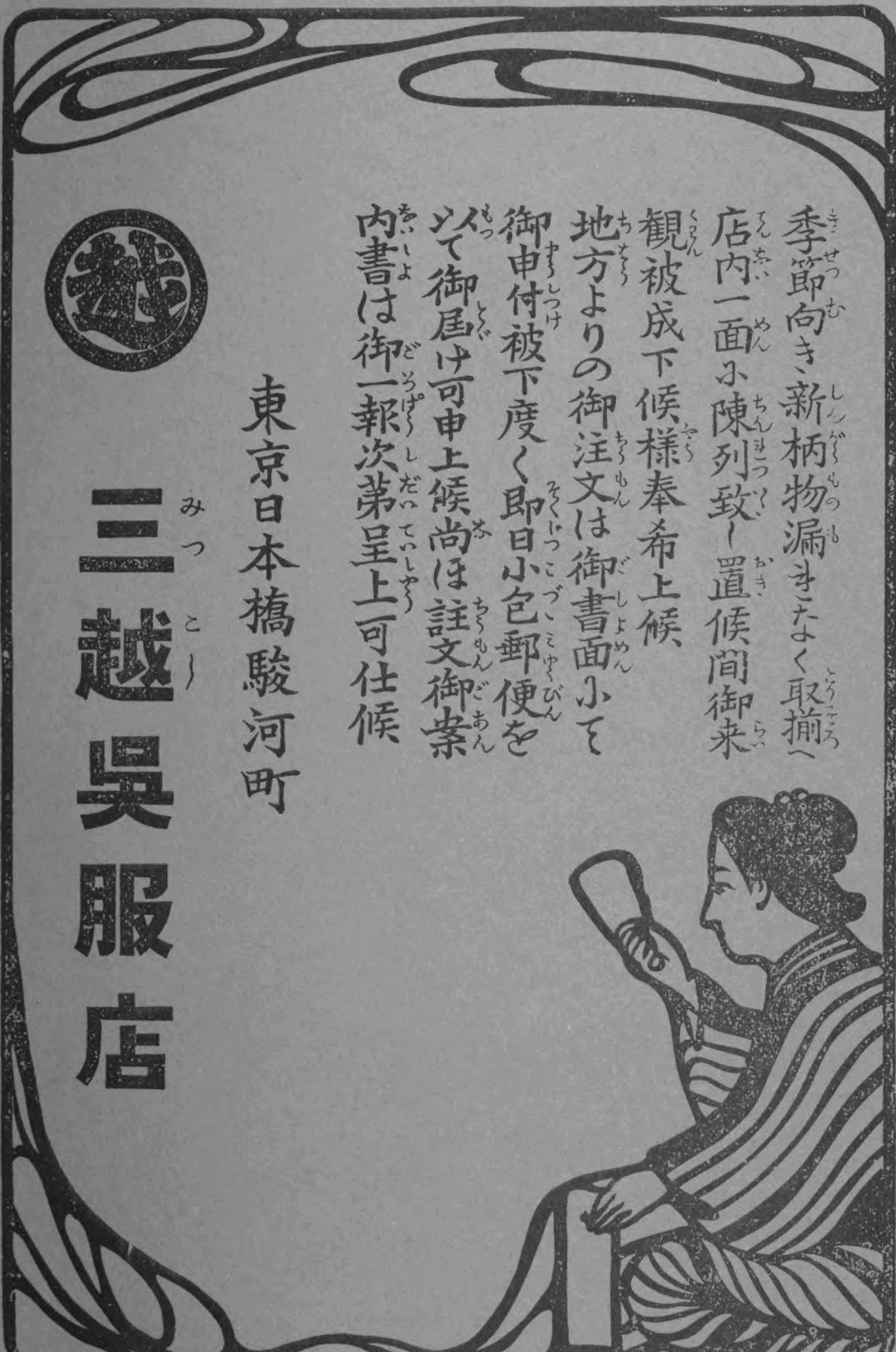

女鑑
第拾五年
第九號


越
季節向き新柄物漏れなく取揃へ
店内一面に陳列致し置候間御来
観被成下候様奉希上候
地方よりの御注文は御書面にて
御申付被下度く即日小包郵便を
以て御届け可申上候尚ほ註文御案
内書は御一報次第呈上可仕候
東京日本橋駿河町
三越呉服店

女鑑 第拾五年 第九號 目次

辨理公使佐藤愛麿氏家庭



上段中央に起立せるは佐藤公使なり氏は目下小村全權大使に隨ゐて米國に在り
下段右傍なるは令閨、中央の老夫婦は氏の嚴父慈母其他は令息及び令孃等なり

米國大統領ルウスヴエルト氏家庭



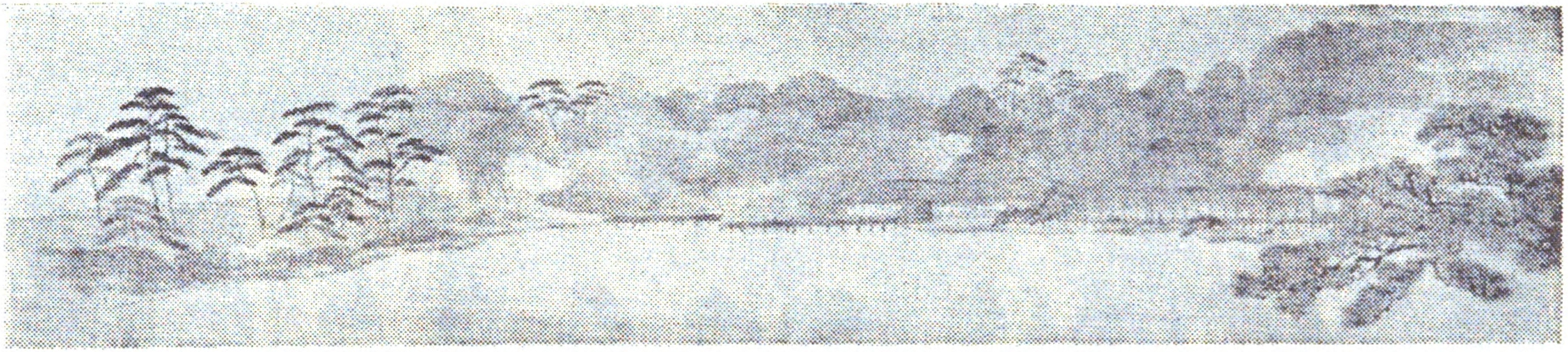
（家庭欄參觀）

華族女學校第二十學年卒業生

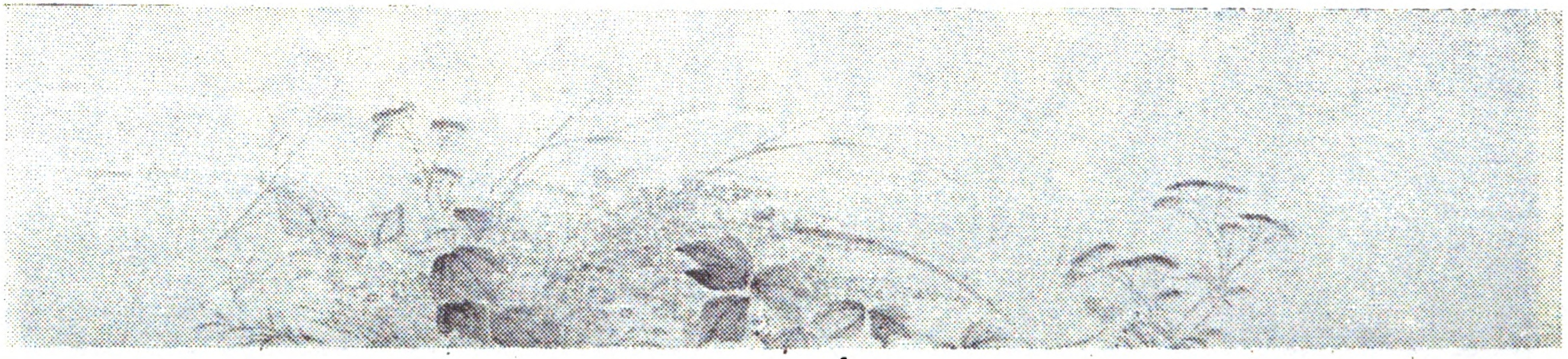


明治三十八年七月華族女學校第二十學年卒業生合作

濱離宮



七草



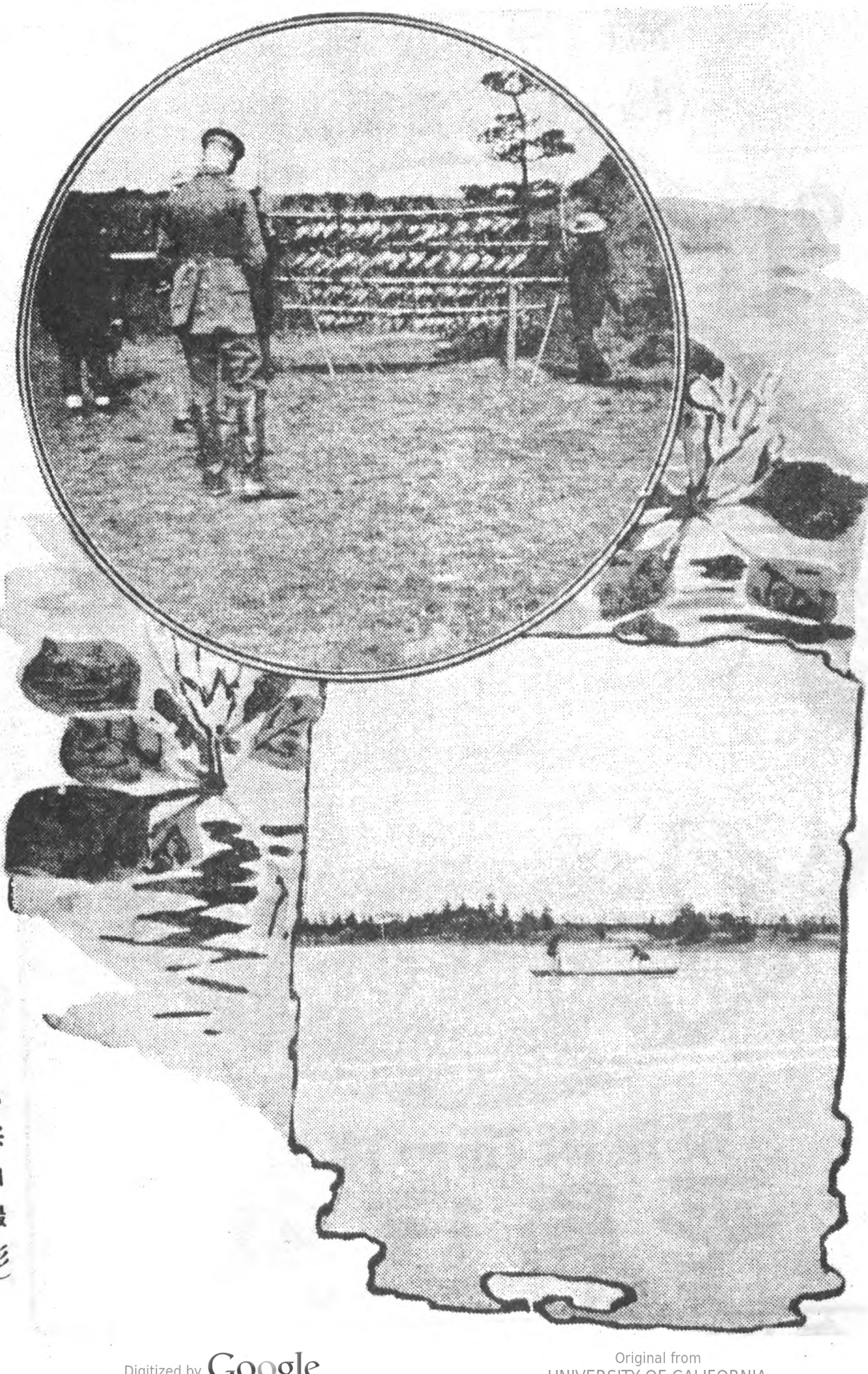
濱離宮

德川英子
戸澤敬子
勝伊代
鷹司房子
奥村房子
毛利亮子

七草

山内壽子
松平貞子
淺岡和歌
村山浦子
櫻井多京子
三田千枝
中村稔子

新濱御獵地に於ける獨逸皇族



（戸田氏共伯撮影）

歐米各種化粧品直輸入商

最新煉香油

(紳士用)(貴婦人用)

パール



東京溜町一町目

平尾商店

電浪 二一〇

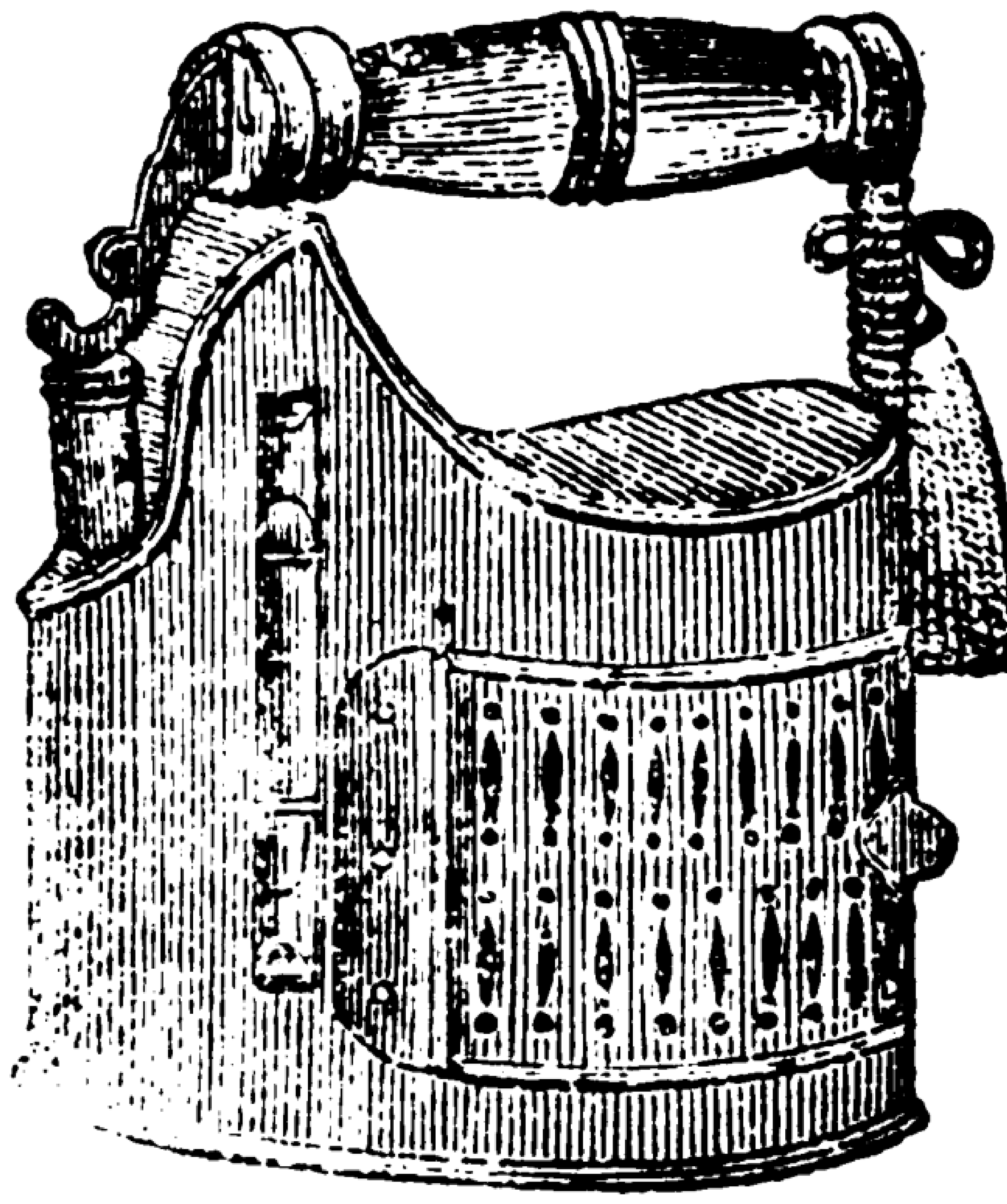
香油(ゴールド、オイル)發賣元

全國到ル處ニ在リ

特約販賣店

東京 大阪 平尾賛平 本店 支店

貴婦人令孃和洋服裁縫家必要品



●專賣特許

輕便湯熨斗器（一名蒸氣ごて）

●本器は湯熨斗を爲すに簡便なる新發明器にして湯の熱度及び蒸氣を以てのすが故に和洋服の着皺を始め織物一切何品を問はず地質を損ずる事なく如何なる小皺又は折目と雖も少しも痕を止めず完全に熨斗事を得るのみならず張のし敷のし等の代用を辨じ衣服にしみたる汗を蒸發せしめ惡臭を消す等種々の特効を有する器にして貴婦人令孃及和洋服裁縫家の一日も座右を離すべからざる必要品なり

◉本器は總て堅牢なる眞鍮製にニツケル鍍金を施しありて最も優美なる實用品なれば進物用として至極適當なり

●使用法及び說明は郵券二錢御送付あれば進呈仕候

定價

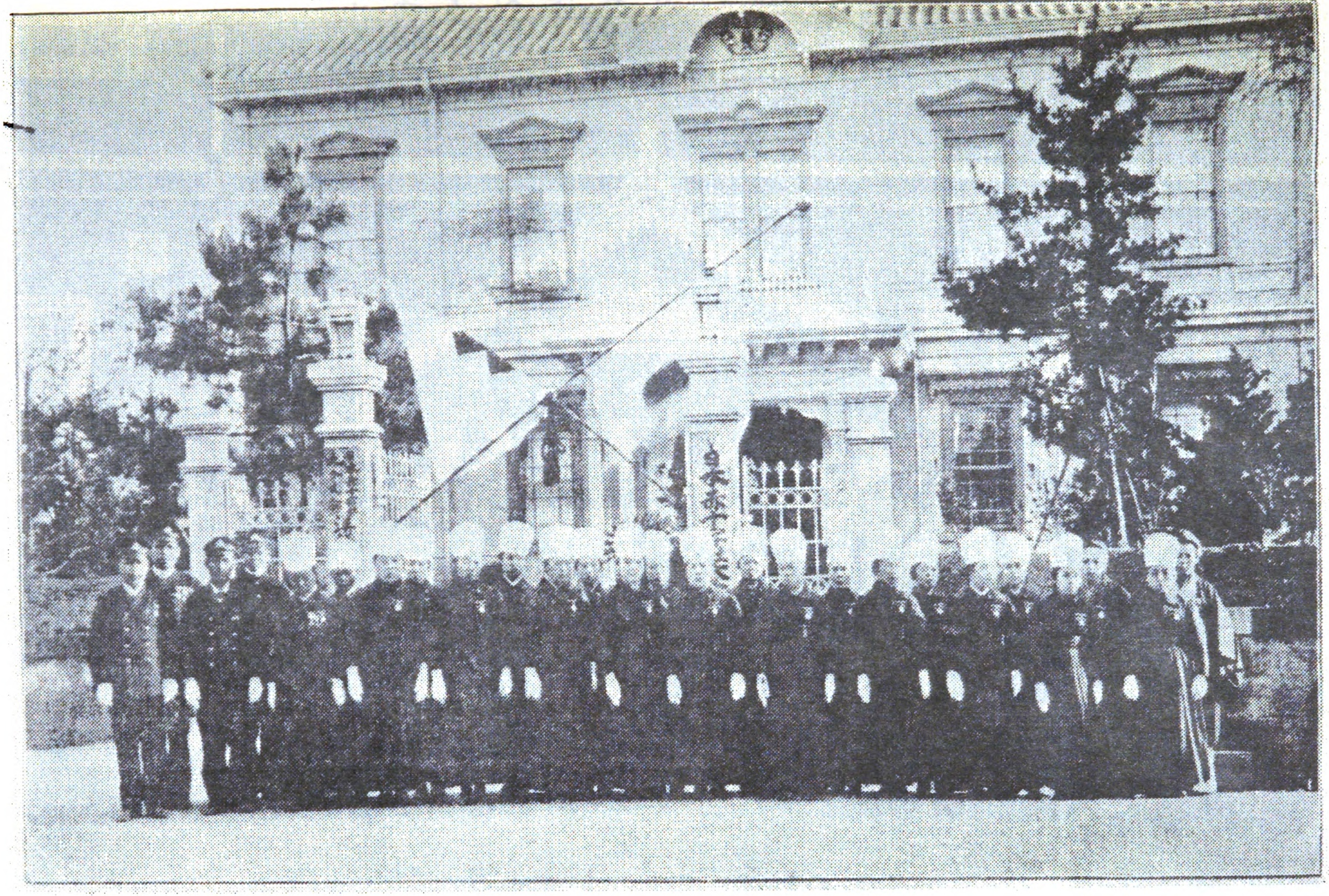
職業用大形（美麗絹房付）	金五圓	小包料	金參拾錢
家庭用中形（美麗絹房付）	金參圓八拾錢	仝	金貳拾錢
携帶用小形（美麗絹房付）	金參圓	仝	金拾五錢
但裝飾付桐箱入は金壹圓上り			
特別上等製中形	金七圓	仝	金參拾錢
同 上 小形	金六圓	仝	金貳拾錢

◉地方御注文は小包料共前金御送付可被下說明書添付置候

◉市內は端書にて仰越し次第持參可仕候

東京市日本橋區箱崎町三丁目二番地　特許堂

赤十字社大分支部看護婦救護班



東京府第二高等女學校卒業生



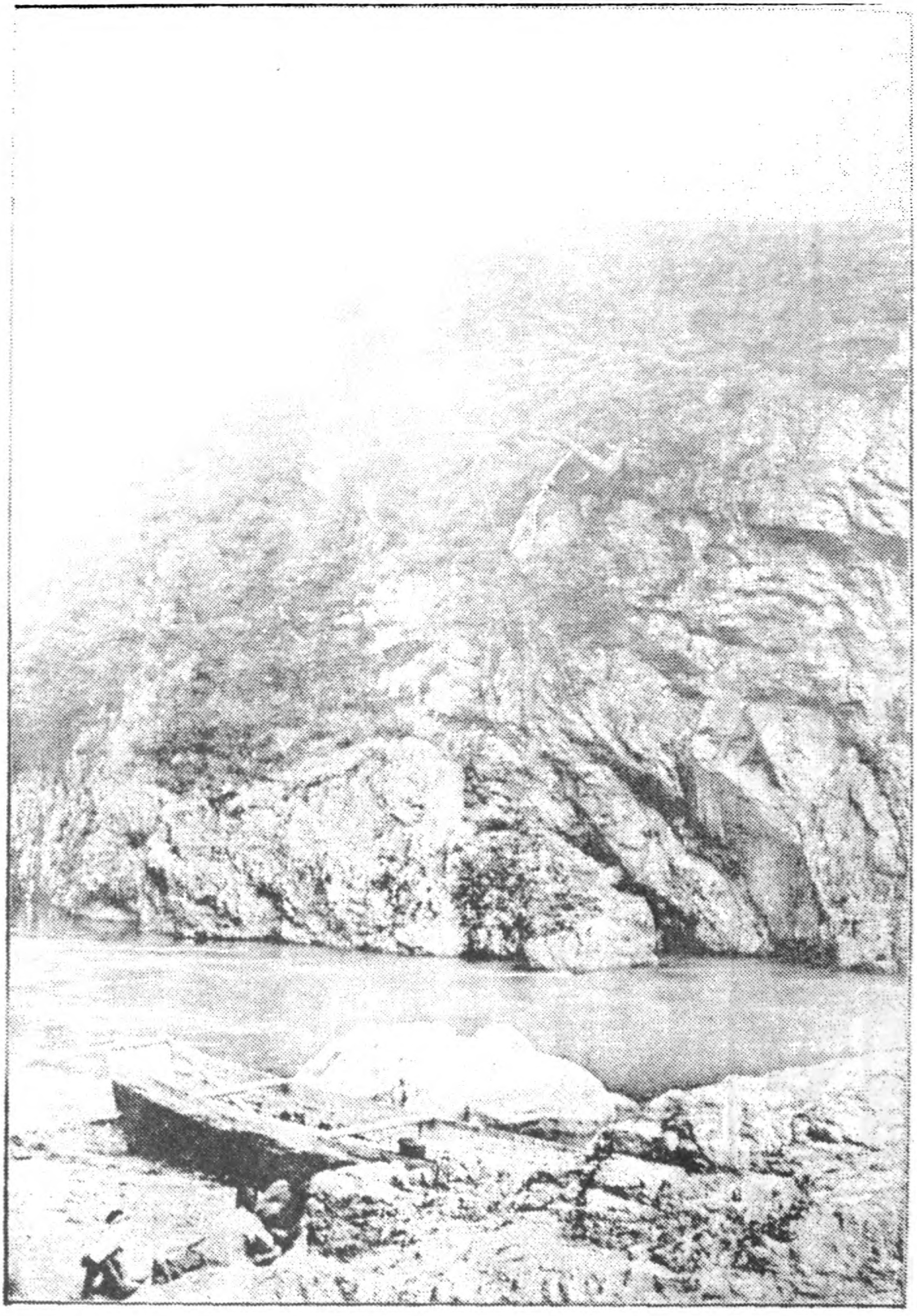
女鑑兼題投稿優等者



馬淵なみ子

千知波きつ子

京都嵐峽大坪石門



○大日本の淑女方が一般に渇望する處の原料の確實なる洗粉は此の花洗粉也



一度御試用の上御高評を乞ふ

特約販賣店
淺草公園第六區 辻小間物店
京橋區橋町 増田勉強堂



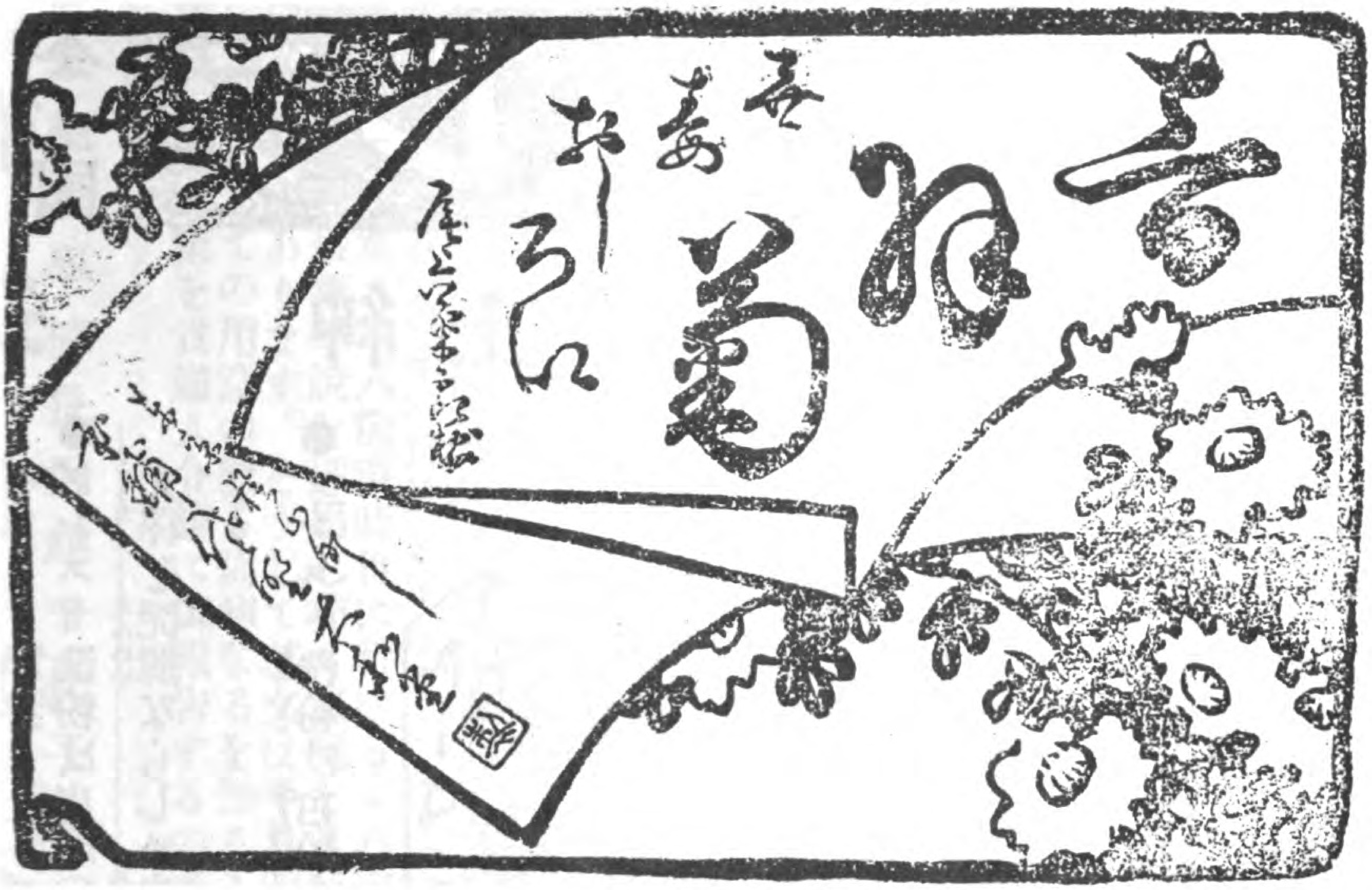
藥價
半廻分 二十五錢
一廻分 四十五錢
二廻分 八十五錢
三廻分 一圓二十錢

月やく閉止 三四ヶ月の月經閉止も二廻分にて必ず通ずる不思議の効あり

月やく遲延 常に月經閉止を苦慮するより神經性にて月經閉止を來し亦は遲延れることあり此藥を一廻分も用ちゆれば直ちに通下す

血の道にて頭痛眩暈し 目かすみ、逆上して顔面潮紅する人亦は常に月やく過少にて肥滿たる人處女十五六才にして月經なき人等は毎月持藥として此藥を用ゆれば**子宮病**月やく閉止、遲延、過少を患ふことなく通利を快よくし**血の道**を**根治**し身體強壯に**容貌爽快**ならしむること此藥特有の偉効なり

本舗 東京市日本橋區蠣殻町四十三 藥劑師**高木與八郎**





定價◦金五十錢◦金廿五錢◦金十五錢◦金十二錢



第十五年第九號

女子問題の兩主義

女子教育は、未來永遠に解決すべからざる問題なる歟、その效果の確定せざる、その關係の紛糾せる、その事體の複雑なるよりして之を見れば、縱ひ永遠に解決する能はざるが如きには至らずとも、今俄かに之が答案を付せんとするは、早計たるを免れじ。然らば則ち之を歳月經過の間に放棄して、一切成行に一任せんか、之も亦た心ある者の忍びざるところならざるを得ず。是に於てか十數年來女子教育上の主義として、殆ど異論なき賢母良妻主義に對して人格養成の新主義を生じ、今や漸やく賢母良妻主義の壘

を摩せんとするに至れり。

蓋し賢母良妻主義は、主義としては餘りに平凡にして、議論としても、又何等警拔せるところあるを見ず、之に反して人格養成論に至つては、其の唱道するところは、人として女子を養成せんとすといふにあり。男子と粗々同等の教育を授けて、双方對等ならしめんとすといふにあり。女子の品位を高尚ならしめて、男子をして非禮非行を敢てせざらしむると同時に、女子も亦一步も男子に假借せざるに至るの基礎を造らんといふにあるが故に、賢母良妻主義の平凡なるに比し、女子をして尤も悦ばしめ易き説なると共に一般俗間を動かし易き論ならざるを得ず。殊に彼の米國流とか、女流ハイカラとかいへる一派の女子に取ては、金條玉科も亦啻ならざるの感あるべし。

されど一步を退きて思考するときは、人格養成の究極の目的は、賢母良妻といふに歸せざるを得る乎、賢母良妻の外に、人格養成の目的ある乎。人として女子を養成せんとする必ずしも惡しからざれども如何なる教育法を用ふるも、女子をして、遂に男子たらしむるを得ざるは、猶男子をして、女子たらしむる能はざるに同じかるべし。男女對等ならしめんとすといふ亦強ち咎むべきにあらざれども、女子は何處までも女子にして、嫁しては妻たらざるを得ず、産みては母たらんことを免かるゝを得ざるなり。女子の品位を高尚ならしむるは、洵に好し、されど女子の品位を高尚ならしむるとは、妻として母としての品位を高尚ならしむといふに同じからざる乎。若し女子にして男子と同じく、必ず獨立生活を營むべきものなりとせば、かゝる説を推通して徹頭徹尾主義として遂行するを得べきも、國家の繁榮上よりして、社會の福利より見て、兩性双對の自然關係よりするも、個人の幸福より觀察するも、一二特別の場合を除くの外には、女子をして獨立生活を營ましめんとするの、男子の側に取りてのみならず、女子自身に取りても甚だ

不利益、不愉快なるは言ふを待たじ。獨立生活の以て一般女子を律すべからざること斯の如しとせば、人格養成主義の論據は、その標榜の著明なるが如くに、其の議論の堂々たるが如くに、しかく正確なるものならざるを判斷するに難からざるなり。

　譬へば賢母良妻主義は、日常三度の食事の如し、喰ふ者之に馴れて、別に稀づらしとも思はざるなり。しかも稀づらしとも思はざる中に、欠くべからざる要素は備はれるにあらずや。人格養成論は、それ猶大牢の滋味の如き乎、何人も悦んで之が饗應に與からむことを欲せざるはなかるべし。されど日々に强ゆるに鷄豚の美味、魚鳥の甘旨を以てせば、何人も亦之に厭きて、遂には嘔吐を催ふさゞるはなかるべし。故に平凡なる賢母良妻主義は、女子をして、その天性を全うして、幸福の人たらしめ、奇拔なる人格養成論は却つて其の性情を傷ひて不幸の人たらしめざるを得る乎。

　然りと雖も物必ず弊あり、弊のある處、害必ず之に伴ふ、賢母良妻の弊は、女子をして怯懦ならしむるにあり、孱弱ならしむるにあり。畏縮せしむるにあり。一言にして之を云はゞ、依然東洋的婦人たらしむるにあり。斯の如きは、予輩の今日の日本女子に希望する所以にあらざるなり。若し人格養成の主義をして、賢母良妻を目的とするにあらしめば、是等の弊害は自ら除去せらるゝに至らんか、凛乎として其節を奪ふべからざるは、妻として最も尊ぶところならざるを得ず。是れ實に人格の養成に待たざるべからざるなり。毅然として其德を完うするは、母として最も重んずべきところにあらずや。しかも是れ亦人格の養成に在るや更に言を待たざるなり。故に良妻賢母を目的として、之が爲に人格養成主義の教育を施さば、謂ゆる大中至正の道たるに庶幾からん歟。予輩は但だ今の人格養成論者が、良妻賢母を含きて、別に女子に求めんとするものあるに同意する能はざるのみ。要するに女子教育は今日猶未定未決の問題なり、若し輕卒苟且の主張議論を以て、之が解決を試みんとせば、其患測るべからざるものあらん。



母としての婦人

米國大統領ルーズベルト述

左記一篇は去る三月ワシントン府に開催の母の會(National Congress of Mothers)に於て米國大統領ルーズベルト氏の演説せしものにして、東西の注目を牽起する所となりしが、近刊のレデースホームジョアナルに掲載しありしを以て玆に之を譯述す(岳南生)

晩近興業的文明の世に當つて、此の光輝ある文明を一面に毀はんとする、實に多數の且つ重大なる危險が演出せられて居る、凡そ一國の地方に比して不權衡なる進歩を以て、都會の發達を見るが如きは甚だ好ましからぬ現象である。何となれば凡そ地方に於ける小地主所謂小家庭を經營しつゝある小民、或は農夫耕夫の如き輩は、從來各國に於て永久に國民的基礎を組織し來つたのである。換言すれば、彼等地方の小民の、經營する職業の進歩發達を、延いて國家の消長盛衰に及ぼし、其國家の基礎の鞏固軟弱は、全く彼等に因て、運命められたのである。故に其基礎たるべき小民なるものが、一朝軟弱微力と成り果て、職業上に一頓挫を來すが如き事あるに於ては如何に其國家は從前立派にして、世界の注目を牽くの價値ありしにせよ、瞬時にして、衰頽零落の悲運に沈倫する事であらう。されば今日に於て尤も重要とする研究は、吾人國民の職業問題と曰はんよりも、吾人國民の家族的生活が、如何なる狀態にて演じられて居るかといふにある。即ち要は職業の種類とか發達とかいふ事よりも、之が經營の

狀態といふにあるのだ。以下少しく之が經營問題に就て御話することとしよう。

◎苟も現社會に於て、眞嚴なる家庭が成立し居り、並びに其家庭を形成して居る人々が相互に各自の義務職分を遂行し、又隣人に對し將た國家に對して、義務責任を完行し居る限りは、國家は幸福安寧なるべく、例令其職業の性質は如何なるものであらうとも、或は其職業が都會に於て營まれやうとも田舍に於て營まれやうとも、將た肉體的勞働なると精神的勞働なるとは極めて瑣少の事に屬するのであつて、國家の消長問題に關係するものではない。

◎而し諸君、若し現社會に於て如上眞嚴なる家庭なるものが存在せず、家族は相互善良ならず、男子は又善良の夫たらず。善良の父たらず、又婦人たるものが義務の感念を沒却し去つて怠慢放逸に流れ而して彼の完全に義務を遂行し、或は努力黽勉し、時に献身的事業をも敢てせん事を覺悟し居る人々の有するが如き高潔なる品性を養成し、陶汰發達し行かんとはせずして、却つて無主意極まる自墮落虛飾の性質を好み自らの性質を放擲し去るに到らば、實に其國家は重大なる危機に瀕して居るものと謂ふべきである。畢竟するに國家の幸福安寧なるものは、絕對に、一般家族並びに一般男女、或は一般兒童なるものが、偉大なる國家の基礎構成に對して適應するやうに國民的性格を發揮して行くか否かに因るのである。吾人にして若し以上の主義を輕視するが如き事あるに於ては、玆に吾人は總べて健全なる文明の因て來る處の道德の根源を無視したのと同一である。

巨萬の富も、物質的進歩の光輝も、將た美術發達の光彩も、若し現社會に於て其家庭が鞏固に成立し、且つ一般男子が正直に、勇毅あり、常識に富み、將た端正にして、熱心に職業に勵み、時に須要の場合に於ては、艱難辛苦と戰ふの覺悟を有し居るにあらずんば、又一般婦人たるものが、善良なる妻たり、又善良

なる母であり、婦人としての第一義の高尚なる義務を遂行する事が出來、また兒童の體格、精神、品性をともに鞏固に、立派に養育し行き、且つ人口の減却を招くが如き事なく、愈々増殖し行くやう健固なる兒童を多數に敎育し行くことが出來るにあらずんば、到底永遠に國家の隆盛を見るが如き事はないのである。

◎凡そ現世界が存在する限りは、永遠へに眞理として存すべきものがある、而して其眞理たるや社會の變遷推移も之を動かす能はざる確固不變のものである。何ぞや曰く、一家の夫たるものが第一の義務として「家庭構成者たるの任に當る可き事、及び妻子の爲めに活計の策を立つる事」。又婦人たるものが第一の義務としては、「夫の内助者たると同時に、主婦たり母たる本分を完全に遂行し行く事」、である。

由來婦人と雖も充分の敎育を要する事は勿論ではあるが普通の場合を見るに、男子は家族支持の必要上充分の修養を心懸けんければならないが、女子には斯かる必要もなく、又一般に必要のあるべき筈はないのである。故に自然男女兩者の間に於ける敎育の方面及び程度の如きも懸隔があるに違ひない。何故かといふに兩者の義務遂行の方面が全く異つて居るからである、蓋し此の懸隔は男女相互伎倆の優劣より來りしものではなく、正しく社會活動の上に於て男女各自職分を異にすべき必要上より來たものである。概して婦人の義務は男子の夫れに比して一層重大で、一層困難で、從つて一段榮譽あるものであると余輩は思ふ。從つて余輩は、男子にして義務を遂行し行くものに對してよりも、寧ろ婦人にして能く義務を遂行し行くものに對して多大の敬意を表する次第である。

◎凡そ男子に因つて營まるゝ仕事の中では、彼の一家族の幼少なる兒童を養育しつゝある婦人の仕事の如くに困難にして且つ責任の大なるものはない、何となれば、此等兒童の爲めに、婦人が費す時間、精力と

いふものは、單に晝間ばかりではなく、屢々夜間に及ぶこともある。即ち若し兒童にして病蓐にあるが如きに於ては、看護の爲めに連夜起きて居らんければならないのである。然し斯る場合に際しても婦人は夜間の疲勞にも係らず、尙晝間は又家事の務に當らんければならないのだ。而して若しも其家計が豐かならざるに於ては、婦人は兒童養育の必要上、稀有の祭日の如きも尙仕事に務めんければならない。特に分娩當時の婦人の苦痛に至つては、到底男子の推察の及ぶ所でない。蓋し吾人が眞に同情及び尊敬の念を喚起するは、彼のアブラハム、リンコルンが慰問し、同情し、信賴したるが如き質素朴訥の人民の中にありて、能く健鬪し居る婦人にあるのである。何となれば此等婦人の生活は時に屢々至極物寂しき人目を遠ざかりたる境遇にあつて、而も能く靜かに献身的勇氣を發揮して居るのである。

恰も男子が妻子眷族を扶持し、兒童を養育せん爲めに、充分の生活費を取得することが、家族にとり、尤も幸福であり、尤も必要なる條件であると同じく、苟も婦人たるものが大に自重し、献身的に努力勉勵して義務を遂行し完全に家庭を組織し、以て良妻賢母たるの器に副はん事は尤も緊要にして榮譽の事でもあり、且つ頗る望ましき事である。勿論此他例外の男女があつて、尙此れより以上の事を成すものもある即ち家庭内の事務を掌る上に（勿論家庭を等閑に附すのではない）更に外界の有用なる事務に向つて己が才幹を用ふるものもある。然し今余輩は例外の場合に付て話して居るのではない、余輩は國家を形成する所の一般國民、一般男女に關して御話して居るのだ。

◎余輩は今母の會に於て演說し居るの故を以て假りにも諸君に安逸氣樂な生涯を御勸めするやうな事はせん。諸君が今日成す可き職分は實に無限にして盡くる處を知らぬのである。凡そ母たるものは決して呑氣な生活を送る事は出來ない、否大底の母たる人は艱苦の生活を味ひつゝあるのである。然りと雖も、苟

も眞個に人の母たる婦人に於ては、焉んぞ此れを口實として憂き艱難の其中にも亦樂しき福音のある生活を斥け、これに代ふるに永久快樂の奴隷となり、遊惰に流れ、心身を勞する事少くして得られん限の奢侈安樂を極めんと欲するが如き我慾私利の生活を以てせんとするものがあらうか、余輩は斷じてないと信ずるのである。

◎要するに眞に吾人が婦人に對して敬意を喚起するは、賢母良妻たる美德があるからである。蓋し婦人は此の美質を有して始めて吾人の敬意を促がし得るものであつて、婦人が此の資格を維持し居る限りは、永遠へに敬意は喚起さるゝのである。但し男女に因て獻身的努力の程度は異にするには違ひないが、其の因つて來る可き生活は正に光榮ある生活と言ふべきである。然れ共余輩は彼のグリセルダ式に婦人の忍耐する事に對しては、全然反對のものである。(譯者註釋すグリセルダ式(The patient Griselda type)とは、古へグリセルダなる一婦人あり、夫の永久の非道虐待に對して能く耐忍し、遂に夫を自己の感化に導き圓滿なる家庭を作りしといふ歐洲に於ける故事にして耐忍の模型として引用せらるゝものなり)即ち長時間の夫の殘忍に對して、盲從して居るといふ事は到底賛意を表することは出來ぬ。いや何が惡いと曰てふも、男子たるものが妻子に對して柔和なる愛情をはらはうともせず、之を虐待し邪慳の仕打をなすほど、憎むべきことはない。斯くの如く男子たるものが彼等妻子に對して、總て只だ利己的に動作し、柔和なる愛情なく、思慮を策らすこともなく、且つ其方法如何を問はず殘忍なる仕向をなすに於ては、自己自らは疚しとせざるも必らずや、清廉なる人士の輕侮憤慨を喚起すべきは必然である。

又余輩は男子と同樣に婦人諸君が各自に、自重心を保つて行かれん事を希望するものである。余輩は又男子と同等に婦人の權利を認むるものである、否男子よりも、もそつと多く婦人が權利を享有せん事をすら

欲するものである。熟々想ふに婚姻なるものは、男女の兩者が共に自他の權利を認知して、互に權利の侵害をなさゞる一のパートナシップであるべきものだと考へる。去り乍ら更に翻つて考ふるに余輩は如上權利問題よりも、寧ろ義務なる問題が、夫婦間に於て更に重要なものではあるまいかと思ふ。要するに個人權利の主張も、時として屢々必要であるには相違なきも、然し之と、圓滿に遂行したる義務と對比して考ふるに、其家庭に及ぼす効果は後者の方遙かに廣大でもあり且つ又顯著であらうと思ふ。

由之觀是、諸君の義務たる、實に愈々至難にして、同時に諸君の責任も亦大なる哉である。然れども何は偖ておき、最も偉大顯著なるものは、諸君が活動の効果に對する報酬である。換言すれば婦人諸君が盡瘁努力の結果として享くる光榮の莫大なる事である。されば余輩は今日諸君の境遇を觀て、少しも憐愍的同情は寄せぬ、否却つて諸君に對して滿腔の敬意と、熱誠なる賞嘆を發する次第である。

◎想ふに來る可き時代の運命なるものは、婦人諸君の双肩に委托せられて居るのである、兒童を養育し行く上に於て母たる諸君が留意すべきは、愛情と慈愛を以て彼等を撫育するが必要であると同時に、又賢明確固の人物に養育しゆく事の必要を忘却してはならぬ。苟且にも、慈愛と、溺愛とを混交するが如き事ありてはならぬ、即ち男兒に對しても、女兒に對しても、柔和なる徳を以て薫陶しゆく事を計ると同時に、彼等兒童が將來の處世上最も必要なる資格として、嚴肅鞏固の性格を作るやう努めんければならぬ。隨分兒童の中には最良の薫陶をなしつゝあるに係らず、墮落の境涯に沈淪しゆくものもあるし、或は又反對に甚だ不幸の境遇にあるに係らず、善道に進みゆくものもある。故に一は兒童の性質にも由るのであるが然し其大に與つて重きをなすは、家族的敎育の影響である。若しも母たる諸君が感化の力弱きの故を以て兒童を唯だ我儘に育て、利己に汲々たるやう養育するに於ては、諸君は後年に到り、將に愛子に婚嫁し來

る可き婦人の、婚嫁後の憂愁に對して、大責任を有するものといはなければならない。又若し諸君にして、自身働かんければならぬと思考する場合に於て、彼等女兒には働きの必要を敎へずして、欲するまゝに遊ばしむるが如き、誤れる感化の下に養育しゆくに於ては、諸君は社會に不必要なる資格を、彼等に附與しつゝあるものであつて、眞に愛女其人に對して責任を帶ぶるものといふべきである。希はくは婦人諸君よ、青年男女をして難事を忌避して此世を過さんとするが如き、卑屈極まる豫想をなさしめずに、飽くまで其難事に打勝つて奮進せん事を、豫想せしむる樣敎育しゆくべし。何の道働くといふ事は、彼等自からにとつても、將た社會にとつても、有害のものにあらずして、幸福であり、有益であるといふ事を悟らしむべきである。而して彼等を幸福のものとなし、生活の趣味を解せしめ、不屈不撓の精神と、勞力とに依つて成功を得るやうに、並びに神と人の前に彼等が義務を果す底の、確固不拔の決意を以て、人生の風波に拮抗し之と大膽に戰ふ樣に養育せよ。斯くの如くにして能く兒童を養成するに於ては、實に其等婦人は他の婦人に對して數倍の價値光榮を有するものと謂ふべきである。

◎或は又善良神聖なる人々にして往々兒童を有せざるの薄運者がある。斯くの如き不幸なる人々に對しては、吾人は恰も自らの失策より招きしに非ずして、而も人生の祝福を賦與せられ居らぬ薄倖者に寄するが如き同情を禁ぜぬのである。けれ共不德義より招きしものであるか、冷淡より招きしか、淺慮よりか、放恣よりか、將た又單に重要と不重要の區別見解を誤つてより招きしものなるか否かを問はず、兎に角此等兒童賦與の祝福を故意的に卻けんとするが如き男女あるに至つては、嗚呼實に斯くの如き者に至つては諸君、彼の戰場に立つて敵に後ろを見するが如き卑怯者の受くる侮辱よりも、將た己れに從屬せる妻子の爲めに生活費を稼がんともせず、勞働を嫌忌し居る男子に對して加ふる凌辱よりも。將た完全なる體格を具

有し居り乍ら、怠惰放恣を事として、他人に糊口を仰ぎ居るが如き無頼漢に對して加ふるが如き罵倒擯斥を以てするも、尙ほ實に嫌らぬ感を有するのである。

◎如上故意的形式に於て婦人の行動なし居るは抑も近世邦國民の或部に演じられて居る最も憂ふべき現象の一である。若し夫れ不幸にも淺見者あつて、斯かる婦人が根本的に愛情を解し居らぬ者なる事を觀察し能はざる者があるならば、余輩は此種の人に對して、彼のジャッヂ、ロバート、グランドの著に成る小說「酵加らずの麵包」(Unleavened bread)を通讀せんことを勸告する。

而して其小說中の主人公セルマの性格を嚴密に考察し併せて如上の形式に從つて一般婦人を養成したる結果として國家の必然遭遇すべき運命如何に付て熟考し見ん事を御勸めする、蓋し之を解する事容易であらうと信ずる、不幸なる哉諸君、如上の形式は單に米國に於て小說として存在するのみならず、現に我米國の實社會の上に演じられて居る。此事たる或地方の家族が漸次衰退減却し行く傾向を調査せる統計表に因て明かに確證せられて居るのである。更に之を婚姻に關する政府統計表に徵せんか、又以て惡風の漫延を證して餘りあるのである。即ち離婚は實に米國に於ては驚くべき程流行して居る。抑も離婚の容易に行はるゝことは、昔も今も變ることなく、國家には有害、社會には害毒を加へ、家庭を破壞し、結婚後の不幸不德行の動機となり、男子には惡行、女子には更に憎忌すべき醜行の動機となるものである。米國人間に於ける此等面白からざる傾向の蔓延に就ては、現に余輩が、つい近頃通讀したる或一新聞紙に掲載してあつた記事に因つて見ても愈々明瞭に認められるのである其記事の中には牧師の話した言葉が引用せられて居つて、其牧師が一般亞米利加人の性格に付いて論及した時に、一寸見た處では、其新聞記事は之に贊同して居るやうに見えた。牧師は實にかういつたのである富有の人は例外であるが、一般の人々にありて

は、唯だ二人の兒童をして「人生の二三の善事を學ばしむるやう」彼等に機會を與へてやるならば其で充分だ、と。

◎飜つて此の牧師の職分に付て觀察して見るのに、彼や一面に於ては道德の敎師たるべく、又一面に於ては實際に國民的理想を、公衆に示し、國民をして其の赴く處を知らしむべき筈の職分である、然るに何ぞや、其理想的國民として發表したる意見は、兒童を敎育せんとにもあらず、義務を遂行せしめんとにもあらず、堅固なる精神を以て浮世の戰闘場裡に送り、自らの爲め、將た母國の爲めに勝利を得せしめんとにもあらず、又成功の機會を與へ、世に立つて彼等が地位を作るの敎育を授けんとにもあらずして、而も却つて「人生の二三の善事を學ぶやうに」一家族の兒童の人員を制限するが如きは、實に何たる謬見であらうか、此を以てして、道德の標準者だとか、國民的理想の代表者だとかいふ事が出來やうか。

夫れ人生に於て兒童に好機を與ふる方法とは、奢侈耽樂に彼等を養育する事ではなくして、强固偉大なる品性を組成する樣に、一種の敎育を注入するにあるのである。假りに今國民としての重大なる問題は暫く措いて、唯だ兒童自身の個々の利益問題に付いて考へて見るのに、彼等にとつて眞正の幸福といふべきは牧師の言ふ樣に家族の兒童の人員を限定するといふやうな事をせずして、其家庭の兒童等全體が一樣に能く養育せられ、善く敎育せられ、又依賴心を有する事なく、自ら自活の道を講じ、其志す處に驀進し、自らの努力熱誠に依つて立派に地位を作る、と斯ういふ樣に敎育せられたならば、實に此程幸福な事はないのであつて、彼の牧師の言ふが如くに、人生の究竟の目的は「二三の善事を學ぶにあり」といふ樣な實に利己的にして、拙劣なる推論に從つて兩親自らも行動し、又兒童をも之を以て指導する。といふ樣な此んな淺薄な主義に則るに比し實に雲泥の差ありといふべきで、國家にとつても、個人にとつても、後說私

の申上げた方が宜しいと思ふのである。

◎前説牧師の主張する處たるや、是を道徳の方面より觀察して見ても是又等しく常規を失つて居らぬ事は明々白々である。何となれば、其牧師の幼稚なる主張の如くに、一般家族に於て「僅か二人の兒童を有すれば足れり」との説に從はゞ、其國家は漸次人口を減少し來り、必らずや遠からず滅亡の悲境に立到るであろう。而して此の主張の下に行動し、此利己的主義の下に活動したる人民は茲に消滅して、更に他の剛毅にして健全なる思想を有する人民が之に代る事となりましよう。勿論斯くの如き結果に終らん事は、寧ろ當然で、何れにしても少しも遺憾な事はないのである。何故かといふに斯くの如き主義即ち國民的自殺を敢行してゆく様な人民といふものは、實際に存在の價値なき事を示して居るのであつて、却つて他の義務的感念を忘却せざる人民が之に代つた方が、寧ろ誠に結構な事であります。

前述の私の話を略言して見ますれば、至極單純のものである。即ち若し國民としても、個人としても、單に骨の折れない安逸快樂を追求し、遊惰放恣を之れ事として、彼の完全に義務を遂行して勞苦疲勞の其中にも亦一種の快樂に接するといふ様な、無限に深い〳〵高尚な快樂をば避け嫌う様な事があるならば、實に諸君其結果たるや、遂には斯くの如き國民或は個人は其陋劣極まる生活を營みし報ひとして非常な禍害悲運を招くに相違ないのであります。

苟も眞個の國民としての名に悖らざるの男女たるものは、決して危險とか、面倒とか、勞力を要する事をば成る丈け避けて呑氣に世を送らうなぞと、其んな卑屈な根性を持つ筈はないと思ひます。例外は措ておき、凡そ人生の眞個價値ある生活、價値ある名譽といふものは、所謂價値ある立派なる目的の爲めには熱心に働くといふのにあつて、又日常の生活に於ては自らの利益といふよりも先づ他人の利益を謀り之に

盡瘁するにあると思ひます。

◎人間といふ者は兎角淺慮な動物であつて、自分は措ておいて先づ妻子の爲めに盡さう、計らうと云ふ樣な事はないのであります。苟も諸君母たるものが、母としての價値ある所以は、利他の精神を保有し、利己的ならざる事を重んずるに在るのだと云ふ事を、能く御承知願ひたい。即ち圓滿に成立して居る社會に於ては、必らず其社會を神聖になす可き分子の集合より來つたもので、決して偶然でない事を御注意願ひたい。

要するに諸君婦人の事業たる、決して容易のものではない。勿論爲して價値ある事業の容易にあらざる事は、寧ろ當然である。然れ共其容易ならざる至難の事業を爲し遂げた曉に於ては殆ど男子には解す可からざる所の、實に〳〵崇高にして神聖なる愉快を感ずるであらうと信じます。加之其事業を遂行した結果としては、又彼の聖書の中に豫言せられてある所謂酬ひを享くる事となるのであります。何となれば夫も兒童も、然り苟も婦人の事業を以て、國家の繁榮福祉の基礎たる事を認知するの人士は起つて諸君が事業を讚美する事と信じます。

愛と節操と信仰

文學士　近角常観

近來婦人問題といふことが盛になつて來た、これは、從來世人が充分に注意を拂はなかつた處の、家庭及社界に於けるセメントとでもいふべき、婦人といふことに就いて、注意し來つた結果であつて、頗る悦ぶ

べきことである。然るにこの問題に對する世人の思想が大體に於て、二派に分れて居るです。その一方は、從來婦人を卑しみたる弊害に反動して、著しく婦人の自由を稱ふる結果、最もその意志の自由といへる點に着目して、終には愛といへる問題を攻究するやうになり、西洋の習慣なる愛といふことを、自然鼓吹するまでになりました。この主義によりていへば敎育上に於ても、女子を人間として敎育すべしとか、はた人格として論ずべしとか、萬事に就て西洋風の敎育を與ふる傾向である。而して他の一派は前者に正反對する思想で、いかにも人格を尊び、これを尊重するは、惡く無いないけれども、徒に婦人に對して、自由を與ふるとか、また愛といへることなどを、云ふのは宜しくない。婦德の要點は、貞操である。またその敎育の如きも、良妻賢母として適當なるやうにするが緊要で、婦人は何處までも節操を堅くせざるべからず、禮儀を重んぜざるべからずといふ如き、いはゞ從來の日本風の氣風を養ふべしとの意見である。

この二派の潮流の存することは、何人も眼前の事實として、よく承知して居ることでありまするが、この二者の間に圓滿なる解決を試みたる說を、未だ見出さぬやうである。無論この兩說は各長所もあれば短所もある。それは今更多言を待たないで明です、單に議論として知らるゝのみならず、事實に於ても兎角西洋風の敎育に傾くものは、輕燥に陷り易く、昔しの日本風の敎育は、卑屈に傾き易い、然らばこの問題を、如何にして解決するかといふに、自分の考にては、信仰といへることを、中心として、考ふるときは、充分に解決せらるゝやうに思ふです。且つそれが最も宜からうと思ふのです。

抑も信仰といへることは、人性上の總ての問題上に大なる意味を、持ち來すものである。故に、先づ信仰といへることを以て、家庭の問題を、解決して見やうと思ふ。

尚先きに擧げたる、二派の潮流につきて、簡單にその要點をいひ盡せば、夫婦といへる問題につきて、前者は愛といへることを主とし、後者は節操といへることを主とするものと、云つて可からうと思ふ。然るに若し單に愛といふことを、主張する時は兎角氣儘に陥り易きものにして、世人が今日口にする愛といへる思想は、餘程不純潔なる意味を含むらしく思はる、また今日婦人問題に對して、新しき潮流に陥りつゝある弊害は、實にこの點にして攻撃せらるゝも、この點であらうと思ふ。さらば後者は如何後者の要點とする貞操といへることは、勿論女德の眼目にして、その尊ぶべきことは、云ふまでもなきことなれどもこれまたその弊害は、自律的に來る意味の節操にあらずして、他律的に『何々せざるべからず』何々すべからず』といふが如き、重き律法に制せられたる思想に、陥り易くある。かくの如き場合には、多くは自分の意志と、自分の境遇とが反對して、何時も心にもなき事を形にあらはすことゝなり、いはゞ結局自ら欺き、人を欺き、甚しきは僞善に陥ることゝなる、この愛と貞操の二者を、眞實によく調和するものは、前述の信仰であると思ふです。全體信仰なるものは、如何なるものかといふに、人間精神の根底を定むるもの也。私は常に親鸞上人の信仰なるものを、味つてあるものですが、最も解り易く親鸞上人が、自分の師匠なる法然上人を信ぜられたることを、自白せられたる言辭を示しますれば

親鸞におきては、たゞ念佛して、彌陀にたすけられ參すべしと、よき人のおほせをかうぶりて、信ずる外に別の仔細なきなり。念佛はまことに淨土にむまるゝたねにてやはんべるらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり、たとひ法然上人にすかされまゐらせて念佛して地獄に落ちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。そのゆゑは自餘の行をはげみて、佛になるべかりける身が、念佛をまをして地獄にもおちてさふらはゞこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらは

め、いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。
この文字は、近來信仰問題に注意する人は最も熟讀玩味する、歎異鈔の第二節、親鸞上人自己告白の要點なり。この文字に於て、注意すべきことは、親鸞上人の眼中には、自分に信仰を傳へられたる法然上人を信ずること、佛陀それ自身を信ずると、全く同價値にして、自己の死生運命を、絶對的に法然上人と同じくせられたることがよく判る。かゝる信仰は師弟の關係に於て、あらはるゝが如く、また他の人生問題の總てに於て現るゝものです、故に信仰の上より家庭といへる問題を、解決する時は、單に人間の力を以て結びつくるものに非ずして、同じき信仰を以て結びつくるものたるべしといふ也。もし同じ信仰を以て結びつけられたる、夫婦の關係ならば、恰も親鸞上人が法然上人に對する、師弟の關係と同樣にして、則ち夫の妻を信じ、妻の夫を信ずることは信仰上各が佛を信ずるといふが如きと、全く同樣である、寧ろ眞髓に至つては別のものに非ずして、佛を信ずる信仰が家庭の上に、働いて來たのである、かくの如きものを名けて、愛と稱するもまた節操と稱ふるも、敢て不可なからうと思ふ。而してこの意味にていへば愛といへることは、極純潔なる且高尚なる義にして、節操の方とて、かくしてはならぬと外より制せらるゝ意味にあらずして、かくせずには居られないといへるやうに、自律的に起り來るものである。そこで特にいふまでもなく愛といへることに於て弊害に陷り易きは、肉慾的の點である。然るに愛といへることの眞義は精神的の愛で、前述の如く、地獄に落ちたりとも更に後悔せざるべく候といふが如きに至つて、其極度に達したものと思ふです。また節操といふに於ての弊害は、自分の心に反して、表面を假飾すること即ち僞善です。然るに地獄に落ちても、さらに後悔せざるべく候といふが如き、中心の信仰より來るときは、自發的に死すとも動くべからずといへる、眞實の意味に於ける節操である。茲に以上述べたることは、架

空の言辭を弄したるものではなく、その意味が親鸞上人に於て、明瞭に實現せられてある。彼の親鸞上人が佛教上獨り家庭的の宗教を稱へられたるは全く上に述べたる意味より來つて居る。さるを上人の人格について世人は未だ十分にその意味を了解しないやうである。親鸞上人は師匠の法然上人の命に因て、玉日姫と結婚せられたのであるが、結婚前上人が京都の六角堂へ參詣せられたるとき、觀音の靈告ありて、共に（玉日姫と）一生の間能く莊嚴して、臨終引導して極樂に生ずとの告げを感得せられたりといふ事がある、これに就て想ふに上人の精神上には玉日姫を、信仰を傳ふるがために働き、運命を共にすべく、佛より命ぜられたるものなりと、終世信ぜられたるものに相違無からう。後年上人が流刑に處せられて、越後信濃常陸の間に、傳道せられたるとき、常に内助の力を盡されたるは此の婦人（後に剃髪して惠信尼となられたり）で此の婦人もまた親鸞上人に對して同一の信仰を有して居られた、何と美しいことではありませぬか。上人の亡くなられたる翌年、娘の覺信女方へ贈られたる文中に、かつて夢に法然上人は大勢至菩薩、親鸞上人は觀世音菩薩の化身なりといふことを、感得したることあり、然るに父上在世中は口外せざりしが既に亡くなられたる上は、汝が父はかゝるかたにて、ありけるぞと知らせうと思ふといふやうなことが記されてある。かくしてまた親子の間に於ても、信仰を以て相信ずるやうに教育せられたです。このことは味つてみれば隨分奥深き意味があつて、西洋のダンテであるとかプラトーの愛とかいふものに比較して見ると倘面白い。

プラトーは其會話篇フエードルスの中に理想の愛を頗る詳かに叙してゐます。蓋しプラトーの理想愛なるものは高潔なるものでありますけれども、未だ醇乎たる宗教の信念には達しないやうですが、ダンテに至つては一層宗教的靈的であります、彼が詩想の中心は實に美人ベヤトリチエです、彼は彼女を以て天使

となし、恰も之に對することがホーマーの所謂「彼は人間の子にあらずして神の子たるが如し」といふのは彼が感想の眞髓なので、また彼は種々の靈夢を感得したがその何れも宗教的趣味を以て着色せられ、素樸にして修飾なく、神秘にして深遠ならざるはなしです、而してベヤトリチエの死にまするや彼は肉に於ては之を失ひ靈に於ては之を得た、而して彼れダンテが神曲の中心として歌ひ神學の中心として彼女の導の下に遂に天國に入るやうになつたベヤトリチエは眞に彼れに對する唯一の救濟者であつた、かくダンテの夢幻はプラトーに比ぶれば一層宗教的ですが、猶彼れが九歳の時一たび彼女を見、十八歳の時、再び道に邂逅せしより起つたもので、本、人間的愛情に基づいて、沈痛なる幾多内心の苦痛煩悶が之を鍛錬して靈化し神化し最後に自己亦信仰に導かるゝに至つたのです。

そこでわが親鸞上人に顧るに、彼等に比して猶且つ高崇にして清潔なる意味があると思ひます。これらの點を若し充分に研究したならば上人の人格なるものは餘程偉大なるものと信じます。

以上は信仰を以て愛と節操とを結びつけたる實例である。

また佛教に於て婦人に對する思想は、舊來世人が想像する如く男尊女卑といふではない。唯男子が出家して熱心に道を求むる修行に於て、女子を遠ざくべきことをいましめられたのである。而してまた女子にして出家道を求むるものに對しては同じく、男子を遠ざくべきことを、いはれてある、寧ろ佛教の信仰上には男子も女子も同樣に解脱すべきことを、教へられたるもので信仰上に於ては、同價値である。從つて在家の信者即ち家庭間に於ける、家庭的の信仰を有するものに就ては左の如き適切なる、教訓がある。尸迦羅越教に曰く

（夫は妻に對して）

（一）尊敬を以て妻を取扱ふべし
（二）親切を以て妻を取扱ふべし
（三）妻に對して貞實たるべし
（四）妻が他人より敬せらるゝ樣にすべし
（五）適當なる飾と衣とを與へよ

（妻は夫に對して）

（一）秩序正しく家政を整理せよ
（二）家族及友人に對して丁寧なる妻たるべし
（三）貞操たる妻たるべし
（四）節儉なる主婦たるべし
（五）其の爲すべき萬事に於て熟練と勤勉とを示すべし

右兩者の關係に於て、婦人に對して貞操を勸むる如く男子に對して貞實を說かれたる如きは、最も適切なる敎訓と思ふ。從來婦人の貞操のみ稱道せられて男子の貞實を省みざるが如きは甚だ惡しき習慣と思ふです、若し信仰を以て結び付けられたる家庭ならば、以上說きたることが婦人に對していはるゝと同時にまた男子に對してもいはるゝであらう。

貞女二夫に見へずとは貞女は二夫にまみゆべからずとにはあらずして、そのこゝろもちなれといふにて西洋にても自分で信ずる、即ちこの人ならば一生を托するに足ると信ずることが要素になつて、親の承諾を乞ふもので、結婚は幾度なしても、自由だと、放縱に流れてはならぬと思ふ。もとより夫婦間にては愛を他に移さないといふのが根本で、中心から信じあはなくては不可である。よそから疑はれるやうになり、或は互に疑ふやうになつては行かぬ。兎にも角にも現時の、夫婦間に於ける大缺陷は信仰の無いことで、深き信仰を以て結び合つたならば、其關係は實にうつくしく、愛と節操とは同一に歸して了ふものである。

（こは一日求道學舍を叩きて敎を乞ひたるもの語り適せざる意の通ぜざるあらば、そはわが罪なり、—記者）

將來の女子教育に就て（前號接續）

寺田勇吉

吾輩は今日の女學生に對ひ、他日健全なる我邦の主婦たるに適當すべき教育を施さゞるべからざることを信ず。而して女子の體格健全ならば、以て滿足すべきか、曰く否、將來人の妻と爲り、一家の家事を掌どり家政を行ふ爲めには、勿論普通の學問無かるべからず。夫たるものと殆ど同一の教育無かるべからず。何となれば、夫婦間の教育に於て、餘り懸隔あるときは、其家庭圓滿なるを得べからざればなり。例へば夫は其妻に向ひ、學校に關する事業を談ずるに、妻は學問なきを以て一向に其趣味を感ぜずして、好んで俳優若くは落語の談を爲すとせんか、夫に於ては俳優落語などの談話を好まざるより、其談調屢々相齟齬するに至るべし。夫は「教育」なる語を用れば、妻は全く之を誤聞して「今日ゆく」と解し、「今日何處に御出でになりますか」と謂ふが如き滑稽を演出することあり。故に圓滿なる家庭を作らんと欲せば、夫妻共に殆んど相等しき所の教育なかるべからず。即ち妻は妻として普通の學問なかるべからず。かくて男子は外部に向て事業を爲し、其收入を得て之を妻に渡し、妻は之を受取りて日常の費用に充つる事とし、衣食住及び育兒等に就ては、妻たるもの自ら責任を雙肩に擔ふて立たざるべからざるものなり。故に普通の女子教育を目的とする學校に於ては、專ら衣食住育兒等を完全に實行し得る如き婦人を養成せざるべからず。

今日の所、女子の專門家を作るは、一般より云へば深く必要なきものなり。衣食住育兒、換言すれば、身

體健全にして家政を實行し、巧に之を整理し得る婦人を得ば即ち可なり。婦人として衣服に注意すると固より必要なるも、其弊に陥るべからず。朝鮮の婦人は一年中常に洗濯のみを爲し、日本婦人も亦年中衣服に心を勞するもの多し。衣服の新調、衣服の修繕、吾妻「コート」、帶、足袋、雜巾に至る迄、一生涯中此等の爲めに苦心すること、朝鮮婦人の衣服洗濯に意を勞すると異ならず。敢て望む、日本婦人たるもの、苟も心あらば、斯かる事のみに意を注かず、家政整理の上に意を向けざるべからず。婦人は一體華美を好む性ある故、從て華美なる衣服を着用せんとするの念起るなるべし。美衣固より美ならざるにあらずと雖も其身體眞に美ならざれば、美衣も亦以て如何ともすべからず。故に意を美衣に用ひんよりは、身體を美にするの優れるに若かじ。又女子の技術としては、裁縫固より必要なり。吾輩の希望を以てせば、學校にては、努めて運針の方法を授け、而して熟練を主とすべし。袴、羽織、袈裟衣、振袖等の如きものは、專門家を養成する所の學校を除きては、寧ろ必要なし。反て衣服保存の方法等を教ゆるを可とす。又日本婦人の臺所等にて食物を調理するを見るに、西洋婦人の如く一々布片を以て衣を蔽ふて働かず、平常の衣服を着けたるまゝにて臺所に働き、衣服の清潔を保つことに留意せず、是れ清潔及び保存法を教養せざるべからざる理由なり。又時間を經濟的に用ひ、決して空しく消費すべからず。俗に井戸端會議と稱して、裏店社會には、往々時間を空費する弊風存するが故に、其時間を利用して勉強するの習慣を養成せしむべし。元來日本人は不規則にして、不規則なるが爲めに、屢々大に迷惑を感ず。例へば午後五時晩餐を供せんとする時は、普通四時として通知す、即ち一時間の懸直あり。之を信ずるものは、正四時に行きて空しく一時間を徒費せざるべからず。或人は曰く、四時の通知なる故、五時に行く時は丁度好からんと果して其言の如し。此の如く招く者は一時間の懸直を爲して客を招かんとし、應ずるものも亦懸直あること

を知りて、一時間遲參して時間に適合し、兩々掛引を爲して時を定む。此の如くんば、寧ろ時計無きに若かざるなり。

西洋にては總ての時間を守ること正確なり。且つ何れの家に至るも、主婦は一週間の事業を各日に割當て例せば土曜日には洗濯、金曜日には買物と規則正しく之を配當して實行せり。然るに我邦にては、週日の事業を分割するの必要を感せざるが如し。日曜日と爲れば、官廳學校の休業なるを以て、却て起蓐の時刻を延ばし、晏眠を貪ぼらんとするものすらあり。此等惡習の存するは、これ週日の事業配當の習慣を重せざる結果なり。又食事は、家婦の勤務中最も大切なるものなれば、割烹の方法を充分に了知し、家人の健全を謀り、食事を以て、家族全體の快樂たらしむること肝要なり。從つて學校に於て大に理化の智識を與へざるべからず。且理論に偏せずして應用を主とし、修めたる所の學藝は充分之を活用し得る樣懇切に敎授せらるゝを要す。割烹調理其宜しきを得ば、いづれの家庭にても和氣藹々たらしむることを得べければなり。余は割烹に就ては固より門外漢なりと雖も、終日外に出でゝ事業を爲し、歸りて食を喫するに當り、膳に供ふる所のもの、敢て佳肴ならずとも、時々其食物の品變りて、調理も割烹上の理に合ひ、巧みなる配合に依て材料を使用せば、風味口に適し、實に心神の勞を慰するの感あり。若し然らずして日々變化なく、調理宜しきを得ざれば、高價の材料を用ゆると雖も、其の効なきこと多し。

此に吾輩の稱する美味といふは、強ち高價なる食物を謂ふにあらず。同一の豆腐にても、或は之を燒きて田樂と爲し、或は之を「フライ」と爲し、調理法を種々に變化して能く口に適合せしむるをいふなり。佳肴なりと雖も、變化乏しきときは其美味を感せざるなり。又美味なる食物を製するに、必ずしも多額の金を費やさずして、之を調ふることを得べし。是れ理化學上相當の智識の學校に於て與へられざるべからざる

所以なり。此際に於て注意すべきは、時間と費用とを多く食物に費さゝるに在り。而して之を爲さんには先づ臺所の設備を改良せざるべからず。現今一般に行はるゝ臺所の設備は、未だ甚だ不完全なることを免れざればなり。元來臺所は最も必要なる場所なれども、吾國にては至て輕卒に取扱はれ、從て奧樣は臺所に入ることを厭ひ、臺所に働くを以て恥辱と爲し、若し自己の働けるを來客に見らるゝときは、面を赧めて臺所を出で、一切の事を下婢に委ねて顧みざるなり。是等も中流以上の令夫人に於ては、下婢の雇者あればなほ恕すべき所ありと雖も、收入十二三圓の家の妻にして奧樣と稱し、臺所を賤むは抑も何故ぞや。是れ今の女學校に於て、將來人の妻たるものに對し、臺所にて經濟的衞生的に美食を得るの方法を教授し、舊風を除去せざるに因るなり。

西洋にては全く之に反し、若し來客あれば、家婦は臺所に於て其調理を爲しつゝ客と談じ、又客をして親しく臺所の設備を觀せしむることを樂とすること、恰も我邦に於て座敷を賞觀すると同樣なるが如し來客をして臺所を見せしめ快樂を感ずる程、其主婦の日頃家庭に於ける注意の周到なるを察すべきにあらずや。歐米にては、高位高官即ち各省大臣の令夫人の如き人すら、午前中は重に家事に屬することを整理し、朝は野菜肉類を求むる爲めに自から笊を携へて外に出で、新鮮にして調理に適當なるものを求め、晝食終れば即ち邸内を散歩し、或は友人を訪問し、或は賓客に接し、專ら交際の方面に立ち、規律誠に正確なり。臺所は一家族に於て至極大切なる所なれば、婦人は之を輕んぜず、深く注意を拂ふべし。臺所を汚物場の如く考へ、臺所に出入するを恥と爲すが如きは、衞生並に經濟の本旨を了知せざるものなり。一家經濟の由て起る所を輕んじ、衞生の源泉を顧みず、揚々として奧樣と稱へ、白き襟卷を胸部迄垂らし、西洋下流婦女の狂態に倣ふて時流に適合せりと信じ、ハイカラ有るを知りて臺所あるを知らず、劇場寄席の

巷あるを知りて、青物市場の街あるを知らざるが如き家婦、家庭の圓滿ならんことを欲するも豈に得べけんや。

又主婦は家屋全般の清潔を圖らざるべからず。煉瓦構造にせよ、藁屋構造にせよ、常に清潔を保つことに注意し、衞生を重んずべし。獨逸の女學校の如きは、其設備完全にして、在學中充分清潔心を養成せしむるを以て、生徒は深く其風習に感染し、卒業後も家庭に於て之を繼續するを常とす。例へば便所の如き、女生徒と女敎員は、同一の所に在りて監督を爲すを得べからしむ。日本にては、如何にも斯る設備に於て缺くる所あるを見る。故を以て其清潔なるや否や、監督の行屆けるや否やを認むるに苦しむ。獨逸にては便所に至る迄清潔を極め、其監督の法また周到なり。清潔は啻に衞生上必要なるのみならず、又吾人の品性を高尚ならしむ。如何に美麗なる衣服を着用するも、不清潔なるときは、其品位從て野鄙となり、他人をして厭ふべきの感情を起さしむ。近來電車にて自己に隣接する乘客の不潔なるを見て、一種不快の感を生ずるが如き、之が適例なり。又我邦の室内掃除の如きは、眞の掃除にあらず、唯だ塵埃の散亂するを防ぐに止まるが故に、僅少の時間を經過すれば、直に又元の通り塵埃の堆積するを見るを常とす。

我邦に掃き掃除・雜巾掛の方法ある如く、西洋にも亦濕燥二種の掃除法あり。然れども彼地に在りて、床板より机・腰掛・窓硝子に至る迄、悉く濕掃除を爲すを以て至て清潔なり。我邦にては、重に疊を敷ける故、一體塵埃の室内に充ち易きに加へて、其掃除法もまた至て亂雜にして、塵拂を以て唯だ障子の紙を叩き、障子の骨に附着せる塵埃を顧みず。箒を持ては座敷の中央部のみを掃き、四隅にはこれを當てることなく、器物あれば唯だその周圍のみを掃き、之を取除きて、其下を掃かんともせず。濕雜巾を用うるに至ても、能く之を洗ひ出さず、器物の順序も無く、手當り次第に拭き掃除するを以て、乾ける後之を見

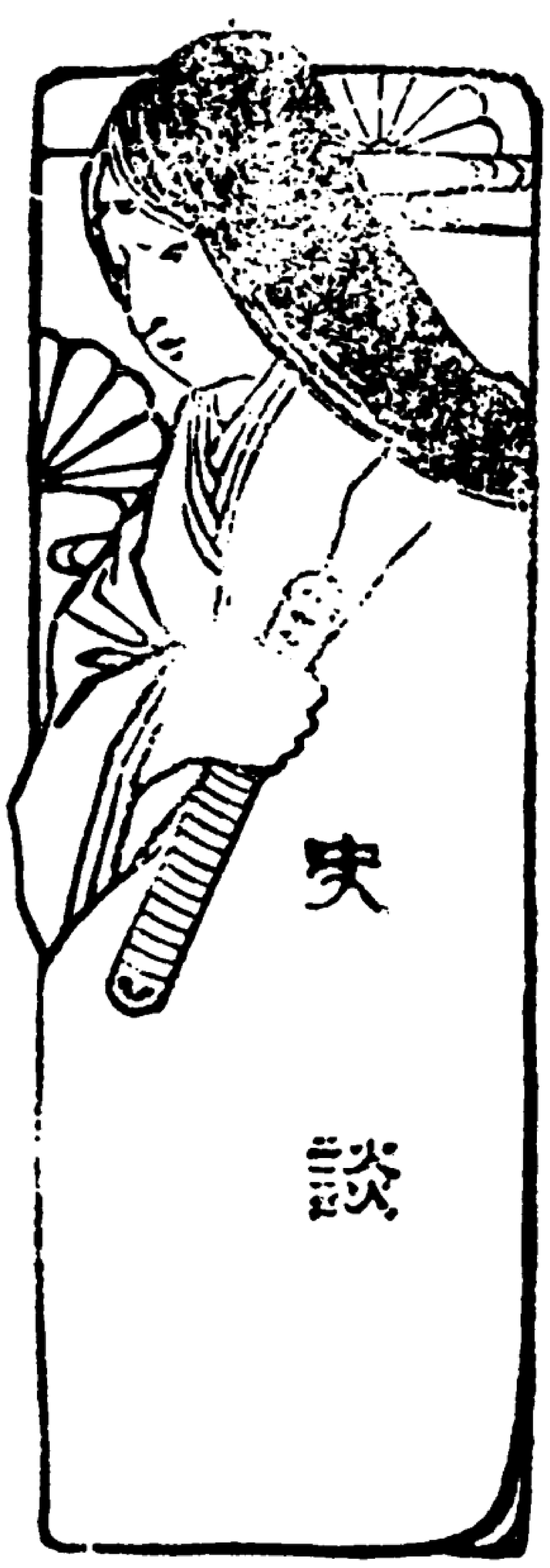
れば、塵埃の線條器物の表面に附着し、下婢不注意の痕跡は歴々として掩ふべからず。飾棚もまた下婢の無作法なる掃除に依て、容易に得難き貴什も數々瑕瑾を點じ、主人の寛大なるによりて、依然机上に飾らるゝも、その過失中下婢教育資料の談柄に供せらるゝもの少なからず。故に一家の僕婢たるものは、宜しく掃除を怠るべからざると同時に、清潔の點、器物保存の點等に注意するを要す。

余嘗て獨逸に下宿せし時、其家の令孃の爲め痛く叱られしことあり。彼國にては、婦女の未婚者を令孃と稱し、六十歲餘の婦女も、未婚者なる時は、依然令孃の名を負へり。故に白髮落齒の令孃敢て珍しからず。余が伯林に於ける下宿屋の令孃も此類の人なりしが、ある日室内にて喫煙せしに、孃叱して曰く、願くは喫煙を止められよ、余曰く、吾が錢を以て之を買ひ、吾が室にて之を喫す、何ぞ孃の助言を要せん、孃の曰く、今貴客此室を借るも、貴客去らば、又他の客を迎へざるべからず、喫煙のため四壁を燻らし、敷物を損するあらば、從て席料を減せざるべからず、其損害を負ふ者は何人ぞやと。余茲に於て止むを得ず孃の居らざる時を見て竊かに喫煙し、孃の來る頃之を止めたり。主婦として其家の清潔を重んずること感ずべからずや。此清潔に關し我邦の男子は意に介せざるが、西洋にては、獨り女子のみならず男子も大に是に注意し、且つ之を實行せり。故に旅行を爲すに當り、外國人は男子も何櫛、懷中鏡、剃刀、石鹼、香水等を携帶して常々清潔に注意す。是れ決して驕奢なる習慣に非ずして、實は衞生を重じ、清潔を保ち、自己の心身を爽快ならしむる所の要訣たるなり。

主婦は一家清潔の監督者となり、中樞と爲り、家族は勿論家屋、器物、衣服、邸内に至る迄、一見人をして清爽の感を起さしめ、延いて其家風を景慕せしむる所なかるべからず。是れ實に主婦たる者の美德の一なり。又主婦として、最も注意して心得置くべきは育兒法なり。さまで教育を受けざる母の手に依て子女

の養育さるゝを見て、育兒は困難なるものに非ざる如く思惟するものあれども、古來の英雄豪傑にして、其母の感化力に依りて成功せしもの多きは、英傑の傳記の保證せるところにして確に主婦の育兒時代に於ける注意の如何に効力あるかを明にせるものなり。世の子女が勞働を好むの習慣も、清潔を愛する心も規律を守るの行爲も、同情に厚きも、若くは身體の虚弱と爲るも、殘忍に變ずるも、懶惰と化するも、一にみな主婦の教養如何にあり。主婦嚴に過ぐれば即ち畏縮し、寛に過ぐれば增長す、所謂其の中庸を執つて教養すること必要なりと雖も、此中庸を守ることたるや、主婦の最も困難と爲す所なり。例へば高等の教育ある繼母にして、先妻の子女を虐待すること珍しからず、况んや教育なき繼母に於てをや。母が育兒法を知らざるが爲めに、精神上にも、身體上にも、其兒をして、生れつかざる不具者たらしめし例少なからず主婦たるもの不注意にも、兒童は頑是なき故、斯ることには氣付かざるべしと考へて、不規律の行動を爲さば、摸擬の性に富める兒童は、何時しか之を眞似、其不規則を善とし、自然に惡境に進むに至らん。孟母の三遷に於ける、「カーネギー」母の米國移住に於ける如き、如何に兒女の將來を思ふて、滿身の愛情迸りて我を忘れ、凡てを犧牲としてその養育に留意せしかを知るべし。

古今東西賢婦人の其跡を一にすること此の如くにして、試みに上來說き來りたる所を概言すれば、身體健全、意志强固、智識豐富、感情深厚なる婦人の益々多く養成せられんことは吾輩の切に望む所なり。斯る有力の婦人にして多く養成せらるれば、將來完全なる家庭を作ること甚だ難たからざるべし。苟も完全なる家庭を作ることを得れば、玆に始めて我邦の社會改良事業を進めて、斯國をして、眞に文明國たる域に達せしむることを得べし。是れ吾輩が將來の女子教育に就て尤も希望する所なり。（完）



小楠公

文學士　大町桂月

第五、辨内侍

南朝五十年の春、東風吹き荒れて、豺狼、路に横はり、雲深き吉野の奥、花に涙をそゝぎ、草しげき黒木の宮、鳥に心をおどろかす世のなりゆきのうたてさ。よな〳〵玉夢おだやかならざりし御有樣、申したてまつるも、いと、かしこし。三木枯れ、一草しぼみ、忠臣前後、熱血を賊庭にそゝぎ、一命を鴻毛にくらべて、骨を野外の月にさらしたる跡、いづれも、あはれならぬはなきに、色も香もゆかしき一本の名花、空しく深山の奥に朽ちはてゝ、かぐはしき心の一輪の花片、谷水の流るゝまに〳〵、世につたはりて、永くあはれをとゞめたる辨内侍、げにや、才色人にすぐれ、徳操世にまれなるに、一生、薄命をきはめて、恨を南山の雲に付したるは、いたはしきことの限りなりけり。

辨内侍は右少辨俊基朝臣の娘なり。後醍醐天皇、さきに北條氏の惡をこらさんとしたまひしとき、その謀もれて、俊基朝臣は、首謀者のことゝて、關東に捕へられけるが、終に葛原が岡の白露と消えうせぬ。その妻なる人、身の不幸をかこつのあまり、浮世を三衣の中にさけぬ。かく父には死別れ、母には棄てられて、よるべなき孤兒の身の上、かなしがりて、俊基朝臣の兄、行氏卿は、辨内侍をその家にむかへとりて、子のごとくいつくしむに、心なぐさめられて、あぢきなき世をすごしけるに、その才徳いつしか雲の上に聞え、召しいだされて、後醍醐天皇の宮につかへけり。東魚西鳥、一場の夢に歸し、

天下は、猢猴のごときものにかき亂されて、後醍醐天皇、都をいでさせたまひて、吉野の行宮にうつりたまひしほど辨內侍、また、從ひまつりて、かしづきたてまつること、いよ〳〵怠らざりけり。

或夜みかど、中納言隆資卿、洞院の實世卿、宗房卿など、御前に召しいださせたまひ、御酒たまはらむとて、辨內侍に酌とらせたまひけるに、いかゞしけむ、はからずも御土器おとせば、二片にわれぬ。御けしきかはりて見えさせたまひければ、內侍、直に、

さかづきのわれてぞいづる雲の上

と、よみいでけるに、いと興じたまひて、誰か下句つけてよと、おほせさせたまふ。宗房卿とりあへず

ほしのくらゐの光そへばや

と、つけゝれば、みかど御感なゝめならず、いと、こゝろよく、御杯かたむけたまひて、夜のあくるまで、うたげしたまひきとかや。げに、この內侍の才の人にすぐれたること、これをもて、おしはかるに足りなむ。

かくて後醍醐天皇は御いたつき、おもくならせたまひて、つるぎを按じつゝ、みまかりたまふ。御心の中、いかに、くやしかりけむ。內侍は、怙恃を失ひたる孤兒の身のよる方なきに、今又、君に別れまつりて、悲歎の淚に、昨日と暮れ、今日とすごしけるほどに、ゆくりなきことこそ起りけれ。內侍は、才德のすぐれたるのみならず、類稀なる美人にして柳の腰、しなやかに紅の頰、香露したゝるが如く一たび笑へば、吉野の花も色なく、三五の月も光を失はむばかりなるが、賊將高師直、いつのほどにか垣間見たりけむ、思慕の情いと切にして、人目をしのぶずりの、亂れにみだれ、思ひたえなむとばかりを、水莖の跡によせて、幾度か送りけれども、心高く操正しき辨內侍、いかでか、逆賊の心になびくべき、いたく、そのなめげなるを怒りて、手にだに觸れざりければ、丸木橋のそれならで、むなしくふみかへされて、夢魂いたづらに峯の雲に迷ふばかり

なりけり。かゝりしほどに師直ふと思ひつきたることあり。その知りあひたる女、内侍の叔父なる三位行氏卿のもとに、親しく行きかよひければ、その女して、ひそかに行氏卿の北の方に、切なる思ひを打明して、さていはしむるやう、思ふこと、かなへしめたまはゞ、三位殿の位をすゝめ、領地をもあまたつけ侍らむなど、利をもて誘ひければ、北の方慾に目くれて、之をうべなひぬ。さて内侍に送る文をとゝのへ、梅が枝といふ侍女にもたし、侍二十人ばかり添へて吉野の行宮につかはしけり。その文に、はるかにこそ渡らせたまへ、山里の御すまひ、さこそと思ひやらるゝごとに、袖をこそしぼりあへね、御こひしさの、いとせめて、住吉へ詣で侍りしほどに道のたよりも然るべければ、あひたてまつらむことを思ひて、河内國とかや、高安のほとりに知りたる人のさふらふに、參りてこそ待ちたてまつれ。はかなき世の中の、まして、みだれがはしければ、此度ならでは、いかで相見むなどかきて、その終りに

あひみむと思ふ心をさきたてゝ
袖にしられぬ道芝の露

とありければ、年頃そだてられて、恩あつき叔母の身の、かくばかり慕ふ心の切なるに、梅が枝さへ年久しくなれたる女にて、そのいふこと、まめだちて見えければ、いとなつかしくて君に奏しけるに、御暇たまはりければ、うれしさ云はむかたなく、女房二人、青侍三人つれて立いでぬ。その路に人あまたいであひて、いふやう、北の方は、高安に待ちておはしたれど、やみがたきことありて住吉にゆかせたまへり。されば、遠けれど、かしこまで行きたまへといへば、青侍ども首をうちふり、そは心得ぬことかな、高安までとて、暇たまはりて來りたるものを、いかでか、はるばる住吉までゆかるべきとていなみければ、いたく怒りて、その三人を打殺してけり。二人の女房は、たゞわな〳〵とふるへるのみにて、せむ術を知らず、かの人々が内侍の乗りたる輿を奪ひてゆくまゝに、從ひゆきぬ。内侍は、たゞ

鬼にとられたる心地して、輿の中に、ひたなきに泣きつゝ、石川といふ所までゆきしほど、楠正行、吉野の宮にめしいだされて來りけるが、輿の中に、女の泣聲しきりなれば、いとあやしみ、立ちよりて、その故をとへば、あざむかれて奪ひとられたるなりといふ。正行、やがて、ひきつれたる郎等に命じてそのくせものどもを捕へしめけるに、大方はいけどりぬ。三人、四人、劍ぬきつれて、斬てかゝりければ、之をば皆殺しつ。たすけ得たる内侍と、いけどりたる曲物どもをゐて、吉野の宮にまゐりて、この由奏しければ、梅が枝を詰問せしめたまふに、師直のたくみなること、わかりぬ。こゝに曲物どもは、みな、殺し、梅が枝をば、尼となして、京都にかへしけり。かく内侍の危難を免れしは、またく、正行の功なりと、後村上天皇、ふかく、よろこばせたまひ、内侍を正行にたまはらむと、おほせさせたまひしを、正行は、

　とても世にながらふべくもあらぬ身の
　かりの契りをいかで結ばむ

といふ一首の歌をたてまつりて、いなみまつりぬ。そは、いさぎよく討死して、君恩に報いむと心定めたる身の、女などにかゝづらひて、おくれをとらば此上なき不忠なるべく、また、一日の情の爲に。百年の身をあやまらしむるに忍びざればなり。さればそのつれなきは、眞に、つれなきにはあらで、なかなかに、情ふかき武夫なりけり。

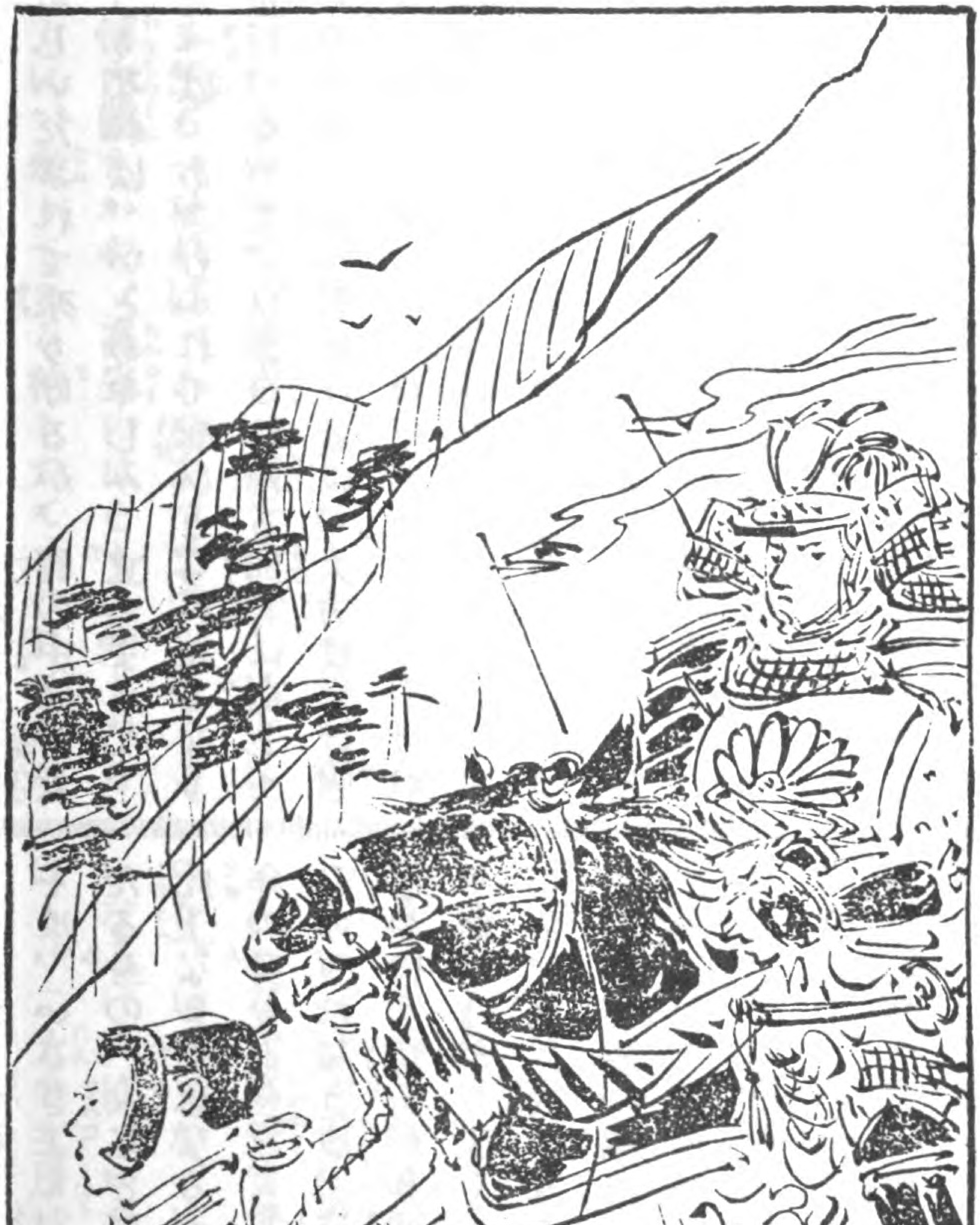
　いくほどもなく、正行は、如意輪堂の扉に、むなしく、無き數に入る名をとゞめて、その身は、果して、四條畷の朝露と消えうせぬ。あはれ、赤繩結ぶに由なかりきといへども、みかどの許したまひし夫危難をすくはれし恩人、いかでか、よそに見すごすべきとて、内侍は、後に龍門の里に、さゝやかなる庵を結びて、一生、かたく操を守りつゝ、正行の冥福をいのりきとかや。

　今時の女は、重きがうへの小夜衣を重ねて、恥とせざるならはしなるに、古の女は、ちぎりもかはさ

ざる人にだに、かくばかりの操はたてけるなり。

第六　吉野宮

近畿の民もとより順逆は辨へながら、南朝の衰頽、足利の威福何時ともなく見慣れ聞慣るゝに従ひて、殆ど如何とも人力の及び難きもの丶如くに思ひ做し、正平二年、正成の嗣子正行が旗を金剛山下に揚げて、漸く為す所あるべき風の見えし時にも、彼は大勢是は小勢、大旱一抹の淡雲、瞬時の通り雨さへも覚束なく、危ふげに手に汗を握りて、成敗を観望し居るに過ぎざりしが、譽田林、瓜生野、相續きての合戦に何の造作もなく賊軍を討破りて大捷を博し、向ふ所



恰も敵なきが如き有樣なるに、而も大將は二十二の若武者なれど、智勇兼備はり、恩威並び行はるゝ良將なるを見聞しては、私かに心を動かさゞるを得ざる時勢となり來りぬ。是を以て菊水旗の飜るところ靡然として正行に謳歌し、日を經るに從ひて、其勢漸く加はるの傾を示し初めたるのみならず、中國四國九州の諸國に蟄伏して、機運を待ち詫びたる勤王の諸士が、風を望んで所在蜂起せんとするの兆候さへ表はれけり。

正行の志す先は無論京師、目指す敵魁は無論尊氏なり。潛かに彼方の隙を覘て、目に物見せんと企つれば、彼方は尊氏、京勢兩度の敗走に手痛き打擊を蒙りたる末、近畿の向背を察し、遠國の動搖を聞くにつけ、今は周章狼狽一方ならず。末々の殘兵、國國の弱卒などにては、とても叶ふまじと覺りて、高武藏守師直、越後守師泰を兩大將とし四國中國東海東山より催し來れる精兵八萬餘騎を撰んで、正行の機先を制すべき謀略を定めたり。

同じき年十二月十四日の早旦、高師泰は手勢三千餘騎を具して、先づ淀に着きぬ。是を聞きて馳せ加はる面々は武田甲斐守、逸見孫六入道、長井丹後入道、厚東駿河守、宇都宮三河入道、赤松信濃守、小早河備後守にして、其勢都合二萬餘騎、淀、羽束使赤井、大渡の民家に居餘りて、堂舍佛閣に充滿ちたり。一方の大將武藏守師直は、同じく二十五日を以て、手勢七千騎を率ゐて八幡に屯し、此手に馳せ加はる諸將は細川阿波將監清氏、仁木左京大夫賴章を初として、今河五郎入道、武田伊豆守、高刑部大輔同播磨守、南部遠江守、同次郎左衞門尉、宇都宮遠江入道、佐々木佐渡判官入道、同六角判官、同黑田判官、長九郎左衞門尉、松田備前三郎、須々木備中守、宇津木平三、曾我左衞門、多田院御家人、源氏二十三人、外樣大名二百三十六人、其勢都合六萬餘騎、八幡、山崎より、眞木、葛葉、鹿島、神崎、櫻井、水無瀨に亘りて陣を取りぬ、固より問ふまでもなく、尊氏は此一擧に楠氏の一族を鏖殺し盡して、

枕を高くして安臥せんことを期し、將も卒も一騎當千のものを精撰し、殆ど京師の守護をさへ空虛にして繰出しゝなりき。

さる程に正行は、京勢雲霞の如く淀八幡に着きぬと聞き、其兵數を探り陣形を察するに、此度こそは由々しき大敵、何人の智略を以てするも我小勢を以て、とても迎へ戰ふべき術あらず、固より期する所は一將にても、一卒にても、多く賊を斃し惱まして潔く討死し、父の名を辱しめざるを力むるにありて尊氏勢を剿滅し盡すが如きは、初より力の及ぶ所にあらざるを覺悟せざるべからず。さるにても憎きは尊氏、畏きは南朝の御有樣、我今一族を率ゐて戰沒し終れば、何れの時にか宸襟を安じ奉るの期來るべき彼を思ひ之を思へばおのづから心鈍れども、さらばとて一命を捨つべき機會、今の外にあるまじく、到底生延ぶべき場合にあらず。即ち弟正時以下一族を引連れて、吉野の皇居に參內しぬ。

時は正平二年の十二月二十七日、空は掻曇りて雪か雨か、木枯は強く吹きすさびて肌を刺すが如し。谷間には雪深く、梢には鳥も鳴かず。凄きまでに物淋しき山道を、悄然として進み行くもの、最後の登山、最後の參內、其胸中の感果して如何なりけむ。

やがて行宮の前に着きぬ。一憩の猶豫もなく、正行は四條中納言隆資卿を經て奏上すらく、「先臣正成曩に尫弱の身を以て微力を展べ、强賊の威を挫き、暫し先朝の宸襟を休め進らせ候ひしが、幾くもなく天下復た亂れて、逆臣西國より襲ひ來り候ふ間、かねて思ひ定めけん、遂に攝州湊川に討死仕り候ひ訖りぬ。臣正行、時に年十一に罷りなりしを、合戰の場へは伴はで河內へ還し、死に殘らんずる一族郞黨を扶持糾合し、機を慮りて朝敵を討滅ぼし、君を御代に即け進らせて、普天卒土再び皇化に浴せしむるを努めよと申遺して死して候ふ。今や正行、正時、既に壯年に及び候ひぬ。此度我と手を碎き合戰仕らすば、一は亡父の遺訓に違ひ、一は武略の謗に落つべく覺え候ふ。且は有待の身、思ふに任せぬ習ひに

て、一旦不測の疾に嬰り早世仕る事の候ひなば、君の爲には不忠の身となり、父の爲には不幸の身となるべし。此度師直師泰の衆を悉して犯さんとするは、洵に臣報効の秋と信じ候ふ。死力を竭し合戰仕りて、彼等が頭を正行が手に懸けて取り候ふか、正行正時が首を彼等に授け候ふか、其二つの中に雌雄を決すべき覺悟にて候へば、今生にて今一度君の龍顏を拜し奉りて出陣せばやと、玆に參内仕て候ふ。』と泣く〳〵述べ終れば、隆資も聞きて未だ傳奏せざるに先づ涙を流し、直衣の袖を濡しゝも理りなり。

主上即ち南殿の御簾を高く捲かせ給ひて、親しく諸卒を照臨あり。正行を近く御階に召し寄せ給ひ『以前兩度の戰、毎に克捷を得て敵軍に氣を屈せしむ。累代の武功返す〲も神妙の至り、朕太だ之を嘉す。今度の合戰は誠に天下の安否たるべし。進退度に當り、反化機に應ずる事は勇士の心とすべきところ、進むべきを知りて進むは、時を失はざらんが爲なり。退くべきを見て退くは、後を全うせんが爲なり。朕ひたすら汝を賴みて股肱とし爪牙とす。宜しく謀を深くし慮を遠くし、自ら愛惜して朕が心を體するところあれ。』と鳳音朗らかに詔らせ給ふ、正行深く心に銘し感涙堰きあへず、兎角の奉答にも及ばず、頓首して退出したり。

此時の一行は即ち正行正時を首として、和田新發意、舍弟新兵衛、紀六左衞門、子息二人、野田四郎子息二人、其他今度の軍に一歩も退かず屍を列べて討死せんと誓へる兵もの、總勢百四十三人、皇居を退出して直に先帝後醍醐天皇の御廟に詣でぬ。

此處にても又正行は恭しく英靈に對し奉りて、崩御の後の世の變遷より、今年兩回の戰勝を經て、此度の大戰に至るまで漏れなく奏上し了りて、軍如し利あらざれば、一人も殘らず討死すべき暇を申し上げ、而して其隣りなる如意輪堂に赴き、鏑を叩いて默禱し、起て百四十三人の名字を扉板に書き連ねて過去帳に代へ、其奥に、

梓弓引ひきかへさじと思ふより

なき數にいる名をぞとゞむる

の一首を書き留め、終りて一同鬢髪を切り佛殿に投げ入れて、相共に此所を辭し去りしこそ哀れにも又勇ましけれ。

ついでに言ふ、梓弓の歌は「かへらじとかねて思へば梓弓」といふ方、却て廣く人口に膾炙するも、こは後世の訛傳に係れる也。

ナポレオンの威武に屈せざりし婦人記者

鈴木義山

一枝の筆を揮ふては、當代の精神を鼓吹して、文才を今日に傳へ、三寸の舌を動かしては、絶世の英雄に反抗して、節操を後世に殘し、十年故國を逐はるれども、之が爲に守るところを喪はず、一旦帝王に招かるゝと雖ども、之によりてその決心を飜がへさず、毅然として終始其志氣を渝へざるが如きは、大丈夫兒も尙ほ難しとするところ也、況んや名門に生れ富貴に長じたる一女子の身を以て、能く斯の如くなるを得たるは、古今東西の烈女傳中殆んど無くして、僅かに見るところのものなるべきか。

佛蘭西王ルイ十六世の朝に事へて、財務大臣たりし「ニッケル」が、財政家として、又政治家として、朝野の信望最と厚かりしは、人のみな知るところなり、されば此人にして、其の全幅の精神を發揮したらむには、かの恐るべき革命の大亂をも未發に防ぐを得べかりしにとは、歷史家の歎惜するところなるが、「ニッケル」をして斯く九鼎大呂よりも重からしめしは、財政家たる將た政治家たる技倆にもよるべけれど、又一つには名高き一女子の父たりしことは其の重なる原因なるべし、佛國人が今日に至るまで「ニッケル」を記臆して、尊敬するのみならず、愛慕の情をさへ失はざるは、畢竟その女子が、健氣にも蔭となり日向となりて、父の居動を監視して、其行ひを正したるが爲に外ならず、この女子こそ、「アンチ、ニッケル」孃とて、後に嫁して「スタエル」夫

人となり、才色兼ね備はり、貞操全き佛國の一名姫として、絶世の英雄「ナポレオン」に對抗したる著名なる女記者は、則ちこれなり。

ニッケル孃が、始めて文學者としての名を得しは日となく夜となく讀書勉學にのみ耽りて、過度とまで思はるゝ程に勉强したれば健康やうやく衰ろへて身體に害あるべき恐れを生せし爲め、一時學びの道を中止して、初めて筆を染めたるが其發端なりき、かくて孃は此時かの「ジャン、ジアック、ルウソー」の著書と人物とに關する評註を著はして出版しけるが、此の書の一たび出づるや、巴里全都は爲に震動せん計りに驚ろきて、紙價爲に貴きまでに及べりとぞ、書中記すところのものは、今日の眼より見れば稍々兒戯に類すると思はるゝ節なきにあらねど、當時は恰かも「ルウソー」の名聲高く揚りて、殆んど絶頂に達する時なりしかば、孃が、己れの熱心に渇仰せる人物を過大に賛賞したるも、强ち無理とのみはいふべからず、且つ其の深沈なる思想の自づから各頁にあらはれて、今が今まで學校の敎室に書を繙きて、咿唔の聲を揚げたる花の乙女の著作としては不思議とも奇妙とも思はれければ、巴里人士のかく吃驚せしぞ道理なれ。

次ぎに著はせしは『自殺』と題する一書にして、題名の已に奇なるに加へて、青春多福の少女の筆としては、かゝる問題を充分に解釋せんは、物足らぬ心地せらるればにや、文學上よりは餘りに注意を惹かれざりき。

其後幾干ならずして、孃は巴里駐在の年少外交官たる瑞典公使「スタエル」男爵と結婚の約なりて、めでたく華燭の典を擧げしが、これぞ孃が政治上の主義に基礎を措きて、其後遭逢せる運命の源となりしとは、後にぞ思ひ知られける、かくて孃は「スタエル」男爵夫人となりて、夫と共に、外交社會に往來して交際場裡に嬋姸の花を咲かせしも一盛りにてやがて彼の恐るべき革命の亂は破烈しぬ、孃は熱心なる自由主義者なれば、自由黨一派に向ひ淺から

ぬ同情を寄せたるが、其の黨人の亂暴狼藉なること譬へば血に渇ける魔の如く、又人肉を啖ふ鬼の如く神聖なる自由の名によりて、幾千萬の無辜の生命を奪ひて厭かざるを見ては、愛に富める女性の爭で忌み厭ふの情を起さゞるべき、孃は、遂にかゝる慘狀を見るに堪へずして滿腔の感情を一枝の筆に寄せ、幾回か小冊子を公けにして、其の所見を世に問ひしが、之が爲に不測の災害を蒙むらんとせしことも度度にて遂には生命を全うせんが爲に、已むを得ず、血腥き佛國を去つて、一時身を匿せしともありき、其後かの十一月三日の事件ありて、局面一變し、やや生命財產の安全を獲しかば、復び巴里に返りしがこゝに端なく孃の公明にして正直、堅全にして剛勇なる操行の世に顯はるべき時期は到來しぬ。

そも佛國革命時代に於ける執政内閣は、政治の權を有すれども、其實擧らず、人心四散すれども、毫も統一するの力なかりしが、此時一人の少年士官ありて、其の初陣の功名は、佛國民一般の耳目を震動炫燿して、適ぱれ、巴里の豪傑よ、佛國の英雄よと口々に唱へしめて、上下貴賤の別なくみな此の少年士官を謳歌し歡迎せざるはなかりき、此年少士官は則ち「ナポレオン、ボナパーテ」にして、其の衆望の歸するところ、堂々たる執政内閣よりも、勢力却つて強大なりき、されば「ナポレオン」はその名聲のみならず、事實に於ても、此時已に佛國に於ける第一等の人物なれば、誰一人として、尊敬の情を表せざるはなかりしに、獨り「ニッケル」孃は、「ナポレオン」が出身の初めより、銳敏なる眼を以て、觀察を怠らず、彼が野心の次第に增長するを見て、佛國の爲に捨て置くべきにあらずとし、遂に親友「ベンヂャミン、コンスタン」の助力を得て、己が住へる居宅をば、本部となして、「ナポレオン」反對の運動を始めぬ、これよりして孃は「ナポレオン」を嫌惡すること愈々甚しく、凡てその一擧一動に至るまで全く信用を措かずなりぬ、爾後「ナポレオン」の運命の開け行くに隨ひて、孃の反對も一層劇しくなり

て、生涯その志操を動かさゞりき。

財務大臣たりし「ニッケル」の女としては、孃は實に「ナポレオン」と輯和親密なるべき因縁ありしなり、「ナポレオン」は人心を集攬するに意を用ゐて、左まで自個に利害の關係なきものまでも、愛撫して恩を加へ他日の用とするを常としければ、孃の如きは彼れの進んで握手せんとするところなるべく、且つ孃の父「ニッケル」は財務大臣たりし時、私財二百萬金を政府に貸付け居りて、今は此の巨額の金圓を返還するの權力あるものは、唯一人の「ナポレオン」あるのみなれば、孃の方より言ふも、「ナポレオン」と結托せんは、この大金を得るの手段としても、甚だ便利なりしなり、されば孃にして一たび「ナポレオン」と握手せば、彼れは孃の如き勢力ある一女傑を得るの代價として、二百萬金を擲たんこと塵芥を棄つるが如くなりしならんに、孃が一片堅牢なる意志は、かゝる大金をも、眼中に措かずして、利害の爲に、其志しを遷さゞりしかば、この貸金は、そのまゝに成行きて、幾十年の後、「ボルボン」王朝回復の時に至り、「ルイス」十八世よりやうやく償還せられたりとぞ。

かゝる有樣なれば、「ナポレオン」が、孃を己が味方とせんとの企ては愚か、中立を守りて、せめては沈默し呉れよとの望みも全く水泡に歸しぬ、是に於て「ナポレオン」は其の報として復讐を思ひ立ちぬ、今や孃の一身は危險に迫れり、何時災害の落來らんも知るべからず、折から父「ニッケル」は『政治と財務との最終の目的』と題する一書を著はして、專制政治の壓制と暴橫とを痛く攻擊しけるが、孃が此の著作を公にせんことを父に勸めたるは疑ふべからざるのみか、孃の所說と符節を合するが如き論旨の、全篇を通じて、明かに見ゆるは、孃が此書によりて「ナポレオン」に向ひ、一矢を放たんとしたるも亦爭ふべからざることなるべし。

されば此書も「ニッケル」孃もそのまゝには措かれざりき、書籍は發行禁止となり、孃は巴里を逐はれ

て、その四十里以内の地に入るを禁せられぬ、これぞ「ナポレオン」が其政敵に與へたる復讐にして、孃は之が爲に、その樂みとせし交際社會より遠ざかり、朝夕面白をかしく送りたる其の住居を去らざるを得ざるに及びぬ、孃の心や如何なりけむ、多年住馴れし花の巴里を後に見て、悄然として車に乘れば、鳥哀み花憂ひて、見るもの斷腸の種ならざるなく、愁雲疊々行途を塞ぎて、長く開かず。

孃は此の追放の間にも、筆取る業を惟一の樂みとし、常に著作に從事しつゝ、遂に二大著述を完成して千八百十年巴里に於て發行せり、此時身は尙巴里に入るを許されざれば、都を距る四十里の境にまで來り居りしが、こゝにも亦災難は落來りて、新に發行せし幾多の書籍は、その發兌書肆より引上げられて沒收され、其の著者たる孃は即時に佛蘭西を退去すべき命に接しぬ。

巴里を去るさへ最と恨みなるに、今は本國佛蘭西をすら離れざるを得ざるに至りしかば、孃は龍鐘として此を去り、一時は瑞西なる其の領地に退隱せしが、其後飄然として英國に旅行し、『追放の十年間』といへる一書を著はしけり、其名の如く此書は愉快なる境遇を去りて、索居落寞の生活を送りたる狀況を記したるものなれば、快活なる文字とてはあらざれども、記事精細にして、文章奇麗なれば、恰も一人の不平女子のその境遇を物語るを目前に見るが如き心地せられて、讀者自から其巧妙なるを驚嘆せざるを得ざるべし、書中の欠點はといへば事實に彩色を施して、往々自尊誇大と見ゆるにあれども、これ將たかゝる境遇を受けたる人にとりては、避け難きところなるべきか。

『ナポレオン』の失敗して、エルバ島に左遷せらるるや、孃は籠鳥の復び放たれたるが如き心地して、翼を伸して急ぎ巴里に還りぬ、而して其の舊友援助者等と共同して、立憲王政を主張し、一方には「ナポレオン」黨に反對すると共に、他方には舊王統を恢復せんとする急激なる保守黨にも左袒せず、卓然

標置して、高く其の地歩を占めたりしに、其の翌年に至り「ナポレオン」の「エルバ」を脱して佛國に回り、復び「ボナパート」王朝の旗を立てしかば、局面暫らく一變し、孃は又もや巴里を去らざるを得ざる身となりしぞ是非なけれ、然るに「ナポレオン」は孃の巴里に留まるを許せしのみならず、剰さへ温言を以て孃を迎へ、憲法制定の業を助力せんことを懇請せしが、貞節毅然として奪ふべからず、苦樂の爲めに其志しを改めざる孃の爭でか之に應ずべき直に一書を裁して之に答へ、斷然其の請を拒絶せしが、その言辭の大膽にして活氣ある、絶代の英雄をして愧死せしめし程なりき。

かくて「ナポレオン」は「ワートルロー」の一戰に打負けて「セント、ヘレナ」に謫居の身となるに及びしかば、其後孃は長く巴里に住ひて樂しき月日を送り千八百十七年七月十四日疾によりて此世を去りぬ。

孃は公生涯に於て、その志操を全くせしのみなずその私生涯は、實に之にも勝りて、女子の龜鑑とすべきもの多かりき、女としては、親に孝、妻としては、夫に貞に、母としては、子に慈愛を盡し、女子として殆んど間然すべきところなければ、佛國人が孃を以て其國の誇りとして、今日尚孃を尊敬して措かざるも道理とこそいふべきなれ、孃の如きは寔に稀代の女子ならずや。

わが國古來節婦勇婦に匱しからず、史傳之を錄して後世に傳へ、今猶婦女子の鑑とすべきもの多きは、世界各國に誇るに足るべし、巴、板額を見よ、細川氏の内室明智氏を見よ、春日局を見よ、誰れか其の勇氣と節操とに感ぜざらんや、しかも清少納言や、紫式部や、小野小町や、文華才藻の見るべきあるも其の操行は以て俄かに倣ふべからずして、却つて、浮躁淫靡人をして厭嫌せしむるにあらずや、筆を執つて一代の人心を動かすこと「ニッケル」孃の如くにして、其の所志を一貫し、永く節義を固執せるは、予未だ我國に於て之を見ざるを憾みとせずんばあらざるなり。

講義

雨月物語「白峰」(二)

文學士　境野天華

あやなき闇にうらぶれて、眠るともなきに、まさしく圓位々々とよぶ聲す。眼をひらきてすかし見れば、其形異なる人の背高く痩おとろへたるが、顔のかたち、着たる衣の色紋も見えで、こなたにむかひて立るを西行もとより道心の法師なれば恐しともなくて、こゝに來たるは誰ぞととふ。

(通解)　眞暗い夜になつて眼前咫尺も辨せぬ(あやなき闇)と云ふ凄じいことになつたので、流石に自分も物淒く心寂しく、變な氣持になつて(うらぶれて)來た。別に眠に犯されたと云ふのではない、實際確に闇の中から自分の名を呼んで圓位圓位と云ふものがあつたので今まで默りて閉ぢてゐた眼を豁つと見張りて、何處から其聲が來たか何者が呼んだのであるかと、闇の中を強ひて注視ると、其れなり、一種異樣な風をした丈の高い痩せ衰へた怪しい人の姿したのが衝立つてゐる。固より闇の暗さに其の顔の形から、其の着物の色合模樣の委しい所までは見止めることが出來なかつた。其の怪しい形をしたのが、自分の方を向いて衝立つてゐる。普通の人が此の怖ろしい姿を見たら直ぐと膽を潰ぶして、氣絶でもする所であらうが、其處は兼て佛道に心を入れてゐる西行の事で恐ろしいとも思はずして、其處に出て來た者は抑〻誰人であるかと詰問した。

かの人いふ、前によみつる言葉のかへりを聞えんとて見えつるなりとて、

松山の浪にながれてこし船の
やがてむなしくなりにけるかな

(通解) 處が其恐ろしい怪しい形をした人が答へて云ふには、前に貴様が詠んだ、言葉(歌)の返歌をする爲めに來たのであるといつて、松山の下を洗つてゐる其の浪に流されて、船に乘つて京都から追放されて來たが、其の船は今何處へ流れて往つて無くなつたやら、乘つて來た自分も間もなく死んでしまつて、今は世の中の人數ではない、果敢ないものとなつたのである。

嬉しくもまうでつるよと聞ゆるに、新院の靈なることをしりて地にぬかづき、涙をながしていふ。さりとていかに迷はせたまふや、濁世を厭離し給ひつることのうらやましく侍りてこそ、今夜の法施の隨縁したてまつるを、現形し給ふはありがたくも悲しき御心にし侍り、ひたふるに隔生即忘して佛果圓滿の位に昇らせ給へと情をつくして諫め奉る。

法施隨縁。佛敎の言葉であつて法施は讀經して冥福を祈り供養を施すこと、其の供養を回向も緣ありて始めて行はるゝものであるから、隨縁と云ふのである。

佛果圓滿の位。凡て人間の世でありた事、行ふた事、即ち一切の罪業から超脱し、眞の淨土涅槃極樂の域に到達することを云ふので、浮世に心殘りがあつては出來難いこととされてゐる。

(通解) 其の怪しい形をして人の云ふのを能く氣を付けて聞いてゐると、能くこそ此所に訪ねて斯く供養やら何やらをして呉れ、實に嬉しいことであるとかうである。さては前の歌の返歌をするとあり、また此の言葉から推せば此の怪しい形の人は、どうでも新院(崇德院)の御亡魂に相違ないと

思ひ知つたので、勿體ない事と、地に首をすりつけ(ぬかづき)涙を流してかしこまりながら言上したどう云ふことを言上したかと云ふに、お察し申し上げる所、此處にかうして亡靈になりて形を表はし玉ふ所によりて見ると、如何にも迷執の暗に惑ふて、成佛しがたくて御いでなさるのであらう自分は今夜此處に新院樣が已に世の中の濁りた中から離れて、浮世を振り棄てゝ佛の世界、淨土に入られた事をお羨ましく思ひ、お喜び申す心があつたればこそ、御墓の前に一夜を過ごし、讀經供養をして冥福を祈り、隨緣の回向を申上げた次第であるのに、今正しく御姿を現はして此處に來玉ふは、自分に取りては忝けない事の限りではあるが、何か御心殘りがあつて、快く成佛も出來ずにおいでなさるに違ひないと思ふと、それがまた悲しく、實に御いたはしい、氣の毒な、情けない御心であると云はねばならぬ。どうか浮世であつた事は凡て忘れてしまつて、全く新しくなつて佛界淨土の人として立派に成佛し、涅槃の境に入り、安心して極樂の域に達し玉ふやうになさいませと眞實の心を籠め誠を盡くして亡靈に對してお諫め申した。

新院から〳〵と笑はせ給ひ、汝しらずや、近來の世の亂は朕なす事なり。生てありし日より魔道に志をかたぶけて、平治の亂を發さしめ、死して猶朝家に祟をなす、見よ〳〵やがて天が下に大亂を生ぜしめんといふ。

(通解) 西行の誠を籠めての言上を聞き終つて、新院はから〳〵と高く笑つて、そして仰せらるゝには、汝西行はそのやうに申すけれども、まあ能く聞け、此の頃世上は物騷で爭亂續きであるのはみな朕自身がさうさせてゐるのであると云ふ事を汝西行は知らぬのであるか、朕自身はまだ人間

の世に生きてゐた頃から悪魔の恐ろしい外道に心を入れて、其の魔道の力によりて彼の平治の爭亂を引起さしめたのである。また朕は朕の死後も尙怨の心を解かず、朝廷を崇り、のろひ、禍を起すやうにと心がけてゐるのである。今に見よ天下は大亂となりて、始末におへぬ恐ろしい騷動混雜となるのであるから、それは皆殘らず朕自身がさうさせるのであると、こう云ふ恐ろしい御言葉であつた。

西行この詔に涙をとゞめて、こは淺ましき御心ばへをうけたまはるものかな、君はもとより聰明のきこえましませば王道のことわりは、あきらめさせたまふ。こころみに討ね請すべし、そも保元の御謀反は天の神の敎へ給ふことわりにも違はじとて、おぼし立せ給ふか、又みづからの人欲より計策給ふか、詳に告せ給へと奏す。

（通解）　西行は此の御言葉のあまりに怖ろしく激烈であつたので、今迄は涙を流して誠を盡してお諫めしてゐたが、今度は少し意外の感に打たれて自然涙も止まつた。そして新院に向つて申上げるには、何と云ふまあ淺ましい、情けないことを仰せられます、今の御言葉は何たることで御座いますか、新院あなた様には、平素から聰敏英明の御評判があらせられた御方であるからして、天下に君として政を行ふ眞の道理、王道は疾くに御承知のことゝ考へられますが、それでは今私西行から御伺ひ申したいことがあるのであります。それは外でもない、一體彼の保元の際に當りて事を起し亂を始められたのは、あれは在天諸神の神慮に違ふまい、天意に叶ひたいと覺召す御心から思ひ立たせられたことでありませうか、又は新院御

自身の私欲を果たし、思ふやうにして見たいお考へから種々と計略をめぐらされて戰亂を思ひ立たれたのでありませうか、さ、どうか其處の區別、其の辨明を詳細に合點が行くやうに、此の西行に仰やつて下さいませと臆面もなく申上げた。

其時院の御けしきかはらせたまひ、汝きけ、帝位は人の極なり、若し人道上より亂す時は、天の命に應じ民の望に順うて是を討つ。

（通解）　西行が申上げた言葉は新院の御心を動かした、其時新院の御容子其擧動が大變に變りて來た。そして云はれる御言葉は、汝西行能く承はれ天子の位と云ふものは人として達し得らるゝ最上の位である。若し其の尊き位にありながら其の德がなく、其天子の位、尊嚴を瀆がすやうな塲合には、天意のあるところ、天の命令に應じて、天下萬民の希望に從つて、其の不適當の天子を討つてもよい、否討つべきものである。

抑永治の昔、犯せる罪もなきに父帝の命を恐みて三歳の體仁に代を讓りし心、人欲深きといふべからず。

（通解）　彼の永治の昔、天子の位に昇りてゐた朕は、別に何と云つて犯した罪があるでもなかつたに、何も位を去るべき理由もなかつたのに、父帝（鳥羽院）の御命令であつたから、父の覺召に逆らう事もならず、まだ三才の乳呑兒の體仁（近衞院）に天子の位を讓りて仕舞うたのである汝西行はそれでも朕が行爲を以つて人欲深いと申すのであるか。

體仁早世ましては朕皇子の重仁こそ國知らすべきものをと、朕も人も思ひをりしに美福門院が妬みにさへられて、四の宮の雅仁に世を奪はれしは深き怨にあ

らずや。

（通解）其の體仁の近衞院が、年若くて崩くれ玉ふたからは、當然朕が皇子の重仁繼いで天子の位に上り、天下の政を聽き、一國の元首となるべきものと、朕自身は勿論天下の人は誰もさう考へてゐたことであるのに、意外千萬にも奇怪千萬にも彼の美福門院と云ふ父帝の寵妃、お氣に入りの女が邪魔を入れて、其の爲め第四の皇子雅仁（後白河院）に當然此方のものであるべき天下を奪はれ、天子の位を取られて仕舞つたと云ふのは到底忘るゝことの出來ない深い怨恨である。（其の怨恨の爲めに保元の亂は起こされ、また今また迷執の鬼となりて形を現はしたとの意）

重仁國知らすべき才あり、雅仁何らのうつは物ぞ。人の德をえらばずも、天が下のことを後宮にかたらひ給ふは、父帝の罪なりし。されど世にあらせ給ふほどは孝信をまもりて、ゆめ色にも出さゞりしを崩れさせたまひては、いつまでありなんと、武きこゝろざしを發せしなり。

○後宮。表向その朝廷に對して、皇后以下女御更衣其他女官達の集りゐる所を云ふので、徳川幕府の時の大奥又はお裏と云ふやうなもの。

（通解）其の重仁は親の慾目ではない實際、天子となりて一國の政を行ふに足るほどの才器があつたのである。彼の雅仁に至りは、何の才器もない、天子と立つるには極めて不適當の人物ではないか。假令一歩を讓りて、德を撰んで天子の位に上せなかつたのは、惡るくなかつたにしても、天下の大事を朝廷の表向で、堂々と評議することをせず、婦人の集合所の後宮に於いて定め、美福門院のやうな女の一言によりて決すると云ふは、實にあるまじき以ての外の事で、さう云ふ事をやられたのは、どうあつても父帝の落度失策（罪）と申

上げねばならぬ。然し何と云つても朕は子である子としては父に逆ふべき道理がないからして、父帝御在世の間は苦しい所を忍び忍び、孝順信義を守つて一寸も朕の不平を外へ洩らした事はなかつた。已に父帝がお崩れになつて見れば、何時まで不平忿怨の心を洩らさずに置かれやう、即ち積年こらへこらへて來た憤怒の情は、外に發して、彼の恐ろしい保元の亂を引起したのである。(武き志し天下に爭亂を起こさうと云ふ心)

臣として君を伐つすら天に應じ民の望にしたがへば周八百年の創業となるものを、まして知るべき位ある身にて、牝雞の晨する、代を取つて代らんに、道を失ふといふべからず。

牝雞の晨。鷄の牡は晨(時)を告るが、牝は元來晨をつくるものでない。それがどう云ふ間違かで晨をつくると云ふのは全く不祥の事である。婦人の身として天下の政治に嘴を容れると云ふのは牝鷄が晨をつぐるやうなもので、不祥の事、天下禍亂の起る基と云ふ意、此處で牝鷄と云ふのは彼の美福門院に當る。

(通解) 臣下の身分であつても天の意に叶ひ、天下人民の希望に叶ふ場合には、主君を討つても故障はないと云ふのは、彼の周が天下を取つた例でも明白ではないか。周の武王は其の君主の殷の紂王が、暴虐無道であつたので、天下人民の希望に從ひ、天の意に從つて殷を討つて、之に代り天下を取つた。周の天下は其の後八百年から續いたが始めて其の天下を創めたのは武王である、武王は殷の臣下でありしさへも、時と場合には此の通りである。まして況んや朕はもとより天子となつてゐた身分、また父帝の故障さへなかつたなら、何時迄も天子となつてゐることが出來た身分であるから、彼のあるまじき出しやばりの美福門院などが氣隨氣儘をする時代に當つて、忌々しい牝雞

を追ひ立て丶、代りて天下を取つて立派な政治をして見やうと云ふのに別に道理をはづれた事があらうか、間違つた事であると云ふ事が出來やうか
汝家を出て佛に婬し、未來解脱の利慾を願ふ心より人道をもて因果に引入れ、堯舜のをしへを釋門に混じて、朕に説やと御聲あら丶かに告らせ給ふ。

（通解）　汝西行は若い時から出家をして、僧侶となつたので、すつかり佛道に心酔して（婬し）仕舞つて、來世では安樂を得たい、一切の苦から免れたいと云ふ自分勝手の利慾心から、人間として蹈んで行くべき道理も、佛道の因果應報、此の世の苦しみは前世の惡業の報ひ、此の世で善い事をすれば、未來は助かるとか、極樂に行くとか云ふ方に引き付けて說き、從つて堯舜仁義の教理も、佛道の教理（釋門）なる自分流義と混同して、朕に向つて種々雜多に說法をしてゐるのであらうと、御聲荒々しく云つておゐでなさる、其の御容子舉動の怖ろしさ。

▲優曇華

夏になると、天井の裏などに優曇華といふものが出來ることがある、これは特に片田舍に普通にある事で、昔は其原因を知らぬものであるから、吉とか、凶とかいつて、大騒ぎをしたものである、所がそれは何でもないことであるのは綿密な觀察をする、と直ぐわかつてくる。

優曇華は長い柄があつて、その先きに卵がくッついてをる。今これを久しく養ふと、それから蜻蛉のやうな、しかし蜻蛉よりも華奢な虫が出てくる。これをクサカゲラフと名づける。夏、庭前などに出ると、この虫を見ることが稀でない、この虫は通常草葉などの裏に卵を產みつけるけれども時とすると、家へ入つて天井などへ產みつけることなどがあるのである。これが八釜しい優曇華で、かう話して見ると何も吉凶に關係しないといふことは明かであらう。

漢文講義　阿井笛村

春日局　鹽谷世弘

局忠而靈慧、大將軍嘗餐不稱旨、更命炊飯、不能遽辨、竟廢食、局謂執政曰、公膳多品、其適口與否宜有之、顧食以穀爲主、若以失和而廢、則非所以奉養尊體也、自今後、宜炊稻麥諸穀七種、公從其所欲、其餘使宮人及厨下胥徒食之、未必爲耗費、且左右侍御之徒、夙夜勤勞易餒、即須餕餘亦一惠、局見宮人衣曳地甚長、訓之曰、婦人中衣、以純白爲貴、曳地則色易變、且觸塵垢以侍左右不敬、宜兩手樞裾蹁躚周旋、不可過婉弱、初吾夫祿薄、吾自製襪、其他針黹無不爲焉、凡婦人、不能爲裁縫織紝事爲不婦、雖宮仕間、宜學婦功、且須每晨夙興梳粧、勿使人見睡面也、九月、大將軍聞春日局病重、自往訪之、局自大將軍病痘時、禱神代死、誓不服醫藥、至是、大將軍躬親嘗湯藥予之、乃爲啜之、既而皆嘔吐、遂卒、大將軍悲悼、爲絕酒肉數日、賻贈優渥、新建梵宇於城北本鄉、名曰麟祥院、給田三百石

（**讀方**）局忠にして靈慧なり、大將軍嘗て餐旨に稱はず、更に命じて飯を炊がしむ、遽かに辨ずること能はざりしかば、竟に食を廢しき、局執政に謂て曰く、公の膳品多し、其の口に適すると否らざるとは宜しく之れあるべし、顧ふに食は穀を以て主と爲す、若し和を失するを以て之を廢せば、則ち尊體を奉養する所以に非ざるなり、今より後は宜しく稻麥諸穀七種を炊ぎ公は其の欲する所に從ひ、其の餘は宮人及厨下の胥徒をして之を食はし

めは、未だ必ずしも耗費たらず、且つ左右侍御の徒夙夜勤勞して餒ゑ易し、即ち餕餘を頒つも亦一惠ならんと」局宮人の衣地に曳くこと甚だ長きを見て、之に訓へて曰く、婦人の中衣は、純白なるを以て貴しと爲す、地に曳けば則ち色變じ易し、且つ塵垢に觸れて、以て左右に侍するは、不敬なり、宜しく兩手もて裾を摳げ、蹁躚として周旋すべし、婉弱に過ぐ可らず、初め吾が夫祿薄し、吾れ自ら襪を製しき、其の他の針黹爲さゞる所無し焉、凡そ婦女にして、裁縫織紝の事を爲すこと能はざるものを不婦と爲す、宮仕の間と雖も、宜しく婦功を學ぶべし、且須らく毎晨夙とに興きて梳粧すべし、人をして睡面を見せしむること勿れと

九月、大將軍春日の局病重しと聞き、自ら往て之を訪ふ、局大將軍の痘を病る時より、代りて死せんことを神に禱り、誓て醫藥を服せず、是に至りて大將軍躬親ら湯藥を嘗て之を予ふ、乃ち爲に之を啜る、旣にして皆嘔吐し、遂に卒す、大將軍悲悼し爲に酒肉を絶つこと數日、賻贈優渥なり、新に梵宇を城北の本郷に建て、名けて麟祥院と曰ひ田三百石を給しぬ。

（譯解）此文章は矢張り春日の局の傳記の一節でありますが、前號のとは筆者も異ますし其事柄も重複しても居ませぬ故、續話として出すことにしました、局忠而靈慧、此の春日の局は忠義の心厚く且つ靈な樣に心が慧しくありました、大將軍嘗餐不稱旨＝大將軍家光公が嘗ときに餐を召し上るときに其味が旨に稱りませんで、更命炊レ飯不レ能二遽辨一竟廢レ食＝そこでお側の者に命つけられて、飯を炊き直して參れ」との御沙汰に爲りましたけれども、遽に辨へると云ふ譯には行きませぬ故に、竟〳〵其時の食事は廢して召し上がらずに仕まいました、そこで局が執政に向つて曰しますには、公膳多レ品其適レ口與レ否宜レ有レ之＝「公の膳部は品數が多でありますから、其の中でお口に適ふのと否のとは、宜しくあるべき筈でありま

す、願食以穀為主若以失和而廢則非所以養尊體也、妾の願へますには、食物と云ふものは穀類を以て一ばんの主とします、若しも和を失りたるが為に、其の度食を廢してお仕まい遊ばすやうでは大切なる尊體をお養ひになる所以に成りませぬ、されば今より後は宜しく稲とか麥とか云ふ穀類を七種づつ炊しぐこととして、公從其所欲其餘使宮人及厨下胥徒食之未必為耗費＝さうして公には其のお欲に從せて召上り、其のお餘りをば、宮人や及びお厨下の胥徒どもに食べさせれば、未だ必ずしも耗費とはなりませぬ、且左右侍御之徒夙夜勤勞易餒即頒餕餘亦一惠＝且へ左右に侍御申して居る徒は、夙は早くより夜は晩く迄勤勞を致す事であります故、定めてお腹が餒り易ひ事と察せられますからお餕り餘しを頒て遣はさるるのも亦一つのお惠でありませうと斯様に申述べまして其の通り行はるることと成りました。

局が又宮人の衣の地を曳ずることが甚だ長すぐるのを見まして、訓之曰婦人中衣以純白為貴＝之に訓へを下しまして『婦人の中衣と云ふものは純白なのを以て貴しとするので、それが地を曳ずれば色が變り易い、且へ塵垢に觸れて其の儘お上のお左右に侍づくのは不敬である、宜兩手摳裙蹁躚周旋不可過婉弱＝それで宜しく兩手で以て裙を摳げて、蹁躚と身輕に周旋る様にせねばならぬ、されど決して只婉弱に斗り仕過ぬ様に、初吾夫祿薄吾自製襪其他針黹無不為焉＝初め（昔しと云ふに同じ）吾夫は祿が至つて手薄で有たる故に、吾は自分に襪を製しらへたり其外の針黹は何でも自分にせぬ事は一つとして無かつた、凡婦女不能為裁縫織紝事為不婦＝凡そ婦女たるものが裁縫や織紝などの仕事の能きぬのは、これは不婦と云つて婦女たるものの道に叶はぬものである、されば、雖宮仕間宜學婦功＝宮仕の間とても宜しく婦功を學ぶ様に

せねばならぬ、且須毎晨夙興梳粧勿レ使三人見二睡面一 ‖且又須らく毎晨夙く興きて梳わげ粧りをすることを怠らぬ様にして、人に睡おきの儘の面を見せてはならぬ」と申聞せました。

寛永の二十年九月と云ふに大將軍家光公が、春日の局の病が重き由を聞こしめされて、自ら局の屋敷に往かれてお訪に爲りました、局自二大將軍病一痘時一禱二神代死一誓不レ服二醫藥一 ‖局に於きましては前かた大將軍家光公が、痘を病はれましたる時より、神に禱り自分の命を以て大將軍に代りて死せんと誓を立て置きました故に、如何に病が重りても誓て醫藥を服みませぬ、至レ是大將軍躬親嘗二湯藥一予レ之乃爲啜レ之而皆嘔吐遂卒‖然るに是の時に至りまして、大將軍が躬親ら湯藥を嘗め試みられて、それをお予へ成された故に、眞がに君命に背く譯に行きませんで、之を一口啜りましたけれども既而皆な嘔吐して仕まいまして、遂に卒りました、大將軍には深く悲悼しまれて、

其れが爲めに酒や肉の類を絶ちて召上らぬ事が數日に及びました位、賻贈優渥新建二梵宇於城北本鄉一名曰二麟祥院一給二田三百石一‖賻贈と云ふは人の死を弔ふ贈りもので、香奠と云ふと同じことであります其の贈り物が殊の外優渥でありまして、猶又故々江戸城の北方本鄉と云ふ處に一の梵宇をお建て下されて、名づけて麟祥院と呼ばれまして、田地三百石を春日の局の弔祭料として下されました、今でも湯島の切通しの上にある、俗に枳殼寺と云ふのが其の寺であります。

春日の局のことに就ては、前號にも講義を掲げましたが、本回のは事柄が違つて居ますから、玆にまた、講述したのでございます、名高い婦人である丈けに隨分逸事や、傳記などの多い人で、此外にもまだ〳〵澤山種々の學者の書いたものがございますから、此後とも載せることがありませうから、題は同じ春日の局でも文章も事柄も異つて居るのでございますから、其積りで熱讀を願ひます。

MISCELLANY IN ENGLISH.

BY A. MIYAMORI.

英文雜錄

宮森桃潭

I. Conversation.

第一. 會話

ABOUT SUMMER HOLIDAYS.

夏休暇に就て

A. [Girl student.] Kimikosan, glad to see you. Where have you been during the holidays?

B. [Girl student.] Why, Tomikosan, it is strange you don't know! Didn't I once write to you from Ikao where I spent the vacation?

A. Did you? But your letter did not reach me.

B. No? Then I suppose my letter was lost by mistake of the postman. What a pity! To be frank with you, I was a little offended you did not write back to me.

A. Is Ikao so good a place as people say?

B. Yes, it is surely one of the best summer resorts. I like the place very much. It is so cool there, that you have no need of using a fan even at the mid-day. Besides, beautiful views of mountains and rivers can be had from nearly every house.

A. Isn't Ikao principally celebrated for its mineral springs?

甲 [女學生]君子さん如何がです。休暇中は何所に居らつしやいましたか

乙 [女學生]富子さんおや其を御存じないの私は休暇は伊香保で暮しましたが伊香保から一度手紙を差上げましたではありませんか

甲. 左樣ですかしかし御手紙は屆きせんよ

乙. 左樣ですか其れでは郵便脚夫の間違で手紙が紛失したのてせう殘念な事です實はあなたが御返詞下さらないので私は少々立腹しましたよ

甲. 伊香保は皆さんの評判するほどに良い處ですか

乙. 良い處です慥に夏に暮す所では一番良い場所の一ですね。私は實に伊香保が好きです。非常に冷い所で日中でも團扇を用ふる必要のない位いです。又大概の家から山や川の美しい景色が眺められます

甲. 伊香保は重もに鑛泉が有るので名高いのではありませんか

B. Yes, there are some hot springs which contain a small amount of iron and sulphate of soda and which have a temperature of 45°C. (113°F).

乙．左樣です。伊香保には少量の鐵と硫酸曹達を含有する温泉がございまして温度は攝氏四十五度即華氏百十三度です

A. Are there good inns?

甲．良い宿屋がありますか

B. Yes, there are a few good ones. Two of them are in European style and it is very expensive to stop in them. So I staid in a Japanese-styled inn.

乙．良い宿屋が五六軒あります。其中の二軒は西洋風の宿屋です。而して宿料は中々高いです。其故私は日本風の宿屋に泊りました

A. They say every thing is very dear in Ikao; is it true?

甲．皆さんが伊香保は萬事高直だと申しますが本當ですか

B. Yes, quite true. I went there with my mother, and we lived economically, and yet we spent five yen a day on the average.

乙．全く左樣です。私は母と參りました而して儉約しましたが其れでも平均兩人で一日に五圓入りました

B. Did you, indeed? I cannot afford to go to such a place. I suppose you took many sketches of pretty views there?

乙．へー左樣ですか。そんな所へは私は迚も行けません。あなたは佳い景色のスケッチを澤山御寫しなさッたでせうね

B. Yes, I drew some. Please come and see me soon; I will show them to you.

乙．はい少々出來ました。何卒近い内に私方へ御出で下さい其れを御目にかけませう

A. Thank you, I shall call in a day or two.

甲．有難一兩日中に御伺申します

* * * * * * * * *

II. Pleasantries.

第二．笑話

FIRE-FLIES.

螢

A little girl.—Mamma, the fire-flies are flying away!

小娘『母[カア]ちさん螢が逃げてよ』

Mother.—Then catch them.

母『逃げるならおつかまへナ』

Girl.—Why, they are hot to touch, aren't they?

娘『だッて觸[サワ]ると熱いじやないの』

Late in the morning I took a stroll to Hibiya Park, and was suprised to see numbers of finely dressed young people, most of them evidently servants, loitering about here and there in the park,—an unusual sight. Upon inquiry I found the day was one of the regular servants' holidays so-called *Yabuiri*. Poor Japanese servants! They work hard every day from the early morning till late at night and they have only four holidays in the year,—the fifteenth and sixteenth of January and of July; and yet they earn a month only a yen or two beside food and shelter.

午前日比谷公園に散策せしに若き男女の多くは一見して婢僕らしきもの大勢公園内を彼處此所とブラツキ居たり。斯る光景は平日に無き事とて變に思ひて人に尋ねしに此日は下女下男の休日所謂藪入たりしなり。偖も我國の婢僕ほど憐むべきはものなし。彼等は毎日早朝より夜おそく迄孜々として働き一年中休日とては僅かに一月と七月の十五十六日の四日あるのみ而して其得る所は食料の外一ヶ月僅か一二圓の給料たるのみ

AN ARTIFICIAL LEG.

A maid servant.—Madam, the guest of the next room is sleeping with one of his legs out of the mosquito-net. I am afraid mosquitoes are feeding on his leg.

Landlady.—Oh, no; it is an artificial leg.

義　足（ツギアシ）

下婢『お上さん次ぎの間のお客さんは蚊帳の外へ片足を出して眠ッてますよ蚊に食はれるでせう』

宿屋女主人『否あれは義足（ツギアシ）だよ』

A DOCTOR AND A CHILD.

A doctor held a child's hand to feel the pulse. Then the child said, "No, I have a pain in the belly, not in the hand."

醫師と小兒

醫師が小兒の手を執て脈を取らんとすると小兒曰く

『否坊は手てじやないの腹が痛いの』

III. English Diary.

Saturday, July 15th, 1905.

It was cloudy and very sultry.

London and Berlin telegrams appeared in the Tokyo press, stating that M. Mouravieff had resigned his peace mission on the ground of ill health and M. Witte had taken his place.

The morning-glories at Iriya were exhibited for public inspection.

I was invited to attend the graduation ceremonies of Waseda University held in the afternoon, but the hot weather disinclined me.

Sunday, July 16th.

It was cloudy and sultry.

Mr. M. Kashiwada, ex-Governor of Niigata Prefecture, called in the morning.

Monday, July 17th.

Cloudy and sultry.

London, July 15th,—M. Witte is to leave St. Petersburg on the 19th inst. The European press has expressed satisfaction at his appointment, which is generally believed as foretelling peace.

In the morning I called on Mr. Urabe, editor of the "Keio gijuku Monthly," with whom I had a talk on literature. I borrowed from him a novel of Maxim Gorky.

第三. 英文日記

明治三十八年七月十五日（土曜日）曇天にして蒸し暑し

倫敦及伯林よりの電報東都の紙上に顯る曰くムラヴィエフ氏は病氣と稱して媾和委員たることを辭しウィッテ氏之に代れりと

入谷の牽牛花此日開園す

此日午後催されたる早稲田大學卒業式に招待されたれども炎暑の爲め出席せざりき

七月十六日（日曜）

曇天にして蒸し暑し

前新潟縣知事柏田盛文氏午前來訪せられたり

七月十七日（月曜）

曇天にして蒸し暑し

七月十五日倫敦電報,—ウイッテ氏は十九日露京出發の筈なり。氏の任命は平和の前兆なりとて歐洲の新聞紙は氏の任命に對して滿足の意を表せり

午前慶應義塾學報記者占部氏を訪ひ文學談を爲す。氏よりゴルキーの小説一冊借り來る

Tuesday, July 18th.

It was cloudy and there was a refreshing breeze all day.

At the night Mrs. Miyamori, our maid and I visited an "en-nichi" [a night fete] in our neighborhood to have a look over flowers exhibited for sale. On our way home a heavy shower came on a sudden. We had no umbrellas. Thereupon I took my Panama hat [which had cost me a big sum of ten yen!] off my head and sheltered it under the sleeves with one hand; and holding my wooden clogs in the other hand, I ran through the rain, followed by my companions. What a material for a caricature!

七月十八日 (火曜)

曇天. 終日爽快なる微風あり

此夜. 妻と下婢とを連れて近所の縁日に植木を素見（ヒヤカシ）に赴く。歸途俄に驟雨（ユウダチ）至る。我等雨傘を携へず。余は此に於てパナマ帽[大枚十圓にて購ひたる]を脱し片手以て之を袖にて蔽ひ他の手にて下駄を持ち雨中を走る妻と下婢に伴はれて。ポンチ繪の好材料

Wednesday, July 19th.

It rained from the morning till about 3 o'clock P. M., though there were short intervals.

In the afternoon I called on Mr. Sasaki, clerk of the Yamaguchi Bank, at his hotel in Nihombashi to inquire after his health.

七月十九日 (水曜)

朝より午後三時頃まで降雨あり其間少時の斷續ありたれども

午後病氣見舞の爲め山口銀行員佐々木氏を日本橋の旅宿に訪ふ

Thursday, July 20th.

The weather was fine, with a a refreshing breeze.

All the Tokyo was busy in making arrangements to welcome Mr. Taft, American Secretary of War, Miss Alice Roosevelt and their party who were coming to

七月二十日 (木曜)

晴天　爽快なる微風吹く

比律賓群島視察旅行の途上日本に來らんとする米國陸軍鄕タフト氏アリス ルーズヴェルト

Japan on their way for a tour of inspection in the Philippine Islands.

雄の一行を歡迎せんとて滿都の人士之か準備に忙し

Friday, July 21st.

It was fine weather and rather cool.

The Tokyo citizens trembled to read in the papers that pest bacteria had spread out of Fukagawa to which they had been hitherto confined and two cases of the epidemic had appeared on the previous day in Honjo. One of the victims died in a few hours and the other was hopelessly ill.

七月二十一日　（金曜）

晴天．稍涼氣を覺ゆ

從來深川區のみに跋扈せるペスト黴菌は同區外に蔓延し前日本所區に二名のペスト患者を生し一名は數時間にして死亡し他の一名は危篤なりとの事實を此朝紙上にて讀み東京市民戰慄す

Saturdy, July 22nd.

It was cloudy and rather cool.

A telegram from Vice-Admiral Shibayama, Commander-in-Chief of the Naval Station at Port Arthur:—

Today (21st) early in the morning we began to pump the sunken battleship *Poltawa* (10960 tons displacement); and everything going on well, she was floated at 3 o'clock P. M.

七月二十二日　（土曜）

曇天．稍冷氣を覺ゆ

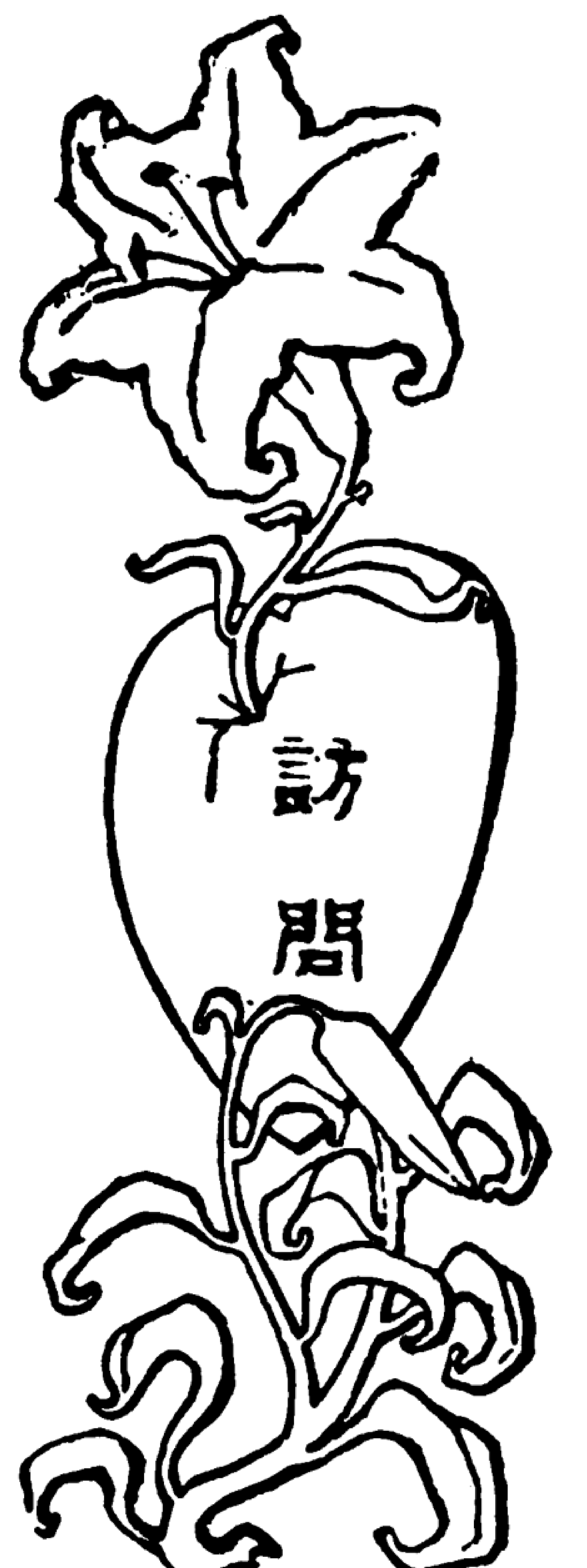
旅順港鎭守府司令長官柴山中將よりの電報：—今日（二十一日）早朝より沈沒戰鬪艦ポルタワ（排水量一萬九百六十噸）の排水に着手し萬事好都合に運び午後三時浮揚れり

I visited Hayashi Hospital at Tsukiji to inquire after Mr. Sasaki's condition.

築地の林病院に赴き佐々木氏の病狀を見舞ふ

文學士上田敏夫人を訪ふ

琴件女史



▲お住居

炎々と燒くが如き暑さは草木も萎るゝばかりで、此處の家彼處の邸宅の周圍を取り圍つて居る杉櫻枳殼等の生垣も疲衰れたやうに勢のない嘆息をほつと吐きさうなので、流石は雜沓を離れて學者町の名ある西片町の、浮世を外に聞きなして居る住居の、誰殿誰様とやらの奥からも、令孃や奥様の手業みの雅な琴の音も漏れるやうはありませんでした。

人の往來も途絶えましたあらがねの土をも燒くやうな晝日中、白い服も焙げ付きさうになつて、交番所を守つて居る「お巡査さん」、職務とは云ひながら何れも同じ人の身の、さぞや困しいことであらうと推察りながら、其處に附いて右へ屈りました。

凡そ半丁ばかりも行きまして、左方に眼を注ぎますと何時のことでしたか通行の際見覺えて置きました一ト構餘り新しくはない門の柱に、「上田敏」と確に記して御座いました。

門を開けて這入りますと、左の方は庭との境界を結つた樫の生垣、夏なほ心地涼しい青々とした梧桐の葉は行く道に茂つて蔽ひ覆さり、涼風が訪づれる毎に黄い花がはら〳〵と散り敷きます、都に居て都離れました趣の、さてもお美しい風情と思ひながら五六間にも餘る長い敷石の上を徐に踏んで、きちんと並べられた優しいお下駄のちんまりとした玄關に訪なひました。

待つ間程なく十七八歳の柔和なお女中が出られま

して、此方へとの御案内に三疊の玄關から次の八疊のお座敷へと通りました。

▲お座敷

床には花鳥の一軸の色彩も華麗な前の、薄端の大花活には池の坊の藝も巧みに、夫人の心盡しの菖蒲の花がゆつたりとしほらしくゆかりの色の床しくも又懐しく見えました。

床に對した向ふの書棚には、獨英佛の書籍が少しの餘地もなくきちんと積み重ねられまして、御主人の博學の程が忍ばれます。

廣くはないお庭の樣の松の枝振り柳の枝垂れなども、なか／＼の面白さと眺めて居りました時に、座敷の椽と茶の間との境の板戸を開かれまして、お出ましになつたのは夫人で御座いました。

私が如何なる方でせうと存じて見上げました眼と夫人の會釋なすつた張のある涼しいお眼とはしなくも見合はしました時に、凛とした意志の強い夫人の御氣象が見受けられました。

華奢骨細の愛くるしい御樣子の、確に廿歳と一つ位お越しになつたでせうと思はれましたが、服裝は至つて地味な淺黄地の木目形の眞岡木綿に、繻子と博多との晝夜帶の、これも余り派手ではない色氣で後の方に小さく涼しさうに結ばれた姿の、丁度谷川にゆらぐ姫百合とでも申上たいやうで御座います。

『先程は折角お出遊しましたのに、女中が失禮を申上げまして、………、今日はようこそお出下さいました。』と爽やかな何處となく品格のあるお聲で『今年は例年と違ひまして、どうもお暑う御座いますこと。』と夫人に相應はしい優しげな絹張りの團扇をお進めになりまして、お手を敲いてお茶を命せられました。

▲小説

なんで御座いますか、大塚夫人へも御出遊して？

左樣で御座いますか、大塚夫人などは宜しう御座いますねえ、何んでもお出來遊ばしますから、彼の方はたしか文學ばかりではなく畫もお上手で被居しや

いますね、それに遊藝などもなか〳〵お出來遊ばすやうで、私も幼さい時から小説を讀みますのが何よりも好で御座いまして、新しい小説舊い小説を問はず、小説と申す小説を大抵渉つたので御座いますがほゝゝゝ皆な後から後からと拔けて終ひまして、此小説は斯うで彼處が面白う御座いますねと仰せられますと、成程さうと考へ出すので御座いますが、よく〳〵好なので文でも美しい所で御座いませんと忘れて居るので御座います。それに學校に通つて居ります時分から國語が面白う御座いまして、作文などが一番好ましう御座いました。只今でも小説を作つて見度いなどとは存じましても、豪い方達のを澤山拜見致しましたので、自然と眼ばかり肥えましてこれでも駄目、あれでも駄目と可笑しい耻しいなどと申やうな事情で、………、それに最う一家を保ちましては、覺えが悪くなりまして、里に居ります頃には能く巧い歌だなどゝ存じまして、二度か三度も繰り返しますと覺えましたが、最う此家へ參りましてからは、それに產を致しましたり病つたり致したもので御座いますから、腦も悪くなりまして只今では面白い歌などでも承はりましたり、又讀みました其時だけは、どうにか斯うにか覺えますが、少し日月が經ちますと、跡方もなく忘れて終ひまして、何んでも物事は獨身の時に致すのに限るやうで御座います。一家を持ちましては、他に屈托が御座いますものですから、何事も身に染みませんで、どうも致方が御座いません。

冷えたお茶を新たなのと取り換へに來られたお女中が、彼方へ出て行かれますと、夫人は『どうぞ。』と私にお勸めになりまして、『此頃讀賣新聞に毎日載て居ります風葉さんの「靑春」を貴孃御覽遊しましたか。』とお尋ねになりました。『はい。』と始めから今まで遺憾なく讀んで居ります事をお話し申しますと『ほゝゝ何う思召して？、私は彼んな靑いなまなましい小説は大嫌で御座いますの。どうも毛色の變つた一見識ある小説で御座いませんでは、見ても

齒が浮くやうで、紅葉さんの小説は作者を存じて居る故でゝも御座いませうか、なんとなく好で御座いますの、矢つ張り作者を存じて居る方が面白いやうな氣が致しまして、私は紅葉さんとは以前からお近親で御座いまして、御病中等も大學病院へ屢々お尋ね申しまして、いろ〳〵のお話を承りました。紅葉さんは如何にもお優しい、さうして男らしい好いお方で御座いましたよ、私等は今でも御高風をお慕ひ申して居りますの。

▲和　歌△

ハイ、歌は佐々木信綱さんに從きまして長い事學んで居りますが、どうも巧妙いのは出來ませんで、ほゝゝ小町泣かせと申やうなのでも作れますとね嬉しう御座いますが、……。』と心から謙遜なさいましたが、私が和歌の舊派と新派とについて御説を伺ひますと『さやうで御座いますねえ、私はどうも新派の方が宜しいやうに存じますの、舊派の方では種々な制限が御座いまして、現在用ひて居ります言葉で、品物とか動物とか申やうな物の名等でも、其儘に詠みます事は、難かしう御座いますし、又其儘に詠みません迄も、昔から別に名のある物は宜しう御座いますが、さやうな物計りは御座いませんから誠に不都合な次第で御座います。これに反しまして新派は、それこそ支那のもの、英國のもの、佛蘭西のもの、獨逸のものを問はず、思ふやうにその物なり、又感情なりを表情す事が自在で御座いますから、第一西洋花の名なぞは到底舊派では詠じられないので御座いますからね、中には隨分新派を攻撃なさる方も御座いますが、どうもそれはちと脳が古臭い保守的の方かと思はれます、なにしろ此れからどん〳〵進歩して行きます廿世紀の世の中では、總べての物總べての感情を自由自在に云ひ表情す事の出來る新派でなくては、和歌は段々と退歩して參るでせうと存ぜられます。

▲書△

書は大好では御座いますが、どうも天稟が惡う御

座いまして、丁度岡倉秋水さんに從きまして、さやうですねえ、四五年も學びましたか！到底大塚夫人のやうには及びも付かないので御座います、斯樣な事を申すと負け惜しみのやうで御座いますが、ほゝゝゝゝなにも畫家になるのでは御座いませんからねえ、さう〳〵一心に寢食を忘れて迄も致して上手になりませんでも、………、其の心得さへ存じて居りますなれば昔の大家の畫や又は上野の美術展覽會などに參りまして諸大家のお書き遊したのを、拜見致しますのにしても、其道に這入らない方よりも趣味が多いやうで御座いまして、矢つ張り眼の着け處が違ふとでも申すので御座いますかねえ。

△箏

此頃は大層お箏が流行致しまして、中流から中流以上の方々は皆樣が大抵遊ばすやうで御座いますから、何處の女學校でも左樣で御座いませうが一體お茶の水の女學校では古くから、三味線等を遊す方は少なく何方も何方もお箏を遊すとか承りましたが、私等が通學致して居りました時分は、取分けお琴が流行致して居りまして、それこそ一級の内遊さない方は一人もなかつたと申すやうな有樣で、それはそれは皆樣がお上手で、奧許でも取りません者はお耻しい位で御座いました。私も幼少の時から稽古致しまして、隨分長い年限毎日毎日如何なる日でも師匠の宅へ通ひましたが、只今では餘り奏でませんので、所々忘れて終ひましたから、たま〳〵持ち出しましてもまごついてばかり居りまして、なんとなく興味が薄くなりました。』と夫人は白玉を展べたやうな、細い小さな指の爪先をじつと見詰められましたが、何處となく品を持たせた眼樣きをなさいまして、『もう子供が有りましては、さう〳〵氣樂にお琴などお弄にしては、居られないので御座いますよ、然し私共には宅の母も祖母も居りますから、誠に他のお家のお嫁さんと違ひまして、仕合で御座いますの。』實に夫人の此のお言葉は和氣靄々たるスヰートホームを表情して居ります。

▲二弦琴

よく八雲琴とか申しますが、名の優美なだけに誠に優しい音の致す、歌の短い割合に面白い一寸品のよい樂器で御座います。それに極く容易いもので御座いますから、二年も學びますと人樣の前で調べられる位にはなるので御座います。私も大分習ひましたが奏でゝ居ります樣子のなんとなく良いもので、青簾の内なとで調べて居ります所などは、畵に致してもなか〳〵風情の高尙なもので、琴から比べますとずつと音が細くさゝやかなだけに、却つて月の夜などに椽の端などへ運びまして、調べますと趣味が多いやうで御座います。

▲裁縫、編物

ハイ、裁縫は嫌ひと申す程でも御座いませんが、ほゝゝゝ矢張り好きませんので御座いますねえ。』と夫人は嫣然なさいましたが、膝の傍に置かれた團扇を取り上げられて、凝然と黑塗の柄を見詰められながら、『學校に在學ります時分は、何しろ點數仕事で御座いますから、外の方に敗けたくないが一心で隨分一生懸命に致しましたが、さて今度は自分でどうしても致さなければならないやうになりますと、本來の嫌ひな性質が出まして、なんと云ふ譯もなく億劫で、大人物等のやうな大きい物を扱ひますのはなんとなく厭やなやうな氣が致しますので御座います。子供の着物の四ッ身等で御座いますと、友禪とか申やうなもので奇麗では御座いますし、それに小さう御座いますから針を持ちますと直ぐ出來ますから、何だか十四五の時に人形の着物でも裁縫ますやうな心地が致しまして、毎度樂しみに致して仕立ますが、どうも大人物等ですとつい〳〵後廻しになりまして、靴下などを編み始めるので御座います、編物と申すものはちんまりと致して居りまして、場所は撰ばず、それに一寸少しの時間でも致す事が出來ますから、裁縫の塲所を領りましたり又待針を刺ちました儘で止める事が出來ないのとは異なりまして至極便利な仕事で御座います、學校でも花瓶敷とか

肱着さとか靴下とか垂れ帽子巾着などの類は習ひましたが、絹糸の編物は取り分け美しう御座いますね。それに此頃は大層枝折が流行致しまして、後から後からと皆様が面白い形や編方をお考へ遊ばすやうで御座います、なんに致せ編物は裁縫と違ひまして、人をお待ち申して居る間や、休む前の時間などには最も適當な仕事かと存じます。

▲自由

一體私は極く子供の時から我儘の性質で、束縛されるのは大嫌ひで御座います。身體も餘り健康な方では御座いませんので、兩親も餘り關渉は致しませんでしたが、如何なもので御座いましたか、私の爲には却つて嚴格しく云つて呉れました方が宜しかつたかも知れないので御座います。面白い本が有りますと一間へ閉ぢ籠つて食事をも致さずに讀んで居ると申やうな有様で御座いましたから、いとゞ弱い身體がいよ〱弱くなつたので御座いませう。成長なりましてからは一層押へ付けられるのが嫌ひになりまして、ほゝゝゝなんだか自由と申す事が人間の眞價のやうに思はれまして、さうかと申して女尊男卑と申やうな奇拔な考へでは御座いませんの、なにしろ自由は人間の花で御座いませうよ。自由自由などゝ大したハイカラな事を申しますが、何も勝手に遊んで居るとか、又は爲べき用事を捨てゝ置く等と申す譯では御座いませんが唯壓制と申すのから逃れるばかりで別に社會を自由に拔手を切つて行かうと申すのでは御座いませんの。私も身體の健康でない故に思ふやうには出來ませんが、仕事を一寸延しに延しましたり、又は時間を無益に費したり致しますのは嫌ひで御座いますの、多少今日は何んと何を致して明日はどれとどれと致さう位の目算は立てゝ置きますが、まあ、大抵客來やら外の用事やらで、せいせい目算より半分出來ませば宜しいので御座います。つまり時間を制限して仕事に取り懸らない故で御座いませうが、時間の制限とか人の非難とかやたらに騷ぎ立てますやうな。

▲教育家主義

はなんと考へましても、私には致す事が出來ないので御座います。さうでない方もお有り遊ばしませうが、教育家と申す教育家は丸で人間を四角な箱へ入れましたやうに、斯う致さうと存じては世間の人に非難されるのを恐れて止し、あゝしやうと思ひましては融通の利かない心に顧て心を制し、蝸牛が物に觸つて驚いて角を引き込ますやうに、小さくなつて驚いてばかり居りまして、自分ばかりなら宜しう御座いますが、困るのは人を教育致しますのにも其の通りで十人十色で、各々變つて居ります性質をも、一向關はず、殘らず同じ樣な性質に矯め直して終ふので御座いますからね。それは惡い所は何のやうに矯めましても宜しう御座いますが、なにも極く極く貴い人間の花の自然に持つて生れました良い特性を矯めませんでも、………、さうして皆んな平凡な十把一束の人に致して終はずとも宜しいては御座いませんか、私はどうも教育家と申やうな、箱詰流が嫌いで御座いまして、………、少しは融通の利く活動の出來る教育家が有りさうなものだと、時々憤慨致すので御座います。丸で今日の女學校や小學校の教育の致しやうでは、天然を矯めまして、柳の枝を上に釣り上げ梅の枝を枝垂れさせるやうなもので御座いますからね。柳は柳の柔軟な特重がありますし梅は梅の凛として雪にも撓げぬ風采がありましてこそ、取り取りに賞翫も致しますし、又清く美しいので御座いますからね。

▲育兒法について

自分は斯う云ふ風で不規則に物事を致して居りますが、子供の體育上や衛生上につきまして、醫者からの說も聞きますし、又私も考へまして成長致しましてからは兎に角、四歲や五歲の只今の所では柔順にすつと成長致させるのが肝要で御座いますから食事や其他の事に至るまできちんと規則的に致した方が宜しからうと存しまして、それこそ乳を飲みます頃から制限致しまして時間々々に飲ませまして、

其外は飲らなかつたので御座います。只今は最う四歳に成りますから、朝は六時に起しまして、七時に食事を致させますが別に眠いとも存じないので御座いませう、ちやんと心得て居りまして起るので御座います。それから遊ばせまして十時に成りますと毎日規つて菓子のやうなものを與へますので御座います。さうして十二時になりますとドンを合圖に晝食を始めさせまして、遊ばせて二時半頃に又間食を致させます。よく他の方に承りますと、日に二度位間食をさせやうと思ふと泣かれてなか／＼出來ないと仰せられますが私共では習慣の故で御座いますか、何んとも申さないので御座います。夕食は必ず五時に濟まさせまして、あと二時間ばかり遊ばせ七時にお湯に入れまして、七時半には必ず寢ませます。去年頃はよくお伽噺をしてやりますと喜びまして二つと致さない内にすや／＼と眠みましたが、此頃ではもう飽きて終ひまして、默つた晝のつかれに直ぐ臥つて終ふので御座います。

此時お庭に餘念なく遊んで居られた令孃は、椽に上られて小さな膝の可愛らしくお坐りになりまして鄭寧にお辭儀をなさいました。『此方へ被入しやい。』と夫人が仰られますと、『いゝえ此處で澤山。』と遠慮された御樣子の何となく優しくしほらしく感じられました。夫人の經驗上深い注意によつて作られました育兒法の時間表は何れの家庭に應用しても、至極容易い且完全なものでせうと存じまして仰られました儘を其儘一見分り易く記しました。

起臥時間 ｛起、朝六時。寢、夕七時半。

食事時間 ｛朝飯 七時。晝飯 十二時。夕飯 五時。

間食時間 ｛午前一回、十時。午後一回、二時半。成可く輕く實にならぬものよし。

入湯時間 ｛寢に就く前三十分即ち七時。

▲家政學と實地

新しい教育をお受けになつた夫人が、殊に家政學

等は實地に應用されたので御座いますから、學問と實地と遠ざかつた所や又は女學校で學んだ家政學が後に一家を持つて何れ程の効驗があるか、さぞ面白いお話があり又面白い經驗もお有りなさるでせうと存じましてお尋ね申ますと、夫人は優しく頷かれまして『左樣で御座いますねえ、學校で學びました家政學は總ての點におきましてなか／＼著しい心得になりまして、なにかと好都合では御座いますが、唯單に心得となるばかりで御座いまして、あれを其儘實行致さうと存じましたら大間違で御座います、例へば四季の献立のやうなものでも、好と嫌ひとが御座いますから、蛋白質がどれ丈の分量で澱粉質がどれ丈の分量と申して割り當てました所で生憎どちらかを含んで居ります方が嫌ひならば、それまでゞ致方も御座いませんからね、まあ家政學を活動させまして應用致しませばよいので御座いますよ、然し學んだと學ばないのとでは、大變な違ひで御座いませうよ、なにしろ中等の教育をお受け遊ばす方はお仕合せで御座いますね、然し又餘り衛生學や生理學などは知りません方が宜しいかなど〻も折々考へます事があるので御座います。病なども原因やなにかを深く存じて居りますと、あゝ此處が痛い肋膜炎ではないか、肺病ではないか、心臟病ではないかなど〻神經で少し風邪でも引きますと、其方も此方も痛くなりました、自分ながら恐ろしいやうになるので御座います。ですから下等社會の人々は餘り病氣を苦に致しません代りに、身體も健康のやうで御座いますね。

▲音樂會▲

ハイ、私は一體音樂とか文學とか申すやうな事が大好で御座いまして、ほゝゝゝ不規則な人間は皆んな音樂や文學が好で御座いますねえ、で御座いますから女學校に在學りました時分も、音樂會が上野などに御座いますと、必ず參りましたので御座います乾度音樂會に私が姿を見せません時は病氣かなにかで御座いましたらうよ。只今では所々へ出掛ける

のが嫌ひになりまして、餘り參りませんので御座います。然し切符を貰ひましたり、慈善音樂會の時などは大抵札を求めますから、三度に一度は參るやうになるので御座います。ヴアイオリンでもピアノでも外國の方が日本の方達よりも御上手のやうで御座いますねえ、丸で樂器が人間に從いて居るやうで御座いますもの、音樂も人を恍惚とさせる位に出來ませば本望で御座いませうねえ、然し幸田さんの御姉妹のやうにお成り遊したら如何なもので御座いますか、よく音樂家のお話に身體が音樂に浸つて終つて面白いより寧ろ苦しいと仰られますが、全く左樣かとも存じます。なんでも慰みに致すのが一番樂しく花で御座いませうよ。

▲演劇について

小說等は面白うは御座いますが、卷中の人物が一度に活動致すと申やうな譯には參りません、一人が顯れて何か申して居ります時は他の人の樣子や顏色などは、とんと分りませんですし、又義太夫なども、其通でこれは少しは賑やかに人が出て居りますやうな氣は致しますが、矢張り相手の人物が一度に顯れて身振り等を致すのは到底見る事が出來ません。然し演劇は此れと異なりまして、何人でも一度に見る事が出來ますから、眼で見耳で聞きます事が同時でつまり兩方を樂します事が出來るので御座います。ですから小說なら卷中の人物と景色と會話と斯う三つ一度に見たり聞いたり致すので御座いますからどうしても面白い筈で御座いますねえ。

▲俳優（新派と舊派とについて）

さやうで御座いますね、私は無論新俳優の靑いのよりも舊俳優の何處となくしんみりと致したのが顧客で御座いますが、只今では演劇界の二大王と稱へられました團菊は亡りましたし、それに左團次も失せましたから、今の處では芝翫ばかりで淋しう御座いますが、どうも私は矢つ張り輝くやうな高尾太夫や地獄太夫などが、おつとりと太夫は太夫らしく金絲の刺繡のある打掛などの服裝で、舞臺へ練り出し

た方が、奇麗でも御座いますし、又今に生れて昔の雅な風俗が知られるやうな氣が致しまして、芝居らしい芝居のやうに存じられますの。新俳優の風采も碌々粧ろはずに、私達が現在致して居ります言葉や身振りなどで、殊に海老茶袴の戀愛談などを致されますと、斯うお腹の奥の方をくすぐられるやうな心地になりまして、見て居るのも厭やになつて終ひますの、それは景色の配合などに至りましては舊俳優の方は學問も新俳優には劣りますし、さう云ふ點に至りましては適ひませんが、どう致して藝はなかなか比べものにはならないでせうと存じます。』私は夫人に團菊についての評を承りますと、夫人は暫く小首を傾けて居られましたが、「團菊が盛んに演じて居りました頃は私も年が長きませんで、それに里の父はなか／＼嚴格しう御座いまして、最も私は身體が弱う御座いましたから、餘り關渉は致しませんでしたが、芝居等にはなか／＼參れなかつたので御座います。で御座いますから、團菊のは前後でたつた一度しか見ませんでしたが、今でも其時致した曾我の五郎十郎の討入の夜に水盃を致しました所などは、眼について居るので御座います。

▲歌舞伎座のキネヲラマ

つひ此間も、御存知で御座いませうが、歌舞伎座のキネヲラマが評判で御座いましたから、參りましたが其時の林中の乘合船と申すのゝ宜しう御座いました事、最も林中のは大學の演藝會で度々聞きましたが、何時も教育的と申やうなもので餘り上手とも存じませんでしたが、此間のは艶のあるなか／＼面白いので御座いましたので、始めて林中の伎倆を知つたので御座います。

▲校友會の演劇説

私が演劇好で御座いますのにお存じの大塚夫人がお好で被入しやいますから、此間もお茶の水の校友會で、大塚夫人が脚本をお作り遊ばして、會員方が演劇を遊ばさうと仰られまして　校長さんに伺ひましたら、お茶の水の校長さんはなか／＼嚴格で、演劇

などは大嫌ひの方で御座いますから、絶對的に反對を遊したので、とう／＼お止めになつたので御座います。

▲寄席

芝居好位で御座いますから、寄席へも參りますし、若竹へ有名な藝人が懸りました時は、近くは御座いますし、大抵出懸けるので御座います。然し義太夫はどうもちと滑稽のやうで、なにしろ聲からして詩的では御座いませんから夏向きなどはお暑さうで不可ませんねえ。』と斯う云はれました時に時計が次の間で五時を報じましたから、夕餉のおじやまに成りましてはと存じ、お暇申さうと蒲團を辷りますと、御門の鈴が烈しく鳴りまして、御主人御歸宅を知らせました。夫人は『どうぞ今暫く、今日は丁度暇でも御座いますし、それに歸りましては又、お話も御座いませうから。』とたつて止められるに、お言葉の程を了して又坐に戻りました。『一寸御免遊ばせ。』と夫人は會釋なすつて、御主人の終日のお疲勞を犒らはれる爲に、いそ／＼と彼方へ行かれました。

▲御主人の風采

『今日は隨分お暑う御座いまして、』など丶夫人の優しいお言葉が次の間から漏れ聞えまして、二言三言お夫婦の仲にお話が交されますと、御主人は其儘洋服をも脱ぎ代へられずに、お立出になりました。文學士中の腕つこきと承りました御主人の風采はと見上げますと、霜降の背廣に黒色のネクタイ、決して例の當世式のハイカラ紳士ではありませんでした。お年は三十の上を二つもお出になりましたでせうか、八の字の鬚の凛としたでつぷりと肥り肉な、一見識ありさうな方でした。

▲初作者の讀物

斯う云ふ風に作らう、あゝ云ふ風に作らうと云つたつて腦にも無い事を作れる物ぢやありませんからね、種を蒔かなければ、芽が萌え出ぬ道理で、本を多く讀まなけりやお駄目ですよ、まあ文を作る初の人は德川時代の文學を始めによく讀むのが肝要で

すね、第一に柳亭種彦とか爲永春水とか京傳馬琴と云ふやうな人の著作をよく見て、其の文の風を眞似るのですね、春水の梅暦などは實に旨いもので、恐らく花柳社會の事を書いたのでは一二に位するものでせうよ、それから京傳の仕掛文庫、なか／＼恐れ入りますよ。第二に讀むべき本は近松の淨瑠璃、西鶴の物、基蹟の物等ですね、近松の淨瑠璃等は良いですからね。それから第三に物語ですよ、伊勢物語竹取物語、住吉物語、平家物語、其他幾程でもあります。殊に曾我物語などは實に傑作ですよ、貴孃お讀みなすつたかそれはそれは、此本は餘り世の中では知りませんが、恐らく物語中の一二に位するものでせうよ。

▲おなじく外國文學

次には英漢獨佛の文學を澤山でなくとも、日本の近松を見る位の程度に研究して、ゲーテとかシルレルとかシエークスピヤとか云ふやうな人のを讀んだならばまあ遺憾はありますまいよ、なんでも幸田露伴君のやうに博學だと實に作家も豪いもんですがね

▲水上語彙について

然し彼云ふ人は勉强からして並とは異うやうです何時も私が國文科へ行つて諸君は駄目だと云つてやるんですよ、水上語彙等を大學以外の幸田君に著されるのは、國文科の辱ですからね、本當は國文科で彼云ふものは著さなければならないのですよ、それを幸田君は著作と研究とをやつて居られるのですからね實に敬服ですよ。私は幸田君の小説では笹舟が實に美な詩的なものだと感じて彼本が大好ですが、世の中では二日物語等を傑作だと云つて居ますが、矢つ張り私は勇魚捕や五重の塔等が傑作だと思ふのです。

▲紅葉山人の小説

紅葉山人のですと一寸説が違ひますが、なにしろ不言不語、片靨・多情多恨などは脂の沸つた傑作ですよ。



米國大統領ルウズヴエルト氏の家庭

▲白館

華盛敦府に魏然として屹立せる白館は、米國大統領の官宅であつて、代々の大統領は皆此に住んだのである、乃ち今の大統領ルウズヴエルト氏も、前大統領マクキンレー氏が暗殺に逢つた爲に、副大統領から、大統領の位置に登つた以來、この官宅を居住として居るので、白色の砂石を以て建築してある宏壯な建物であるところから、白館といふ名を附けたのであらう。

▲起床

ルウズヴエルト氏が、その臥床から起出るのは大概午前七時頃で、一碗のミルク入りの珈琲に目を覺まして、八時には簡單なる朝餉の食卓に就くのである、それから來客があれば一々應接室に延見して、それぞれ用務を辨じ、九時には事務に就きて、午後一時半まで鞅掌するのである、一時半は晝餐の時刻であつて、それが濟むと一時間許り休息する、さうして三時半から四時迄に午後の事務を見るので、四時になると

▲茶の時間

といふのが來る、それを終ると、用事のあるときは格別であるが、大抵な日は、夫人と共に、夫婦馬に乘りて、轡を駢べて園中を徜徉するのが例である乘馬はル氏の最も嗜好するところであつて、極寒でも極暑でも、又は暴風大雨の時でも、鞭を揚げて疾走するのが、樂しみであるので、雨中にヅブ濡れになつて、歸邸するなどは決して珍らしくない。

▲晩餐

は午後六時であつて、一家團欒、和氣藹々たる光景は、實に人をして羨殺せしむるのである、機智縱横なる夫人、輕快多才なるアリス孃を始め、四男一女と相對して、談笑恰かも湧くが如き中にあつて、ル氏は興味ある多趣の談話を面白く物語りて、兒女を歡ばすので、此時に於ては、世界大共和國の首長たる尊嚴無く、一擧一動みな各國に影響を與ふる大英雄の威風も無くなつて『談話上手の阿爺』となるのである、覇氣勃々二十世紀の大政治家たるル氏は、平和なる家庭の晩餐の食卓には、その姿も影も見せないところは、甚だ妙ではあるまいか。

▲家庭の日

嚴格なる『家庭の日』なる日曜日は、一家遊樂の日であつて、此日一日は事務もなければ、來客もないのである、或は萬頃の漣波細々たるヲイスター灣に短艇を浮べて、閑靜なる生活を樂しみ、或は鬱蒼たる園林の中に斧を擧げて丁々伐木の音を響かせて終日俗世界より遠ざかる事もある、銃獵も又此日の遊びであつて常に崔嵬たる丘陵を踏破して、鳥や獸を獵るので「亂暴なる射手」とまで、呼ばれて居るのである。

▲夫人

ルウズヴェルト夫人は、寔に家庭の良主婦である、良人の位置が次第に進んで、遂に米國最高の人となつたに係はらず、その生活の摸樣は、依然として布衣の書生時代と、殆んど異なるところのないのは、實に欽慕すべき美風である、大抵の婦女子は、其の良人の位置の進むに從つて、昔日の質素たりし生活

をば何時となく忘れて了つて、衣食の美を望み、贅澤三昧をして、これ見よと言はぬ許りに、世間の人に誇りて、知人朋友を羨ましむるを以て、無上の樂みとするのであるのに、ル夫人はそれとは正反對で毎日馬車を驅つて、市中に買物に出かくるのが常で毎日の食膳に上る肉も野菜もみな夫人の手づから調へたものである、尤も夫人自から買物をする抔は、米國の風俗にも依ることであらうが、兎も角其の儉素なる美徳は、我國中流以上の婦女子が、臺所の事務をば一切下婢の務めとして、調理割烹の事を擧げて、之に任せ、時々小言をいふ外には、新聞と小說とで、其日を送つて居るのに比べると、月と鼈ほどの相違がある、我國中流以上の細君にして、ル夫人の行ひに對して愧ぢないものがあらうか。

▲夫人の嗜好

夫人の嗜好はといふと、良人の風を受けたのであるか、輕快活潑な遊びが樂みであつて、乃ち前にも記したやうに、良人と相携えて馬に乗るなど熱心なる戸外運動家である、しかし家事整理といふ大任を一身に負うて居るので、朝夕少時間づゝ散歩を試むる外は、嗜好を樂むの暇はないのである、ル氏が事務の爲に其室を出て行つた後に、夫人は執事を相手にして、細大となく萬般の家事を處理するのが、日日の務めであるから、その多忙なことは、粗々推察し得べしである。

▲アリス孃

孃の風采は、逐ひ此間來遊せられた節、親しく接近せられた方も少なくない、のみならず、多くの新聞雜誌は、孃の肖像を掲げたが、孃は我國の謂ふところの美人といふ方ではない、しかし高尚なる容貌と快活なる態度とは、一種の威嚴を備へて居て、その双眼の麗はしさと、言語の爽やかなるとは、心の愛と徳とを表はして居るので「天女」の樣だなどと言つた人もあるが、實際孃に接近して暫らく談話を交へる中には、この形容も決して過褒でないことが分る、孃はさすがに兩親の血統を承けた程あつて、

戸外散歩が何よりの樂みで、殊に馬に乗るのは嗜好の重なる一つである、ヒラリと白馬に飛乗つて、一打鞭をあてゝ、野外を驅廻る樣は、實に女神の來臨かと、思はるゝ位立派であるとのことで又たベースボールも中々の上手で、大概の男子も及ばぬ位の技倆を有て居るさうな、全體が快活な性であるのは是等の事實によつても知らるゝのである、現に我國來遊の海上に於ても、風號び波跳りて、船體の動搖の甚しい際にも、孃は泰然自若として、讀書や談話をして居たとのことである。

今やル氏は世界人類の幸福の爲に、日露兩交戰國に向つて居中の勞に當つて居らるゝし、又アリス孃は天涯萬里のヒリッピンに漫遊中である、思ふに最愛のアリス孃が、目出度歸國せらるゝ日に、ル氏の目的たる世界平和が、克復されて居たならば、白館晩餐席上の歡樂は、如何なる光景であらうか、實に想像するに苦まない。

（をはり）

うす墨

大塚楠緒子

▲叔母より麗子に

なが雨降りつゞき候折柄いかに御暮しなされ候や、わが身事も寄る年波にいつとなく衰へ候と相見え此頃は筆取るに物憂く、つひ〳〵御沙汰に相なり居り候處、一昨日珍らしき人より書狀あり、そなたに對して吾身よりならでは叶はぬとの頼み、是非と强ひられ候へば迚も叶はぬことゝは存じ候へど此文差し出し申候、實は彼の昔御存じの人、と申さば御承知なるべし、隨分彼の人のためには其方もつらき思を致され、我身とても腹を立て候事に御坐候が、彼の人此頃七年連れ添ひし奧樣に不義ありてとかにて離縁致候由、付ては何といふこともなく往時を思ひ出で、そもじに對しての無情なりしを今更に後悔し今以て獨身なるを聽くよりひとしほ居ても立つてもをられぬ樣に、此程は日に夜に悶え苦しみ

候とかにて、つひ怨は水に流して昔の縁再びとり結びたくよしなにとりなせよとの文面に候が、御身いかゞ思し候や、叔母は一言も申すまじく只御考にまかせ候、かしこ、

▲麗子より叔母の許に

御文嬉しう拜しまゐらせ候、父母君に別れし身は殊更に頼まるゝ叔母様、斯く遠く地を隔て居り候てはなゞ御案じ申上候のみ、何の御衰へにや、すぐさま醫者に見せられ御服藥ありたう候、さては不思議なる人より面白きこと申まゐり候ものかな、彼人生涯を終り候曉には幾人の弄ばれたる女の殘り候らん、私の心中は叔母様よく御存じの筈別に御答はいたさず、勤むる學校に試驗ありて此程は其成績調べにいそがはしく候へば、なにも〳〵申殘し候、かしこ、

▲叔母より麗子に、

無下にいひ越されたる御文の心を叔母もよう、汲み取りて、手跡の相變はらずみごとなるをうち眺め居り候處へ、またしも彼の人より書狀參り候、一度信用を失なひつれば手紙のみにては齒がゆき限、飽くまでも御疑の蟠りてとは存じ候へど、過ぎし罪やら罰やらの今の弱身に付け込むにか健康をさへ損じてうち呻き居り、何とぞ御慈悲に彼女の納得致し候やう御取り量らひ下され度とあり、良人に持ちても、姪聟に爲ても、勿體なき斗りなる、末は大臣にもなりぬべき器と、去る人も申され候高官に有る彼の男に、斯くまでも頭下げさするわれ〳〵は、今こそ昔の復讐を爲るやうにて小氣味よくは思ふものゝ、年寄りたる叔母は少々、烟にまかれ候ぞかし、御分別を仰ぎ候、かしこ、

▲麗子より叔母の許に

叔母様少し辟易き給ふと見え候、十八の歳婚約して良人は只彼の人と深うも〳〵思ひ詰め、三年の留學濟みたらば比翼連理を誓ふべく恥かしきをも忘れて叔母様にもよくその事申出でゝは、樂しみに致し候位に御坐候ひしを、歸朝して一月と經たぬまにはや

其人の心變りて富豪の聟となりすましたる彼の時の口惜しかりしことは、夢にも現にもいまだに忘れ不申、かの時駈と獨身の決心を胸に彫り付け候を月日のたてばとて自らを欺き候やうのことは致さず候、其後も彼の演奏會に私ピヤノ彈き候時かの人新婚の令夫人と連れ立ちて來り居り、樂しげに指さしては知らぬ他人かなんぞの樣に私の技を批評し居る態の、ちら〳〵と眼に入り耳に聽え候より腹立たしさやら悲しさやら



にて譜も見えず手も亂るべくなり候を、辛うじて彈き終り引き退がらんとして、その儘其處に卒倒したる事の御坐候ひしも叔母樣は御覺えの筈、叔母樣やはり私の心中御察し下されぬにやと存じ候、亡き母樣も思ひ詰めしことは思ひ遂ぐる女なりしと叔母樣仰せられしことあり、私は母樣似に候べくや、かして、

▲叔母より麗子に

そなたの心中知らぬには候はねど、此頃は彼の人の

心中も察し居り候、彼の切なる文は三日にあげずはや手箱に餘り候、狐にたぶらかさるゝと御身は申されんも、六十年の間、いろ〳〵の人に交際候 叔母には人の僞か眞かは終には明かに讀まるゝものに候、先夜の夢に其方が婚禮の姿したるを見申候、姪が兒の初着京染にして送らん事の若しわりもせば、叔母が壽命十年は延ぶべきかとぞんじ候、かしこ、

▲麗子より男に

まさかに御忘れはあるまじ貴君樣には笑ひて、私は泣きて、御別れ致しゝあの時以來、それとなく御目にかゝりしは一度、御文をいたゞくは此處に七年振、然も異な御仰せにもの珍らしきやら氣味惡きやらにて兎に角くり返し拜し參らせ候 うけ給はれば、私の心がけやう一つにて御獨身にて一生を過したまふとやらなんとやら、私少しも合點まゐらず、迷惑千萬に存じ候、又御前樣には奧樣御氣に召さずとて御離縁あそばされし由、男の御方と申すものはいろ〳〵の御勝手遊ばさるゝものとほと〳〵呆れ申候、始めは私を芥の如く御捨て遊ばし、次は奧樣を見飽きし花の枝のやうに投げ遣り給ひしか、私は未だ御約束致せしのみなりしが七年も連れ添ひたまひし御奧樣御いとしきことに候、人の上は我上それにつけても恐ろしき事に候、私事も御前樣に振り捨てられてよりは樣々に世ずれ人ずれ、憂き事に抵抗すべきためには、意地惡きことをも數多覺え込み候へば昔の私のやうにては無く、御思召は迚も無駄に候斯く申さばさだめて不實不人情これにても女かと思召候はんが、如何に御腹立あそばされ候とも、七年の昔私の胸の口惜しかりし苦しさは汲み分けては得知り給はじ、叔母を惡しうは必ず御思ひ下さるまじく候、かしこ、

▲叔母より麗子に

彼の人より終の文參り候

『我寶と握り居る程は玉の光を得知らず、彼女を捨てゝ始めて彼女の價を知り候 私再び昔の初戀に餘りに悶え候よりかにかくと、御願申上候 ひつ

れど更に御とりなし給はらず、彼女も又固き決心致し居り候やうなれば、是れも互ひ運命と男らしう断念いたし候」と、言文はそれのみ、意地張り通す其方の氣性はよく呑み込みをり候、さだめて此文見て當分は泣き暮す事と存じ候、とてもの意地に、かへす〳〵も病み煩ひなどひき起さぬやうにと念じ候かしこ、

若き母

すゞき生

七夜迄の危險

生れた許りの孩兒が死亡るのは、大抵出生後一週間以内である。

邊鄙な田舍などへ行くと都會の様に醫者が多く住んで居ないから、萬一の塲合などは折惡く留守のことなどあつて、夫れが爲め、哀れ！可愛い孩兒を黄泉の旅へ送くることが往々ある、で、こんな時の用心に應急の手當を心得て居るのは、子を思ふ母親として當然なことと思ふ。

例へて見れば、孩兒が生れると其儘息が詰つて死んだも同様の姿で居ることが往々あるが、此な時こそ手當の心得がないと其儘に落命して終ふものである

生れた子が母親の胎内を出る途端に、産聲を高く上げるのは、先づ〳〵安産の方であるから、此の上もない目出度ことで、浮世の風に吹かれてから、引續き呼吸をするに差支はない、呼吸と言ふものは人生最も必用なもので、孩兒に限らず、誰でも呼吸をして肺の伸縮力を強くして居らなければ、到底生て居られる筈はないのだ。

若しや生れた子が不幸にして産聲も上げず、默つて居るやうなことであつたら必と何か障りがあるに相違ない。

その時には、如何したらよかろうかと言へば、何でも生れた子に聲を上げさせるが第一なので、孩兒の身體を極く輕く打つて聲を出させるなぞは、如何に

も無慈悲の樣に聞へるだらうが、かくしてこそ全く生兒の生命を取止めるのである、それに孩兒の生命が可愛ければ、精一杯骨を折つて、其の衰弱して居る氣力を興奮させるのは、殊更必用なことであつて必と好結果を生ずるものである。

以上の手段を盡して、幾度輕く打つても氣が付かないで、蘇生しなければ、直樣産婆を呼んで、充分の手當をして貰はなければいけない、こんなことになると親の心配は最のことだが、ナニ格別驚く程でもないのだ、孩兒と言ふものは、生れ落てから十五分間位呼吸をしないで居ても差支ないし、時によると數日間肺の伸縮が適當に行かないで、生命に別條がないことがある。

蘇生させるには、全で水に溺れた人を復活させるやうな具合で、一時間餘も呼吸作用を施すがよい、此の方法は中々容易のことではないが、一生懸命に行るより外に仕方はない、産婆は孩兒の咽喉をよく見て、其の咽喉部に粘液がからむで居るか居らぬかをよく驗べて、全く粘液がとれてゐたなら、今度は皮膚に刺擊を與へるやうにする。

其の方法はと、言ふと先づ火の側へ寢臺なり、搖籠なり、椅子なら二脚並べて、其上に枕を置き、華氏の寒暖計で百度位の湯と、別に水盤に冷水を汲んで置て、夫から其の湯の中に孩兒を十秒程浸して、其儘枕をさせて、靜かに寢かして置いて、手で冷水を掬ふか、又は水を海綿へ含まして子供の顏へふりかけ、漸次身體にも撒布するのである、この寒暖の具合を心得て、幾度となく爲て見るがよろしい。

以上の方法を用ゆると、大抵は孩兒に産聲を發させるものであるが、これでも結果がよくなければ、更に手拭の隅を濡らして手足を輕くチョイ〳〵と打つマア大概之で成効する、若し又それでもいけなければ、結局、

人工呼吸法

を行つて見るがよい、此の法を施す時間は、孩兒が自然に呼吸を初めてくるか、さもなくば、心臟の動

悸が起る迄でよい。

人工呼吸法の事をお慈し申せば、先づ孩兒の頭に枕を當てがい、肩を少しく上げさせ仰向に寢かして置くのである、此時產婆は其の孩兒の頭の方へ立つて孩兒の兩手をとり、自分の方へ引き付けて肱を抑へ其の手が頭の上と後頭の邊に出會ふ樣に、靜かに上げさするのが手術の始りで、其れから二三秒の間手を高く上げさせて更に其手を下ろさして、肋骨のあたりを抑へさせる。

この方法を繰返し〱一分間に二十回も行ふて見る其れ以上は行はないがよい、慌しく急いでやつても、二十回以内でなければならぬ、よく〱時を計らつゝ行ふに越すことはない。

冷室と狹い室

冷たき室と息詰りのする樣な狹い室は、何れも孩兒の健康に有害である、生れて間のない間は、食物で育つと言ふよりか、寧ろ溫暖の度に適つて居るのが何よりの事であつて、其上身體を清潔にするのと、新鮮の空氣を呼吸させるのが最も必用である。

生れて間もない時に、罹り易い危險と言ふのは、

眼炎

と言ふ目の焮衝疾である、眼炎を起す原因は二樣あるけれども、一方は空氣の冷却から起つて來て、容易に全治することが出來るけれども、一方は眼に化膿して來る傳染性疾患である、これは眼のために非常なる危險を引起すもので、恍然して居ると僅に廿四時間許りで、とり返しの付かない盲目にして仕舞ふのだから、眼炎の豫防法は、最も必用なことである、出來る丈早く眼中にある粘液の分泌を奇麗に拭ひとるのである、早く氣が付いて治療を行へば、早い丈甲斐があるのだ、ぐづ〱して產湯をつかはせてからなぞと、暢氣なことを言つて居ないで、何でも手早くやるがよい。

眼炎の兆候

は初め眼瞼が脹れ上つて、涙がポロ〱出て、眼が開かなくなつて來る、こんなことになつたら、瞬時

も手後れのない樣に、醫師を迎ひにやるのである、醫師が留守で直ぐ來られないときは、左の通りにするがよい。

亞鉛末と硫黄の混合粉を買つて來て、一オンスの水の中へ、其藥を耳搔に二杯も入れて、猪口に一杯溶かして、其れに毛布を細く切つて浸し、よく眼を洗つた後で、使つた毛布を燒棄るのです、この療法を朝夕度々して眼に溜つて居る粘液を拭ひ、眼球を奇麗に洗滌して、腐蝕しない樣にして、夫れから最後に數滴の石腦油を眼の緣に塗布のです、之れは洗滌の度に、目の邊についた、痂痕を防ぐ効がある。

室の透間から風が吹き込でくるのを防ぐのも、又何より大切なことである、居間を取替へる時でも冷風に觸らぬ樣に、頭部へ冠り物をさせるがよい、而して搖籠も直に板の間の上なぞへ置かぬ樣注意が大切で、睡椅子又は普通の椅子の上に寢かして、羽目板などから風の吹き込まぬよう心懸けるのも必用であります。

蜜月と戀愛文　△△△△

一日の新婚旅行

唯た一日の新婚旅行は、最も短い蜜月です、しかしそれでも矢張り新婚旅行に相違はございません、一月も二月も蜜月をなさるお方もありますが、そんなに長くては、たゞ時間が潰れるのと、お金が費るばかりで、左までの樂みはないではありますまいか退屈して厭になりは致しますまいか。

己れ等夫婦は一日間の蜜月を、倫敦で樂しく送つたのです、蜜月には倫敦が世界第一の處です。

此日はお誂へ向きの好天氣でありました！イエ縱へ雨天で外へは出られませんでも、陰氣臭ひ田舍の小さい旅舍などに居るよりも、どの位ゐ樂しいか知れません！、朝飯が終みますと、手と手を執りあつてセント、ゼームス公園を散歩致しまして、腰掛臺に

腰をかけまして池面に戯る、水鳥の浮きつ沈みつするのを見物しました、それから互に談話を致しました、どんな談話をしたと思召しますか。

公園を出て、今度は一寸或る古寺院に參詣し、議事堂をも見物して、もう時分でもありますから、お晝飯の仕度をせねばなりませぬので、馬車に乘つて、料理店に向ひました。

料理店でお晝飯を仕舞つてから、音樂會に行つて音樂を聽きました、夫は煙草を喫しました。

それから「ボンド」街の靜かな小さい二階で、お茶を喫べまして、市中の景色など眺めます中に、やがて夕方になりましたから、旅館に還りまして、衣裳を着換て晩餐の食卓に着きました、食後には「オペラ」に參りました、これが此日の遊樂のお終ひなのです旅館に返りましてから、今日一日のことを考へますと、隨分長いやうで、一日の間の事とは思はれないのでございました。

けれども蜜月の最も樂しかつたのは、明る朝、自宅に歸つてからでございました、夫は旅館から直に勤先に參りましたので、私しは手荷物など取片付て、馬車に乘りました、自宅に還りましてから、夫の還るまで、家中のことを、何やかや隈なく仕末したり調べたりいたしまして、一分一厘も殘らず心の中に疊み込みました、女中も甲斐々々しく手傳つて呉れました、それから兩人で晩餐のお料理をして、それがすむと、夫の室にお湯やら、スリッパやら、ジャケツやらをチャンと用意して置きました、間もなく夫は勇々として返つて參りました、晩餐は始まりました。

女中が食堂から出ますと、夫はけたゝましく私の傍に參りまして、私を抱きかゝへて、如何にもうれしさうに滿足らしい風で私しにキッスを致しまして、

「これが私しの理想の蜜月です

と申しました、私しも勿論此の詞を贊成したのでございます。

家　庭

結婚後の戀愛文

戀愛といふものは、增さなければ減るものです、これが原則なのです、如何すれば、結婚してから後、幾年經つても、結婚當時のやうな、生々した戀愛を互に續けることが出來ませうか、金錢や、財產や、位置を目的にして、結婚する者は、その目的さへ達すれば、互の間に戀愛があらうがあるまいが、少しも關係のない譯でございますが、戀愛といふことを目的にして結び付いた間は、戀愛を互に續けるのが固より本旨なのです。

若い男や女は、動もすると、不幸な結婚の爲に苦んで居る夫婦などを見て、結婚といふことを恐ろしいものゝやうに思ふのも、强ち無理とばかしは申されません。



世間には頰脹らして、プツ〳〵不平をいふ女もあれば、靑筋張つて小言ダラ〳〵の男もあります、夫婦滅多に顏を合せなくて、樂みを共にすることもなければ、苦しみを互に分つこともない、冷淡な夫婦が少なくありません、これは畢竟結婚後、互に戀愛の情が次第に薄くなつたからです。

戀愛を目的にして結婚した妻は、一生の間、夫から折々『私しは貴女を愛します』と心底から言つて貰ひたいだらうと思ひます、この詞を受けませねば、口には申しませんにしても、心では、妻は夫を冷淡だと思ひ夫は妻を氣の利かない女だと思ふや

うになるのです。
或處に新に結婚した夫婦がございましたが、結婚後日數の經たない內に、夫は急に用事が出來て、妻に握手を與へる暇もなく、大急ぎに汽車に乘つて行つてしまひました、妻は悲しいやら腹立たしさやらで、一時は泣き出しでもしさうでしたが、我と我氣を引立て丶、夫に向ひて戀愛文を書きました、思ひの丈を筆に言はせたので、口には言へないことまでも、細細と書いたので、餘程旨く出來たのでございます。これで少々胸がサッパリ致しまして、其夜は床に就きました、翌朝になると、昨日書いた手翰を郵便に出しましたが、其の手翰と引換へに、夫の手翰が着きました、封を解いて見ますと、汽車の中で、餘程取急いで認めたものと見へて、擲り書ではございますが、心を籠めたる筆の跡最もやさしく、寔に有難い程の「ラブレター」でございました。
そこで妻は嬉しさの餘り、又も直に筆を走らせて、返事を認めて贈りました、さうすると夫からも間もなくその返事が來るといふやうに、手翰の取遣りが頻繁なので、結婚後數日ならずして、袂を分つたにも係らず、互の戀愛は日に增し加はりまして、譬へば樹木の根が附いて、健全に成長するといふやうに夫婦間の戀愛が、確然と發達したのでございます。
其後は妻が親里に參りますか、又は夫が其の職務の爲に遠方に行きまして、互に別れて居る間は、何方からも常に手翰を出すことを止め無つたのです。
結婚後十年を經た後でも、郵便配達夫が、戶を叩いて「郵便」「郵便」といふ聲が聞へますと、妻は頰にサッと紅を潮しまして、如何にも耻かしさうな風で、慌て丶二階を下つて、郵便を取りに行くのであります、全で十七八の娘でゞもあるやうに……………。
結婚後の戀文程、公明正大で、また潔白なものはありません。

△愛情盈れば食も甘く、愛情欠くれば美食も甘からず、

（ソロモン）

日常の諸心得

△△△△△

▲酒を燗する注意　酒を燗する時に、鐵瓶などの湯餘りに滾り居る時は、往々德利の破るゝことがある、かゝる時には、少量の水を鐵瓶の湯に注ぎて、後に德利を斜に入るゝのです、さうすれば破るなどの虞はありませぬ。

▲鐵瓶の湯の酒氣を去る法　燗などなしたる後に鐵瓶の湯に酒氣つき、茶なぞ入るゝ折に困ることがある、かゝる時には、よく熾りたる堅炭の火の灰を吹き落して、その湯の中に入れ直ぐ取り上げるのです、化學上の作用で炭が酒氣を皆吸ひとります。

▲錫器に就いての注意　錫の器は濕氣のたまりたる所より錆び出して、速に腐蝕するものですから、常々よく拭ふて乾して置かねばならぬ、また錫の德利などに凹みの出來る事がある時に、猥りに鐵槌などで打ち擲きて疵など付けてはならぬ、かゝる時は其德利の中へ大豆を一杯入れ、水を注ぎ入れて、一夜おくのです、さすれば凹みがすつかり直ります。

▲器物に魚脂獸脂のつきたるを取る法　肉や脂物を入れた漆器陶器の脂氣を去るには、菜の葉で拭ふのです。

▲新らしき飯櫃の木臭を去る法　これは飯櫃の中へ蕎麥粉少しく入れ、熱湯を注ぎてよく蓋をなし冷める迄その儘にしておき、後よく洗ふのです。或は又熱湯を注ぎ込み、直に燈心五六本を入れ、冷める迄其儘にして置いても、よく臭氣を去るものです。

▲桐製器具に虫つくを防ぐ法　桐の簞笥、箱類はとかく虫のつき易きものですから、樟腦水を刷毛で普く塗つておくのです。又蕃椒の煎汁でもよい。

▲雨障子を張る心得　雨障子は糊はがれ易きゆゑこれを防ぐには、始め糊に酢を少し加へるのです。傘の破れなどを繕ふにも亦同じであります。

▲雲脂を取る法　頭髮の雲脂を取るには、白芷の細末にしたるものを、ヒマシ油で、よくとき頭髮へ

すりこみ置き、五時間許過ぎて、後梳れば、よく取れるものです。

▲腐敗せざる糊をつくる法　先づ水五合の内に一匙の明礬を溶かし、生麩を入れ、攪拌て火にかけ、更にアラビヤゴムを少許加へて煮詰め、出來あがりたる時、他の器にうつすのです。冷き所におけば一年位は保存出來ます。

▲漆器の臭味を去る法　重箱や辨當箱など凡て新しき漆器の臭氣を去るには、米磨汁を微溫湯となし半日ばかり、其器を浸しおくのです。

▲釦のつけ糸　シャツなどの釦とれたる時、之をつけるには、眞綿を程よき大さに引き延ばし、針に通して糸に代用するのです、通常の木綿糸や絹糸などよりも工合もよく、保存も亦よいものです。

▲鐵器の金氣を抜く法　鐵器は金物の內で、最も身體に害なきものであれば、食器には極く適當ですけれども、その金氣は往々毒なことがある、釜などの金氣をぬくには、薩摩芋または糠を入れてよく煮るのです。

▲鐵の錆を防ぐ法　黑鉛(鉛筆の心を作るもの)の細末十五匁、硫酸鉛六十五匁、硫酸亞鉛十五匁、ペンキ油二百四十匁を能く煉り合せ、之を暖爐や鐵門鐵棚などの鐵器に塗れば、其錆つくをよく防げます。

▲玻璃を磨く法　布にブランデー又は石油をつけて磨くのです、或は又アルコホルか酢でもよい。

▲銀器を磨く法　銀の器を磨くには、炭酸鐵を布につけて磨くのです、併し油氣のある時は、先づよく油氣を拭ひ去つた後にせねばならぬ。

▲額縁などを磨く法　金塗りの額縁や鏡の縁等の光澤を出し、又蠅糞などを落すには、玉葱を二つに切りて、その切目の所で靜に金塗の所をなで、後に海綿に水を含ませ、徐々に拭ひ去るのです。

▲漆器を綺麗にする法　苛性曹達三匁、酒石一匁五分を水二十四匁に溶かしたるものを貯へおき、入用の節は、水で薄め、汚れたる漆器に塗り、三四分間經つてから、和かき雜布で拭き、更に水で洗ふの

です。

▲獸皮を貯藏する法　熊や狐などの皮を貯藏するには、膽礬を細に碎き、水で煉つて獸皮の裏面に擦り込むのです。かくすれば先づ虫害は防げる、又水楊酸を多量の水に溶き、獸皮を一度之に浸し、乾して貯藏する仕方もあります。

▲油の滲みたる器に紙を貼る法　行燈や燈籠など凡て油の滲みたるものに、紙を貼るに、極めて剝れ易いから、之を防ぐには、普通の糊へ砂糖を交せます、又金屬器、漆を塗りたるものを張るにも此



法を用ゐてゐます。

▲庖丁刀剃刀の防銹法　庖丁刀剃刀などは、鹽氣や汗で直ぐ銹びるものですから使ひし後は、椿の油で拭ふか、又は墨を塗つておくのです。さすれば容易に銹びませぬ。

▲針の防銹法　針を銹びないやうにしておくのには、杉灰の中に入れておきます。

▲疊の垢を落す法　橙を兩斷し、疊上をよく擦り、後雜布で拭ふのです。又揮發油を布片につけて拭ふてもよい

▲疊に墨汁零したるを拭ふ法　疊に墨汁零したる

時直に水をかけ試ふは餘りよくない、乾くまで其儘にしておき、新しき草履を以て、よく擦るのです。存外綺麗になります。

▲醬油の變味、變色せるを直す法　その變味變色せる醬油を鍋に入れ、强火に煮立て、徐々に文火にする時は、泡と汚物は上に浮び出る、之を掬ひ取り醬油を其儘で冷し置けば、元の通りよきものとなります。

▲麥酒の良否を見分くる法　凡て麥酒は澄みてゐるのがよい、瓶詰麥酒の久しくなつたものは、極寒の節或は凍えて濁ることがあるが、これは强ち麥酒の惡くなつたのでない、ですから、温むれば、又澄むやうになります。併し、濁つて、やゝ臭ひも變り、粘氣を生じ、線を引くやうになつてゐるのは、既早腐敗してゐるものと見てもよい。

又麥酒をコップに注いだ時、表面に、白く細き泡を生じ、且つコップの側面より小さき泡を發生するのが最もよい、泡の發生少く、若くは全くこれのないのは麥酒に缺くべからざる炭酸瓦斯を失うてゐるもので上乘のものではありませぬ。

麥酒には固有の香氣があるもので、異つてゐる臭氣あるものは、其原料の忽布麥芽などの變質したものを用ゐたのか、或は酵母の不純なので造つたもので良くありませぬ。

麥酒は心地よい位に舌を刺す如き作用ある物はよいこれ即ち先にもいつた炭酸瓦斯があるからです。瓶詰麥酒などは、往々栓の惡き爲め、この瓦斯を失ふことがあるゆゑ、注意すべきことです。

▲フランチルの洗濯法　フランチルを洗濯するには、普通の人は、木綿類の洗濯と同樣に、石鹼をこすり、力を入れて揉みて洗ふけれども、かくしては痛く其地質を損して硬くならしめる虞がある、故に之を洗濯するには、先づ湯を煮立て、石鹼水を作り適宜に水を加へ、その泡立つてゐる中に浸して餘り強く揉ないで、洗ふ時は、清潔となり、毛をも害しないで、また硬くもなることがありませぬ。

▲氷を久しく保つ法　氷を細少に砕きおく時は、夏時など殊に溶け易いものです。之を久しく保つには筒形の湯呑茶碗にフランネルの布片を張り、その中央を推し窪めて此上に氷片を載せておくのです。さすれば、よく久しく保つことが出來るのです。

▲水を清ましむる法　良水を得ざる所では、已むを得ず、濁りたる河水を使用することがある、か丶る時は、河水を先づ桶の中に酌み置き、その上清を酌み取りて飲料に供するのです。けれども礬土の如きは、久しく靜置しなければ、清澄せしむるとが出來ないから、か丶る時は明礬を混じて攪拌せおくのです。さすれば、石灰と明礬と抱合して沈んで、同時に礬土も底に沈澱し、清き水となります。そして其味にも少しの變りもありません。

▲虫螫の解毒法　夏時には蚤、蚊、蚋などより蜂蛇類に至るまで毒虫が多くて、隨分其害を受けるものです。毛虫や蜂などに刺された時は、稀薄なるアムモニヤを塗る方がよい、又蛇などに嚙まれたる時は、その創所にアムモニア又は二十倍位の强石炭酸を塗り、創所の上の方を固く綳帶するのです、これは毒の蔓延を防ぐ爲なのです。又平常水飴を干しておき、蜂など總て毒虫に螫されたる時には、其腹部を水にて和かにし、これを其創所に塗り擦すれば、痛み去り、脹れ引くこと實に不思議な位です。又蘩蔞といふ草あり、これは春夏秋何處にでもあるものですが、毒虫に螫さる時、直く揉みて其汁をつければ、大概の害は防げるものです。

▲蟻を防ぐ法　夏日は蟻が群をなして隨分座敷に這ひ登りさては菓子など貯へある戸棚までも尋ね來り、大に之が驅逐に困まることがある、又庭い果樹などにつきて植物を害する事があります。されば之を驅る簡便法はといへば、和布を煮た汁を軒下又は庭に撒けば、一夜にして、蟻の姿は一疋も見えぬやうになります、又敬遠主義として砂糖俵の菰などを買ひ來り、椽下などにおき、蟻を其所のみに導きおくこともあります。

▲衣服の黴を洗ふ法　夏日衣服のかびて色ついたのは、冬瓜の煎じ汁で洗へば直取れます。また梅雨にかびたものは、梅の葉の煎じ汁で洗へばよい。

家庭瑣談

すみれ

△趣味ある交際

客あしらひ、日本婦人の交際の腕前は、歐羅巴婦人に比較致しますれば、實に皆無でテンでお話にならぬと申さるゝ方が御座ります、成る程我々姉妹は、歐洲の婦人達から見ますれば、交際上の智識の劣つて居ります事は、決して抗辯を致しませぬが、然し日本では婦人が歐洲の様に公會の席上に出ると云ふ様なことがなく……、絶對的に無いとは申されませぬが、先づどちらかと申しますれば、出ないと云ふ方が多いのですから、されば公會に臨みたる時交際上の智識は殆んど缺げて居ると申しても好いでせうが、然し個人としての交際上には婦人の出る場合も決して少なくは御座りませぬ、從つて、此程の交際向には多少其素養もあり、又昔から種々の訓戒もたしなみも御座りまして、時としては随分奥床しく思はるゝ節も御座ります、只是迄は比較的に婦人に敎育の缺げて居りました爲に、交際が何となく、卑屈で、品格と云ふ點に於て往々世間から低く見らるゝ事を免れませぬ、然し夫は其人の罪で、日本婦人の交際が、夫程迄に劣等であると申します次第でない事は、先づ婦人自ら之を信じられると思ひます、

昔から日本の茶人には、客ぶり、主人ぶりと申すことが御座りまして、客は主人の心を以て心とし、主人は客の心を以て心とすると云ふことで、實に之は獨り茶會のみでなく、一般の交際に對して慥に一種の福音である様に思はれます。若し此心を以て、交際場に立つことにすれば……、一寸した事でも食事時に他家を訪問致しまして、主人に迷惑を懸けるのみならず夜更る迄も無用の談に長座すると云ふ様な

事も御座りませぬ、又主人の方から申せば、折角尋ねられた客人に不快を感じさせて歸すとか、同じ食饌を供するにも氣安く、愉快に客人に喫せしむると云ふ事が出來ますので御座いますが、凡て斯樣なる事は云ふは易く行ふは難しで御座ります、それで昔から傳はつて居ります逸話や記者が斯くありたしと思ひまする交際上の理想を一種の談話として、つぎつぎに記しますが、若し之が多少にても世の婦人達の交際上に益する事が御座りますれば、眞に望外で御座ります。

△麥湯とアイスクリーム

記者が曾て某男爵夫人をお尋ね致しました事が御座りました、夫人は餘り交際社會に立ち交ると云ふ樣な事は好まれぬ方ですが、然し其しとやかで、優しく交際の調子の好い事は、一度お馴染になれば誰でも必ず永く御交際を願度思はぬものは無いと申す樣に、何處となく人に慕はるゝ、申さば人德のある方でございましたが、中々御家庭向の取締は能く行屆て待女や、小間使などのお仕着けなどは、至極嚴正なものでありますが、私が御訪問致しましたのは丁度七月の半で、時間は午後の四時頃、それは〳〵實に暑い盛りで御座いましたがお居間に通る、直に女中が大コップに麥湯の冷やしたのを汲んで出されました、夫から夫人とお話の半に、アイスクリームを下されましたが、之は昔秀吉が狩の歸りに或る山寺へ立寄られました時に、寺の小僧が最初に薄茶を大服に少しくぬるき位に點て、今一服と秀吉が所望をされた時には小服で熱く點てゝ出したと申すので、秀吉が其小僧の才氣を愛で、召連れて歸られたのが彼の石田三成であつたと申すことで御座りますが、此日の麥湯とアイスクリームに、何となく此秀吉の話を思ひ出しまして、夫人の接遇の氣轉を感じました事で御座りました。

△麥飯の饗應

舊尾張侯の老臣某と云へる人が、同地で有名な財産家へ招かれて參つた事が御座りましたが、名に

しおふ一方は大藩の老臣、殊に主人は土地で屈指の資産家で御座りますから、其老臣の心の内で定めて此日の饗宴は、山海の珍味を盡した盛んな事であらふと豫想されて參られた所が、中垣の竹や、露地向の筧などは、青竹でスッカリ仕換へて、



見るから心地よき有様で御座りましたが、扨膳部は極めて粗末で麥飯に味噌汁竹の子の煮附と云ふ眞の一汁一菜の料理でありましたので、老臣も成程町人と云ふものは何程金を貯へて居つても吝嗇なものだと、大層心中で賤んで其家へ立出られた

が歸り道に從者に今日は定めて其方等には粗末なものを出したであらうと云つて、暗に其主人の卑吝なる事を語られたるに、從者はイヤ今日は私は生れて始めての美味を頂きたりとて殘肴を斯の如く持ち居れりとて、其饗膳の美なりし事を激賞いたしましたので老臣はハタと横手を打て其趣向を感じたと申す事で御座ります。

△銀盤中の河骨

豪奢を以て誇れる某伯爵が、先頃英國の貴賓某氏を午餐の饗宴に招かれし事が御座りましたが、宴會が終りてから近頃新築せられました、和洋折衷の談話室に誘はるゝ手筈でありましたが、室中の裝飾は華美を盡されて殊に床の間の挿花は、廣口花瓶に河骨を挾みありしが、恰も盛暑の折でありますから、憐れにも食事の了る頃には瓶中の河骨が水を下げてしまひまして、客が此室に來るべき時に迫り、他の花を挿むにも殆んど致し方がないのに、丁度其處へ見廻りに來られました伯爵夫人が之を見て、伯の書齋に金魚を飼養して飾られてある銀製水盤を取り寄せ、萎れた河骨の花ばかりを剪りて、盤中に浮べて床上に飾られたのですが、來賓の茲に來らるゝ時には、スッカリと此俄思ひ付きの飾りも出來て、其白銀盤中には點々たる河骨の花、彼方此方に浮動する樣の美しくも涼げなるに、來賓は手を拍つて之を激賞し、日本人の意匠に優秀なるは實に世界に冠たりと云つて大に賞せられましたと申す事を聞きましたが、云はゞ過ちの功名でありますが、賓客を喜ばしめますには、氣轉が第一と云ふことは之によりても知らるゝではありませんか。

△一輪の牽牛花

豐臣秀吉が曾て茶人の利休の露地に見事なる牽牛花の花咲き居るよしを聞れて、夫を賞玩せむ爲に朝の茶の湯に、利休の宅へ參られましたが、不思議にも、朝貌の一輪も御座いませんので、秀吉は頗る不興の體でありましたが、やがて小座敷に御出になりますと、露團々たる牽牛花一輪を、掛尺八に挿した

輕便＝瓦斯の煮燒＝德用

瓦斯は燈火用の外料理其他一般の煮燒用として使用は輕便マッチ一本あれば晝夜何時にても即時に用を便じ火力加減自在にして火災の危險なく且大に人手を省き費用は薪炭よりも低廉なり

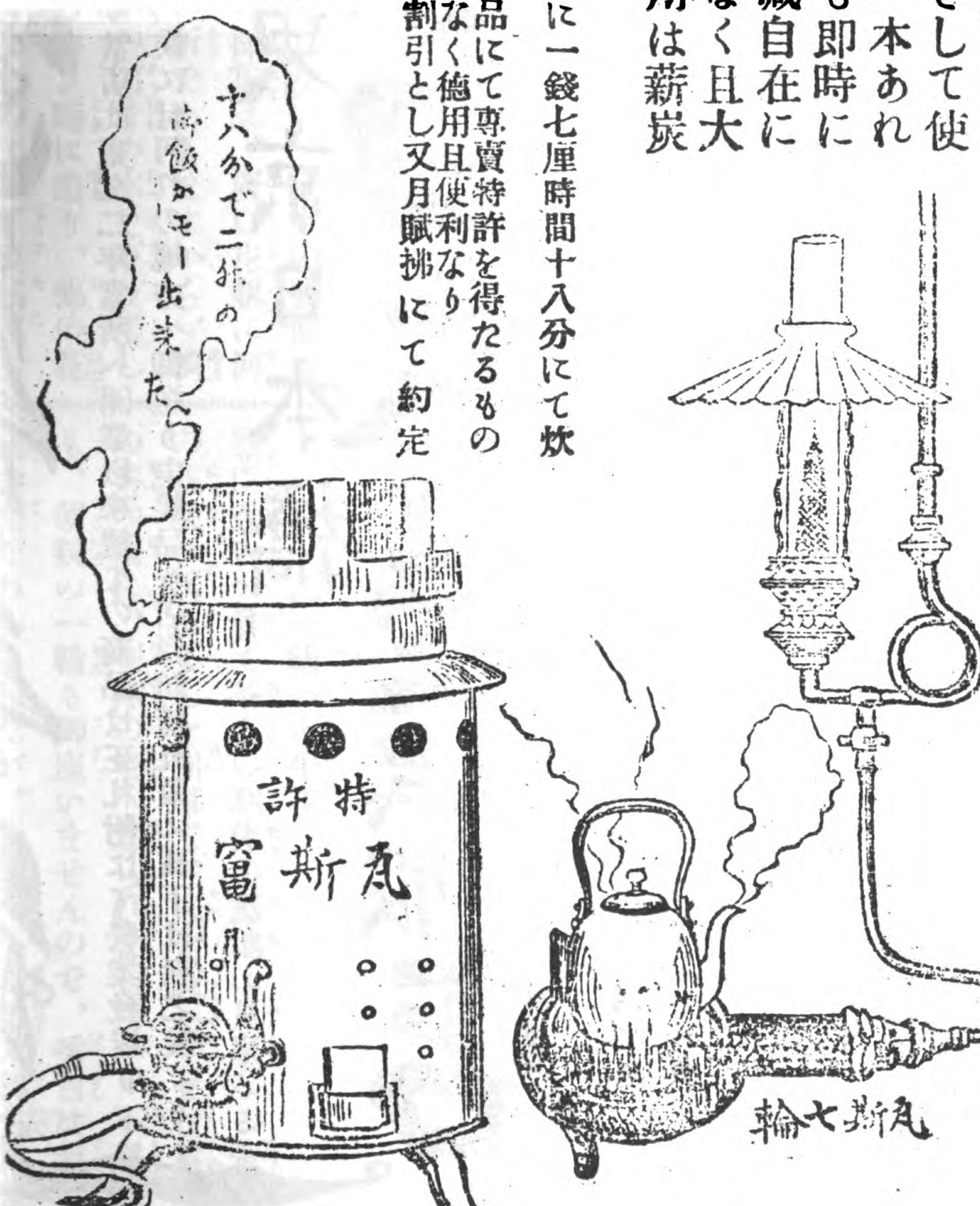
○三升の米は瓦斯代僅に一錢七厘時間十八分にて炊くを得べし

○瓦斯竈は本社の發明品にて專賣特許を得たるものにして瓦斯消費量少なく德用且便利なり

○工事費は前金拂は一割引とし又月賦拂にて約定す

○臺所竈、七輪、湯沸、風呂、並煖爐等に專用の瓦斯代は特に定價の二割引とす

尚各種瓦斯器具は當社構内陳列所又は銀座所等へ陳列縦覧に供居候御立寄御一覽被下度候



神田區錦町三丁目

東京瓦斯株式會社

電話本局一二三番、五四八番 二二〇三番




御用諸學校
體操器械
TRADE S.A MARK
ANDO-SHOTEN
No.5 Urajimbo-cho. KANDA. TOKYO
Manufacturer of Various Appliances for Gymnastic & Other Out-door Games.
東京神田裏神保町
安藤商店
電話本局四八四番
SA
ピンポン室内テニス
一號一箱 一、二二〇
二號同 一、五〇〇
三號同 一、六八〇
四號同 一、八三〇
號外同 〇、八八〇
其他各種御注文に應じ製造可仕候
ピンポン改良室内テニス（旅行用）
一號一箱 一、〇三〇
二號同 一、二三〇
三號同 一、三五〇
四號同 二、五一〇
同用テーブル上等一臺拾參圓
並等一臺九圓半
大人用
御用
體操器械
体育用品一切
東京神田裏神保町五
S.A.安藤商店
電本 484
テニス用ラケット一組
一號大人用 一三、〇〇〇
二號同 一一、〇〇〇
三號同 八、八〇〇
四號同 七、四〇〇
五號同 六、七〇〇
六號同 五、七〇〇
七號同（小學用） 四、七〇〇
綿人用（一號） 六圓
同二號 七圓
改良櫻二重枠ラケット一組
一號 拾參圓參拾錢
二號 拾壹圓七拾錢
三號 九圓五拾錢
四號 八圓貳拾錢
五號 七圓貳拾錢
六號 六圓貳拾錢
テニス組一張 一、七五〇ヨリ二、九五
〇迄各種あり升
東京市神田裏神保町五
安藤商店
電話本局四百八十四

る風情は、實に云ふにも云へぬ好い趣向で、陪從の人々も目をさましたる心地したと申す事で御座りますが物を賞美し又は人々に賞美せしめんには斯くありて後ち始めて眞の價値を知ることが出來ます。

△香爐の温り

日本で從來交際上の粹と申しては、先づ茶人の間の交際を以て第一とせねばなりませぬ夫は流石に主人ぶり客ぶりと云ふことに、心を用ゆる爲でありませうが、とりわけ利休などの交際ぶりなどは、感服すべき逸話が澤山御座います、之も其一つですが、或雪の朝に其知人の紹智を葦屋町の宅へ……簑笠を着て、尋ねて參つた事がありましたが、路次へ入つて簑笠を脱ぐと等しく紹智が迎に出たので御座いますすると利休が彼の有名なる千鳥の香爐を、袖の内より取いだして、香を炷ぎ少し温はさめつらんながらとて、紹智に渡せば、紹智、之を左の手に受け、某も懷中にとて右の袖より香爐を取いだしたれば、利休甚だ入興したと云ふ事ですが、雪中千鳥の香爐、ほとりはさめつらんがと云へる挨拶、其配合の面白きはとても尋常人の思ひ至らぬ處で御座います。

△出征軍人の送別

今年の三月の下旬の事で御座いましたが、茶事についても有名な某醫官が出征の某軍に從軍して出發する何某と申少佐を招きて、送別の宴を開かれた事がありましたが、饗膳の料理は山海の珍味でありました事は無論ですが、初の一献の時に勝栗に鰹魚武士を添へて出されたのは、出征軍人の送別には面白い趣向で御座いますが、夫よりも更に主人の心を用ゐられたかと思はるゝのは、橋本雅邦翁の草畫の虎を一寸カーキー色とも見ゆる茶色緞子にて表裝し、芽出し柳の枝長きを床の隅から垂して、其枝を結ばれたのは、彼の縮柳の古事も偲ばれて、大變に衆客の喝采を得られたと申す事ですが、之等は何んでもない樣な事でありますが、客の待遇については、大に意を用ひられた事では御座いませんか。

飲食物の話（つゞき）

磯部武者五郎

蔬菜類

蔬菜の類にて葉茎を食する類のものは水分を主成分とし、之れに少許の澱粉灰分、脂肪を混ずるなり、すべて此の類は其の水分要用にして肉類と調和して料理に用ふるときは消化を助けて有効なるものなり其の重なるものは

葱　種類頗る多く本邦産にては千住葱、岩槻葱、秋田葱、朽木葱、下仁田葱等あり、概ね冬季より春季に生ずるものなれども、一種夏葱と稱して夏時に生ずるあり、千住葱は東京府下千住に生じ茎長大なり岩槻葱は埼玉縣岩槻に生じ茎短く屈曲せり、下仁田葱は上野に產し茎頗る長大なり、外國產は多くは玉葱成分は水分を主とし蛋白灰分を有せり、固有せる

一種の臭味は神經を刺戟し消化液の分泌を促す効ありと稱するものにて球狀をなせり、葱は煮又「ぬた」にして食す、

韮　成分葱と同じく臭味亦同じ夏秋の間生じ、到る處に產す、多く煮て食す、

土當歸　又獨活とも書く、水分最も多く少量の蛋白澱粉又一種の苦味香味を有し、味美にして料理に用ひて佳品なり、普通のものと寒土當歸との二種あり多くは煮て食し、又膾、ぬたにして食す、

款冬　又蕗の字を書す、水分最も多く少量の澱粉、灰分と一種の苦味を有す、本品は我邦の原產にして特に寒地に生ず、北海道、秋田の產を著名なりとす秋田蕗は長大にして六尺以上に達するもの多し、款冬の花は香味と苦味とを有す共に煮て食す、

筍　水分蛋白と少量の澱粉、糖分灰分を有す、多くは煮て食す、種類に孟宗竹、苦竹、淡竹等あり京都市附近東京市附近の產を佳とす、

三河島菜　東京府下豐島郡三河島村に產するを以て

此の名あり、葉濶大なり水分、蛋白を有し、漬物として美味なり、

白菜　水分、蛋白を有す、原支那より渡來せしものなり、三河島菜に似たり、漬物として食し、又料理品に副菜として用ふ、

小松菜　水分、蛋白と少量の澱粉を有す、下總國小松川の原產なるを以て此の名あり、煮て食し、又は浸し物にして食す、

水菜　水分蛋白と少量の灰分を有す、　原產なるを以て、一名京菜の稱あり、又伊勢菜とも稱せり、漬物として佳味なり、或は煮て食することあり、

芥菜　水分、蛋白、澱粉、灰分を有し又一種の辛味あり、漬物とし又は煮て食す、

菠薐草　水分、蛋白、澱粉、灰分を有す、原產地は中央亞細亞ならんといふ、本品は葉柔軟にして味美なる故其の食用とする區域最廣く日本支那印度波斯より歐羅巴各國、亞米利加に亘りて各人の賞味する所なり、多く浸物として食す、

芹　水分、蛋白、澱粉、灰分を有し、一種の香味あり、煮て食す、

三ツ葉　芹の一種にして芹に比すれば柔軟にして料理に使用すること多し、

春菊　水分、蛋白、澱粉、灰分を有し、本邦各地に產す、浸物として食し、又は煮て食す、

蕨　水分、蛋白、澱粉、灰分を有し、本邦各地の山野に自生す、煮て食し、又は鹽漬とす、澱粉を取りて、蕨粉を製す、蕨粉は葛粉と稍同じ性質を有す、

薇　水分、蛋白、澱粉、灰分を有し、本邦各地の山野に自生す、通常乾燥して後之を煮て食す、

次に瓜の類

瓜類の成分は水分を主とし、糖分、蛋白、澱粉を混するなり、其の重なるものは

甜瓜　水分、蛋白、糖分、澱粉、灰分を有す、本品は美濃國眞桑村より初めて出でたるを以て眞桑瓜の名あり、歐羅巴の南部及中央亞細亞にては盛に培養し、人の賞味する所なり、重に生にて食し、又は糟

漬に爲すことあり、

白瓜　甜瓜の一種にして甜瓜に比すれば水分、糖分稍少し、到る處に栽培し、鹽漬、糟漬にして食す、

胡瓜　水分、澱粉、灰分を有し、各地に產す、原產は印度地方なりといふ、鹽漬、糟漬として食す、

冬瓜　水分、澱粉を有す、原と暖國の產にして東印度諸島及亞弗利加に盛に產し、本邦にては九州邊の暖地に多く產す、多くは煮て食す、

南瓜　水分、糖分、澱粉を有す、原と暖國の產にして東印度諸島に產し、本邦へは柬甫寨より渡來せしを以て俗に「カボチャ」と云ひ、又唐茄ともいふ、多く煮て食す、

茄子　水分、澱粉を有し、本邦各地に產す、西洋產には赤茄子あり、本品は料理品として種々に使用し煮、炙き、油に揚げ、鹽漬、糟漬、糠漬として食用に供す、

海藻類

海藻類は水分、澱粉、蛋白、灰分を有し、疏菜類に比すれば灰分最も多きを特點とす、其重なるものは

昆布　水分、蛋白、澱粉、灰分を有す、北海道は原產地にして實に本邦海藻中の最多額に出づるものなり、支那人の嗜好する所にして、支那へ輸出すること最も多し、通常煮て食し、又鹽漬、砂糖漬とし、或は菓子に造りて食す、又沃度を有するを以て沃度製造の料に供す、

海苔　水分、蛋白、越幾斯質、灰分を有し、一種の佳味を有す、東京府下大森品川邊の產を以て著名なりとす、多く焙りて食す、每年九、十月の頃採りて紙の如く製して乾すなり、此の種類に靑海苔といふあり、其の色靑く香味あり、焙りて細末になして食用に供す、

羊栖菜　水分、蛋白、有機物、灰分を有す、本邦暖地の近海に產す伊勢の產を最も好とす、故に伊勢羊栖菜の稱あり、乾燥したるを煮て食す、

黑菜　有機物、灰分、水分、蛋白を有す、海中の岩に生するものなり、乾燥したるを煮て食す、

裙帶菜　有機物、灰分、蛋白、水分を有す本邦暖地の海中に產する海藻にて阿波の產を最も好しとす其の嫩葉を採りて乾燥したるを煮て食し、又酢に浸して食す、

石花菜　水分、越幾斯質、灰分、を有す本邦南海に產する纖細なる海藻にして伊豆、安房、志摩、土佐紀伊、豐後、日向、臺灣等より產す、多く寒天を製造する原料に供す。（寒天のことは製造食品の部にて述ぶべし）

實驗 牛乳日本料理（第九回）

清水鈴子

▲スープ

全體主題が日本料理でありますけれど、近來高襟式のテーブルが到る處に歡迎されて、刺身にソースを用ゐたり、薩摩汁に胡椒がでたりして、大分折衷したものが流行ますから、少し私も日本料理的のスープの試驗をいたしまして御覽に入れます。

○ポテト、スープ　大きな馬鈴薯を適宜にとり、よく洗ひまして皮ごと煠ます、それを上げて皮をむいたならば鉢に入れてすり潰し、ストックの代りに牛乳とバタを加へて味をつけるのです、手輕にできてお友達などのお馳走に添れば、ライスカレーなどで濟みはしませぬか。ついでに馬鈴薯は今が丁度期節であります。

○素麵スープ　これは極上の素麵をよくゆでゝ、前回にてお話しました、素麵の仕方で軟かくしたものを、牛乳を加へて味を附けたスープの中に入れるのです、これを又素麵の方を重にし、後右のスープをかけても一種不思議な料理ともなりまして、それを冷して用ふれば夏季の御馳走ともなります。

○豌豆スープ　青豌豆を程よく取り、よくゆでゝすり潰し、裏ごしにかけて滓を去ります、またその煮汁には凡そ等分位のストックを加へまして、別の鍋でこれを煮、これに右の豌豆を入れ、又上等の麥粉

を牛乳で溶いて置いたものを加へ味をつけます、この豆は俗に北海道の青豌豆と申すがよろしいでせう

▲ソース

魚、特に或る種の料理に用ゐますソースの製法を申上げませう。

○生鮭　生鮭の身を鹽ゆでにしたものにかけるソース（尤も魚は生鮭に限りませぬ、何なり大魚の身でありましたならば用ゐられます）は、まづ麥粉一大匙に牛乳を加へてソース鍋に入れ、よく灸り、之に肉の煎汁を差して濃くし、後ち鹽と胡椒とで味をつけます、此時汁の加減を見て、尙牛乳の度合を考がへて加へるなり、又は前に麥粉を溶く時、よく見計うて加へて置くのであります、このソースの製法、種々なものを入れる法がありますけれど、まづこゝらが簡單でおよろ　いでせう。

○ダッチ、ソース　前のはアンチヨヴイ、ソースの法を眞似たのでありますけれど、今度はダッチソースの眞似方をいたしまして、同じく魚類にかけるソースの別法を申上げます、これは矢張前の方法の如くソース鍋に牛乳を入れ、右に麥粉を加へてよくかき混ぜ、灸り上りたる所へ水少し入れ、別によく解きたる玉子の黄味のみを二個ほど取り、そろ〳〵と流してみ、弱き火の上にかけて、又牛乳にて濃淡の加減をなし、それに鹽胡椒の味をつけるのであります終りに、青密柑の汁を少ししぼり込んでお覽なされ。

▲ポテト、サーマン

鹽鮭の身の成るべく大きなものをとり、よく洗ひ二十四時間位水に浸し、凡その鹽出しをしたら（長時間水に浸して置くと味が失せてしまひます）鍋に入れ、とろ火にかけて一時間ばかり煮ます、これはゴールド、サーマンとして種々な料理に使ふものでこれを程よく取りて擦りつぶし、馬鈴薯をゆでゝ擦りつぶしたものとよくすり交せ、鹽と胡椒とで味をつけ、これを饅頭の形につくり、牛の脂肪を以てフライ鍋で燒き、牛乳をかけて出すのです。

○これは此位にして置いて、次に別の製法を申あ

げませう、然し私は牛乳の如きものを用ゆる代りに成るべく多數の材料を用ゐず、同じ種のもので種々風味あるものに變へて行く、それが料理の秘法でもあり、また經濟でもあり、他には類のない料理法でありまするから、從つて普及させる運命を短かくすると云ふ恐れがありますので、前に一度行つた事を少し法を變へた斗りのがありますから、成るべく前述の方法は覺えて置いていたゞきたいものであります、つまりは單から複に入るのであります。

▲油あげ

○海苔卷慈姑　まづ慈姑の皮をむぎ、卸金にてすりおろし、それを更に擂鉢にてよくすり、これに上等のウドン粉、牛乳を加へ、よき堅さになりました處を、淺草海苔四つ切（又は六つ切）の上にのせて厚さ五六分ばかりに卷きます（第四回慈姑蒲燒の項參照）今度は温飩粉に玉子（粉五合に玉子二ツ）を割り込みこれに牛乳を加へてよく攪き交ぜ衣といたします、さて鍋には胡麻油を入れ、火に掛け、煮え立つた時に前の慈姑をとりて衣をつけ、鍋の縁よりすべらし、一度裏返し、兩面が狐色となりたる頃を見はからひて紙の上にあげるのであります、（第三回菓子の項參照）付醬油にはダッチ、ソースを用ゐてよろしうございます。

○冬瓜　冬瓜の皮をむぎ、程よく切り前の衣をかけて揚げます。

○花玉葱　小さな玉葱の根の處を少し切りすて、上皮を除き、頭の方より十字形に深く庖丁を入れて、矢張右の油で揚げるのでございます。

○つくね蓮　蓮の皮をむぎ、卸金にておろし、それに一旦湯に通しました魚の身をむしり入れ、適宜の量にとりて右の油にてあげるのであります。

◎是等はみな取り合せに用ゐます、付醬油の代りには前のソースを用ゐます。

▲味噌汁せんろふ

味噌汁のこしらへ方は常の通りでよろしうござい

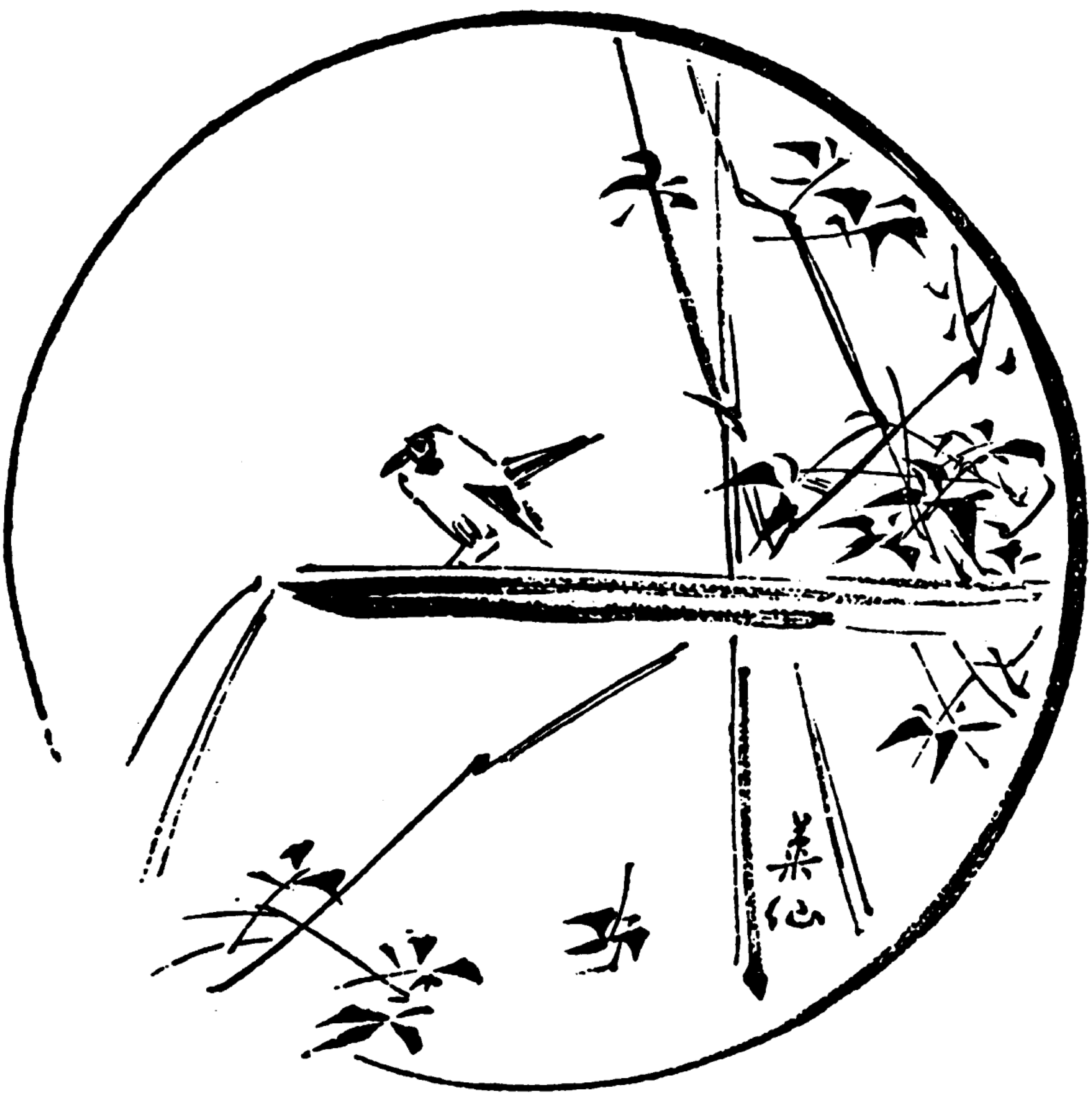
ます（第四回味噌汁の條參照）、繊蘿蔔の製方は、大根の皮を剝き、これを一寸二三分の長さに切り、繊にうち、鍋にて空炙りをして、柔かになりしものを右の味噌汁に入れ、煮え立ちたれば椀に盛りて出すのであります、尤も牛乳は汁に入れても餘り長く煮ぬ事、繊を入れる少し前ぐらゐに加へることにしなければなりません。

◎牛乳は餘り長く煮ると其味を損じます。

▲おろし蕪

まづ成るべく大きな蕪をとり、水にて洗ひ、上皮を剝ぎ、おろし金にておろします、別に牛乳へ玉子の黄味ばかりを加へて斑なく交せたものを用意し、それに鹽加減して味をつけ、數個の茶碗に盛りましたならば、右のおろし蕪を布巾につゝみて輕く水を搾り、その茶碗の牛乳の上に盛り、蓋をせずに蒸籠へ入れてむします、蒸しあがりましたならば蒸籠から茶碗をとり出してうすあんを掛け、おろし山葵などをそへてすゝめるのであります

而して、うすあんの仕方は、味淋をとろ火にて煮つめ、之に生醤油を加へて再び煮つめ、煮出汁を加へ、又一度煮立て



ゝ火よりおろし、之に水を以て溶せし葛をそろ〳〵と垂しこみ、又鍋を火にかけて葛をかへしたものでありまする、

◎おろし蕪の傳で、里芋、茄子、長芋なども出來ます、お試みなさいまし。

▲冬瓜あんかけ

冬瓜の皮をむぎ、生醬油で煮ます、それに右のあんをかけます、これでは牛乳を用ゆるところがありませんから、あんの方に牛乳を入れます、此あんの製法は下地をこしらへて置いてから、牛乳にて解いた葛をながし込み、火にかけて變らせますのですがその時には味淋は用ゐませぬ、またこの傳を豆腐のあんかけにしてもよろしうございます、

◎要するに料理なるものは、料理人の手際にあるのですから、以上私が提供ました方法によつて、種々の御案じの上お試みなさるやう願ひます、決して材料がよろしいから味いものが出來る、又それが悪いから不味いものができると云ふのではありません、又その方法が變テコであると思ひましても、それは調合が下手だつたのか、口に馴れなかつたのでありまするから、よく〳〵御試驗の上なるべくは私の實驗以上に出てゝ牛乳を用ゐることに成功して頂きたいものでございます。

▲僞燒鷄卵

自然藷を生のまゝ皮をむきまして、卸金にておろします、また別に饂飩粉をとつて、牛乳にて延べつつ程よくなりましたならば、今度は玉子の黄味ばかりを二つほど加へまして味をつけ、よく拌せたらば右の長芋のすりおろしを加へ、玉子燒に油をひき、火にかけ、鍋がよく熱するを待ちて前の品を流しこみ、上面が半熟となるころを見はからひ、鍋の片方へそれを片寄ておいて、そのあとへ更に右の品を流し入れ、上面が半熟となる頃、片寄せし玉子をその上に重ね、こんどは反對の方は少し持ちあげて又新らしきものを流し、その上に持ちあげしものを重ねてかくて燒きあげます、燒きあがりましたらばこれ

を板の上にうつし、よきほどに庖丁をして皿に盛りおろしを添へてすゝめるのであります。

▲茄子龜甲燒

茄子のよきものを二つ切になし皮を剝ぎ、表の方に庖丁を細かく入れ、恰も龜甲の如くいたしまして胡麻の油をつけ、金網のうへにのせて兩面より燒きます、別に牛肉、人參、慈姑、馬鈴藷など細かくきり、カレイ粉を入れてよく煮、鹽、胡椒にて味をつけたる上、牛乳を加へ、出來あがりたる時、右の茄子にかけて侑むるのであります、

◎此傳で南瓜を鹽煮にしましたものへ　右の汁をかけても惡るくありませぬ、

○丸揚げ汁　俗に一口茄子と云ふ小さいものゝへたをとり、よく洗ひ、牛乳にて解きたる饂飩粉を衣につゝみ、油にて揚げたるうへ、味噌汁の實といたします。

○ごま汁　牛乳を入れたる胡麻汁の實といたします

▲鰤あんかけ

鰤を厚手の刺肉につくり、竹の皮に敷きならべ、蒸籠の中に入れて蒸し、皿に盛り、うすあんをかけて出すのであります、あんの製法は前に申上げましたものでよろしう御座います、それにすり生姜をそへて侑めるのです。

▲かすていら慈姑

これは口取、鉢肴などの盛合せ、または菓子ともなりますものです、まづ慈姑の皮をむぎ、卸金にておろし、輕く汁をしぼり、用意して置きます、また別に自然藷の皮を剝いて同じく卸金にておろしたるものを、慈姑の一、二割ほどすくなく合せ、等分位の饂飩粉と牛乳とを加へ、鹽、砂糖にて少し甘味をつけてよくすり交せ、蒸籠の中に高さ一寸ほどの枠をこしらへ、其中に濡れ布巾(新らしきもの)を敷き前の慈姑を入れ、蒸籠の蓋を五分ほど開けて蒸すのであります、蒸しあがりましたならば、之を玉子燒にて兩面の少し焦るくらゐに焦き、冷してのち程よくきりまして右の用ゐにいたすのであります。

▲豚油あげ

豚の赤身をよろしきほどに切り、うどん粉を牛乳にて溶き、胡麻油にて揚げるのでございます、またこれを賽の目に切りかきあげとしてもよろしうございます。

▲卯の花汁

まづ白味噌と常味噌とを擂鉢に入れてすり（白味噌六分ならば常味噌四分）、裏漉にけたるのち鍋に入れます、尤も之を解くには水を用ゐます、そして煮立つた時に卯の花を入れ、また煮立つをまつて葱を入れ、葱の少し煮えたる時牛乳を加へ、直ちに火より引き椀に盛りて出すのであります、牛乳は水一升に一合の割でよろしいが、味噌によつて多少の違ひがありますから、前にその加減をして、少し辛目にして置くのであります、尤も始め味噌を煮る前直摺りて置きまして、水を煮沸し、然るのちにそのすり味噌を加へれば、味の加減をすることができます、又葱ばかりでなく、蛤仔でも入れやうと思ひなさるならば、卯の花を加へた時に入れるのであります。卯の花はまた常のまゝでなく、前方に能く摺りつぶして裏漉しておくのです（すりつぶすだけでもよろし）。

▲馬鈴薯べつかう煮

馬鈴薯を生のまゝ皮をむき程よく切り、水にて洗ひ、笊の如きものにあげて置きます、鍋には胡麻油を入れ煮え立つた頃に右の馬鈴薯を投じて炙りつけます、箸の長いもので絶えず掻きまぜて居りますとやがて少し透明になりますから、この時、醤油、砂糖を加へ尚煮て居りますと、鼈甲色に變じ、且つしなびて了ひますから、此時を見て牛乳を加へ泌みたる頃火より引きます、また始め醤油、砂糖を加へます前、湯をさすのでありますが、湯は凡そ鍋の半分位（馬鈴薯は一杯あるものとして）入れます、それで馬鈴薯は最初の半分ぐらゐに減りますから、成るべく色のよくなる迄煮、冷して後に皿に盛ります

▲フライ

生鮭、又は生まぐろの身を七八分の厚さに切り、牛乳とパン粉をつけ油にて揚げソースをかけて出すか、鹽と胡椒をそへて出すのであります、又これを賽の目に切り、上のでんでかき揚げにいたしてもよろしう御座います。

▲サーマンスープ

先づ生鮭の身のよき處を小片に切りて用意しますその餘りの骨や皮や頭などは一切鍋に入れ、之に何か他の魚の汁を加へ、半時間ほど煮出し、のちその荒を去りて裏漉にかけ、再び火に掛けてこれと同量の牛乳を加へ、鹽と胡椒とで味をつけ、これにまた麥粉を加へて濃くし、前に用意して置きました鮭の肉を入れ、やがてそれを侑むるのでありますが、此時あまり煮すぎて牛乳がぼろ〳〵にならぬやう御注意なさいませ。

▲トース

まづトース（燒きパン）を作るには、二三日經過て幾分か乾くなつたものを撰び、中までよくトースせられたものを備へて置き、それからバタ一匙ならば麥粉二匙を鍋にてとかし、牛乳をよきほど少しづつ加へてよく攪きませ、これへ生の魚肉を細かく切りたるものを前の品の半分ほど加へ、鹽と胡椒とで味をつけ、をはりに玉子一個を割り込み、充分にかきませまして、それを前の良くやきたるパンの上にひろげて、然るのち人に侑むるのであります。これは此儘菓子として、コーヒー、若しくは牛乳などに添へて、お客樣に出してよろしうございます。

▲ラムネの性質　ラムネとは炭酸瓦斯を含みたるリモナーデにて外國にて沸騰リモナーデと申すものに御座候リモナーデと申し候は酒石酸、枸櫞酸、醋酸の少量を水に溶し之に香の芳き果汁類と砂糖とを加へたるものにて之を飲めば美味清涼を與へ渇を醫するの効之あり候我國にて通常ラムネと申す飲料は大抵稀硫酸と重炭酸曹達とを以て炭酸瓦斯を發生せしめ之を砂糖水の中に飽充せしめて製したるものにて之を製するに用ふる水は純良ならざれば腐敗し易く候故夏季ラムネを召上る方々はよく〳〵蒸餾水にて製したる良品を撰み衛生上の危害を豫防し給ふ可候

雜録

睡眠學校と美貌術

近頃ろ横濱の某女學校にては、睡眠法といふを學科の一つに加へて、一般生徒に睡眠法の敎授をするといふことでムいますが、これは元より同校が始めたのではなくて、其の出處はといふと、毎も新奇な事をして、世間を驚ろかす、例の亞米利加から起つたのでムいます。

さて睡眠法を敎ふる學校の始めて設立されましたのは、同國の「ニユーゼルシー」といふ處で、此頃では他にも同種類の學校が出來て居るそうです、この學校の生徒は、婦人ばかりに限られて居て、

△其△の△目△的

は、完全な生理的休息によりて、女の容貌を改良し、長く美しく色艶を保つといふ點にあるのです。

多數の有名な醫師の研究した結果によれば、婦人が年を逐うて、次第に其の容色を失ふ重なる原因の一つは、睡眠の方法の惡い爲で、例へば睡つた時に、寢像を惡くすれば、目の覺めた時も、睡眠中に於ける筋肉の不自然が、容易に回復されずに殘つて、次第に容色の美を損するといふのであります、嘗て或人が佛國有名の女優に向つて「貴女はどうして、いつまでも、ソンナにお若くて居らつしやるのです、何か秘傳があるのですか」と問ひましたところが、女優は「妾の秘傳は外でもムいません、夜寢る前に決して考へ事をせず、無念無想で、口元には微笑を浮べ、極々安らかな位置に眠るので、これが妾の今日まで、若く色艶を保つ事の出來た原因です」と答へたといふ事です、睡眠學校の設立の重なる趣旨の

適例は之れであると思はれるのです。

實際上の經驗によりても、枕の位置が惡いとか、又は窮屈な寢樣をした翌日は、氣分が惡かつたり、頭痛のしたりして、其日一日は不愉快勝なもので厶いますが、之に反して、安らかに、自然の位置に寢て、よく安眠した翌日は、何となく氣分が清々して、筋肉の力が、新に加はつたやうで、愉快を感ずるものであります、ソコで凡ての生活機關の衰耗したのが、夜間睡眠中に補はるゝといふことを考へたなら、何にも知らぬ睡眠の狀態が、身體の色澤を保つ上に於て、如何に大なる影響を與ふるかは、何人でも容易に悟ることが出來るではムいますまいか。

寢て居る間の事は、何にも知らぬのが、當然のやうで、從つて睡眠中は、自分の體で、自分がどうすることも出來ぬものゝやうに、誰でも思つて居りますが、必ずしもさうとのみは限りません、乃で**睡眠中の狀態**を改良させようといふのが、睡眠學校の第一の目的なのであつて、この學校の敎ふるところは、すべて十二の課目から成立つて居るといふことです、そうして此の十二の課目にさへ合格すれば、何人でも安らかな自然の位置に麗はしく睡眠することが出來るのだそうで厶います。

我國の婦人方は、どうであるか、よくは存じませんが、西洋諸國では、男子よりも女子の方が、多く鼾をかくものとしてあります、鼾をかくのは鼻カタルが、大抵その原因であるそうですが、よく注意して鼾をかいて居る婦人の顏を見ますと、頗る面白いものです、頤が落かゝつて、口がバーと開いて、空氣が其の空虛から通つて居るのです、遠慮なく批評しますると、決して格好の善いものではありません、それにまた衛生上にも種々の害が伴ふものだそうです。

そこで睡眠學校では、第一に鼾を矯正する事が、その重なる課目の一つであるのです、しかし鼾はかゝなくても、口を開て寝る婦人は少くありません、起て居る間はいふまでもなく、寝て居る間でも美しく見られたいのが、



すべての婦人方の希望であろうと思ひますが、若し婦人方が御自身の寝顔の寫眞を御覽になることの出來た時には定めて顔を眞赤になされてオヤ々々と自分で自分に愛想が盡るでございませう。

有名な或美術家のいつた言に、女は寝て居る時ほど

美しく見ゆる事はないが、又寢て居る時ほど醜く見ゆる事もないと申してありますのは、如何にも名言であると思ひます、寢顏を見て、

三年の戀も覺果る

といふは善く人の申す言で、婦人方の記臆して置かれたいことゝ存じます、寢顏の如何にも安らかに清くして、恰かも神の宿つてるかと思はるゝやうに美はしいのを見る時には、其方の平生の身嗜みの程も察せられて、床しさを感ずる道理ではございませんか、して見れば身嗜みを最も大事にすべき婦人に取りては、小さい時から睡眠の正しい方法を守るといふは、大切な事であつて、之を敎ふるといふことも又單に嗜みの點から見ても、最も肝要な事であらうと思はれます。

しかしこの鼾をかき、または口を開て寢るといふ習慣ある婦人を矯正するは、頗る困難な事だそうです、それも小さい幼兒の中であると、母親の注意一つで、例へば傍から絕へず口を塞ぐやうにでもすれば、自然と矯め直すことも出來ますが、大人になると、容易に直りません、ソコで大人には機械を用ゐまして、其の機械で鉢卷をさせて、口を開く事の出來ないやうにして、鼻カタルの慢性になつて居るのを直せば、三四ケ月も經つ中には、自然に其の習慣を改むることが出來るさうです。

次に此の學校で敎ふる他の課目の一つは、寢る時に其の

髮毛を如何に取扱つたら好いか

といふ事であるのです、髮毛を堅く結んで寢るのは、丁度手や足を縛つて寢るのと同じことで、毛髮の滋養分吸收を妨げ、甚だしく髮の艶を失ひて、爲に拔けるといふ結果を來し、次第に髮毛が少なくなる患があるのです、日本婦人の西洋婦人に比して、早く髮毛の少なくなるのは、畢竟固く髮毛を結ぶからに相違ありません、殊に西洋婦人と違つて、一度結つ

た髪を四五日持せるのが常となつて居ますから、髪の衛生上からいへば、最も其の方法を過つて居ると思ひます、以上の理によりて、この睡眠學校では、夜寢る時は必らず髪を解くか、左もなくば極めて緩く髪を結ばせる事にしてあるさうです、是れはたゞ毛髪の養生の爲めばかりではなく、髪をつめて括つて寢ると、眠られない事もあるし、また頭痛其他不愉快の原因ともなつて、容色を損する基となるからであります、又た

皺の生ずる事

は或程度までは、夜中の睡眠法一つによつて、防ぐ事の出來るものだそうで、則ち多くの醫師の説も、此の學校の主張も、此點に於て一致して居るのです元來皺の生ずるのは、皮膚の彈力の無くなる爲めで、皮膚を健全に保ち、何時までも筋肉の活力を盛んならしむる事が出來たならば、皺は決して出來ぬ道理です、睡眠中に自然の安静を保ち、肉體と精神の充分なる慰安を得るの道を計るのは、最も必要なことでありますまいか、夜中室を密閉して、空氣の流通せぬ處に、睡眠するは、衛生上に害のあることは、申すまでもありませんが、之が爲に直接に皮膚を害し、その色澤を損することもまた非常なものであるといふことです、この點も睡眠學校では最も注意すると申します。

要するに睡眠中の狀態は、日中起きて居る間よりも身體の組織に重大なる影響を及ぼすものださうで、身體の疲勞も筋肉の消耗も、自然に叶つた安眠を得れば、すぐに取返しの附くものであると同じく、安らかに無念無想の睡眠を取ることが出來れば、日中に顔に刻まれた皺も伸びて舊の通りになり、損じた肌の色澤も取戻すとが出來る筈ではありませんか、のみならず、樂しい觀念をもつて、樂しい顔をして眠れば、覺てからも其通りの機嫌の善い表情が顔に殘るといふのが、この學校の主宰者の主張する説であつて、前に述べた佛蘭西の女優の經驗談と丁度一

致して居ります、何さま此說には一條の眞理があると思はれます。

現今「ニユーゼルシー」の睡眠學校に居る三人の敎師は、いづれも老練な看護婦出身で、敎授法は極々懇篤なものであるさうです、それで此の學校を卒業した貴婦人達は此の學校に向つて、切りに感謝して居るとの事で、蓋し感謝する丈の價値が見へるからなのでせう、月謝は思ふ程高くなく、又自宅敎授の方法も取て居るさうです。

右に述べたところに據て考へますれば、睡眠學校は、單に睡眠によりて、容色の美を得、又は之を保存するに於て必要なるのみならず、身體の營養上及び精神の慰安上に取りても、必要なる修練ではムいますまいか、一寸考へますと、こんな學校に入つて、こんな修業をするのは、少々突飛なやうにも思はれますが、よく〳〵考へて見ますれば、一時胡麻化しの白粉を塗るとか、燕脂をつけるとかいふやうな美貌術とは違つて、根本的の治療をするのでございますから、實の處は皆樣この方法をお用ゐになりましたら如何なものであらうと私しは思ひます、況して身體と精神とに益あることは洵に明白なことでございますから、この方から申しましても決して不利益でないではございませんか、但しわざ〳〵睡眠學校に入るといふのも、大業でムいますし、又た日本では僅かに橫濱に一個處ある位ですから、中々容易に學校で修業することは出來ますまい、ソコで皆樣其積りで睡眠の際充分に御注意なされたら、知らず識らずの間に修業を積むとが出來るだらうと考へます。

當世俤草紙（第三綴）

新山春子

○女作家

私は女でありながら、女のことを兎や角惡く云つたり、罵つたり、誹つたりするのは、一面から云へ

は、自縄自縛するやうで、また如何にも同情のないやうでございますけれど、實に可笑い、妙な、變挺古な、一つの話が、私のお友達の一人にございましたから、それを茲に御披露いたしておきませう。

お友達の名は憚りますから、假りにS子さんといたしておきませう。

S子さんは、今年が丁度二十歳になられ、四つ道具の揃つた細面で、顔色の白い、脊のすらりとした實に宜い御標致でございます。そして、S子さんの父君といふのは、宮内省の高等官で、省内では勿論官界全體を通じても歴々としたもので、肩身も廣ければ、聲望もまた高いお方でございます。

S子さんは、斯様なお方の愛娘でございますから中流社會と……云つたより、むしろ上流の令孃と云つた方が適當なお方でございます。それですから、S子さんの身の周圍は、何時もきらびやかなものでそれに、元來が人品の光がある所へ持つて來て、金簪の光り、金指環の光り、パチン止めの光り、實にちよつと拜觀すると、目眩い位な御容子で被居るのでございます。

それに、一體が、至つて、ハイカラで、流行を逐うて、否、むしろ、流行に先立つてやると云つたやうな、お洒落な、贅澤も贅澤、大贅澤なお方でございますから、頭の頂天から足の爪先まで、何處も彼處も、皆きら／＼としたもので、闇夜にも光るやうな御扮装でございますが、唯光るべき所で光らぬ所は、花瓣のやうな唇を開かるゝ時に現はるゝ、小さく、細かに揃つてゐる綺麗な玉のやうなお齒、それ位なものでございます。

そして、S子さんは、學校でも、非常に能くお出來になりまして。英語も出來れば、數學も出來、また文章も書ければ和歌も詠めると云つたやうな風でまた、その他の、音樂や裁縫など、すべて、女の爲すべきこと何一つ、これが不得手と云ふことなく、頗るつきの才女でございます。

別に是と云ふ御不足のない御身分ではあるし、そ

れに凡ての女藝が御器用で、その上御縹致がお美しいのでございますから、女として、誰一人S子さんの御身分、御縹致、それに御器用なことを羨み望まぬものは無い位でございます。それで、ほのかに承はりまするに、S子さんの所へは、始中終、此所彼所から、絶えず結婚の申込みがあるといふことでございますが、實に不思議もないことで、男子として全く此S子さんのやうな婦人を一生の妻と呼び夫と呼ばれたなら、この上もない幸福の絶頂で、また、近頃の流行語ではないが、男子の所謂理想の妻と云ふものであらうと存じます。

それで、斯く申せば、S子さんは、別に缺點といふものもなく、また不足と云ふべきこともなく、まことに、申分のない、初々しい、おつとりした、見得も張らぬ、優しい、美しい令孃のやうでございますが、實際は左樣ではなく、能く人に指さゝれ、嘲けられることがあるのでございます。

S子さんが、人に指さゝれ、嘲けられると云ふてとは、抑何樣なことでございませう？　これは、他のことでも有りませぬ、S子さんは、人並優れの才女であるだけ、その才が高慢心を強くして、また一面に於いて虛榮心を高めてゐるのでございます。

女子は、一體に男子と比較して虛榮心―見得を張る心が強いと云ふことですが、その女の中でもS子さんなんかは、虛榮の最も強い方で、まるで、虛榮が全身を支配してゐるやうで、虛榮をS子さんの頭腦から引き去れば、殘りは零となるではあるまいかと思はるゝ位なお方でございます。

この頃のことでございました。S子さんは、「女子雜誌」といふ雜誌の懸賞小說の募集に應せられ、「ゆく秋」と云ふ題で廿四五枚のものを書かれましたがうまく選に入つて、而かも第一等に選ばれたのでございました。

並普通な人でありますれば、太く打ち喜んで、早速お友達にも語り、知己にも告げるのであります。又、ずつと普通以上から超然と放け出てゐる人なら

は、默つて、知己に語らずお友達にも告げないでゐるのでありますのに、S子さんは、それ等の二者とは違つて、非常に嬉しくつて嬉しくつて堪らないので、嬉しい〳〵と云ふ、言が自づと口から出さうになつてゐるのを、それを無理に嚙み締め、呑み込んでおいて、故意とらしく其ッンとした鼻ッ先をピンと上の方へ反して、恐ろしく、おすましの態で、高慢虚榮と云つたやうな、忌む可き熟字を其鼻ッ先に見せてゐるのでございます。

私は一日、S子さんの所へ參りまして、いろ〳〵とお話して居りましたが、やがてS子さんは此頃の小說界の消息を話され、やれ碌な閨秀作家がないとか、讀賣の小說が面白くないとか、單行本で小說らしい小說は一つもないとか、何とか彼とかと云つていろ〳〵と文學通なことを喋々と述べ立てられ、それは〳〵恐ろしい鼻呼吸でございました。

で、私はS子さんに對ひまして、早速、女子雜誌の懸賞のことを申しまするとS子さんは、莞爾として

『ナニ、あれは、隨分ひどいものでしたが、まあ、他に宜いのがございませんかつたので、選に入つたのでせう……貴女お讀み下さつて？』

『ハイ、私、新聞の廣告で見ましたので、是非拜見致したいと思つて、早速勉强堂へ買ひに出掛けやうとして居りましたが、そこへ、藤田さんが被入いまして、丁度、雜誌を持つて來られましたから、早速拜見いたしました。まことに、まあ、能くお出來になつて居りました。まあ、あの何とか云ふ孤子の女の子！さう〳〵、壽美子の可哀さうなことッたら、ないんですもの、私、非常に動かされて、引き付られて、思はずほろりとしましたのよ、まつたく、うそでも上手でもございません、貴女の筆に泣かされました。そして、その時、私は斯う思つたんですよ、貴女のお筆の四半分でも立つたなら、書いて見たいと思ふことが澤山あるのですよ、本當に何うしたら、貴女のやうに書け

ますかしら、…………。』

『ナニ、そんなに、宜いものでは決してありませぬ。至つて散漫なもので、女らしい緻密なところが些ともなく、むしろ男の作のやうで………』

『いゝえ、どうして〳〵なか〳〵甘く書きこなしてありました、その、なんですよ、男のやうな所が却つて宜いですよ、女は兎角女らしくなるものですが、それを男のやうに覇氣があるやうに、お書きなさるのが偉い所だらうと思ひます。反對に男の作者が、婉麗に緻密に



女のやうに書くのも、私はまた偉いのだと思ひます。何にしろ、貴女はお偉いことでございます。そして貴女が一等で、二等三等の方は豫てから少しづゝ、所々の雑誌へ書いてゐる人で、いくらか名を知られてゐる、、、△△女史とか○○女史といふ方なんですもの、いはゞ△△女史も○○女史も貴女の先輩なんですが、それが忽ち後輩の貴女に踏まれたやうなんですから、貴女とお交際ひ申して居りますこの私どもは勿論、藤田さんも誰も彼も、皆嬉しくつて嬉しくつて、また非常な

大勝利でも得たやうにも思つて居ります。實際貴女は天才がおあんなさるのですから、豪氣なものですね、そこへ來ると私なんかはお恥しいもので」

「ナニ、春子さん、そんなに天才なんかと云ふことは爪の垢程もございませぬ、只私なんかは下手の横嗜位なもので、そして、今度一等になつたのも、全くまぐれ中りと云つた樣なもので初心の人が尺的を狙つて居つて、圖らずもお隣の金的を射た樣なものでございます。オホ……」

「いや、決して左樣ではございません、貴女なんかは、全く初めツから金的を狙つてやられたのですそこへ來ると私なんかお恥かしいもので、矢を番へることも出來ないんですからね、」

「春子さん、そんなことがありますものか、貴女などは元來が詩的趣味のお有んなさるのですから、少しお遣りになれば直に書けますよ、 女子雜誌の懸賞位はお茶の子さい〳〵ですわ。」

「いゝえ、どうして、これは矢張天才がなくつては」

「ナニ、天才もゼニアスもあつたものではありません、私なんかに天才でも何んでもありません、只、幾分か趣味があるからやるのです、テストがあるからです、天才とは一葉さんのやうなお方を云ふのです、私なんかは、天才のての字もあつたものではございません。………ナニ、懸賞位は譯はないです、春子さん、今度、貴女も一つ應つてお覽なさいな、屹度、一等……少なくも二等にはなれます。」

「さうですね、やつて見たい、やつて見たいとは、始中終思つて居りますけれど、餘まり不味いので自分ながら呆れてゐるのですから、とても〳〵まだまだ中々出すことは出來ませんし、そして、私は自分といふものを知つて居りますから、氣恥しくつてとても出すなんかと云ふ勇氣はございません。」

「何に其樣なことがありますものか、貴女なんかは、級の中でも作文が御上手な方で、いつも〳〵

甲のお方ですから、懸賞なんかは些とも造作はありやしないです。』

『兎に角、私も、一つ作つて見たいと思ひますから何うか、一度御覧なすつて、お直しなすつて下さいまし。』

と、私は斯う云ひまするど、S子さんはさも〳〵嬉しいやうな、喜ばしいやうな、そして、幾分か高慢なやうなお顔をなさいまして、

『あゝ、よろしいです、何か遣つて御覧なさいな、私が貴女の文章を見て何う斯うすると云ふこととは、餘程僭越な次第でございまするが、それは、まあ、別問題として、只御相談と批評とを申し上げませう、お互に評し合ふ方が双方の爲めに得だらうと思ひます。まあ、とにかく、一つ作つて御覧なさいまし………。』

と、S子さんはにつこりとして、大層おすましなさいました。

私は、少しS子さんを煽て上げました、それも惡いことでございまするが、それにしても、やつと、一ト月や二タ月前から、小説に凝り出して、そして、初めて、女子雜誌の懸賞に應じられたので、まだ、公平に云へば、文界の嬰兒である身分でありながら一度懸賞を取つたからと云つて、早速大の先生となつて、大家ぶるのは、まあ、何と云ふ淺墓なことでせう、これで、女作家が成功しないのではあるまいか、と、私は斯う咄嗟の間に思ひ廻らしたのでございました。

S子さんは全然女作家で身を立てやうといふお方か、如何かは、まだ知りませぬけれど、とにかく一度懸賞を得られた後の氣燄と勢とは恐ろしいものでした。

すると、S子は何と思はれましてか、卓の下から、女子雜誌の第九號を五六冊も引つ張り出されて、

『春子さん、貴孃は、これをお持ちになつて被入いますか。』

と、お尋ねになりましたから、私は有の儘、

「い丶え、藤田さんのを拝見しましたから、別に買ひませんでした。」
と、云ひまするとS子さんは、
「あ丶、さう、では、一冊あげますから、御覧なすつて下さいまし。」
との、ことですから、私は御遠慮なしに、
「あら、さう、ぢや、頂きませう、もう一度ゆつくりと拝見しませう。」
と、女子雑誌を受け取りまするとS子さんは、ますます得々然となさいまして、
「では、春子さん、辻村さんね、あの方も此誌を毎號お取りになりますか。」
「い丶え、辻村さんはお取りなさいませんが、私のを時々借りに被入います。」
「あら、さう、では、失禮ですが、春子さん、これを一冊辻村さんにお上げなすつて下さいまし。」
と、云はれて、又も一冊を私の膝の前へ薦められました。

私は、又、斯う思ひました、雑誌なんかと云ふものは、買はぬものは一冊も買はぬものだが、買ふものは一人でS子さんのやうに幾冊となく買つて、それを一冊づ丶、それ〴〵へ分配する篤志なお方もお有んなさるし、賣る方の側から云へば懸賞なんかと云ふことは、全く宜い政略の一つであると思ひました。

S子さんは口へ出してこそ、何とも云はれぬけれども、非常に得意なもので、御自分の小説の出てゐる雑誌を幾冊もお買ひなすつて、それを、所々方々御自分の知つてゐる人へ殘らず贈られて、御自分の天才を御披露なすつた御様子でございました。

それで、私は最後に、ある意味に於いて、
「大分、この女子雑誌も出るさうですが、なか〳〵改良されて、以前とは餘程宜しうなりましたね。」
と、女子雑誌を褒め立てまするとS子さんは、いよいよ喜悦の色をお顔へ現はされまして、
「ハイ、宜い雑誌になりましたね、これから、だん

だん又賣れるやうになるやうですね。」と、さも〳〵落ち付き拂つた語調で斯う云はれましたが、何となく小說「ゆく秋」が女子雜誌に取つては非常な味方になつたやうに聞きました。（をはり）

清國婦人の現狀

倭翁

△故西鄉從道侯が曾て李鴻章を揶揄ふて、貴國には婦人は居ないと見えますなと、申されましたところが、流石の李爺も啞然として答ふる所を知らなかつたと云ふことであります、實に清國にては商家でも婦人が店頭に坐して物を商ふやうなことはありませぬ、矢張り官吏などの妻女と同じやうに内房に閉籠りて一切他人に會はないのであります、故に妙齡の處女がありまして結婚の希望があつても、之を世間に知らせることが容易でありませぬ、今日までの所にては只僅に存せる機關とも云ふべきは、年々兩三

度、城の内外に御寺の開帳があつて、恰も我が國の緣日のやうであります、此日に限りて婦人に外出を許しますから、老弱男女打群れて參詣するのでありまして、李家の郎と姚家の娘とが茲に端なく相見初めて成婚の緒を捕ふるのであります。

△清國婦人の外出について最も奇觀を呈するは正月です、十五日以後に至れば地方村落の婦女は一般に晴天を見て各所を縱覽するのであります、殊に十五日は女子の正月と稱へ、數多の婦人は盛裝して老幼一同に各官衙、官邸等を見物いたすのである、此日は如何に嚴重なる公局でも皆開放して自由に縱覽を許し、而も縣知事の夫人などは此日充分盛裝して椅子に倚り、見物の婦人より禮拜を受くるのであります、此の日は見物の老婦人は年長者として如何なることも自由勝手と云ふ姿でありますから、中には自分の身體に異狀ある時の治療法として、貴婦人の身體を摩し、其手にて自分の身體中必要なる部分を撫で、又其貴婦人の小脚なるを見て娘の脚もこれにあ

やからしむる爲め、其脚を摩するものもあります、官民上下の懸隔が甚しいに係らず、此日は除外例として斯る催しが實行せらるゝのであります。

△婚姻成立の順序は、その媒妁人あつて双方の間を周旋し、結納を取り換はす等のことは、大抵我が國の婚禮と大なる相違がないやうでありますが、さて彌々輿入の當日となると、早朝から爆竹、烟火を打揚げて先づ景氣を添へ、午前十一時と云ふ頃に花嫁は美麗なる轎子に乘り、その前後に數多の花旗を押立て、又左右より皷や笛の音樂合奏して囃立てつゝ花婿の宅へ繰込で參ります、そのさまは恰も祭禮の花車のやうであります、次でこの花嫁の轎子が婚禮の式場間近く進み來ると、やがて花婿は出でゝ先づ轎子に向つて敬禮を行ひ、轎子の戸を破りて花嫁の手を取り定めの席へ伴ひて、共に三拜九拜の禮を致すのであります、これは祖先に對して又天地に對しての敬禮であります、此の儀式が濟めば花嫁花婿は相共に洞房に還り、此に始めて媒妁人に依て三々九度の杯をいたし、目出度新夫婦の契をなすのであります、花嫁は此時まで面上に赤布を垂れて、他人は勿論花婿にもその顔を見せませぬ、さて此式が無事に卒りますと、新夫婦は式場に出來つて、その父母、兄弟、姉妹、親戚、緣者、知人に向つて、花嫁花婿相並で最敬禮を行ふのであります、彼是れする内に午後六時頃になりますから、此に於て兼て別室に設けある、宴席へ來賓一同を案內して饗應いたすのであります、斯くて此祝宴が目出度おひらきになりますと、來賓一同は洞房へ押掛けて自由勝手に花嫁の美醜を品評するのです、此時は先きに顔を覆ひたりし赤布は最早や撤去してありますから、酩酊せる客達は故らに燭を執り花嫁の顔近く接近して、或は手脚を摩し、或は面上を撫でなどして、殆ど見るに堪へざる滑稽痴態を演じて、花嫁を批評するのであります、此時もし花嫁が眼を開けるとか、或は失笑するとか云ふことがあれば、婦人一生の大耻辱、大瑕瑾となるのでありますから、花嫁はたゞ手を垂れ

眼を閉ぢて、靜に侍婢の爲すまゝになつて居るのだと云ふことであります、さて來賓をして何故かくまで暴狀を逞しうせしむるかと申すに、花嫁をして一度受けたる斯る苦痛を十分記臆せしめて、婦人は二度と結婚するものに非ずと云ふことを知らしむるのださうであります、如何にも珍らしき慣例であります、斯くて三日間は誰も新嫁を自由に見ることが出來ますが、三日過ぐれば新婦は奥深く内房に住居して何人も容易にその姿を見ることが出來ないのであります。

△淸國の風俗として、成人獨立の身分となつても矢張り父子兄弟共に幾夫婦となく一家に同棲して居ります、されば一夫婦が一室を有せるは勿論、姉妹兄弟も亦各自一個の別室を有し、器具衣匣なども各自保管するやうになつて居ります、古來家門の榮へたものは一家に　百幾十人の家族を有せる大家もありますが、此れは皆々一家内に同居せるにあらずして同じ邸内にて暮し居るので、乃ち邸内に幾棟となく住居は建られてあつて、只だ同一の門戸より出入すると云ふ意味であります、故に夫婦は成るべく一戸生活の出來る處に住まはせ、舅姑は一々之に干渉するやうなことも少うございます、最も貧富によりて別戸を搆へがたきものは、その家内一同が寄合ふのは食卓に付く時と、來客を接待する時と、其他祭日祝日位であります、故に新婦が舅姑に對する勤め方も、我が國と異りて奉仕し安き所もあるやうに思はれます。

△家庭にては老人が一番尊いのであります、取別け老婦人は最も尊敬せらるゝのであります、故に花嫁などは常に年長者の差圖通り、何事に依らず唯々として服從し、決して其理否を問ひ、又爭ふやうなことはありませぬ、女子の母親に奉仕するさまは我が邦の婦人の想像し難きところで、母親の命とあらば如何なる難事にても夢逆ふことなくこれに從ひ、又何事にても常に遠慮して母親に請求すべきことなければ、勿論我國女子の母親にねだりて困らせるやうな

ことはありませぬ、飲食、衣服、其他總てのもの先づ母親へ進め、その母親へ充分供給したる後に非ざれば、家族は決して私用することはござりませぬ、而して老人を大切にすることは自家の老人のみにあらずして、見ず識らずの路頭人にても必ず道を讓る美風があります。

△女尊男卑と云へば或は穩當でないかも知れませぬが、實際清國では全くその事實があります、即ち老年に及んでは男性より女性が比較的大なる權勢を有して居ります、例へば小兒が惡戲を致して居る場合でも、老翁が叱責いたしますよりは、老媼が訓誡をいたす方が遙か効力があるのでござります、時に依ては一家の老婢が令息なり令孃なりを遠慮なく叱責して、その命に服從せしむることも珍らしくはありませぬ、これと申すも、縱令はしたなき召使風情にても、老人の言葉は輕蔑すべからずと、常に父兄も默許して居るからであります。

△婦人の城璧とも云ふべき内房の體裁は如何と云ふに、その室内は多少の裝飾は施されてあれど、華美と云ふ程でもなきに塵埃は常に四隅に堆積し、日用器具の類は悉く膩垢がしみ付き、床板は煙草の吹殼を吹き散らし、痰唾を吐き汚し、乳兒に放尿させて一向平氣で不淨とも思はず、日常油質の食物を用ゐて居るから器具も衣服も共に油垢にまみれ、剩へ室内直接日光を受くることを厭ひて常に窓を閉ぢて置くから、濕氣は床板を通ほし、陰欝の氣は充滿し、臭氣紛々鼻を衝て來る、寢臺の設けあれども、臥すに寢衣を着換ふることもなければ、又夜具を日光に曝すこともありませぬ、南京蟲は内房に於て常に孵化せられつゝあり、不衞生とも不攝生とも例へやうなきは内房の光景であります。

△清國では不潔と云へば、總て不潔ならざるはなき有樣で、彼れ是れ云ふのは愚の極でありますが、清人の常食が豚の如きしつこき油質の多量なるを好みますから、卓子と云ひ、食器といひ、何にも彼も油塵まみれとなるも清拭せうともせず、よし偶拭巾

を用ゆることあるとしても、却て不淨を増す計りであります、飲料水は明礬を用ひて清澄すれども、水面には例の油がギラ〳〵と浮遊して居ります、厨房即ち臺所の不規律なること、不整頓なること、不淨なることは、言語同斷にて、我が國にても一度清人に借宅された家屋は、その不潔に驚きて誰も住居人がありませぬ、我が國に留學せる清國女學生の如きも化粧は甚だ巧みにして外部に現はるゝ處は如何にも麗はしいが、入浴は一般に厭ふ風であります、清人の入浴は夏時に於て多少試むることがありますけれども、冬季は一切廢しまして、只僅に顔及び手を洗ふのみであります、入浴と申しても殊に婦人は小脚纏足の爲に全身浴を快く取ることは能はず、常に脚部を外に置きて盥浴を用ゐる計りである、且つ足部の纏布は汚垢に染りて如何に不潔なるも取換へることをなさゞれば、入浴とても我國の如くすが〳〵する如き愉快を感ずることとなし、獨り最も可笑しきは我日本人を指して不潔なりと笑へることなり、それは他にあらず清人は入浴の際には二個の手拭を用ゐることにて、一筋は面部、胸部を拭ふに用ゐ、他は下體部及び足部を洗ふので、斯く區別して使ふのですから、我邦人が一個の手拭を以て總べてに使用するので不潔なりと笑ふのであります。

△清國婦人の日課は、毎日午前二時に臥して十一時前後に起き出で、午後二時と七時との二回食卓に着くのであります、此外午前八時前後に粥を食して再び寢に就き、十一時に及んで全く臥床を離れ、口漱ぎ、面洗ひ、お化粧するのであります、化粧は彼國婦人の特色であつて、多量の白粉及び臙脂を塗り立て、又掌にも紅粉を施すこともあります、斯く入念に厚化粧するのですから、素顔と粧顔とは全く別人のやうで、如何なる火急の際にもこの化粧を廢することはありませぬ、この化粧が濟めば後は自分用と小兒用との靴を製作するのであります、原料は木綿又は絹布を用ゐ、之に美しく刺繍を施すのでありますが、清國婦人唯一の手藝であります、休息時

間には阿片を喫するものもありますが、多くは水煙を用ゐて居ります、水煙とは水煙臺と申して白銅製の煙管があつて、煙草の烟が一旦この煙管中に裝置しある水中を通過し多量の脂質を溶解し去つて、煙を緩和するやうに作られたものであります。

△清國にても家庭の主人公は矢張り婦人であります衣服、飲食、婢僕などの家事に屬することは、主婦が整理することに成つて居りますから、男子は一切干渉いたしませぬ、諸事主婦の一量見にて始末を付けて行くのであります、さて飲食と申しても中等以上の家には別に料理人が雇つてあるから、唯だその献立を申付くればそれでよろしいので、さなくも大抵の家には二三人の下婢を召使ふて居るから、主婦が態々自ら煮炊に手を下すことはありませぬ、偶々親類或は心安き朋友の來訪ある時は、客中の婦人にその料理の一部を負擔せしめて樂しむこともあります、併し貧賤者はさうは參りませぬ、依て婦人自らが常に炊事の勞を掌らねばなりませぬ、併しながら清國にては衣服の裁縫は總べて男子の職業でありますから、貧富の別なく決して婦人の關係することはありませぬ。

△列女傳に依ると、婦人子を妊む、寢ぬるに側せず座するに邊せず、立つに蹕せず、邪味を食はず、割め正しからざれば食はず、席正しからざれば座せず、目に邪色を見ず、耳に淫聲を聞かず云々と、八釜敷注意されてありますが、これは昔のことで今日の清人は一向お搆ひなく、懷妊して五月に達しても尚ほ纐帶を結ぶと云ふこともありませぬ、只食物は妊娠中生薑、芥子、番椒などの興奮質を含めるものを忌み、又油質のものを嫌ひて鯉鮒などを用ゐます、さて臨產には通常二人の產婆が、產婦の前後を擁するが例であります、その生兒には出生後一種の甘味藥苦味藥、甘草、黄連等の煎じ汁を飲ませます、誕生三日目に出產祝をなし、名附は別に日限を付せず、勝手に日を撰びまして、普通祖先の名に因みて一箇の名を附け、更に父兄によつて一個の名を附けます

この父兄の命名が通稱であります、さて小兒の出產については此外別に我國の宮詣、又は節句等の祝儀に類することは一切ありませぬが、たゞ誕生日の祝賀を最も鄭重にいたしまして、よし幾十人の家族の集りたる家庭にても、各自の誕生日には必ず相應の儀式を行ひ、客を招き祝宴を開き決して等閑に附し去ることはありませぬ。

△男女七歲にして席を同うせずとは、彼の國の敎へでありますが、實際は十歲前後までは男女入混りて遊ばせて居りますが併し我が國の如く隣り近所へ遊びあるくと云ふこともなければ、又友達を誘うて來て共に遊ぶと云ふこともありませぬ、一家內の少幼者が春先の暖い日に日向に蓆を展べて土人形などを造りて遊ぶ位であつて玩具の如きは皆無と謂てよろしい、十歲にもなると女子は既に例の纏足を厲行せらるゝから、復戶外へ出て遊ぶこともなくなります、由來纏足は清國婦人の積弊にして、婦人の美醜を論ずるに脚を第一とし若し纖小ならば直に美人とするのであります、故に上流の婦人になると二人の下婢に倚靠れ辛うじて室內を步行する位であります其不便不自由は想像の外であります。

△女子の敎育は敎師を自宅へ聘して敎を受くるのでありますが、それも多くは自修にして直接男敎師より授かるにはあらず、一旦家人が習ひたる上にて、更に家人より傳へらるゝ順序なるがゆえに、若しこれを普及せしむるに至つても、多大の障碍がござります、その敎科書の重なるものと云へば、先づ女兒經、女四書、女小兒話、孝經、四書、烈女傳、古文詩賦等で、又習字をさせますが、その習熟する所は多く小階に止まる素より我國の如き實用的敎育ではありませぬ。

△清國婦人の裝飾は、頭髮には眞珠、珊瑚、翡翠等幾多の寶玉、金銀製の指物を飾り、又指環や腕環の華美なるを好み、首には念珠樣の首環を掛くるのであります、その禮服は男子の大禮服と殆んど同じ樣なるを用ゐ、胸部、背部には方形で龍を描きたる刺

繡紋章を着け、衣服の縁を盡く白色の獸毛を以て飾縫をしてあります、もと粧粉に妙を得たる婦人にして厚化粧をなし、斯る禮服を纏ひ、髮飾を施し、首環、腕飾をなして盛裝を凝らせしさまは、眞に言ふべからざる雅致がござりまして、此處に至ると我國の白襟紋付は甚だみすぼらしくて比較になりませぬ勢ひ十二單衣を持出さゞるを得なくなります。

△中下等の婦人は時を定めずして隨意外出することは出來ないでもありませぬが、上流の婦人は、端午仲秋、正月の三大節に定期の親戚訪問の外、吉凶によつて往賀し往弔する位で他に外出する期は一生ありませぬ、外出するには縱令隣家へ行くにも轎子を用ゐ、出入毎に爆竹、烟花を打揚げ、中門にて下乘し、侍婢をして所要品、即ち水煙臺、化粧道具の類を捧げて扈從せしむるのであります、相互談話の間に喫烟するにも自ら手を下さず侍婢をして煙草の周旋をさせますが、これは其品格を保つ法であるさうです、主客坐を進め、又茶菓などを呈する場合の如きは、その應對の言語、身體の動作、鄭重謹嚴なるを貴ぶのであります、清國女禮式とも云ふべき要點は此處に存するのであります。

△清國婦人の娛樂これ内房に蟄居して四六時中たゞ談笑の外これぞと云ふべき樂しみを有せず、中に詩を賦し、琴、笛等の樂器を弄ぶものも無いではありませぬが、是れ又極めて少數にして寧ろ皆無と云ふて能しい、實に氣の毒なる程無趣味なる境遇であります、只僅に正月の節が來ると、一家の婦人が打寄りて錢を賭け博奕をうち以て最上の遊びとして居ります、賭博の器具は色々ありますが、我が花札の如きものが廣く行はれて居る想であります又室外の遊びと云はゞ唯だ演劇を觀る事のみであります。

△清國婦人にして一度疾病に罹るときは、醫藥を得るの道なきを以て、神佛を念じ、偶像を拜し、卜筮呪咀などして、偏に平癒を祈る、故にその天壽を全うせざるものも少なからずと思はれます、偶々文明國の醫師の治療を受けらるべき便宜ありとしても、

婦人は絶體的に男醫師の診察を厭ふゆゑに適藥を服する事が出來ませぬ、畢竟男女の別隔を極端まで嚴守させた積弊に外ならず、清國婦人の不幸此上やあるべき實に憐れむべき現象と云はねばなりませぬ。

俘虜の妻

目を遮るは、殺伐の光景耳に轟くは砲駁の響のみ、一として愛の光に接せざる慘憺たる陣中に、夫妻相携へて果敢き愛を辿るは、露國兵士の風習とやいはむ、茲に露國ワルソウ市より程遠からぬ、ルヴリンと呼ぶ田舍町の商人の悴にて、ミヘリーベルグルマ(二十四)と呼ぶものありて此度の戰役に徴せられ、旅順要塞の守備兵となり、ハーナベルグルマ(二十八)と呼ぶ妻と共に、旅順に棲ひしも、本年正月空しく陷落の怨に逢し上、捕虜として我軍に收容され、名古屋の收容所にて淋しき日を送り居れるが、其折しも死せば諸共三途川にて待合んと盟ひし言葉も、一時の空言に、恰も生木を裂かれし如く、いとほしの妻ハーナベルグルマは、芝罘領事に引取られ、共に見知らぬ山川に相戀の恨つきやらず、約六ヶ月を過せしが、ハーナベルグルマは、遂に日本に來りて、ミヘリーに面を合せ、夫婦同棲の願を提出せしかども、下士の身には許されず、再三再四の嘆願も空しく恨を增すのみなれば、自分捕虜情報局に出頭して、懇に願出でんとて、此度上京し目下其筋の沙汰を待ち居れり、今渠を訪問して聞き得し談話を掲げむ。

▲夢の如き三年間　二人の中には、今年三年八ヶ月のイーグルマといふ愛の片身あり、イーグルマは歡樂の中心となり、何時も一家は興樂のさゝめき絶えざりしが、風雨一陣此樂境を吹きて、軍籍に在るミヘリーは日露戰爭の噂と共に、旅順に派出され、其兵器工廠の機械部員を奉職する事となりしかば、止むなく家財を疊みて、愛子イーグルマを實兄に托し

出發せり、斯くて旅順に到着せし後は、業務山の如く眼前に襲ひ來りて、寸暇もなき有樣なるも、ハーナベルゲルマの愛益々濃く、ミヘリーは此の温き慰藉に、何事もなく歳月を送り居しが、終に日本軍に占領され、夫は日本に俘虜となり、妻は非戰鬪員として芝罘領事に引渡さるゝ事となれり。

▲山の如き信書　千山萬水を隔てし異域に、歳月を過すも、軒端にかゝる月の光も、胸に絶えぬ相思の情も、等しく同じかなしき身なれば、日毎に文通絶えもせず、此方ミヘリーは名古屋の風光頗るすぐれ、露軍に在りては又と受け得ぬ、日本帝國の歡待の逐一を報ずれば、ハーナは安心の胸を撫でゝ其傍に侍りたしとの涙文字、三日にあげず送りつ受けつ、手にせし文は積んで山の如く、戀々の情益々募るばかりなり。

▲なつかしき日本　ハーナに執りては、我日本は恐ろしき敵國なるも、何はさて最愛の夫が居住せる所とて、寧ろ本國ロシヤよりもなつかしき地たらん、さる程にミヘリーは見る目も羨望に堪えぬ將校等の同棲を見るにつけ、一入ハーナ戀しく、手紙に心中を言ひやりて、來朝の事を促しければ、ハーナは旅裝を整へ、波を嚙む滊船の速き廻轉も、急ぐ心にまどろしく感じつゝ、先づ神戸の土を踏みぬ。

▲情の日本　ハーナは去月上旬を以て來朝せしかど元より我人情を知らねば、其途中不安に胸を傷めしは女心にさもあるべし、されど豫想と違ひし我國人の歡待に、渠は喜悦の涙を催し、情の人たる日本人の温愛に感佩し、神戸ホテルに滯在すること十九日間、去月上旬名古屋に着し、腕車を驅て收容所の門を叩き、在芝罘水野領事よりのミヘリーの妻なる證明書を係員に示して、面會を求めしに、折柄入浴中なりし、ミヘリーは襯衣一枚のまゝ馳け來りて、涙と共に無事の會合を喜べり、其後ハーナは名古屋ホテルに投宿し、日として收容所に來り、ミヘリーに面會を求めざる事なく、逢ふにつけ語るにつけて、同棲の願望愈々堅くなり、出願すること再々なりし

も、未だ許可に接せねば、玆にハーナは動し得ぬ目的の爲め、躍然として上京するに至れり。

▲家賃の廉價に驚く　かくてハーナは、上京して懇願すれば、情に厚き日本人は、必ず聽許せられんとて、收容所に近き二階建の一家を二圓五十錢の約定にて借家せしが、其間數は二階一室、下二室の臺所つきなれば、渠は其安價に驚きしと、渠は如何なる障害あるも目的を貫通して、夫ミヘリーと同棲せんとて、近藤さとと呼ぶ下女を傭ひ入れ、留守を托して上京し、築地メトロポールホテルに投宿せしも、目下滯在せるセントラルホテルの主婦は、佛國人なるの因みによりて、間もなく轉宿する事となれり、又同宿せる米國人クーパー氏は同情に堪へず、ハーナとミヘリーと別々に願書を提出するが可からんと過る日其手續を踏み、目今陸軍省にて協議中の返答を持ち居れり。

▲忽ち日本贔負　ハーナは、忽ちにして日本好となり、請願の結果、同棲の許可を得ば、相共に平和の日を待ちて日本に歸化し、ミヘリーは日本の機械工場に職を求め、自は內職をなしつゝ久しく日本に滯在せんと言ひ、訪問せる記者に快よく、語を交て只管許可のあらん事を、一日千秋の想をなして待ち居れり。（報知新聞）

觀月

並木青雲

▲仲秋の明月

梧桐の葉落ち初めてより、早や旣に一月を經たれば、秋も中ほどとはなれり、空の色は次第にうつり來て、その靑みも深くなりたるを覺え、晴れ渡りては、宛も藍を塗りたるかとも見え、瑠璃盆にて蔽はれたるにも似たるを思はるゝに、月も冴えに冴えていと淸らかに、實に明月といふの理由あるべく見ゆるが、此空合に懸ることなれば、之を觀るものは、自ら心も淸らかになり、得も言はれぬ心地すべし、其景色

のよさは、いふ迄もなく拙き筆には、書き現はすべくもあらず、されば古より此中秋の月をば、明月といひ又名月ともいひて、年中第一の月として、月々に月見ぬ月はなけれども、月見る月は此月の月ともいひ、三日月の頃より指折り數へて、待ちに待ちし月ともいひて、今は太陽曆の事なれば、年々多少の相違はあるも、此月を滿月といひ、太陰曆にては、此仲秋の月は八月十五夜の事なれば、之を三五の明月といひ、此夜を三五の良宵などともいひたり。

▲朝廷の御宴

觀月の宴は支那にては、古くより行はれて、中々盛なることとなるが、我朝廷に於かせられても、古より月見の御宴といふを開かせられ、固より深き雲井の上に於かせられての事なれば、卑しきものには、其儀式の詳しき事は、窺ひ得べくもあらざれど、御所内の御池に臨める御殿、或は御池の邊なる御亭御苑などにて、其時の公卿や文人をば召させられて、詩を賦し、歌を咏せしめられ、博士には其序文をも作らしめたまひて、御遊興あらせらるゝと共に、文學の御奬勵ともいふべき、いと芽出度御催しあり、上代に於ける文學の盛なる頃よりして、殆んど代々年年の御例ともなり、此時に於ける御製を始として、御宴に侍れる公卿や文人などの詩も歌も文章も、今に殘れるさへありて、之を見るを得ると共に、是等によりて、御宴の御摸樣も少しは窺ひ奉らるゝものもあり、何れも昭代の盛事として、下々の仰ぎ羨むべきものなるのみならず、後の世の摸範ともなれるものなり。

▲月見の場所

我東京にて月見といへば、先づ宜しき場所を選みて、此に集まり見るを常とせり、芝浦や、高輪や、品川の海邊より、月島、洲崎も海岸としての見處なるべく、隅田川も、多摩川も、中川邊も亦河岸としての場所なるべく、上野公園の坂上、芝公園の圓山、さ

ては愛宕山や、湯島臺や、目白臺などは何れも高臺としての人出多かるべし、斯る場所にての各酒樓にて月に當れるは、何處も人の滿たざるなく、又常の人の住居にても、見晴しの好き家は、親戚に朋友に集まり來るも多く、又斯る場所ならずとするも、樓上はいふも更なり、月は何處とて見るを得ざるの場所もなく、見られざるの理由もなきものなれば、賤が小屋にも月を見るものは、窓の戸、裏口の間よりも眺め愛するものあるべきか、

▲月見の模樣

月見の客は、いまだ日の西山に春づかざるに、南より北より何處ともなく、或は車にて、或は杖を曳きつゝ、早や黄昏にも近づきては、群集ともいふべきほどとなり、是等の客を目當に、湯茶、氷水より菓子、團子など商へる露店も出さるべく、兎角する中に涼しき風もそよ〳〵と吹き來るかと思はるゝ折しも、東の山の上は何となく明く見るに、いまだ光なきも、赤き月の顏の端を現はし、人々ソレ月がと喜び呼べるの聲、さては拍手さへ交りて、海の濱、川の岸高臺の上には、時ならぬ喊の聲とも聞かれ、一分一分、一寸一寸と上り來る樣、言はん方なく興ありて、遂に全く上りては、其大さの見事なるは、是又一しほの見榮えあり、其れより次第に上るに隨ひて、其大さも色もうつりて、最早二三尺も山を離るるかと覺ゆるに至りては、忽ち清光を放ち來りて、星は影を匿し、一天月の外、何物もなきかと疑はれ、俄に一坐を照すの光は、晝にもまがふべき心地せられ、その水に映れるの樣は、銀の波を流すかとも、金の龍の跳れるかともいぶかられ、軒より入れるの光は、己が影に人の來れるかと驚かれ、盃の中に月の入れるかと恠しめるもあるべきか、其高樓に欄干に倚るの令孃もあり、輕舟に舷を敲くの少年もあり、彼處此處と杖を曳きつゝ徘徊ひて、月をも觀又人をも見るの客もありて、何れも夜の闇くるをも知らざるべく、終夜物思ひ顏に飲みあかす、酒狂もあるべ

く、團子に腹皷うつて頻りに何か口吟むもあるべく、或は寢具に入りて又或は戸を閉ぢてまた押し開け、出づるなど、眺め惜しくて、離れかぬる物好もありて、鷄の聲にも氣の附かざるもをかし、序に言はんに、古はなべて黄昏より月に供ふるとて、秋草の生けたると、團子と芋と枝豆とを飾り、神酒をもならべて、又此等の品を相互に贈りもし、月見の宴の馳走ともなせり、今も古を慕へる家には、殘れるか。

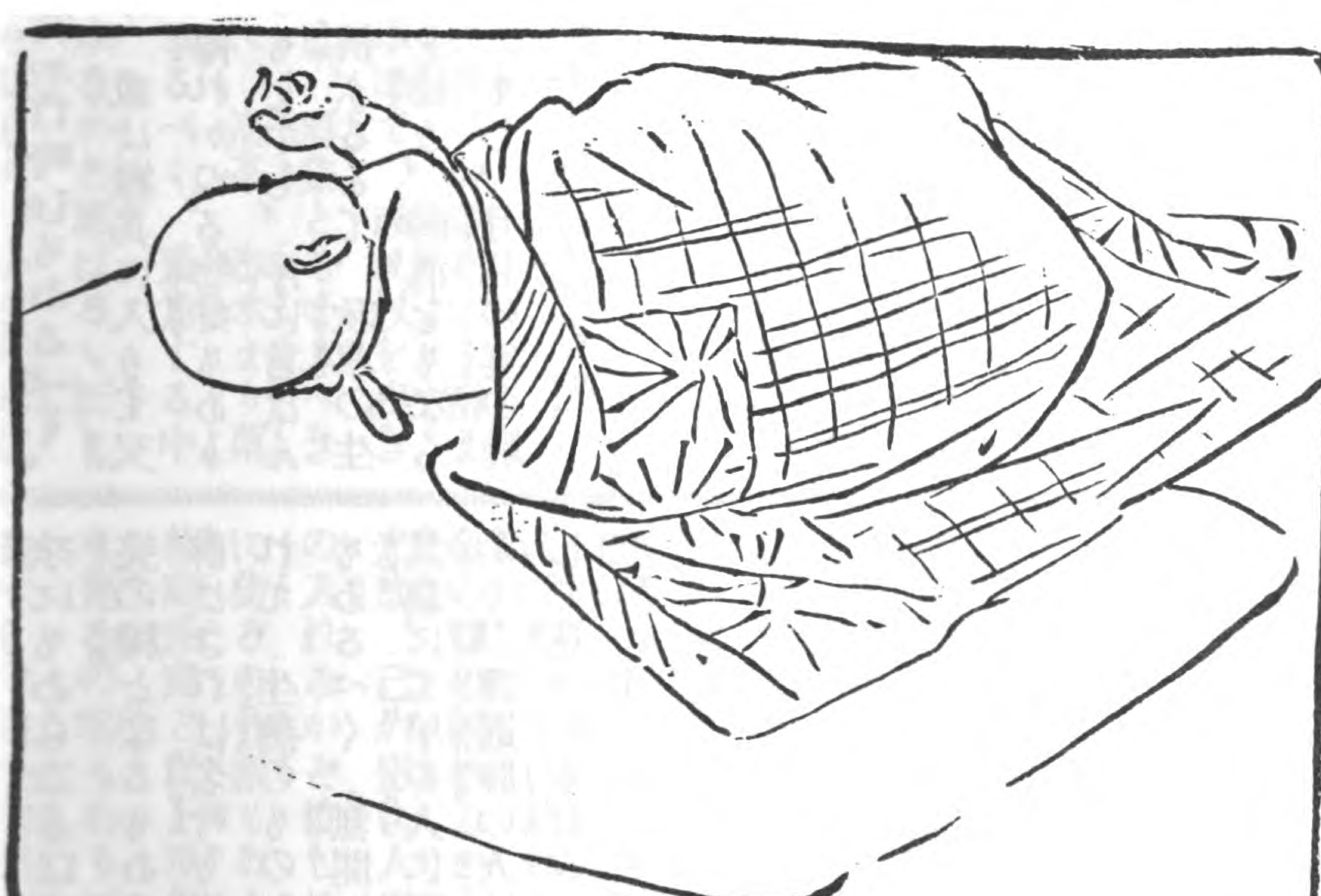
▲月見の遊事

古より月見の遊といへば、詩や歌や、笛や絃やと數へられて、前にも云へる上に倣へる下々の事とて、今宵は或は詩、或は歌、又は俳句など思ひ思ひに、己が嗜める道に、人には劣らぬ秀吟や名句をと競ひ、中には古人にも恥ぢざるものをとまで、所謂錦の心、繡の腸をも絞るもあるべく、酒好まぬものは、杯の廻るを憂ひつゝ、早や醉の爲めに苦しめられて、あたら趣考を仕上げ得ざるもあるべく、さのみの出來にもあらざるに、自慢顔に人に示して、後の日の笑の種となるもあるべく、飲むことを嗜めるものは、醉はざれば名吟も出でずなど云ひつゝ、遂に人に後れて、生熟のものをも促されての醉と共に赤面するもあるべく、無闇につまらぬ文字の行列を出して、其塲にて早や人に厭嫌るゝもあるべく、物事愼みぶかく、謙遜勝の人は、一座には恥しからざるも、辭して見せぬもあるべし、又酒宴の間に琴や絃の歌と音とを聞くもあり、笛や尺八まで合せ奏するもありて、令孃の常の稽古の上達をば、母君が人に聞かせたきもあり、少年の何時に學び得たるか、笛の音も聞くべきほどになりたるを誇れるもあるべし、いまだ聞き苦しきも主人への世辭に、只管賞むるもあれば、稽古の容易ならざるを想ひて、眞に感歎して措かざるもあり、是等は打寄りての月見なるが、又獨窓に倚りて口吟むも、筆を採りて思に沈めるも、相手ほしさに杯を手にせるもの、聞き人もなきに尺八を弄ぶもの、風雅の客も、俗に慣るゝ人も、上下貴

賤の差別もなく、賤が家とて、雅人のなかるべき理由なければ、人皆今宵には、月を招くと云はんか、月にして若し意あらんには、之が應接に堪えざるなるべし

▲月の名稱

月の和名又は異稱ともいふべきもの多し、月讀といひ、月夜見とも、月よみ男ともいふ、是れは伊弉諾尊、伊弉冊尊の御子の中にて、天照太神は日の神として女神なるが、月讀命を月の神とせられて男神なることは、我國の歴史にある事にて、之より月を月讀といひ、



月夜見とも書き直し、月よみ男ともいふなり、又桂男ともいふは、昔呉剛といへる仙人が、過ありて月に謫され樹を斫らしめられたるが、月の中に高さ五百丈もある桂の樹ありて、之を斫るに、隨つて斫れば隨つて合ひ斫り終ること能はずして大に苦めりと、之より支那にても桂月といひ、我邦の歌などにも月の桂などといへり、又日の中には烏あり、月の中には兎ありといひて、烏兎といへば、日と月との事となり、之より支那にては月を金兎、銀兎、玄兎、玉兎などいひ、我邦にて

は「たまうさぎ」とも、月のうさぎともいへり、又月を鏡にたとへて、金鏡、銀鏡、圓鏡、寳鏡、寒鏡、皎鏡、玉鏡、瓊鏡、瑤鏡、明鏡などいひ、歌にも月の鏡などよめり、又月に蟾蛙ありといへるより、銀蟾、玉蟾、月の蟾ともいひ、詩人は尙種々の形容を凝らして、玉盤玲瓏と吟じ、氷輪皎潔と賦し、金靑冷艶と品するもあれば、銀環嬋娟と許するもあり又羿といへる人の妻に嫦娥といへるがありて、不死の藥を西王母より竊み、月の世界に出奔して、蟾蛙となりたりといふより、月を嫦娥といひ、素娥とも、孀娥ともいへり。

▲月夜の名稱

前に云へる明月又名月といへる外、所謂十五夜の月を今日の月、こよひの月、名高き月などいひ、芋を供ふるより芋名の月ともいひ、佛書に眞如の佛性は、常に煩惱につゝまれながら汚れざるを、月の雲や霧につゝまるゝも、その淸きと明かなるとに、何のさはりもなしといふに喩へて、此月を眞如の月ともいへり、中秋の月には限らざるも、滿月をば「もちづき」といひ、此月十六夜の月をいざよひの月といひ、又旣望ともいひ、哉生魄ともいふ、旣望とはもちを過ぎたるよりにて、哉生魄とは月の缺けたる所を魄といふなり、始めて魄を生ずるといふ事なり、又十七夜を立待とも、旣生魄ともいひ、旣生魄とは、哉生魄の翌夜なること、望の翌夜を旣望といふに均しく十八夜を居待といひ十九夜を臥待又寢待といひ、廿日は古來廿日の月と詠めりともいへるが、又更待といふともいへり、何れも漸次月の出の後るゝより、月を待つの長短によりての名なり、又廿三日ともなれば、下弦といひ、下旬の月をおしなべて在明の月といふ、月の空にありながら夜の明くるよりなり、又十六七日頃より廿二日までの月を、降り月とも、もちくだりともいふ、十五日以前に於ては、十四日を待霄とも、又小望月ともいふ、小望月とは、未望月とはならざるも、若し望月の夜の雨又は曇にて、月を見ること能はざる

やも、測られざれば、此日に月を見るといふより、本望月にはあらずとの意なるべく、新月を三日月といひ、之を哉生明ともいふ、哉めて明を生ずるにて、月の魄より明なる所を生ずるをいふ、七八日ともなれば、弦月といひ、又上弦ともいふ、上旬をおしなべて夕月夜といひ、夕方に月ありて早く入り、朝方には月なきよりいひ、之に對して下半月を朝の月とも、朝月夜とも、曉月夜ともいふ朝方に月ありて、夕には月なきによれり、是等は月の詩や、歌や、俳句などせんもの丶心得置くべき事なるべし。

▲中秋無月

空の陰るか晴る丶か、又は雨降るともなきかとは、早くより豫め知り得べき術なく、かの翌日の天氣豫報とて前夜又は其日の朝ならでは、一般の人には知られざれば、月初めより待ちに待ちたる月には、折角の用意もあるべきに、曇勝ちなる空ともならば、雲間には見えざるかと、夜もすがら空を眺むるもあるべきが、終に見えずして止むもあるべく、雨夜にも當らば、晴間とて雲の間さへ得難きに、雅人ならざるも月見んとせる客、その客を待てる諸酒樓より、露店を出さんとせる小商人に至るまで、その失望と落膽とは、如何ばかりぞと斯る時には獨詩や歌や俳句などの道に志あるもののみは、之を仲秋無月と稱して、却つて好題を得たるものとなし、雲の月を妬むものともいひ、嫦娥の怨みを憐みて、天の風をして雲を起さしめたるものとも推し、風や雨を無情なりと罵るもあれば、却つて心置きなく寢られて宜しとすねるもあり、花に嵐に月に雲は往々免れかたきことにて、能く此世の人事に似たりなど、無情をかこつもありて、兎角は秋は悲しくなり易きは是非もなし。

▲後の月

序に後の月といふことを書き添へんに、後の月なる言葉は此陰暦八月十五夜より後の月といふ意にて、

陰暦九月十三夜の月をいへり、是れは延喜年中に宇多院天皇が、今夜の月を明月無双なりとの勅ありて、詩をよくせるものを召させられて、月見の御宴ありたるより始まり、後の世にても詩や歌や俳句などに志せるものは、之に倣ひて風流の遊びを爲せるもの多し、又古より十三夜に曇なしなどいひて、仲秋に月を見そこなひし年には、分けて此催しも多かるべし、空に一點の雲もなく、きら／＼と輝ける玉璧のかゝりて、涼しさも先月より増せる暮の秋に當ることなれば、月の黄昏ならぬより出づるを見るべし、水の底にも璧を沈めたる樣は、趣考も一しほ面白かるべし、月に供ふる品は八月と左のみ相違なきも、最早栗の時節となれるより、八月十五夜の月を芋名の月といひしに倣ひて、此月を栗名の月ともいへり、昭代には兎角奢に流れ易く、酒宴の肴には、別して馳走せんとするものあるより、其時々の品によりて、定まれる例を作りて、此品さへあれば宜しとせる事、古人の是等にまで心を注がれたるを見るべきか。

元祿模樣

錦巷隱史

▲五代將軍▲太平の絶頂▲當時の大奥▲驕奢淫蕩▲財政の困難▲物價騰貴▲愛兒德松君▲怪僧隆光▲殺生禁斷▲狗兒保護▲愛妾連

近頃世上に元祿模樣が流行して一襲幾百圓と云ふ上流の衣裳より一反七八十錢の下等浴衣に迄尨大華美な模樣をつけた物が賣れると云此模樣は果して愛すべき物であらうか、先づ此の模樣を産出した時代は如何なる時代であつたと云ふ事を研究して見やう。元祿は即ち徳川五代の將軍綱吉公諡名常憲院殿の政權を握つた時代の年號であるから此模樣は五代好みとか又は常憲院式とでも云ふべきものであらう、公は三代將軍家光公の三男で最初館林に封せられたが四代將軍家綱公に世嗣がなかつた爲め順養子となつて將軍の職を襲がれたのである、此の時は徳川の天下太平の絶頂に達し國民の富力漸く增加し生活の程度益々進み學問工藝より音樂遊戯の末に至る迄社

會百般の機關大に發達し殆ど前代未聞の有樣であつた、然るに太平の餘弊人心遊惰に流れて上下共に驕奢淫蕩に耽り衣服でも持物でも一切萬事華美贅澤を競ふことになつた、此際社會の嗜好に應じて世に現はれたのが即ち此の元祿模樣で其流行の本源は五代將軍の奧向である。

五代公は德川の代々中に於て最も學問を好まれた君主であるが其素行は至て修らぬ人で俗に所謂論語讀みの論語知らずと云ふ側の人であつた、元來德川家の憲法は東照公以來勤儉を以て其骨子とせられたもので、三代以後稍々崩れては來たが尙其家法は堅く守られてあつた、然るに五代に至つては驕奢淫蕩甚だしく其憲法を全く破壞して仕舞つた、其故に財政は非常の窮乏を告げ之を救濟する爲め勘定奉行荻原重秀の言を聽て慶長以來純潔無垢であつた金銀貨幣の改鑄を行ひ、金には銀銅を雜せ銀には鉛錫をませて盛に惡幣を鑄造したから物貨は忽ち騰貴して細民は一方ならず難澁した、一方民心の叛いた處に又素性の賤しい柳澤吉保を大名に取立て大權柄を授けたから門閥世系を重んずる諸大名は之に不服を鳴らさぬ者はない、若此塲合に彼の由井正雪別府庄左衞門の如き浪人が非望を企て有方の國守大名が其を機會に叛旗を飜したならば德川の天下は五代でメチャ〳〵になつたかも知れない、表面は無事太平の樣でも誠に危險の時代であつた。

又德川家に於て閨門の亂れはじめたのも五代の時である、扨五代が何故に驕奢淫蕩になつたかと云ふに是には悲慘な原因がある、人情に貴賤上下の差別なく子故の暗に迷ふのは常例で五代も最愛の男子德松君が天和三年に五歲で歿し其後更に出生がない、之が爲め精神に異狀を生じ樣々の弊政を行ふ事になつた、ソシテ此動機を挑撥したのは護持院大僧正隆光と云ふ怪僧で、將軍に世嗣のないのは前世に殺生をした報いであるから世嗣を得るには生類を憐むがよい、第一將軍の生年が戌であるから別して狗を大切にせねばならぬと勸めたるに將軍は勿論の事、其母

堂の桂昌院と云ふ殆ど信佛狂と評すべき老婦人始め御臺所鷹司氏、愛妾大典侍左衞門佐小谷の方、抔大奥幾多の女中皆將軍の世嗣なきを嘆いて居る時であるから此説に感服せぬ者は一人もない、此に於て殺生禁斷を天下に布令し又狗兒保護の命を下し、犬の出生ある時は其毛色牝牡を届出しめ、犬役人を設け、犬を疎畧にする者は曲事たるべしとあつて犬を殺した者は死刑に處ぜられた、犬の命と人の命を取替にするとは誠に無法極まる事で常識を具へた者が其非理を知らぬ筈はない、まして五代程の君主が是位の事に氣の付ぬ人ではないが其處が愛子を喪ふた爲め精神に異狀を生じた一種の狂人であるから之を斷行したのである、遂に中野の犬小屋には十萬匹の犬を養ふて犬公方と云ふあだなを得られたのである

扨此時の大奥の有樣は實に言ふに忍びざるものであつた、右に云ふ如く奥女中一般の大希望に唯將軍のお世嗣を產むの一事に止まるのだから、苟も懷姙する方法なれば如何なる奇異陰怪の手段でも之を採用する、其弱點に付け込んだのが彼の怪僧隆光で一切萬事祈禱の力で出來ると云ふから奥向の信仰は一方ならず、隆光の云ふ所は皆悉く行はれ、財政困難の中から護持院と云ふ輪奐壯麗の大伽藍を新築せしめ、將軍家にも度々御成があつたから御臺所も愛妾連中も必ず參詣した事であらう、相手が破戒不如法の賣僧で其祈願する所が懷胎にあつたならば其際に如何なる秘密が行はれたであらうか推量するに難からぬ事で之を説明するに忍びない、又此時奥向から寵愛された僧侶は獨隆光ばかりではなく、左衞門佐は淨嚴に歸依して湯島に三千五百坪の新地を賜ふて靈雲寺を建立し、大典侍は豊藏坊に歸依して淺草に大護院を建立して百石の祿を與へ、小谷の方も圓福寺の覺戒と云ふ歸依僧があつた、將軍は頻りに世嗣をほしがつて數人の妾を抱へ、其上或る諸侯の妻孃に迄戲るゝと云ふ亂行なるに、其愛妾連は亦此事に熱中して僧侶の信仰と佛寺の建立との競爭をすると云ふに至ては實に沙汰の限りで、其內行の如何樣で

あつたかは必ずしも吟味するを要せぬ。當今或る都面に流行する元祿模樣は此の半狂將軍と、何んでも男子を生みたいとモガイた奇異なる女性に依て產出されたものである、其根原を探究すれば隨分淸潔ならぬ模樣と云はねばならぬ、且其模樣にキチガイじみた所のあるは、尤も當然である。

又此の五代の時は芽出度からぬ事が多く、沓干地震等の天變地異頻りに至り、江戸には度々大火がある、又大名の刄傷も此時代が一番多い、延寶八年には內藤和泉守が增上寺御法會の席上で永井信濃守を打果す、貞享元年には若年寄稻葉石見守が殿中に於て御大老堀田筑後守を刺殺す、元祿十四年には淺野內匠頭が殿中に於て吉良上野介を刄傷に及ぶ、一代の內に三度迄箇樣の事があると云ふも珍らしい、此外にも不吉不祥の事が澤山あるが餘り長くなるから止めて置く。

五代公の道樂は數あるが能狂言も其一つで、自分舞ふて諸大名に見物させたり、又諸大名に舞はせて自身見物する、例の華美を好む處から其衣裝は實に善盡し美盡したものである、元祿模樣の多くは此の能衣裝から轉化したものであらう、又御臺所及び左衞門佐と大典侍は京都生れで內裏模樣の絢爛なるコツテリしたのを好まれ、桂昌院母公と小谷の方は江戸兒で寬濶奇拔なザングリしたのを好まれたであらう此の東西の好尙と能模樣との合併した雜種兒もあるだらう、其壯大にして華美なる事は此上あるまじく、太平の武人には最も嗜好されべきものである。扨我征露の軍百戰百勝の結果愈平和になつた曉には通貨一時に暴漲するから人心華奢に流れ非常に贅澤になるであらうとは識者の今より憂慮する所である、此際に元祿模樣を流行させんと企つるは所謂燃ゆる薪に油を注ぎかけんとするもので、隨分危險の手段と謂はねばならない、嘗て普魯西が佛蘭西に打勝て莫大の償金を受取た後民心が非常に驕奢贅澤に傾き淫蕩放逸に流れ、浪費妄用戰爭に勝て經濟に敗れん有樣になつた爲め之が救濟法に就き維廉大帝と俾斯

麥が非常に苦心焦慮した事は近世史を讀む人の皆知る所である、今や我日本國は戰勝の結果將に普魯西たらんとするもので此時に當て贅澤驕奢の流行を煽動する如きは、商業上から云へば機敏であらうが、國家を愛すると云ふ點から見れば甚だ不深切なヤリ方と謂はねばならない、又一般國民も此際は勝て兜の緒を締めろと云ふ古諺を守り、愼て驕奢華美の弊に陷らぬ用心をせねばならぬ、故に元祿模樣の出來た時代の概略を陳述して愛國心に富まるゝ貴婦人令孃方の一讀を請ふのである。

八日の旅（つゞき）

松林歌子

高さ一丈三尺餘の黄銅の涅槃像あり涅槃堂の東に武田信玄、勝賴、信勝、信忠、の四基織田信長信忠の二墳墓ありて武田氏の石塔は天正九年の建立にかゝり織田氏のは瀧川將監の建る所なりと云へり拜觀料一人前五錢なり妙心寺の北門をいでゝ左に行けば兩側に茶園あり向ふに見ゆるは愛宕山左にそびゆるは嵐山なりそれより眞言宗の本山御室御所仁和寺に趣きぬ中門の側に掛茶屋あり右には繁れる楓五もとありて薄紅なり左には八重櫻の數多く花の盛には此處に杖を曳く人いと多しとぞ此櫻花は世に珍らしく根近くより花さきて地上にしたるゝを以て地すり櫻の名ありとなり又紫つゝじ澤山あり右と左につゝじ櫻の色あらそひたらむにはいかに艶なるながめならむ右側には五重の塔あり眞すぐにゆきて金堂に參拜す本尊は阿彌陀佛西壇には寛平法皇の御宸影東壇には性信法親王（中興）の御影を安ずとなり當山は光孝帝の御願により仁和四年八月に創立せられしを以て仁和寺の号あり後舊紫宸殿を當山に賜ひしを移して改築せしものなりとぞ明治貳拾八年迄に貳百六拾貳年を經たり左に鐘樓あり其西祖師堂には弘法大師を安じ京都三弘法の一にして有名なりと云ふ此前坂を下りて觀音堂の前を通り裏門にいづれは老杉欝々として深山の感あり此處より左に上り草木繁茂せる處より田畑の間にいづ衣笠山龍安寺の茸狩に趣く人多し衣笠山の麓等持院に入る開基は夢窓國師にして足利尊氏建立する所なり門を入れば大小の松楓ありて常磐の中に淡紅のまじれるいとも妙なるながめなり拜觀料男女共一人前七錢なり十二三なる童に案内せられまづ休息所にいたれば朝鮮大司馬大將軍金松園の筆になりたる三幅對の掛物かけられたり此處より庭下駄うがちて後に從へば少し左手にあたりて義政公御好みの庭に同じく御好みの茶室と云ふありて清漣亭と号し前なる池を芙蓉池と呼びこれに架したる白檀橋は應仁の亂に山門の燒け落ちたるを渡せるなりと此處を渡りて家に入るに足利氏累代將軍の影像を安置す衣冠持笏の座像なり維新前の擾亂に勤王の浪士幕府の專權を憤り斬て三條橋に梟したるは即ち此像にして今安置するは其後收めて接合したるものなりとぞ明珍の作尊氏の馬具甲の鉢義滿の刀地藏堂の棟札家康四拾二才の肖像尊氏公守佛利運地藏尊狩野山東の筆十六羅漢の畫應仁の亂前のものといふ當山創立伽藍の圖長曾我部元親の蠶鎗「等持院」は義滿の筆山門の額あり別間にて暫時休息するに其十二三なるが自ら薄茶を立て白と赤との徑一寸余なるに庭園の圖を入れたる菓子を出す此等持院の門前につゞれの錦の織元と云ふさゝやかなる門がまへの家あり土産話しにとおとなひて意を通ずれば此方へと案内す僅に八疊位のいとむさくろしき板の間に「機」の五つ六つありて中年増の女三人機にかゝりて從事せる樣「ぬき」を通しては一つ

一つに指の爪を以てなほし四五筋つみては 小さき櫛の齒にて繕ろふ樣の綿密なる 實にかく小さき糸の一筋毎に 手を煩はしたらむには一尺の巾織りいでむはなか〳〵なるべく 其高價なるも實にうべとこそ思ほゆれ此處を出で 官幣大社平野神社に參拜す 祭神は日本武尊仲哀天皇仁德天皇天照皇大神の四座にして外に天穗日命を祀れり境内に名札つけたる數多の櫻樹ありて春花爛熳たる候にいたれば酒舖茶店を花下に設け毎夜篝火をたき市人競ふて此處に遊ぶよしにて平野の夜櫻とて有名なりといふ此處を過ぐれば左は平野撚糸場にてゆく手にそびゆるは大文字山なり西へ行く事八九町にして十一時半衣笠山鹿苑寺通稱金閣寺に着す門内茶店多しまづ社務所にいたり拜觀料一人前拾錢を納むるに參觀の人々集まりてより共に案内すとの事なれば暫時茶店にて待つ此處昔は西園寺公經卿の別莊にして其子孫の傳領する所なりしが足利義滿此地を愛し乞うて退隱の地となし應永四年造營して輪奐の美を極め 世に北山殿と稱せりとぞ 常に參觀の人々絶ゆる間なしと見え暫時にして集まる 七八人十二三才なる童子に案内せられて 庭園に入れば左に鏡湖池と云ふあり 金閣寺は



其湖畔にたてられたる三重の閣にして 鹿苑寺方丈の西にあり 屋根は實形造りにして 棟に鳳凰を安す下層を法水院といひ 又如來堂とも云ふ佛間あり 本尊は阿彌陀佛にして 作者は運慶也又足利義滿の座像あり其西椽の外二間の懸造りは瀬濟と呼びて 義滿の手水所なり 中層を潮音洞といひ天井立繪狩野正信の筆嚴屋觀音は惠心僧都の筆脇立四天王は弘法大師の作なり上層を究竟頂と呼びて其額は後小松天皇の御宸筆なり天井は楠の一枚板と云へど幾つよりも成れり昔は金箔の爲一枚の如く見えしを以てなりといふ四方椽の欄干は擬寶珠にして内外屋根裏天井勾欄共に金を以てぬりたるものなりと今は僅かに金光をみとむるのみ鏡湖池中には夜泊石九山八海石赤松石畠山石等の奇石點在しまた出龜入龜の兩島あり西南には衣笠山をのぞみ水は清く園内老松綠こまやかに薄紅なる楓の點々たる抔雅趣幽邃實に風光の美を一眼にあつめたる豐けさ過ぎし世の榮華を今こゝに自ら參見る心地して 身は仙境にさまよふが如し閣の北に銀河泉と云ふありて義滿御茶の水又巌下水といふは 御手洗の水なり 龍門の瀧といふ瀧の中にある石は 鯉魚石と呼び 鯉の瀧上りをかたどれるなり

とぞ 此より左に上りて虎渓の橋を渡れば 丘上に安民澤と呼ぶ池あり池中一の小島ありてこゝに小さき五重の塔あり よびて白蛇の塔と云ふ 又少し右方に上れば貴人榻の傍なる茶亭を夕佳亭とよび 其床柱は園八寸餘の南天を用ひ 又萩の違ひ棚あり是寛平年中後水尾天皇献茶御遊びの聖席にして金森和尚の好みにいでたる 有名の茶席なり 此前に義満愛玩の不二形手水鉢同石燈籠あり 此處を下りて 花園に出で案内につきて方丈にいたる此間彼の十二三才なる 童が石の名 其他一つ一つにそらんじていと面白く 露のよどみもなく すら／＼と語りつくせるは實に馴れたりとは云へ いと 珍らし方丈にては 年老いたる人の案内にて寶物を拜觀す 蘆雪唐子の屏風二つ一休和尚の筆になりたる掛物土佐光信筆の 古代庚申猿 義満の 冠笏義満愛玩のくづやの釜金閣寺四方の風鈴咸陽宮古瓦其他書畫いと多し 又庭中なる陸船の 松は實に洛中の一大奇觀と云ふべし 一同別間にて薄茶の饗應にあづかり 菓子は等持院にてと同じく金閣寺をゑがきし白と赤との菓子なり 共に筑紫への土産物とす 庭前ワヒスケ椿走馬石布袋石其他 奇石數多し十二時半金閣寺をいで再び平野神社の前にいで 右に折れて 北野天満宮の裏門より本門にいで 晝食の爲其左側なる神樂樓に 入るに直に薄茶を持出づ晝食を終へ 一時四十五分神樂樓をいで 先をいそげば 北野神社は外面より拜せしのみにて 東平安神宮に向ふ 堀川第一の橋を渡て中立賣御門に入見返りの櫻を左に見てゆくこの櫻は其かみ 光格天皇車返しの櫻と呼び年に二度花咲く 由にて折しも 二三輪ほころびたるいと珍らし公卿門前をよぎり 南門を通り寺町御門より 梨木神社を左に高等女學校とその寄宿舎との間なる道を通り 鴨川なる荒神橋を渡るに水はいと少なけれど 清らかに布をさらせる様いと 珍らし織物會社を左に熊野神社大日本武德會本部を 右に見て 二時二十五分上京區岡崎町なる官幣大社平安神宮に參拜す 此宮は桓武天皇をいつき奉る前には疏水運河流れ 吉田黒谷聖護院の森は 後を掩ひ遠くは比叡愛宕の山近くは東山の翠巒したゝるが如く 境内一萬六百餘坪と聞ゆ 拜殿は有名なる紀念殿にして 明治二十六年大極殿に摸擬して 造營したるものなり金銅の鴟尾は 燦爛として かゞやき屋根は碧瓦にして丹朱に柄梁楹柱に相映じたる美はしさは 實に眼もくらまむばかりなり 去る明治廿八年は桓武天皇平安遷都より一千百年に相當せし由にて 市民こゝに一千百年祭を擧行して 御聖德を追慕し合せて一千百年間に發達したる事蹟を表彰し帝國の隆盛を祝せんとて 全國の有志に計り朝野の賛成を得て遂に廿七年一月十三日を以て 平安神宮創立を 出願し同二月十日聞き届けられ 七月二日平安神宮と號し官幣大社に列せらるゝ旨仰せいだされ 金二萬圓を御下賜相成りたりとぞ 又全國有志の寄附金は二十五萬圓に達し内五萬圓を以て 本社の保存金としたりとなり南に第四回内國勸業大博覽會場あり 面積凡そ 八萬坪平安遷都千百年祭に際し開設せられたるなり 琵琶湖疏水運河は 實に我國古今未曾有の大事業にして 時の知事北垣國道氏の計畫起工する 處なり明治十四年の夏始て 水路を實測し 百難を冒して遂に十八年政府の特許を得同年六月起工式を行ひ 廿三年四月竣功式を擧げ 兩陛下の御臨幸を辱うしきとなり 水路幹線は近江國大津三保崎湖岸より 京都市鴨川東岸に至るの 間延長六千百七間餘にして セルフクリングインクラインは日岡より 南禪寺町に至る三百三十間の間に 施され鐵軌四條を布設し 水力電氣を利用して 河舟を諸荷搭載のまゝ山上山下に運送する様は 實に大奇觀にして 京都市無盡の富源は琵琶湖畔より滾々として流れいづると共に 北垣氏の功勞又千代萬代の後までも語りつがるべし右に水力電氣會社山縣公の別莊あり 少し進めば智恩院あり此寺は淨土宗の總本山にして 高倉天皇の御代法然上人の 開かれし處也東山帝元祿十年勅使を參向せしめ 給ひ 法然上人に圓光大師の諡號を賜ひ後靈元帝の寶永八年宗祖五百年忌に勅使をして 東漸大師の 號を加諡し給ひきとぞ 山門は德川秀忠の建立にして 華頂山の勅額は靈元帝の御宸筆なり 現今の本堂集會堂及び 方丈大小庫裏等の建築は德川家光甲府城を築かんが爲 木曾の山中より 採伐したる材木を移し用ひたるものゝ由にて 實に希代の建物なりとて 内外人の嘆賞する所なりといふ 大谷寺の勅額は後奈良帝の宸翰なり 本堂には圓光大師の像を安置

す左甚五郎一生の傑作智恩院の唐傘は本堂棟の右方にありて僅かに端を表はせり本堂の廣さ廿間四面堂前に泰平亭といふ茶亭あり其大釜は德川家康の寄附なりと鐘樓は茶所の東山上にありて巨鐘は重量二萬貫目寬永年間の鑄造にかゝれりとぞ南は圓山に接し山門下には數多の茶店ありて實に東山屈指の勝地也圓山公園は昔眞葛が原と呼びし處にして風光に富める實に東山第一と稱す此處に一株の垂枝櫻あり彌生の頃花下遊人の群をなし夜に入れは篝火をたきて一しほのながめを添ふる由にて世に祇園の夜櫻とて有名也又也阿彌左阿彌の大旅館あり垂枝櫻より左に行けば右に村井兄弟商會の本宅壯大に立られたり左の東大谷高臺寺は豐太閤の夫人北政所の造營せられしものなり右に高臺寺燒の燒元あり四時十分清水の坂下につく坂を上ればば左右に清水燒瓢簞店軒を並べ又京都重要物產陳列場ありめかくし門は清水第一の山門にして此門により京都御所を隱くせるによりて此名ありと西門の東北に隨求院と云ふあり本尊はもと豐臣太閤が幼時砂中に得たる靈像なりしを後關白となるに及びて此堂を建てゝ安置せりとなり又惡七兵衞景清獄中に於て刻したりと云ふ爪形の觀音あり本堂は平城帝の御宇田村將軍に紫宸殿を賜ひて淸水寺に移し用ひしめ給ひし由にて實にこの堂の形は紫宸殿の模形なりとぞ有名なる清水舞臺は南面して懸崖に架し下を新高雄と呼び紅葉の名所なる由也されどいまだ時期早くして色淺きはいとくち惜し茶店多く見下され音羽の瀧は午王山より落ち瀧の上には龍神鎭坐まします此處に通へる道はかの義士大石良雄が敵に油斷をさせむ爲わざと身を放蕩に持ちくづし日夜遊廓に通ひたりと云ふ道なりとぞ南に常磐の色美はしくそが中に白き塔の殊更目だちたるは鳥邊山とて豐太閤の墳墓なり京都市の四分通りは此處よりはるかに見渡さる東西本願寺は他の家々に立まさりて宏大に見え東本願寺庭園の噴水は恰かも白煙の如くたち上りて壯觀いふ可らず清水寺本尊は十一面四十臂千手千眼の觀音脇立は勝地地藏勝敵毘沙門天なり此毘沙門天は延鎭の作にて田村麿將軍蝦夷征伐の時に靈驗ありたる靈像にて今倚備兵所所に印せりとぞ奥に地主權現釋伽如來堂圓光大師の畫勝觀世音あり本

堂の横手に十六番清水寺と云ふありこゝは清水寺賭請の際の御かり所。

松風や音羽のたきの清水を
むすふこゝろはすゞしかるらむ

との和歌を題せし額あり並何閣の石に鐵の高下駄ありて兩側には仁王いかめしく立てり門を出でゝ天川屋の出張店又物商みすやの本店あり下りて左側なる清水燒店朝日堂に立ち寄るに時五時半日は早や西山にかたむかんとせり此時俄かに黑雲出で來りて車軸をながす大雨となり暫時にして名殘りなく晴れ渡りぬ實に定めがたきは秋の空にもあるか此處に休らふ事一時間茶器茶椀等を求むこゝをいづればはや家々の燈火のかげ美し清水山に茸狩催しゝなりとて舞子等のけふを晴れと粧ひたるが十數人小づまをかゝげ足袋はだしにて歸る樣見るからにいと氣の毒に今の大雨を如何にして凌ぎけむと人事ならず覺えぬけふは三十三間堂迄廻る心づもりなりしかどはや夜に入りたればこゝより宿へと心ざし歸るに中途幾多の神社佛閣等の前を通りしかど夜目にいづれとも見わけがたく幾まがりかをめぐりくて二つの橋を渡り宿に歸りしははや六時半にて實にけふは午前九時より午後六時半に至るまで凡そ十時間ばかりも休みなく名所くを廻りたるなれば車上とは云ひながらいたく疲れを覺えたり

指折り數ふれば筑紫の空を遠く離れてより今日は六日と成りぬ所々の名所古跡を尋れて自然の雅趣を賞し古を忍ぶにつけてもあはれ實に此僞しの今一年早からましかばいかに樂しき旅路なりけむなとそぞろ過ぎにし日の悲しさ口惜しさのみくりかへされて我この小さき胸の中は人こそしられみだれくしかた來の苦しさとくよしなきを如何にせむ戀しくなつかしき我亡き兄君いかで己をすてゝ只一人白玉樓中の人となりはて給ひしそ嗚呼己は最はや何事も云はじ語らじあなあはれ日數かぎれる貳拾五日ははや明後日となりぬ歸るべき日は早や眼前にせまり來ぬ歸途は海陸何れの便をからむかと心まよひしもやはり船路の方空氣淸らかに又心やすければと旅行案内につき

取調ぶるに 一向思はしき汽船なく貳拾五日には 神戸發郵船會社西京丸あれど門司に着するは 貳拾六日なるを以て 若し貳拾四日神戸發の汽船なくば陸路にてもと 種々取調べし結果漸くにして 一艘明午後四時神戸發の郵船會社小樽丸と云ふあるを見出しぬ こは上海行にて二千噸以上の汽船なればこれに 便乘せんこそよけれ それにつきては折角の神戸行きなれば 布引の瀧位見物する時間を持ちて 當地を發する方よろしからむと 午前九時貳拾一分京都發にて 神戸に向ふ事と定め明朝の早起きを約して九時過ぐる頃床につく

貳拾四日午前神戸行布引瀧楠神社參拜午後神戸出發

實に京のながめこそをかしけれ 東西には 東山愛宕山北には鞍馬の峯峰線の屛風引まはし 鴨川の流れは 一すぢの銀波をたゝよはせ春秋の錦ゆたかなる中には 朱の柱に碧瓦の美はしき 樓門宮殿あちらこちらに點在せる 實に花やかなる趣味ふかき處柄なれば自ら人の心も優美なるべく 何處に行きても まづ點茶をいだす等は筑紫にしらぬ奥ゆかしさなり かゝる間に自然の美を賞し 文才をねりてこそ古の如き優艷華麗なる傑作もいづべけれと いとしたはし此地僅か 一日の滯在なればいまだたづねまほしき 名所古跡のいと多かれど 又の樂しき旅をちぎりつゝ心をあとに 午前九時二十一分七條發の 官線鐵道に乘り込み神戸へと向ふ七條停車場は 七條烏丸通りにありて 東海道官線鐵道中の一大停車場にして 京鶴鐵道も 先つ第一着手に同所と嵐山間を布設する筈なりとぞ 又電氣鐵道も 七條停車場を起點として京都市中及び伏見の方へ通ぜり 二條線を右に見 山崎驛高槻茨木吹田の五驛を過ぎて十時二十五分大阪驛に着きぬ 美はしかりし大空は 俄かにかきくもりて 既に山崎驛のほとりより 降り出しぬ吹田驛に朝日びいる製造所あり 大阪驛はいと大きなる 煉瓦造りの建物にて右に眺望臺高く聳え驛の近傍には 無數の煙出しありて 黒煙天をおほひつくせり十時三十分大阪發安治川 神崎川を渡り 五分間餘にして神崎驛に着く阪鶴鐵道の乘り替へなり 阪鶴線を右に見て ゆくにはや田の面は稻刈り[illegible]りたる處多し 武庫川の兩岸には白砂青松つらなり 橋を渡りて左右田畑の中に高さ一間半餘の築山の如きもの數多く居ならびたるは天然物にや西の宮驛を通りすぎ 小さき山と山との間をぬひ 行く小さきとんねる二つを通れば 左に海岸遠く見渡されあまり大いならぬ漁船の一つ西にむかいて 走れるあり 住吉驛を過ぎ十一時十五分神戸三の宮驛に着く(神戸には神戸驛と三の宮驛との二停車場あり) 布引の瀧には此處より下車する方便利なればとて こゝにて下車するに 雨の爲いと道惡し手荷物は驛にあづけしまゝ車を驅りて布引へと心ざす 生田神社の一の鳥居をくゞり 右に折れて神戸きりすと 教會の前を通り左山手に上りゆく 山腹には多く外人の居宅たてられたり 又布引倶樂部布引温泉あり 途中より雨いたくふりまさりければ ほろをかけたればあたりの樣を見るにいと不便なり 久形橋の前にて車を下り 坂を上るにいと急にして 殊に雨天なればいと困難なり 左にあたり川崎造船所の別莊恰かも城郭の如くたてられたり 布引の瀧は武庫山腹にあり 生田川の水源にして 上下二層の瀧となり 上を雄瀧下なるを雌瀧と云ふ雄瀧は上るに困難なれば 行かず雌瀧にのみ至り見るに 十二三間なる岩石の間より威勢よくとう〱と 落ちて水玉を飛ばせる樣の 壯快なる見るからに 心地すが〱しく 夏の涼みのいかに心ゆくらむとぞ思ひやらるゝ茶店料理店等あり 下りて又生田神社前にいで ヘシペリヤホテルを右に見て 湊川神社に至る 別格官幣社にして楠正成の靈を祭り明治四年の造營にかゝれり 正門をいりたる 右側の松林中に水戸光國卿の建設にかゝる「嗚呼忠臣楠子之墓」との八字を刻める一碑あり公がゆかしきいさほは湊川の盡ることなく 百代萬代に楠の高き香をはなつなるべし 境内廣く正風館勸工場 神戸在鄉軍人會本部水族館茶亭等ありこゝを出で相生橋を渡り 神戸驛を右に榮町汽船問屋兼旅館なる西村に至る時午後一時過ぎなり 土地の名物神戸牛肉を注文し 二時過ぐる頃晝食を終ふ午後四時發の小樽丸に便乘する積りにて 聞き合すれば 此船は荷船にて乘客を許さぬ由にて 又々けふは海上風強ければ出帆は明日に延しゝとの事に 詮方なくさらばいつそ 一日延引して明日の西京丸にのばさむかと 初めはほゞそれに決し 三の宮驛より手荷

物等取りよせつれど 追々風の吹きまさるに いと心許なく海上は如何あらむと尋ぬるに如何とも 御返答致しかねとの いとゝ覺束なき番頭の言葉に 若し海荒るゝ樣の事ありては いと困難なるべく又滯在しても雨天にては見物も出來されば 却て夜汽車の方寝臺もある事故心安かるべしと急に神戸午後七時三十分發の 今夜行急行に乘る 事に決し夕餉は汽車にて 認めむと 七時頃より神戸停車場に趣き食堂寝臺付列車に乘りこみ 食堂にて夕餉を取る 七時四十分頃發車す 折あしく雨天の爲空には一つの 星影だに見えじ 實に出立後昨日迄打つゞきたる好天氣なりしを 爰に今一日つゞきたらむにはと恨むれども 甲斐なし攝津の名所なる 須磨明石のうら〳〵等も闇にとざゝれて めづるによしなく 又美はしき天氣ならましかば 須磨の月のいかにはなやかならむをといと口惜しうぞ思はるゝ十一時半頃岡山を過ぐ

二十五日

午前六時頃起きいでゝ 含嗽手水など終へ 暫時にして柳井津驛に着すこゝ地は山口縣下屈指の商業地なりと 七時頃食堂にて 朝食をなす梨りんごのいとも 見事なるありければ 各十個宛を求むかくて下の關に至る間山は高く そばだち浪は白く〳〵うちよするあかぬ 景色にあこがれて時の過ぐるも知らでありしにいつしか 汽車は下の關に着きぬ あはれ今暫しとは思へども 詮方なし 連絡船にて 廿五日午前十一時三十分事なく九州に歸り着きぬ

實に此僅か八日の旅遊あるみ 世とは云ひながら 思へばよくもめくりにけるもの哉 そも此八日の間に 外國までも名高き瀬戸内海を一週してたとしへなき 自然の風景を 一人我物顔にめでほこり安藝の宮島に浮世のちりを洗ひ去り 呉軍港には流石やさしきを みなの心もおのづからふるひたちて ひたすら日の出の御旗を地球のうへにかゝやかさむ 事を契ひ屋嶋山麓の浦には 源平のいにしへおもひ出されそゞろにあはれの袖を絞りて 榮華の夢の早敢なさ 驕る者久しからずのたとへ深く〳〵身にしみて 恐ろしくなほ 奈良平安朝の古跡足利氏の榮華の名蹟を探り 或は名高き女流文學者のあとをしたひ 楠公父子の忠節を湊川に仰ぎ 其他各地の風俗産業等を 實地に目撃して得たる處はなか〳〵に描き筆にえ盡しがたく 僅か八日の間に 身は俄かに見聞學者となりすましたる 心地我ながら可笑しう覺えはべりぬ かく新智識を得たる事の多きと 共に此旅行の 最大目的はと問はゝ嗚呼何と答へむそは名所廻りの遊びの 旅其名の如く いとも嬉しき催しならで心になびく 愁ひの雲清きながめにはらひ去り 麗はしくめでたき忘れ草摘まむとの志なりけれどあゝ如何にせん 月に紅葉にいよゝ過にし事の忍ばれて草の 露のはら〳〵と包む袂に 置きまさるのみされどこゝにたゞ一つ人々にほこるべき 家づとは我々 三人出立の日に立ち勝りていたく肉つきて覺えける一事なりけり

（をはり）

巴里通信

澁谷馬頭

◎まだ倫敦には行かないが、小巴里と聞ゆる白耳義國のブルッセル府も見ました、大巴里なる佛國の首府も見ました。日本から直に歐洲へ渡つた目には、萬事珍しく見えるでありませうが、米國から此方へ來た人はあまり目が肥えて居る爲に、左樣に目を止る物もない樣です。どうかと云へば米國の方が萬事大仕掛で、建築等も新しくて、新式の學術をくまなく應用して、國勢膨脹の機何處となく現れて居ます。

◎米國の家屋　は箱のやうに四角なのが多く屋根も斜面ではなくて、平らに作られてあります。佛國には箱をならべたやうな建築は多く見えませぬ、屋根の所は大抵色々のかざりを付けてありませす。米國では六七階造りの家ならば、必ずエレヴエートルとて昇降機があつて、之によつて上り下りします、巴里風では十階も十四五階もある家でも、エレヴエートルの設けがなくて實に上り下りが厄介です。

◎ガタ馬車　はまだ東京にやつて居ますか、電車開通後はやめましたか、巴里では電車もあるが、ガタ馬車も中々盛んに市中を横行して居ます、巴里ではガタ馬車は二階造りで、何となくあぶなさうに見えます。一人乘り又は二人乘りの馬車は、米國では一寸雇うて二弗五十仙、即ち日本金五圓もとられますから、馬車は(日本に於ける如く)金もちの乘りものと思つて居ましたが、巴里では一般の便利をなして居ます、私ども〻一寸離れた所へ用がある時はすぐに馬車をたのみます。賃錢が一寸した場所に行くに日本金五十錢一時間雇うて八十錢ですから誰でも乘ります。

◎米國には辻便所　がありませぬ。巴里では東京のやうに澤山あります。公立便所と私立便所の二種ありまして私立では大抵十五サンチーム即ち日本金六錢ばかりとります。米國には巡査の交番所と云ふ者は見えませんが巴里では外見一寸便所のやうな交番所がこゝかしこにあります。米國の巡査は棒をふりまはして居ます、巴里では日本と同じく劍をさげて居ます。

◎はり札無用　と云ふ文字は巴里市中、到る所の壁や塀に記されてあります。中には千八百八十一年七月の法律によつて貼札を禁ずと云ふやうにいかめしく書いてもあります。このことわりのあるにもかかはらず種々雜多な廣告札がすきまなく貼り付けられてある所もあります。米國紐育の地下鐵道停車場には「唾をする事を禁ず犯したるものは五十弗以上の罰金又は五十日以上の拘留に處す」と云ふやうな

掲示がところ〳〵に見えました。如何に公徳が守られて居ないかと云ふ事が知られる。米人でも歐人でも喫烟を禁ずと云ふ所で平氣で喫烟し、唾するなと云ふ所でおかまひなしに吐き散らすは、紳士と云ふきはにはないやうだが、下等社會などはそれが常であります。私などは旅行するに、常に三等切符ばかり買つてあるきますから、汽車の中汽船の中で實に閉口する事が度々ありますのです。こんな事上等旅客には一向わかりませぬから、歐米の人は一體に堅いと思つて視察して來る方もあるやうです。

◎女子の風俗　米國では婦人が左の胸に勲章をさげたやうに、小さい時計をぶらさげて歩きます、便利の爲めと云へば便利でせうが、妙な風俗です、巴里には此風ありませぬ。米國では帽子をかぶらずに街路を通行する女見えませぬが、巴里では一寸の用で外出するには大抵帽子なしです。米國で日本人の或る女が天長節の式場に於てかぶつてる帽子を脱げと云はれても脱がないため、一悶着を起した事があつたです。巴里の小娘は、短い靴足袋をはいて膝上から、こむらの下まで露はして居る。米國ノ小供は膝上までかゝる長い靴足袋をはいて足は少もあらはさない。米國風がよいやうです。

◎男子のパナマ帽子　は米國では少し流行して居る。巴里でパナマ帽はまだ一つも見ない。大抵の人は黑の高山か普通の麥藁帽子であるく。衣服も背廣が最も多く、モーニングコート、フロックコート之に次ぐ、シルク、ハットは米國人よりは多く用ゐるが一般にシルクハットをかぶると聞えて來たけれどさうでもありませぬ。

◎巴里で多いものは　石像銅像。國會議事堂の前に七つ八つ石像が立つて居ますそして議事堂が何となく古風の建築で寺院かとも疑はれるやうです。博物館の側の公園に幾百となく立てられてある石像の其うち過半は、若い女の裸體像であります。マアマアと始めの間は驚いて見ます。

◎多いものは　居酒屋料理屋いづくも同じです。

併し巴里の料理屋は高等の所は除外例として大抵は其戸外表通りに面して卓椅子をならべ、客はそこでビール、葡萄酒やつて居ます、花の時節の公園の茶屋のやうです、これが市の中央の平生の有様です。客が其所で表通りを眺めて、一杯やつて居る所へ、乞食小僧が立寄つて、ソロ（獨奏）を始めますと、客は五厘銅貨を投げ出して追ひやります。米國紐育では乞食の一隊が家々の戸口に立つて、オーケストラ（管絃樂）を奏して錢をもらつて歩きます。

◎少いのは　英語を話す人です。日本では一寸氣のきいた人は英語を話し（少くとも英書を携帶）でもせぬと、きまりがわるさうに見えますが、こちらでは、英語を話す人など容易に見出されませぬ。時として店前に「此店で英語を話します」と記して置くのが珍らしく見えます。馬頭が中部アメリカのメキシコ、サンサルヴアドル、ニカラガ、等まはりました時に、西班牙語ばかり土人が話すので大きに困りました。又ニウヨルクから此方へまゐります時に白耳義の船にのりました所が、船中の旅客及びボーイ等大抵獨逸語を話すけれども、英語を話すものが少いので大に困りました、船中の掲示はすべて四五ケ國の語を以て記されてあります。始めて船室に入つた時に「何だ長々しい掲示だ」と見たら、唯「喫烟するな」と云ふだけの事をNo Smoking, Nicht rauchen, Défense de fumer, Niet ro oken, Nie palie, Ne 等英獨佛等六ケ國の語で同じ事を書いたのです。で出入口、食堂便所など一々各國の語を並記してあります。白耳義國は、佛獨兩國語併用で錢など獨語で字を記したのもあり、佛語で記したのもあり、便利と云へば便利、不體裁と云へば不體裁、米國は紐育市の眞中で、猶太人の開いて居る店の看板は皆ヘブリウ語であります英語でありません、それも其筈です猶太人の其所に住居するもの凡そ百萬人と號します米國人に物を買らなくても猶太人仲間で澤山商賣が出來ます。桑港のデユポン街日本人の店の隣りに、猶太人が雑貨店を開ひて居ます、此猶太人仲々

の愛嬌もの店前に日本字で掲示して曰く『此店は日本語で買物出來ます』とデスポン街附近は日本人を以て滿たされてあるからです。巴里第一の大店ボシマルシエの隣りの最も小い旅宿の一室にて記す。うまのかみ。六月十六日

▲新刊批評

◎家庭衞生衣食住　（慶松勝左衛門氏著）飲食物、衣服、住居の三篇に分ちて、家庭衞生上必要なる事項を順次に詳述したる良書なり、近來家庭を名義につかひて杜撰粗笨なる如何はしき書籍を出版する者の少なからざるは慨嘆すべし、此書の如きは是等とは全く其撰を異にすれば、家庭用として一本を備ふべきものといふべし、（定價金五拾錢、本鄕區森川町一育成會發行）

◎家政講義　（第一期第一號）大日本家政學會に於て發刊する講義錄にして衣食住、育兒、看護、裁縫、割烹、衞生等を始め詠歌、作歌等までも掲げたれば講義錄としては先づ完全なるものといふべし、講師は博士學士其他知名の人々なるが中に石川半山、茅原華山などいふ人の見ゆるは、際立ちて甚だ面白し（會費一ヶ月二十錢本所區相生町五ノ八大日本家政學會發行）

◎慰問百人一首　（岡部讓氏編輯）遠征の途に在る勇將猛卒等の徒然を慰めんとて、古來の志士仁人等の風詠を集め、簡單なる註解をも施したる一小册子なれば、戰地への贈品として適當のものなり、編者の詠に曰く「あつめつる言葉のはなよますら男がいくさのひまのなかめともかな」と忠厚の情自ら見るべし（定價未詳滋賀縣犬上郡多賀村岡部讓發行）

◎海と山　文藝界の臨時增刊として、金港堂より、發刊したるものなり、筆者の名を記さゞるは、聊か物足らぬ心地せらるれども、夏の海と山、濱の女神、雨の踞山など其他にも面白きもの十數篇ありて、讀みもてゆけば、清風雨腋に生ずるの思あり、夏時隨一の讀物といふも決して過褒にはあらず、（定價二十錢、日本區本町三金港堂書籍株式會社發行）

▲寄贈書目

家庭のしるべ	一四	東京	白木屋呉服店
日本婦人	七〇	同	帝國婦人協會
女學世界	五ノ一一	同	博文館
をんな	五ノ八	同	大日本女學會
慶應義塾學報	九三	同	慶應義塾
六合雜誌	二九六	同	ゆにてりあん弘道會
家政講義	一ノ一	同	大日本高等女學會
國學院雜誌	一一ノ八	同	國學院事務所
婦人と子供	五ノ八	同	フレーベル會
新聲	一二ノ七	同	隆文館
成功	六ノ八	同	成功雜誌社
日本の家庭	六	同	同文館
二十世紀の婦人	二ノ八	同	北海道婦人同志會
裏錦	一五二	同	倫網社
體育	一四一	同	體育會
商家の友	四一	同	時事新報社
愛國婦人	每號	同	愛國婦人會
婦女新聞	每號	同	婦女新聞社
家庭週報	每號	同	櫻楓會
時好	三ノ八	同	三越呉服店
向上主義	每號	同	久友社
直言	每號	同	平民社
精神	一ノ八	同	精神學會



瀧見堂

米光關月

（一）

或年の秋の事で、私は某驛の棒鼻から、不圖氣が變つて脇道へ逸れた。

元來其時の旅は、懷中の淋しいのと、先途に待つて居てくれる人があつたので、決して悠長な名所見物、そんなもの丶出來る理は無つたのだが、不圖思ひ出すと矢も楯も堪ら無くなつて、遂に脇道へ外れる事とはなつたのだ。

まして其脇道へ逸れたのも、所謂悠長な名所見物のそれで無く、極々つまらぬ、名も知れぬ山が見たかつたからで、云はゞ好奇心、醉狂な持前の惡癖に駈られて參つたやうな理だから、いよ／＼以て妙な具合さ。

で、目的の山と云ふのは、本街道から四里斗り這入つた頗るの僻地で其處に廢寺同樣になつて居る文珠寺と云ふ禪寺がある、其禪寺の後山にある、眞に小さな、一ツの瀧が見度かつたので、自分の曳寄せられ

たのはこの瀧山の爲めなのだ。而して不圖醉狂な惡癖の起つたのは、自分の友人で塚原と云ふ男の、嘗て一ト夏この瀧山で生活した事があるからだ。

この男は頗る血に燃へ易い性で、本來は畫筆をもつて立つたものであつたが、流行の新體詩も作れば、一寸音樂の才もあつて、我々友人中では尤も器用な部であつた、なんぞと云へば直ぐに涙ぐんで、至極感じ易い、其癖又移り氣な、飽ッぽい性分の、難を云へば其疳高な、激し易い持前であつたが、底には如何にも温味のあつた男丈けに、肩を入れるとなると非常な熱心で、それは〳〵親切な處がある、同情深い處がある。しかもそれが唯御座なりの表面でなくて、心底うんと力を入れてかゝるので、我々友人誰れ一人惡く云ふものは無つた。

それが妙な機會から腦を煩つて、誰れに聞くとも無くこの僻地の瀧山の話を知ると、思ひ切つて一ト夏を其處に過し、毎々來る手紙にも頗る經過の可い事を云つて居たので、自分等友人間でも其幸福を窃に喜んで居ると、突然病勢の募つて來たと云ふ報知が來た。續いて直ぐに歸京ると云ふ穩やかならぬ報知、自分は誰れよりも眞先に眉を顰めて氣使つて居ると、歸京つて來た渠の容貌は如何にも容易ならぬ事態を示して居た。で、何うしたのだと理を聞くと、其蒼ざめた面に苦悶の色を浮べて、

「山は惡い、瀧は毒だ。」と、唯これッ限り、他には何も云は無い。强いて訊ねると「性に合はんのだ。」と舌打ちをする。それを猶追究して細しく聞かうに掛ると「君は僕を苛め殺すのか。」と、以つての外の立腹で、止むを得無いから其儘にして何事も聞かずに居たが、この容子で察しると、慥に病氣の外に苦しみがあるらしい、必ず何等かの秘密に苦しめられて居る。

「はて、何んであらうな。」と、小首を拈つたが自分には更に釋ら無つた。

すると其年の暮の事で、渠の宿を久々で訪ねると、床が伸べてあつて、寢て居たらしい。髯も伸び、頰も瘦せて、如何にも痛々しさうな肩附、枕に肱を突いて、苦しさうな息を吐き乍ら、それでも自分の訪ねたのが嬉しいか、淋しい微笑を浮べて、

「よく來てくれた。實は君の處へも知らせる心算で居たのだ。」

と、病氣を知らせ無つた事を、自分にくど／＼詫びて偖て重々しい調子で、

「今度は僕も徒爾なやうだ。」と、頗る心細い言を云ふ。自分は先づ驚く前、不審の眉を寄せた、

「何うしたのだな、そんな弱い事を云つて……」

と、慰め面に云つた心算であつたが渠の狀を見ると弱い事を云ふのも無理からん事だと思つたので、非常なそれは衰弱であつた。

「イヤ、弱い事を云ふのでは無い、全く強い事の云はれぬ程弱つて居るのだ。」

と、渠は自分の語を遮つて、

「併し病中、好きな道の筆丈けは離さ無つたので、見てくれ給へ、こんなものが出來たのだ。」

と、取出した一幅の畵絹を展いて見ると、如何にも精巧に出來た、瀧の圖で、岩に激する水の勢、綠の樹立の涼しさうな鹽梅。殊に一人の齡若い婦人が半身を水に浸して、其黑髮を後にさつと解いて居る、頗る艶なる半裸體の姿が描かれて居るので、今更乍らか丶る病中、か丶る製作にか丶つて居た渠の其道に熱心な事を嘆賞する外は無い。

「可く出來た、旨いもんだ。」と、日頃の惡口も吐けず心から褒めてやると、渠も嬉しかつたか、聊か其面が晴れやかになつて、調子も些し輕くなつて來た。

「圖は珍らしくも無いが、人物には苦心した。惡口屋の君が賞めてくれたのは何よりだ。」
「惡口屋の君は少々御挨拶だね。しかし旨いものは猶且旨い、僕だつて無理に惡口を吐く必用も無いから
な。」
と、自分も快活に云つて、
「時にこの圖は何處でとつた。」
「この夏行つて居た例の瀧山さ。」
「成程、然うか。話よりも畫の方が可いようだな。」
「これで行つて見ると、或は僕の描いたものよりは可いかも知れん。」
「ぢやあ君の話は酷評だつたのだな。」
恁う云ふと、渠は苦笑して、一寸どきまぎしたが、
「イヤ、あの時は一寸激して居たからな。」
と、頗る要領を得無い事を云ふ。
「激して居たからッて、何も山が惡くもあるまい、瀧の音が煩さくなつたと云ふのでもあるまい。」
「それは無論なんだ、そんな理は無いさ。」
「でも其當時は僕が何を聞いても、山は惡い、瀧は毒だと、さも〳〵惡々しさうに可く云つて居たぢやあ
無いか。」
「だからそれは激して居たので、一切僕は顛倒して居たのだ。」
と、夏以來自分の胸に或一種の不思議を懷かした、其秘密らしいものゝ端緒を玆に得た。が、それを捉へ

て飽迄も追究して、この病友を責めるでも無いと思つたので、可い加減に話頭を轉じ、

「しかし、苦心したと云ふ丈けあつて、人物は凡で無いな。これも彼方でモデルでもあつたのかね。」

渠は俯向いて居たが、面を上げないで、

「何、別段モデルがあつたと云ふ理でも無い、」

「然うか、それにしては頗る生々した處がある。第一姿が可い、面立ちも痩地の、尠し貧相と云ふ難もあるが、何處か恬う眼の張りのある、鼻條の徹つた具合、神々しいと云へば云はれる氣高い處もあつて、一寸繪葉書式の俗なのとは一緒にならんな。」

「ハ、、、大層何うも賞めるでは無いか。」

「實際可い物は可い、慥に可いから賞めるのだ。」

「ハ、、、然う云はれると材を明すが、實はこれにはモデルがあるのだ。」

「そら見給へ、果してあるのだらう。そんならそれと早く白狀すれば可いに。」

「處が何も白狀呼ばゝりをされる程、秘密にして置くものでも無いので、これでこの女は神經病患者なのだ。」

「フム、神經病……早く云へば狂印なのだな。」

「遲く云つてもそれに違い無い。」

「成程、それが何うしたのだ。」

「我輩の行つて居た山は頗る僻地であつたが、瀧は其近邊で有名なもので、毎年夏になると、腦病、神經病、いろ〳〵の患者が皆やつて來るので、隨分とそれは賑ふのだ。尤もわざ〳〵都會から行くものは無

い來るものも來るものも皆其處等の里の者で、折によると押し返へす程の瀧浴び連中が來る、其中一人一寸姿の可い婦人が居たのでね、僕は職掌柄、逃さず頭に收い込んで居たのだが、格別珍重すべき代物でも無いので、材を明せば神經病患者なのだ。」

と、語り終つて渠は又淋しく笑つた。しかし自分はなんと無くこれ計りの話で無く、未だ〳〵其話の先があるやうに考へられて、如何にも根堀つて聞き度かつたが、例の病人の身の上を思つてそれは思ひ止つた而して渠は其翌年、梅の散る頃遂に亡くなつた。

（二）

いよ〳〵瀧道に掛つて見ると、麓で聞いたよりも幾層倍險惡な路か知れ無い。しかも登りが頗る急なのでざわ〳〵と秋風立つて居るにも係らず、着て居る襦袢をぐつすり濡らして、未だ其上に袷の裏を徹すと云ふ仕末。

が、折々立停つて息を入れる度に、眼を放つて四邊の狀を見ると、有繫に深山の秋の趣は又格別で、すつかり色附いた木々の梢、足下を流るゝ早瀨の音もなんと無く淋しい中に身の泌るやうな心持がされて、何處とも無く遙かの奥で、杣の斧の音がコン〳〵と靜かに響いて來る。續いて何鳥か一聲けたゝましく啼いて飛ぶと、後は又更に寂寞として、さら〳〵と梢を亘る風。それにつれて未だ時は早いが、ハラ〳〵と散る紅の木の葉三つ四つ、今迄汗ばむだ體軀は俄に凄然と寒む氣立つ。

かくて瀧近く、登り着いた時は、恰度午後の三時頃であつたが、折節其處の立樹が日を遮つて、なんと無く暮近くなつたやうな心持がしたので、少々急ぎ足になつて登ると、漸く水音が高くなつて、稍々平らな地へ出だが、見ると木の間に、軒の傾むいた茅葺き屋根がある、這入ると薄暗い四五間四方のがらんとし

た堂様のもので、一種油臭い匂ひが鼻を衝くので、直ぐにそれの瀧見堂である事を知つた。

堂内を出ると、瀧は正面にあつて、十間計りの高さから落ちて居る。水勢も餘り激しく無さゝうで、浴遊者には尤も適當な地であらう、と、思ふと夏の事が思ひ出されるので、夏の事が思ひ出されると、塚原が目の前に浮んで來るので、それと同時に例の瀧の圖、かの水浴い美人の事が潮の湧くように胸に浮んだ。で暫らくはこの一事に就いて空想を凝し、何時の間に石へ腰を卸したか、それも忘れて、唯瀧の音、水の躍る狀に眼と耳を奪はれて居た。

と、この寂寞たる秋の山に、誰れか人呼ぶ聲のする。始めは杣か木挽の聲と思つたが、呼ぶ聲は四五人計りで、谷に下るやうでもあるし、又山へ登つて來るやうでもある。西に東に馳廻るやうでもあつたが、不圖其聲が絶へて、又遙かの谷の方でかすかに聞える。

自分は暫時耽けつた空想から覺めて、もしや俗に云ふ、天狗隱しにでもあつた小兒などを呼ぶのではあるまいかと思ふと、なんと無く凄涼な感に打たれたので、心殘りのやうではあるが、急ぎ山を下るべく立上りに掛ると、この時不意に瀧見堂の中へ飛び込んで來たものがある。

自分は不思愕然として、一足退り乍ら、薄暗い堂内を透して見ると、何うやらそれは女らしく、軈てふいと自分の前へ飛出した。

と、それは猶且女であつて、先でも自分の玆處に居るのが、聊か意外でゞもあつたのか、頗る落着かぬ、そは／＼した態度で、

「あの、此方へは參ら無つたんでしやうか。」と早口の、しかも冴へた疳高な調子で、急き込み乍ら自分に訊ね掛けた。

年齢は二十四五でもあらうか、痩形の、生際の逼つた、一寸見の頗る貧相な女であるが、何處か仇つぽい中に犯し難い處があるよう、と、思つて見れば神々しくも思はれる其眼元の、生々としてしかも情のある見樣によつては聊か凄然とさせる容色である。

自分は尠し返答に困つたが、多分先刻方から人を呼ぶ聲のしたのはこの人達の連中であつたらうと思つたので、取り敢へず、

「誰方か御索しになつて居るのですか。」

「え丶、一寸、あの……」と、女は口籠つて、

「何うしたのか知ら……」と、眼を上げてそは〲と四邊を見廻す。それかと思へば、又直ぐに

「慥に茲處に來た筈なのだが……。」と、尠し伏目になつて、其生々とした情のある眼に露を浮べ、

「猶且道が間違つたのか知ら……。」

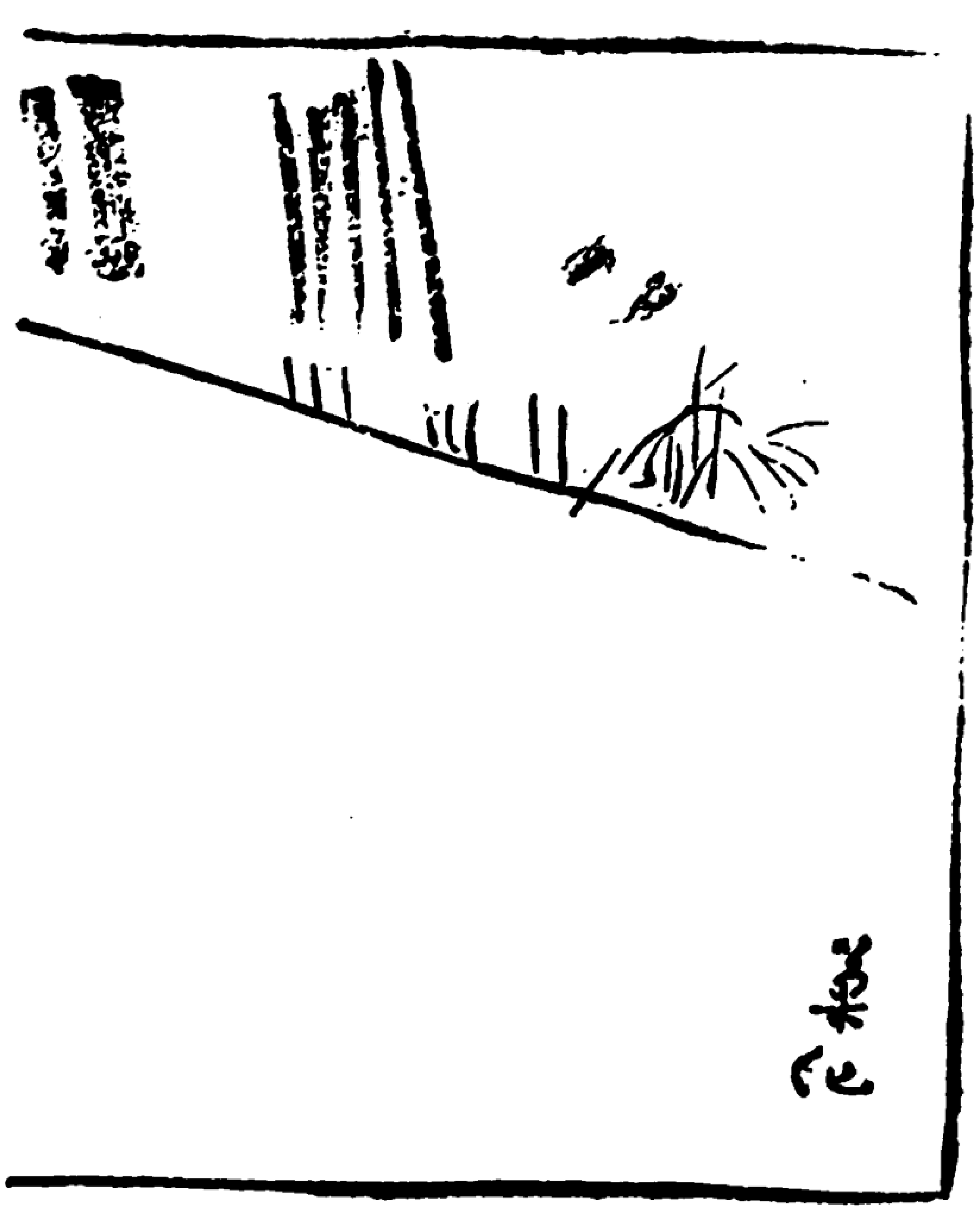
と、如何にも當惑らしい面附だ。

恁うなると自分も有繋に氣の毒になつて、

「小兒衆でも見え無くなつたのですか。」

と、再び訊ねた。

が、女は自分の聲が耳に入つたか入らぬか、默つた儘で深くも物を思ふ態であつたが。屹と何か決する處のあるらしい眉の動き鹽梅、眼の光り、俯向いた面を上げるとさつと其面に



紅が潮して、「ホヽ」と淋しく笑ひ慇懃に自分へ會釋をし乍ら、

「とんだ失禮を致しました。猶且此方では無つたのでございましよう。御免遊ばせ……。」



と、云ふが早いか、譬へば燕のそれのよう、ひらりと身を返へして、堂をぬけ、坂を降り、見る〳〵中に姿を木蔭に沒して終つた。

自分は重ね〳〵の意外に、聊か不審の小首を拈ねつて、

「變だな……。」と、不思大聲に獨言を云ふと、恰も其聲が谺に響いたやうに、つい足許の森の中から、不意に二三人の人聲が爲出した。

「やわ、茲處だ〳〵。」

「猶且茲處に違い無つた。」

「聲がする。それだ〳〵。」

と、わや〳〵云ひ乍ら自分の前に來たのは、いづれもこの里村のものらしい風俗で、額の汗を拭き〳〵息を切らして居る。で、自分の姿を見ると駈寄つて、

「御免なさい、ちよつくら御訊ね申します。」と、ぼくりと頭を下げ乍ら、

「お前樣先刻から茲處に御座らしつたかね。」と、聞く。

自分はいよ〳〵異樣な感に打たれて、返辭もせずに默つて居ると、彼等は委細關わず、

「御座らつしつたらちよつくら聞くべいが、今こゝへ、女が一人來無つたゞかね。」

「齡の頃は二十四五だ。」と、次のが云ふ。

「痩せた女で、器量よしだ。」と、又次のが云ふ。

「併し氣い狂つてるだで直ぐに釋るだあ。きよろ〳〵そは〳〵、それは凡の人とは違つて居るだア。」と、先に立つたのが又云ひ足す、

自分は玆に於てか、始めて悟つたので、疑ひも無く先刻の女こそ變であつたので、又谷々に呼ぶ聲の聞へたのは、かの女を索す爲めの、この人達の聲であつたのだ。

「イヤ、其婦人なら今方瀧の方へ降つたが全體何うしたと云ふのです。」

自分は俄に急き込んで云ふと、

「やあ、では玆處へ來る事は來ましたゞね。」と、中に立つた一人が叫んで、

「何、外でも無いだが、この前畫い描く人がこの瀧へござつて居たが、其人が何時もこの瀧へござるやうに思つて居て、狂氣の悲しさだ。折々飛び出しちやあ皆に心配のう掛けます。はい、これば御邪魔しました、ではもう一度降りて見べいか。」

首肯き合ふと自分に一禮して、皆は瀧の方へ急ぎ降つた、後には瀧の音が唯絶へず何事かを物語るのみで瀧見堂は次第に暗くなつたが、自分の胸に何時も疑問として存じて居た、亡友塚原の秘密は此時正に明かに解けた。

と、思へば、渠は間違ひも無く畫中のそれであつたのだ。それと悟れば成程似て居る。其面、其眼、其肩附……。

しかし如何にして渠の狂女であるかは自分には遂に釋ら無つたのである。

（完）

文林

浪花江の旅

和田望東子

わかさりし花すり衣ぬきかへて、青葉にうつるさ月の末の、六日といへる夜、おなじこゝろの友にさそはれ、浪花へゆかむとこゝろざし、先新橋より立出る頃しも、雨いたくふり出し、鬼一口の夜なりしかば、わやめもわかで更行まゝに、夏のよのみじかさは早や東の空しらしと雨もいつしか晴れ遠山まゆもほのみえ、翌廿七日の朝四時過る頃靜岡にいたる、こゝにてわひ知れる人に出合ひ、何くれとたのみなどして別れをつげ行くほどに、ねふの木の立ならびしを過ぐる頃は、夕邊にかはり空いとよく晴渡り、富士の嶺に日の出のさまはゆきばかりにみえ

見しか夜のねふの木蔭を過行は
めさむるふしのおもは嬉しき

幾度かかよひなれたるかな路さへ、ものめづらかなこゝちして、里人のすき鍬とりて、朝戸出のすがたをかしく青田には露のなごりをとゞめ、桐の花今をさかりと誰かゆるしの色をあらはし、荒井の川のあしの葉も、緑いろますこゝちして、早ふしのまに豊橋過て岡崎にいたる、此邊りに名高き三河の八橋といへる名所ありと聞しに、ところの人に尋ぬれば、今はわとしもなくといへり、昔男の袖の香も、殘らざるぞ口をしきなど語りしほどもなく、名にあふ名古屋の城もほのみえて、黄金の鯱の燦爛と誰か目をもおどろかし、これより

美濃路にかゝり、ぎふ大垣も過行ば、關か原にいたる、こゝは世に聞えし古戰塲にて、卯のはなおどし緋絨しに、吹雪が中をたゝかひしほまれのあとぞ忍ばるゝ

祖翁が詠したまひし

夏草やつはものともの夢のあと

など思ひ出し、折しも米原にいたるに、こはいかに軍人あまた此車にめされ、戰地へむかはると聞、世につれ姿かたちこそかはれ、同じ心のもの〻ふが、むねにかざせる生花こそ、いさましきがうへに花をそへたり、それに付ても女程かひなき者はあらじ、是より近江路にかゝり、琵琶の湖水を右に見て、都に近き山の姿何となくみやびたるこゝちして、早あく田川にいたる、こゝにも古き物語ありけるを思ひ出られて

散つもるあくたの川にとひてまし
ふるきゑにしやいかにあるらん

京都に着しは、夕四時頃にて、これより三條小橋の大津家といへる宿にいたり、しばし休らひて夜に入り、四條あたりをそゞろあるき九時ごろに宿にかへる。

廿八日空いとよく、暑さを催す、朝より二條の停車塲に至り、嵯峨に行く、こゝより嵐山へとこゝろさし、凡四五町ばかりの道ながら青田を通り、竹の林にかゝりしにみどりの色うつくしくすくなるさま、土佐畫の工みを見るがごどし、かゝる内にこそかくや姫のおはすらんなど語りし折から、うしろより來りし婦人のひとむれ、さすが都女のうつくしさ、われさへしばし見とれ、思はずあとに付行ば、さもあやしげなるかけ茶屋にこし打かけ持來りしひさごにわり子をひらきしはさもそふづと思ひあたりたり、我らも三軒茶屋といへるに休らひ、山の景色をながめしに、花にもまして水枝さす若かへる手に、櫻の青葉茂みあひて、蟬の初音を聞、大堰河の流にかじかの聲涼しく、水底までもすみ渡り、其むかし御幸ありしところは、いづれならむとおもひ

いにしへのみゆきのあとをとひてまし

雲井にとゝくきしの老まつ

向ふの小倉山の茂みに、ふもとの華表の影ほのみえけるを

葉さくらのしけるをくらの山ふもと
石のとりゐもかすかなりけり

こゝにその子共の引舟のさま、いかにも古き書巻物を見るこゝちして、又此邊に小督の局の世を忍びて住たまひしと聞、いづれにかあとやあらむと所の人に尋ねみれば、さしも名高き雲井の人には似もやらで、しるしばかりの小さき塚の殘れるを見るにつけ、さすがになみだ催し、渡月橋の前にかけたるは、琴聞橋とあり、これこそ想夫戀のしらべを聞しならむと思ひ

名もたかき雲井の調うちもれて
こと聞はしといふもなつかし

世のさかはうつりかはれどいにしへを
こと聞はしにとひてみましや

此邊りに都人うちよりて、聲はやりかにかたるさま、いとをかしくおもひて

かはかりに人目さかのゝ里なれど
旅の身なればこゝろやすさよ

こゝに嵐山焼となむいへる物家ごとにひさきありければ、われも家づとにあがなひて行ほどに、天龍寺にいたる、これぞ人も知る、古き禪寺にて、さすがに廣き庭のくまゝでも清らにそふし行とゝき、奥に入れば後嵯峨天皇、龜山天皇の御陵ありうや〱しくおろかみて横にめぐれば、故上人歷代の墓打ならひ中にも、滴水峩山上人に私淑したる事ありければ、何となふなつかしきこゝちせられぬ、素より此寺は後醍醐天皇菩提のため、光嚴天皇の創立し給ひたるよし、今より五百有餘年の事ながら、折々に手入れとゞきたるためにや、くちたる所だになし、扨是よりかへりかけに北野に行、天滿宮にまうでけるに、むかし式部の詠じ給ひしを思ひ出し

紫のゆかりのころをわすれずば
ひと聲もらせ山ほとゝぎす

宿にかへりしは、午後三時頃なり、これより大阪

にゆかむと、七條にいたりしに、風すこし吹出しながら、東寺の塔もほのみえ、かつらの川も打過ぎ、梅田の停車塲に着しは、たそがれ時なり、先船塲なる母と姉のもとを尋ね、さま〲の物語りに夜を更し一泊す。

廿九日けふも空晴ければ、午後早〱より兼て心安き玉手菊洲といへる能書の先生、先頃より此地に遊び給ひしを尋行しに、いつにかはらぬ我らでとき、かずならぬ身をよろこびてむかへられ、何くれともてなしたまひ、あふ時はかたり盡さんと思ひしになどゝきけむよけにみきかさねられ、更くるもしらで九時過るころにやどに歸へりぬ。

三十日薄曇りながら、朝より江戸堀なる兄のもとを尋ね、それより神戸に行き、海岸なる兄のもとを尋ねしに、姉なる人の厚きもてなしにゆる〱と語りあひゆふくれころに大阪までかへりぬ。

三十一日けふもくもりながら、友なる君と湊町停車塲より奈良に行く、まづ猿澤の池にいたるに、きぬかけ柳いまもなほみどりの色をうらみの水に寫し、昔御門をしみ給ひて、柿本人丸によませたまひし歌に

わけも子かねくたれ髪を猿澤の
池の玉藻とみるそかなしき

御門の詠したまひしは

さる澤の池もつらしなわけも子か
玉藻かつかは水そひなまし

これより十三かねといへるに行く、春日野を通り春日神社にまうてけるに、青やかなる檜原の茂みに石の華表燈籠など神かみしくうちならびつゞきて、春日若宮に詣づるに、此ほとりにやどり木といへる御神木あり、こわ梅櫻紅葉其他さま〲と七樹まじりて一もとゝなり、枝ごとに青葉さかえいとめづらしく見受たり、これより三笠山にいたるに、さすが名のごとくわか草茂みてみどりうるはしく

さして行くみかさの山と聞からに
世の雨露もいとはさらまし

二月堂に詣づ、こわ羅索院と號し、天平の頃實忠

和尙勅定によりて、造營し給ひ、本尊はなに波の浦よりあがり給ひし、十一面觀世音にて、みたけ七寸におはし、銅像ながら人のはたへの如くあたたかにますとかやいふ、御堂の前に若狹の井といへるあり、朝夕みほとけにさゝぐる閼伽の水と申此井戸につけて、毎年二月十二日の夜若狹の水取といへることおこなはるとかや、祖翁が詠じたるに

　水とりやこもりの僧の沓の音

東大寺大佛殿にまうづるに、本尊の御長五丈三尺五寸といふ、聖武天皇の御願にして、天平勝寶年中に成就せりといふ、又是より東圓堂に行く、前なる八重櫻を見るに、花には時過けれども、青葉茂りて、九重の花の香のなほのこるこゝちせられぬ。いそがぬ旅にあらなくば、訪たき名所あまたあれども、はや入相のかねの音に、心殘して浪花へかへりぬ。

水無月ひと日小雨ふりしかど、明日は出立むとおもひ、手荷物など取りかたづけ、母姉兄などにいとまごひしけるに、老のならひに、たらちねは、又もや秋はとひてよと、なごりおしまれ、私もおなじ心にて、盡ぬ名殘をのこし宿にかへりぬ。

二日晴早朝よりなにくれと仕度とゝのひ、梅田にいたり、七時半發の汽車にのりて京都に行く、しばし休らひ、夜八時半ののぼり汽車に乘りて靜岡さして行く、

三日曇り、曉の四時過る頃に、靜岡に着し、宿にいたり夜も明ぬれば淺間神社にまうで、今岡大人のもとを尋ぬ、午後にやどに歸りぬ。

四日晴朝四時三十分發にのりこみ、九時過るころにつゝがなく新橋に着し旅の行路のへだてなき友にをしきたもとをわかちおの〳〵家路にかへりぬ

　日わ淺き旅にしあれとかへりなば
　　かきのゆふかほ待ち顔にさく



夏月涼

氷うる家にも人のみえぬまて　みやこのちまた月そすゝしき　松井とし子

水やりししのふの露にさす月の　風にこほるゝかけのすゝしさ　濱治　松子

はしゐしてむかへは涼してる月の　桂の露もちるこゝちして　根本新之助

吹風にのきはの簾うちゆらき　影さたまらぬ月のすゝしさ　同

浦風をかやにふかせて磯やかた　ふしなからにも月を見るかな　菅　廓

夕立のはれし軒はの玉水に　やとりてすゝし夏のよの月　大木　眞備

蚊の聲も遠さかりゆくねやの内に　さしいる月のかけそすゝしき　同

若竹の葉末にのほる露見えて　すゝしくなりぬ夏のよの月　五十嵐雅言

木のまもる月影ふみて夏のよの　そゝろありきは涼しかりけり　和田　慶祐

夕風にはちすゆらけは池の面に　月もゆらきて涼しかりけり　江戸　爲房

ふくるまでとさゝぬ宿も見ゆる哉　月夜すゝしき川つらのさと　東　胤德

そよとたに風のかよはぬ窓の内も　月さす夜半は涼しかりけり　同

はしゐして風まつ軒の小簾こしに　さす影すゝし夏の夜の月　片岡久太郎

聲

なかゝゝにひくきか耳にとまりけり　我名をましるさゝやきの聲　松井とし子

山のおく海のはてまてひゞくらむ　大御軍のかちときのこゑ　生井澤伊之助

たらちねの親こそまさねいましめの　みこゑは耳にいまものこれり　彦坂　麟照

めつらしきなき聲そする隣には　けさみとりこのうまれいてけん　和田　慶祐

高らかにいひのゝしりて人のこと　あけつらふ聲のきゝにくきかな　東　胤德

國の仇ゆるすははやし譏もて　命こひするこゑきかぬまは　同

天の下ひゝきわたらぬくまそなき　やまと島根のかちときのこゑ　片岡久太郎

詞苑

従二位男爵 黒田清綱先生撰

（代撰菊池武則先生）

古寺

天

雲かゝる高ねに鐘の音せずは
　年ふる寺のありとしらまし

肥後菊池郡城北村　徳永而有子

地

秋ふかきみやまのおくのふる寺は
　月のもるにそまかせたりける

肥前呼子　藤松りか子

人

東京府豊多摩郡千駄谷村字原宿　駒澤さだ子

あれたれとまうつる人や絶さらむ
　草ふみ分し古寺の道

甲

ほのかにも法のともしひてらさすはありともしらし嶺の古寺
東京　吉岡龜子

後の世をかけてそれかふふる寺に すみこそわたれ鐘のひゞきは
熊本　佐々有隣子

いつのよのひとやたてけん白雲の奥に そひゆるみれのふるてら
滋賀　大宮求馬子

汲むひともあか井のみつも絶え〳〵にいくよふりけむ峯の古寺
東京　松本くす子

おく山のこのまをもれてみゆるかな 年ふる寺ののりのともしひ
奈良　天野照子

乙

山てらのあれたる庭にあきふけて さひしさまさる法のこゑかな
名古屋　不破きみ子

ふきおくるあらしのさそふ鐘の音に代を古寺のありかをぞしる
熊本 徳永満壽子

まうてくる人もまれなる古てらになに松かせのちりはらふらむ
岐阜 青木まさを子

丙

（以下到着順）

あれはてゝとう人もなきふる寺に讀經のこゑのあはれさひしき
神奈川 岩戸菊子

こけむせるあか井のあたり月おちて木の葉ちるなりふる寺の庭
愛媛 高橋茂子

垣やふれともしひもろゝふるてらにこよひもきくよ讀經のこゑ
名古屋 近藤偉子

まかきにはたゝしら菊のにほふのみ主なき寺のわひしかりけり
磐城 三森すま子

よひ／＼にゆきし母上ゆめに見て今朝また訪ひぬこのふる寺を
大阪 田中れん子

入相の鐘をきくにもさひしさのおもひやらるゝみれのふるてら
東京 入江菊子

やれかはら月にみかきてみあかしのかけうすれゆく古てらの庭
東京 伊藤竹子

なでしこのこの一もとを見ることにむかしをしのふさかの古寺
三重 藤堂しげ子

なか／＼にあはれふかきは古寺ののきはをたゝく雨のおとかな
東京 田中千賀子

やもりだになき古寺にさきにほふ千歳のきくそあるしなるらむ
磐城 三森すま子

ゆかりある里のあせみちゆくほとにむかし忍はるふる寺のみゆ
千葉 石橋たけ子

讀むふみに時のうつるを忘れけり淡くきこゆるふるてらのかね
富山 三上ふし子

冬枯れて見る目もさむくふる寺のあれにあれつゝとふ人もなし
能登 金森かのゑ子

やれかはら月にみかけるよもすからむかしをしのふふる寺の庭
東京 五十嵐済子

草しけく問ふひともなきふるてらに誰か手向けん白合のひと枝
兵庫 高橋町子

やへむくらしけりしけれる古寺のしはの戸もれてきゆる鐘のね
山形 松井うめ順

いくよへしこけむす軒に月もれて御あかしくらしさかのやま寺
東京 小林芳子

卒塔婆もたをれしまゝに年ふりてけものすむべき山のふるてら
東京 杉田繁子

さゝかにの糸よりいとに引はへて門をとさせるやまのふるてら
熊本 田代綾子

今は早やふみよむ法のこゑたえて人かけもなしみれのふるてら
大和 栗山多加子

ひめありしふみに昔のあらはれて今はときめくならのふるてら
大和 栗山俊子

鐘のおともたえてひさしきみ山寺いゝのよゝりか月はもりけむ
東京 日暮いく子

年つきはうつりかはれと山てらの鐘はおなしにきこえけるらん
沖縄 名嘉元松子

ときめきし跡ほのみえていまもなほいらかいかめし京の古てら
沖縄 名嘉元ウメ子

たひ僧かこよひの宿をたのみけんくちしもくきよの聲きこゆ也
岩代 菅野和子

あはれてし野邊の古寺厨子の月にすかきをかけしさゝかにの糸
上野 木藤千代子

岡山 黒瀬まさの子

いくとせも年ふるてらの法のこゑきくもあはれに秋のいろみゆ
東京 高橋珍子

おとつるゝ人もあらしのふくまゝにみねの古寺あれまさりけり
陸前 前田河千年子

山寺のかねのひゝきもかすかにてものおもふ身のいとゝ淋しき
陸前 前田河みさを子

古寺ののきかたふけるはかなさをみても無常のこの世をそしる
秋田 細矢はる子

すみすてゝやるゝにまかす山寺をおのかものとや月やとるらん
秋田 古瀬とよ子

あかの水くめはつく／＼鐘のねのよにひゝきたるしかのふる寺
秋田 佐々木とら子

いしふみにむしたる苔のいろにさへむかしをしのふ山かけの寺
能登 高森いち子

かへくすれ月もる寺は何となくたふとかりけるむかしのへは
東京 青木たま子

山寺のまつのあらしのおとすみておのつからなる法のこゑかな
岡山 小山松枝子

かれはてししきみのおくにふくらうの聲もさひしきみねの古寺
大阪 田中靜子

ふるてらの鐘の音うすれうすれゆきて牡鹿なくなり秋の夕くれ
神戸 今西みさを子

かすかなるみのりのこゑは初瀬寺尾上のかねにつきそ更けけり
神戸 今西重子

荒果てしみねのふる寺今日もまた御法のこゑを聞かんとそ思ふ
岐阜 中島楽子

みほとけの道はたゆれとなか／＼にたから物見に人のゆきかふ
三河 永井さい子

なか／＼にかた山かけの古寺そさやかなりけるのりのともし火
肥後 篠永廣子

柱さへゆかみしみねのふる寺に御のりのこゑの絶えぬかねの音
愛知 後藤信子

山ふかくほのかに見ゆるふる寺にたれかゝくらん法のともし火
愛知 松本たか子

山ふかくおいたるすきのこすゑよりかすかにひゝく古寺のかね
大阪 船越小仙子

梟啼く杉のむらたちとめ來れはふるきみてらのかねの音きこゆ
東京 大枝廣子

八重葎しげれる野路の古寺にいまはむかしのおもかけそ見ゆ
秋田 古瀬りく子

あれはてし年ふる寺もこのころはみのりの聲のきかぬ日そなき
秋田 古瀬惟子

壁はおちはしらはくちてふる寺にたてるは石のほとけなりけり
埼玉 横田やな子

あけぬるか横雲しらむはつせやまかねの音わたる檜原すきはら
埼玉 横田須磨子

おとにきく都のふしのふる寺はかねて名たかく世にひゝくなり
薩摩 松原みね子

秋風をわひにしあまそしのはるゝさかのゝ寺のゆふくれのかね
伊豫 廣田政美子

あわれなる法の御こゑもうらわかきとし古寺にきこゑ初めけり
能登 杉下文枝子

棟木朽ち朱塗はげにしあれ寺はかたゐの宿となりにけるかな
津 神田みよし子

法の師もすまてあれけりふる寺のほとけの影はいつこなるらん
東京 瀬藤ちよ子

鐘臭のむかしのことのしのはれて 破れたるかとに僧のたゝずむ　三重 茨木みす子

たふとしやいくよへぬらん高の山ほとけさひぬる みれのふる寺　東京 瀬藤ちよ子

雨風のほかにおとつるものもなしふる 寺あられ小きつれの鳴く　埼玉 澤田榮小

ふもと寺かはらの屋根に花さきて ゆふくれさひしびゝく鐘の音　三河 榊原てい子

法の音やたえていくとせなりぬらん御山の おくのあはれふる寺　埼玉 澤田房子

おひまつにゆふ日さひしきふるてらに 老僧ひとりまもりける哉　三河 榊原きく子

文よみしともしひうすくなりし夜半 ねよとやつくる古寺のかね　肥後 佐々小琴子

うちならす鐘のひひきは夕くれのあはれなそふるみれのふる寺　東京 西 ひさ子

棟もおち垣もあれにし古寺も 昔は經の聲やもれけむ　在清國 宮成梓子

法の聲まつのあらしも 千とせへてなほこそふりぬをはつせの山

草花先秋

天

東京本郷區森川町一番地 大枝庸子

誰かためにほころひにけん藤はかま
また秋風もたちそめぬまに

地

秋田縣羽後國由利郡本荘町谷山小路 佐々木とら子

つちかひし人のこゝろにいそかれて
夏のうちにも萩か花さく

人

東京青山南町七二 森千里子

さを鹿の來なかん秋を待ちつらん
なつの末野の萩の花妻

甲

まちわひてはやおみなへしさきにけり 野山に秋の風もふかぬに　和泉 中江なほ子

名もしらぬ野への八千草花さきぬまた 秋かせはふきそめれとも　熊本 田代綾子

此の朝け野へなつかしくおもふかな 千草のはなそ秋をみせつる　肥後 綿永而有子

秋かせの立をもまたて夏の野にやさしくさけるおみなへしかな　陸前 前田河みさを子

植おきしちくさも〻艸花さきて またきにあきと見ゆるにはかな　東京 伊藤敏子

わかやとの一むらすゝき穗に出て 秋をおそしとうちまねくらん　三河 永井さい子

夏の野に一もとさけるを みなへしはやくも秋のいろみするらむ　東京 青木たま子

秋またてにはのたま萩さきにけり牡 鹿もいまやなかんとすらん　肥前 藤松りか子

秋ちかくなりにけらしな夏の野にひらきそめたり 秋萩のはな　薩摩 松原みれ子

おほかたのものみな競ふ世なれはかあきをもまたて 萩は咲らん　愛媛 廣田さゆり子

秋またてすみ田のさとのはなそのゝにはの七種ほころひにけり　埼玉　横田やな子

八千草の數のなかよりさきそめて　あきまつ野邊の月くさのはな　東京　松木くすゑ子

乙

暑き日のかけ消えやらぬきのふけふ　庭の小萩はまつさきにけり　東京　山田婦美子

さなしかもいまた來なかぬ夏の野の小萩一もとはな咲にけり　東京　駒澤さだ子

夏草のなかにましりてをみなへしはやくも　あきの色をみせけり　三重　茨木みす子

（子以下到着）

丙

まつ秋の色とも見ゆれのへはいま萩やすゝきのまさかりにこそ　京都　坪内りき子

人のなすわさともしらて匂ひけり　あきもまたきの鉢のしらきく　秋田　古瀬とよ子

あき風もまたたてそめぬわか庭におほつかなくも萩※かそする　秋田　古瀬りく子

おく露を　せにゆらけて萩の花やさしくさきて　あき迎ふらむ　近江　萩原治子

にしきての鉢にやうゑん藤はかまあとにあきまつ蕾もありけり　秋田　古瀬惟子

あきちかみ野守か庵やつくりけん千草　いろめきむしもこゑする　埼玉　横田須磨子

もゝ草もひもときそめて水無月の末の野原にあきかせそふく　埼玉　横田秋子

きそひつゝ學ふ園生のなてしこにましりて　匂ふをみなへしかな　伊豫　廣田蕭子

夏なからあきをしめのにはやさきぬときにおくれぬ萩のはつ花　津　神田みよし子

夕まくれうらの山邊をさすらへはなつくさ　影にきゝやう花咲く　東京　瀬藤ちよ子

むしはまたおとせぬ秋に先かけて　のへのちくさは咲そめにけり　滋賀　大宮求馬子

秋風もまたとはぬまになつかしき　大和なてしこ咲き初めにけり　三河　榊原きく子

姫百合の花はまはきにさきかけて　咲こそにほへにはのそてかき　肥後　佐々有隣子

秋風はまた立れとも萩きゝやういとうるはしくさきそめにけり　三河　榊原てい子

あさ夕のこゝろつくしもはやみえて　夏なからさく秋はきのはな　東京　高橋珍子

みな月の末野のちくさ　はなさきて秋のいろこそまつしられけれ　岐阜　青木まさを子

去年の春とものめくみし菊のもと秋をもまたてはや　咲きにけり　岡山　黑瀬まさの子

秋風はまたたゝなくにふたつみつ　ほころひそめしにはのいと萩　奈良　天野照子

あき風にさきたちさけるなゝくさの花のかずかず　みるぞ楽しき　陸前　前田河千年子

野あそひの人にもらひし草はいま秋をもまたてはなさきにけり　秋田　細矢はる子

秋はまたこえぬ　こなたのませがきにはやくもにほふ萩のはつ花　東京　岡田柳子

秋のいろをなにゝ知りけん宮城野は萩の花かさかさしそめたる
福井　岩橋花子

ふくかぜもすゝしき松の下かけに夏をは知らてさけるきちかう
岡山　小山松枝子

なつくさの咲きのこりたるその中にひときはめたつ菊の花かな
大阪　田中靜子

來て見れは嵯峨野の原もたわゝ迄秋に先き立つ女郎花かな
神戸　今西みさを子

あき風のけふたつことやしりにけんきのふより咲くかきの白萩
岐阜　中島素子

それとしもしらぬ秋に移り香は秋たちそむるふちはかまかな
肥後　德永萬壽子

堪かれしあつさは夏にかはられとひとり秋しるあさかほのはな
肥後　德永廣子

はつかせに露はらはして秋の野にさきいてにけり大和なてしこ
名古屋　不破きみ子

虫の音もまたきゝそめぬ草むらにさきたつ花の香こそゆかしき
尾張　後藤信子

川そひのひとむら小萩いろつきぬみそきの幣のなかれこぬまに
大阪　船越小仙子

ゆかしさを外にやらしとをみなへし秋まちかれてひとり咲けむ
東京　小林芳子

たへかぬる夏の日影にしのすゝき秋まねくとやほにいてぬらむ
東京　杉田繁子

秋かせのふくもまちかくなりにけり岡へのすゝき一もとさきて
沖繩　名嘉元うた子

一葉ちる秋もまちかきませかきに凉しくさきしなてしこのはな
沖繩　名嘉元松子

おこたりてはらはぬ庭のくさむらは秋にさき立はなさきにけり
大和　栗山たか子

たれちりし物かあらぬか刈のこす草にもあきのはなさきにけり
大和　栗山俊子

あき風はまた音つれぬかきの内にまたきにさきぬ萩のひともと
東京　日暮都子

なにおへる秋まつむしのなかなくにみことになりぬ庭のなゝ草
岩代　菅野和子

七種のはなみつふたつさきいてゝなつをはなれし庭のくさむら
上野　木暮千代子

こむ秋をまちつゝにほふ八千草の色こきはなそ今日さかりなり
磐城　三森須磨子

くさ花ははや咲きぬれと秋ならぬのころあつさは苦しかりけり
愛媛　高橋茂子

あたらしくふく秋風になくれしと惜しくものへに花むしろしく
金澤　北　隆子

植たてしまかきのちくさ生たちて秋なられともはやさかりなり
東京　吉岡龜子

いてましゝ君かかたみの萩のはなはやさきそめて秋はきにけり
大和　橋かほる子

はなまつをはやくも秋の風ふきてわかきくさはに虫のこゑきく
東京　田中千賀子

秋ならてはや咲にけり朝ゆふのつゆにひもとくやまとなてしこ
東京　伊藤福子

なゝ艸もまた秋しらぬませのうちの露にひもとくみつひきの花
東京　伊藤竹子

虫のねはまたかたなりの庭なからうゑし秋はきはやさきにけり
東京　五十嵐清子

一村のなつくさましりさきにけり夜めにもしろき月くさのはな
東京　増野やす子

華族女學校教授井上頼圀先生撰

日記の一節

地

山城八幡　鈴木菊子

七月五日　晴

草苅る童の鄙歌に、夢に破られて、庭に立てば、殘月白う、木の間に傾き、朝霧に籠められし鳩ヶ峯は淡く墨繪の如し。母君が、惠の露に、ゑみそめし、朝顔、紅二ツ、瑠璃一ツ、やれし籬をかざりて、伏屋の庭に色そへぬ。しめれる、小草をふみ分けて、背戸の流れに、水掬めば、消え殘りし明星の影、結ぶに任せて、百千の玉と、碎けつ、散りつ。やがては、涼しき、朝風に、袂吹かせて、今日の、勤めにと、出で立つ。

燃ゆるが如き、日盛りを、わざをへて歸る木の下道、茂る夏草の中に、妙なる香りのなつかしくて、立寄れば、露を笑顔の百合一本、清き姿は、優し女神のそれかとばかり。おゝ此花、あはれ、母君の御目にかけ奉らんには、如何に喜ばせ給ふらむ、一枝を我に許してよ、老の御心、慰めんとならば、神もさこそは咎め給ふまじ。心くみてか、わらぬか花の、風なきに頷く、さらばと、手折りて、路を急げば、名殘や惜しむ蝶一ツ、なれつむつれつ、慕ひ來る、湯たきつゝ、待ち給ひし母君の、御顔に、喜びの色溢れて、たたへ給ふ、うれしさ、あはれ、花のみかは。

一日の暑さ、流して、軒しのぶ、涼しき樣に、夕餉終へて、例の如く、肩打ちまゐらせつゝ、大町先生の、小楠公の續き、果ては、戰の物語りに、いつしか、細る蚊遣の煙、驚きて、床に入れば、闇にもしるき、百合の花、いつとはなくて、消え失せぬ。

人

大阪市南區惠美須町二丁目六六三番屋敷　船越小仙子

八月二十七日。

けふは亡き弟の命日。生前睦ましかりし人々を招きて心ばかりの追善供養す。この頃の暑さは、夏に弱き此の身の、ともすれば腹立ち易きまゝ、けふだけはと、朝より心がけしに、夕方客人の歸られし後下婢の芳、膳部を洗はんとせしに、取落して赤繪の茶碗一つ微塵に碎きぬ、あはれこの赤繪は亡き弟が秘藏のもの、けふの席上にても、この茶碗ゆゑ物語の興を添へしものをと思へば、げに腹立たしくて、詫入る芳をば、さんぐ〜に叱りつくる折から、良人は湯より歸りましぬ『はゝゝ、また女の閻魔さまかね』の一言に、忽ち我心のはしたなさを思ひ出で、叱ればとて茶碗は舊にかへるまじを、口きたなく聲高に罵りしとの、今更に恥かしさ、けふは腹立つまじと、朝より心がけながら、女の閻魔さまとはなりぬ、女といふものは、誰も〜〜淺間のものなれど、我ほどの不覺ものはあらじな。

評　淡永味ふべし

人

東京下谷區御徒町三ノ三三　岡田柳子

朝霧けしきばかり、立ち渡りて、峯に生ふる松は、薄衣に、包まれたらむやうなり。綻びそめし、こゝかして、ほのぼのと、緑の色の、見えすきたる、いひ知らず、ゆかしきに、昨日の疲れも、打忘れて、旅の宿りを、立ち出づ。早川の流れに、そひてゆく程に、いつしか見渡し、廣やかなる、野邊に出でぬ。こゝは、名もなつかしき、宮城野の、原とかや、早川といへど、流れいと、靜かなり、水淸らに、すみたれば底のさゝれをも、數へつべし。汀には、萩の初花、今を盛りに、咲き匂ひて、枝もたわゝに、うつろふさ

まの、美しさ、水の中にも、誰が植ゑけむと、問はまほし、かけ渡したる、丸木橋、わたりてゆけば、彼方には、桔梗苅萱女郎花、とり〴〵に、打ち匂ひつゝ、そよ〳〵と、吹きくる朝風に、靡ける風情、いとなまめかし。あはれ旅路ならずば、一枝をだに、折りとりて、たらちねの母君が家づと、なつかしき妹のかざしともなさましものをと、いと本意なし、せめては、押し花にもと、一花づゝ、つみ取りて、たゝう紙に、さしはさめば、いみじう匂ひたへなり。あはれ花よ、心あらば、我家に歸らん迄、色なあせそ、香なうせそとのみ、口ずさみぬ。

評　濃にして膩ならず

秀逸

東京　岡田近子

雲に峙つ日光山、赫々として、朝暾に映じ、滔々たる大谷川の、清流にそひて、上りゆくこと、五丁十丁、道漸く、険しうなりぬ。山には奇石數多、聳えたちて、其形削りたてしものゝ如きあり、或は打倒れて、化石したる如きあり、或は崩れ落ちんばかりなる處に、松など生ひいでたるあり、見上ぐれば、峻嶺峨々として、聳え、見おろせば、滾々たる溪流の響きは、脚下に聞え峯の松風と、調べあはせて、天女の樂を、奏づるが如し。身は唯仙境に遊ぶらん心地して、うつし世とも思はれず。暫し佇む折しも、行手の方より、一人の白髪の翁、歩みくめり。近づくまゝに「華嚴の瀧へは、こゝいくばくの道のり、侍るか」と問へば、いと懇に、半里計りなりと答ふ。其風采の、いひ知らず尊く、品ある樣なるに、仙人の使ひにもやと思ふも、折柄に、をかしうなん。心いよ〳〵勇み立てば、百舌鳥のなく音、さやかに聞えたる、ゆかしともゆかし。足は疲れにたれど、勇を鼓して、猶行けば、幽に水の流るゝ音す、さても何處なるらん、此深山路に、谷川の水の、流るゝ音か、はた山風の、梢にむせぶ風の音かと、あやしみつゝ、數百歩、こゝに至りて其響き、漸う高く、遂には滔々として、落下するが如し。これなん我目ざす、華嚴の瀧なりける。

評　一氣直下、節促にして意長し

東京　杉田繁子

籬にまつはりて、霧の絶まに、白、紫、紅、と、おのがじゝ咲匂ひて、朝いを誡め顔なる、朝顔の今朝は殊に美しかりしも、ひるの照輝く日の光りにえ堪で、あはれ果敢なく凋みぬ。葛飾の里より來し人の、話を聞くに、打續きし日照に、こゝかしこの村々にては、うぶすなの社に、夜毎、雨を祈るとかや、實に數ふればみそかも雨はなかりしに、地はさけ、路の邊の草さへ、枯はてんとす。まいて此頃は、そよとの風も訪れねば、燃立、竈の内にあるやうにて、露よりもろき玉の緒の、今にも絶なんなど、人毎にうるさきまでつぶやきぬ。ひる過ぐる頃曇れる空の、四時頃になりて、猶黒き雲涌出、はたゝ神の、遙になりひゞく音のするに、すはや夕たつならん、物取いれよ妻戸閉ぢよなど立さわぐひまもなく、稻妻の光きらめき、いよいよ近くとどろき渡りひぢがさ雨の、板廂もとほりぬべく、はらめく、いとすさまじ。一時程へてまたく雨もやみ、涼しき風の吹入るに、やうやう人心地して、絞らん斗り、汗にうるほへる夏衣の心地あしければ、湯あみなどして、身を清め、衣き更て庭に下り立に、早咲の秋草のよみがへりて、種々の花の、ゑみむかへたるもをかしきに、朝顔のあす咲ん蕾など數へをる折しも、楓の林の名殘露ちる青葉の影より、日くらしの涼しき聲の洩れくるもえならず、やゝ暗うなりゆけば、むかつをの松が枝に、ぬるゝかほなる五日の月の影ほの見えて、小萩のほとりにまだかたなりなる虫の、なき初めしも、秋にさきだちし事のひときは、おかしさまさりてなむ。

薩摩　松原峯子

七月十三日　五時ふしどを出て朝顔を見むとて急ぎ雨戸をくり開く。濃紅に淡藤のとり〳〵開きたるもはた開かむとするも皆露をふくみて心地すがすがしうなりぬ。なかにも珍らしく花の形さへ變りたるが今朝始めて咲き出でたるはいと嬉し。

さて家に入りて衣服など改め。部屋々々を掃き清めて主人を起しぬ。起き出でられて朝顔にうちむかひ目も覺めたりなど心地よがらせらる。

されど斯くも艶かしう咲きたるを山里の見ぜん人もなくあたらうつろはん惜しさとかこち居れば。なぐさめ顔に番ひの黄蝶のむつれ來りて。とまりつ舞ひつ花にたはむれ一層の風情を添へたるもおかし。

主人出で行かれしあと昨日ほどき置し夜具を洗ひ濯ぎにとて例の谷川へと行く。奇しき岩間をくゞりて流るゝ水の清けさ目馴れてもく〳〵あかず覺ゆるを。岸の楓などの青葉の奥より駒鳥の鈴ふりいでゝ鳴く聲さへいと涼しうもれ來りて。心のちりまでも洗ひ流して歸りぬ。

それより下女に晝の事共云ひ付置きて。しばし古今集をひもとく。

午後は冬物の張りたるを裁縫す。

堪え難きまでむし暑く。二時過ぐる頃よりは雷さへとゞろきて今にも夕立の來べきけはひなれば。干物など急ぎとり入れて待ちしも。此里許りよきてすぎけん甲斐なし。夕方菊朝顔などへ水を灌ぎゐたりしに主人もかへらる。

夜はしばし新聞を見しも。蒸し暑く虫さへ多ければ早くふしどに入る。

同十四日、主人起床前に故郷なる母上へ參らすべき文を書く。主人出勤されし後。昨日洗ひしものを張りてありしに。いまだ面識なき村の老人二人朝顔をとて訪へり。生憎今朝はありふれたるがただ三輪許りなるにいと口惜し。二人もすべなう葉莖のみながめて。あれ珍し是れよしと語り合へるを。今年始めてものしたる己れは何となう恥しうなりて。培養の法など尋ねれば。いとねもごろに經驗ある事共語り聞かせて。我つくれるも見せばや近きに來り給へ。又此蕾咲きなん頃には訪ぬべうと約して歸りぬ。

午後張り物を終へて古き女鑑女子の友などとり出で。床しき君達の歌文にうつし繪をながめくらべてしぬびゐたりしに。いつかき曇りけん。夕立烈しく降り來りて張りものをとゞ入るひまもなく。下女ははだしにて飛び出しあはてさはげり。

しばしは雷強くとゞろきて。いともものすごかりしがやがて晴れ渡りぬ。

夜は夕立の名殘の露しげき庭の面へ洸ひしやうなる月淸うさして冷し。手風琴かなでなどして十時頃迄端居せしにいよ〱淸き月は惜しけれど。肌寒さやう覺ゆれば松の板戸をとざしてふしぬ。

相模　野田貞子

八月二日、空うちくもりて、門田にさわぐ蛙雨を呼ぶことしきりなり。あゝ今日もまた雨かと思へば、わびしさやらんかたなし。そゞろ文机に向へば軒端の草木蕭々として是も雨をまつかの風情なり。

雨は蛙に呼ばれ、草木にまねかれ、しとしとゝ降りそめしが、そもしばしにて墨の衣は草木をわたる涼風におとなくぬぐひ去られ日は西にかくろひそが征矢はあらゆるものにおびせ、紅の雲は西に漂ひ、桔梗の花鮮かにたへなる香を送り、景色いとなつかしき夏の夕暮となり、四日月ならぬ三日月は、青白く西に光り、淡き雲細長く其の上を流れぬ。

月入りぬ、今を得顏に門田の蛙一つ鳴き二つ鳴き三つ四つさては箕もてはかるばかり鳴き立ちぬ。

一つ鳴く内に三つ四つ枝蛙。

八日、降りつゞきし雨、今日も雨かと起き出でゝ庭面に出づればうれしや日はうらゝかに青葉若葉を渡りて……葉末の露のそれに輝くも心地よし。

そもつかのま、麗かなる日は雨の衣につゝまれてあゝ又も雨かと天を仰いで嘆ずる九回。

夕にいたり雨は御山の奥に入り日は今民の子らに名殘をつげんとして西にあり。

月は淡き雲よりどんよりと光りせゝらぎ流るゝ小川のあたり影淋しき螢光を水にうつし何に驚きてか蛙の水にどんぶりと飛び込みし波動に光はゆらゆらと水中を飛びぬ。

能登　加野こひ子

築山のたゞずまひ、石燈籠の備はれる、春夏秋冬のながめ、げにかしこきあたりの別莊にもふさはしきわが園に水の流るゝ音なきこそ、あたら美玉にきずなりと、今日ふと思ひたちて、兄上及び弟の

健坊に加勢を乞ひて、庭に續ける後の森の麓より水を導きぬ。時正に九時四十分、時折涼風の軟々と、萩、竹、櫻の葉毎に渡るも見ゆ。

まづ兄上が眞先に鍬もて小川の岸を破れり、われと弟とは築山の麓をめぐりて深さ五寸ばかり、趣あるほり方をなしぬ。五分、十分、二十分已にして清水滔々として流れ來れり。築山の麓をめぐりて、老梅二もと三もと植ゑたるほとりは水勢やゝ急に、忽然として一尺ばかりの瀧をなせる樣、詩趣言ふ可からず、秋深うして、草間に喞く虫の音雨の如きたそがれ、紅葉せる朽葉のはら／＼と點ずるも捨てがたきながめならんも、降り積む雪の其れならで、香やはかくるゝ白梅の、ちらほらと咲き初めし如月の末つ方、一痕の夕月微茫として花の梢にかゝれる時にいたつては、眞に畵中の畵詩中の詩なり。萩、竹、山吹さては石燈籠の影鮮やかに宿れる邊は、さしたる趣もなけれども燕子花の咲ける邊は、可愛ゆき淵をなして魚も住まんず氣合、汀に櫻の二もと三もとありて、暮れ行く春の夕間暮、落花曲水の風情も自としのばゆ。

十一時四十分この優美なる工事は全くなりぬ。あゝ樂しかりしは八月二十日、自と微笑みの片頰に浮かばざるを得ざりき。

能登　高森いち子

曉告ぐる蓮江寺の鐘の音に驚かされて、今し夢より覺めし姿は、やをら起ちて緣戶押遣り、希望の光輝く夏庭に下り立てば、未だ明けやらぬ、み空には殘んの月色夢よりも淡う……冷たき朝露蹈みしだきつゝ籬のもとに至れば、幾朶の瑠璃露滴んとして、曉天の微風に輕柔を弄せらるゝ牽牛花の正に其蕾を、破らむとす、み空の色次第に榮えて、ほの／＼見ゆる旭日の光。此瞬間花は全く笑み傾けつ「おゝ兄樣は！戰地に在ます兄樣は、命短かの此花をこよなう愛でなすつた、妾の育てた此花を送つて上げたなら甚麼に御喜びなさることだらう」、斯く呟きし姿は、そが中のいとも大きやかなる三輪斗りそと拔き取りつ。

なつかしき兄君の許に送らんずる玉章漸く認め、扨て今朝取りし朝顏に名殘の接吻し終へて、靜かに封じこめつ。冀くば兄君のみ手に觸るゝ迄其色香共に變らであれ。

忽ち階下に「郵便ッ」と、消魂しき聲する間なく、後ろに影あり、「姉樣！命の二代目が」と謂ひつゝ弟の差出す一包み。おゝそは最愛なる女鑑にてありける、さては今日も樂しく過ごされつるか、人間僅か五十年、樂しく面白く暮らすこそ德なれ。

群馬　竹のふし子

門邊を過ぐる馬子のつぶやきを半ば夢に聞きて、臥床をはなれ、ほの暗き室の中を探りつゝ、支度調へ庭に出でぬ。仰げば空は名

残なく晴れ、稲を渡る朝の風は、神のさゝやきかと計り微なる音立て、青葉をそよがせぬ。あゝ朝の氣色の静けさよ萬象皆清くして新なり。吸ひ込む氣には些の塵もなくいと心地よし。かゝれば露に重かるべき襟の先にも塵はたやすく除かれぬ。やがて朝の務めも終へ、妹のすゝむる茶に樂しき團居の折しも、郵便の一聲に弟は早くも大姉樣よりならんと云ひしに、果せるかな姉上よりのお玉章なり。弟は玆に鼻を高むる幾尺、斯くて額をあつめ、父君の讀み給ふに、耳傾けぬ、妾は返し事認めむとて退く。晝過る頃、父上は園藝の友よりのお招きに行き給ふ。絶間なき蟬の鳴音のかしましく、殘りの暑さはいよゝ烈しく、寒暖計はまさに九十五の高度を示し、そゞろ氣も遠く、針持つ手も鈍りはてければ、物の本等を携へて、庭の彼方の木陰に繙きぬ。青葉は暗きまで繁りあひ、日の光は遠し、微なれども折々來る風には、傍の花園より姫百合の香を送り、いと心地よきまゝ暫しと思ひしものを幾時かこゝに過しぬ。夕餉終へ椽の端居に唱歌など口ずさみ居しに、妹はかけ來り、双の手を出して、お裏廻りお土産よとて千成ほゝづき出しぬ。鹽ふりかけて漬け置きぬ。夜に入りては、只一人机に向ひ、筆のすさびに、三枚程の紙を染め、猶もと思ひけれ共、攻めくる蚊の繁くて、防ぐによしなく、遂に思ひ止まりて臥床につきぬ。

岩代　菅野和子

八月一日、曇、稲田を渡る清風、そよ〳〵吹き來りて旅衣をひるがへしぬ。汽車の便りはあれど「ステイション」迄三里あり。寧ろ山越十餘里の道を健脚に驗さむ。一人旅もいと興あり。行々路傍の草に蛙の飛び入る音を蛇かと驚きては、小さき膽を冷やし、百合の花を見ては背よりも高き叢に恐れず分け入りて、手折などして往く程に名にあふ岩、磐の境、柳澤峠にかかりぬ。聞くさへ氣味惡きに、昔山賊の潜み居て、行路の人の財寶掠めとりしと、昨夜きゝて心にかゝりしが、今は人も馬も絶えぬぞうれし。神代ながらの古樹蓊蔚として嶮坂を蓋ひて小暗きに、足下數仭の溪流潺々として底に聲ありて凄し、此幽邃の去りがてに暫し憩ひて疲れをやれば、山の精谷の精、我を迎へて、名呼ばるゝやう、いとあやしうなりぬ。やがて歩みをつゞくるに、萬項豁如けたる所にいづ。玆は相馬が原なり、彼方此方野馬ならぬ飼馬の青草追ふて嘶く聲勇し之、より濱街道を下り、午後四時原釜浴場に着き、やがて海風靡波を起し、帆船悠より高く行かふ江南亭に宿りぬ。頃しも雲靉靆たる大洋天に連りて際涯なく、夕日に揺る金鱗眩く、えもいはぬ眺めなり。唯浩唯快山に住む身に海の心ならざる可からざるを思はしめき。近く眼を轉ずれば白帽白衣の男女、浪を勢ふ樣、河童のそれかといと可笑し。夜、波の音を枕に心地よくれむりぬ。

長野　細野撫子

八月二十五日
天氣いみじくて、暑さたえがたし。朝より裁縫す。吹く風もなげなるにをり〳〵風鈴は、やさしき音にて、長き藥玉の總は、無心にゆらぎぬ。鉢の金魚は、そも何に驚きてにや、俄にをどりて飛びたる水は、兄君が秘藏の朝顔、今朝開きし照君紫の君に宿つて、さながらそれよルビー眞珠の玉の樣、黃昏湯浴を終へて、浴衣の袂心地よく、朝顔の蕾など數へて、池のほとりをさまよふ。をりから妹も大きなる庭下駄を穿ち此の頃手づから植ゑし大事な〳〵酸漿に水など與ふ。湯あがりの頰を薄紅に匂はせて、きのふ洗ひし髮は、綠の瀧かと許り麗しかりき。

同二十六日
空清う晴れわたり、心地すが〳〵し。けふはミサヤマ、片山里の

ならはしに、茅の箸にて、小豆の飯を食するが常なれば、弟はとく起き出、近き野邊に、朝露わけて、はや穂に出し茅敷多苅りてきしをわらはゝ姉上と綠先にて、箸を造れば、妹は此大きいのは父上のよ、母上のは細くて長きのなど、打ち興じつゝやがて樂しき朝飯のまとゐもすみ、茅の殘りを床の花瓶にさしぬ。なりから床には、誰の筆にや、牡鹿の月に、紅葉を蹈める軸、柱には、黃菊白菊の小枝の斜に見下せる樣いと似つかはし。此日西の都なる兄君より物し給ひし屛風を繪つきぬ。畫題は落花吉野の落城に大塔の宮の爛熳たる櫻花の下散りしく花を蹄に蹴て令顏恨を含むで彼方をにらまへ給ふ御姿なりき。

越後　松永しげ子

八月一日雨

此の夏は間瀨の磯濱に、海水浴せましと、思ひ定めしに、故鄕の父母より休みとならばとく歸れかし、肥へたる畑の片ゑくぼ見たし、との有りがたき言の葉、もだし難くて雨の日門出しぬ、腕車の内、車窓の眺め、さしたることのあられど、やさしき情に浴せる今日なれば、心樂し、ねむの葉の眠りさめざる折にいでしがひぐらしの聲高きとき笑ひの聲に迎へられぬ、問ひつとはれつたのしく夕げす、樂しきかな歸省の此の日、

八月二日曇　墓詣で

赤き小百合二本携へて亡き友げん子の墓に詣でぬ、あはれ美しき花の世に匂はむとすれば、嵐こを散らしつゝ、殘りしいとし兒は二つとな、草かき別けて手向けしに、葉陰の蟲聲細く啼きしがあはれに涙催し立ち去るに蝶一つ香に醉ひたらむ如く、名殘惜しげに姿があとを追ひしか、

八月三日晴天　國分寺へ參詣

朝とく立つ途中見しもの、石油製造所、福島城趾、名古の浦濱午前九時國分寺の境內に入る、櫻は繁り紅葉は色なけれど、ゆかりあるこの庭おーそれよ、幼き折りより春秋かけていく年か尋れし所、蝶をおひ落葉を踏みて鬼事したる此處三重の塔も昔に同じ氷水をのみ八幡の宮へ詣づ、藤棚の下に休む浦風涼しう吹きて夏としもなし、緋鯉は池に躍り蝶は庭に舞ふ、はんもつくに笑ふ乳兒もかはゆらしく雜誌くりかへし給ふ學生も時によし、照子の君への文を認む、やわらけき君が御手に渡らむはいつ、おー鯉はまたおどりあがり蝶はとある露草の花に止りしが、時には吾のみ風は綴う葉を動かし筧の音一きは涼し、

名古屋　不破きみ子

七月九日天晴　來書二出書三

けさ未明、軒近う、豹あやしく吠えしかば、目を覺し屋內を見めぐりしに、別條なし、良人、起床直に散步運動に行かれ、己、朝餐の支度とゝのへ、前栽を逍遙し、日頃土かひ水やりておひ立てし、山梔の花只一輪、雪をあざむく色、け高う、にほひゆかしう、今年のけふ、初めて咲き出でければ、己より、まづ、良人のお目に入ればやと、急ぎ露のまゝ手折りて、机上に登し、良人の歸りき給ふを待つ、程なく歸り來ましぬ、されど花の色香を愛で給ふにてもなく、妾の心盡しと、よろこび給ふ樣もなし、實に、無氣なる我良人かなと、大に氣ぬけしぬ、

午後、號外來る、樺太上陸、コルサコフ占領の公報なり、晩景、子等を伴ひ、若宮神社祭禮に詣す、途中子女の乞ふ、テニス機械を買ひ與へ、歸り、伏床したり、

同十日天晴暑氣強し　來書二

良人、御役所に出頭せらる、

一來書の事柄は、某氏母君死去の報なり、本夏初めてうす物を着

用す、今日の新聞を讀む、折しも前栽の繁みより蟬の聲、初めて聞こゆるは、我等が、かこつ此暑けさに、時こそ來たれと、鳴きしきるならん、
夕景、巨人、市内散歩せらる、
來客二

和歌山　高内さくら子

八月十三日木曜日
空いとよくはれたり。朝より蟬のこゑかしまし。午後の暑さおもひやられぬ。朝煩終りて、庭に出で見れば、垣根の朝顔はじめて、花ひらきたり。うれしく、かけよりて見れば、二つは、こきむらさきにて、ふちしろく、一つはうすべにゝにしぼり入りなり、二つともめづらしとて、家内打ちよりてながむ。午後まちにまちたる女髪來る、いとうれしく直ちにひもとく。所濟（アラハマ）なる知己より、大なる西瓜到來す、弟等いたくよろこび、早速これを井戸にひやす。たそがれの頃より弟妹と共に、はし近く出でゝすゞむ。
八月四日金曜日
天氣いみじう、よくて暑さやくが如し、けい子の君より御手紙賜はる、いとうれしく直ちに返り言す。午後一時頃、父上役所よりひけ給ひしかば、きのふの西瓜取り出して、うちつどひ食ふ。味いとよし。夕つ方、あまりの暑さに、あはれ一雨もがなと、おもへどさるけしきだになければ、兄弟打よりて打水す、木々の枝葉よりは雨後のそれのごと、露の白玉ホタリ〳〵と地上におつ、見るからに、すゞしき心地す、折から冷けき風の、さつと吹き來りて軒端の岐阜提灯をゆるがし、風鈴におとづれて、可愛き音をもらすなど、心地いど、すが〳〵しくなりぬ。折しも親しき友の、とひ來りければ、端近う座をしめて、共に四方山の話しに時をうつしぬ。
八月五日土曜日
裏の梨の實よく熟しぬ、垣際の水引、庭の秋海棠、裏の桔梗、とくに花ひらく、午後二時頃空合少しく異しくなりぬと思ふ、間もあらせず篠つくばかりの大雨となり、とかうする間に神さへおどろおどろしくなりひゞきければ、おどろきて蚊帳の中にもぐりこみぬ。一時ばかり立ちて雨やみ雷もしづまりければ、雨戸おしやり外面見やりたるに、小池の水は、あふれて金魚二つうれしげにおよぎゐたり。ゆあみ後かろき浴衣の袖を夕風にあほらせて琴のお稽古に行く。

岐阜　中島秦子

八月六日。空晴れ暑さいみじ。朝戸あくるや郵便の一聲して、學友なる、花村愛子の、君より、いと懐かしき、寫眞に、玉梓そへ、送り給ひぬ。いよ〳〵嬉しく。こなた、文宵く事の、いと拙くて恥しけれど、取敢えず御返しまゐらす。あまりの、暑さに、たへ兼ねて、母上、はらから、諸共、今宵前栽の小川に涼みしに、そよ吹く風だになく蚊軍と戦ふのみなりき。さ夜ふけて夕立はげし。
八月七日。昨夜の雨、拭ひたらむやうに晴れて、一點の塵だになし。そよと吹く朝風に、未だ、醒めやらぬ夢もいと輕るやかに身装ひしつゝ、尾花、白萩、さては、をみなへし、など、打匂ふ庭づたひ、食前のそゞろ歩き、言ひしらず、心地よし。思へば、けふは月も文月七日とて、故事の一節なる、星の祭りなりけり。いでや昔に歸り、一日を樂しむとて、弟共と竹きり色紙きざみて、思ひ思ひに、歌あるは、古への諺など、書きたるを結びつけ、畑の物などそなへ、皆々、打興じつゝ、夕より散歩せむと、門戸を出で青海原とも、見ゆる空、打渡せば、西南の涯より北東さして長く流るゝ、一筋の、星の川あり、これなん、俗に云ふ、天の川ならむと打語りつゝ、やがて、細谷川のみぎはにたゝずみし、時、颯と、吹きくる秋の初風、いとも、涼しかりき。
八月八日。空はれたれど暑さやる方なし。樹影に鳴く蟬の聲、いと忙しう日かげ稍短くなりけるやう覺えぬ。學友なる、片山様、

例の如く誘ひ給へは共に、琴、點茶の、師なる岐阜にと急ぎぬ。午後四時頃わが家に歸り、諸共に日頃好める千鳥など、合奏で、さては、四方山の無邪氣なる、話しに、打興じ時刻のうつろも、覺えず、夕を、告ぐる鐘の音に、驚き下男善吉を、供して片山様、見送らせしに、母上よりの禮狀持歸れり。

能登　松下翠子

六月六日、雨。忌々しきは晝ふる雨。待つ友の遲き、轟く車のそれかと耳欹つれば、皆吾が門をば通り行く。たまさか威勢よき呼び聲にもしかと、立ち出づれば、郵便なり。姿を名宛の一通！いと不思議にて見れば、ゆり子の君より

散る櫻哀れとおぼす君にして
　などか返しのふみよこさざる

芳香めでたき濃紫、紫インキのペンもて、細う鮮やかに書き給へるは、女にもせまほしき御筆の跡。菫に似て菫ならぬその珍らしき花の繪葉書に。かく優しき人の筆の匂ひや、眞情に充ちたる玉章の、日頃山なすばかりに積りたるに、たゞ一たびの返しだにせで情なきものよと恐れつゝも、時鳥血に吐く思ひに過しつる、堪へ難き胸の煩悶は、人知らじな。いはでの山の岩躑躅、言はで果つべき事にあられば、また其儘打ち過ごすは、妾かまへて人を弄ぶなり。せつなき思ひに堪へ忍びて、机に凭りて紙を展ぶれは、胸はひきむしらるやう。筆の毛いと危しくて、墨の色もさだかならず、一行書いては破り、二行書いてはまた破り、書きたる紙は大方裂きて棄てたれど、遂に文をなさずして、妾に筆を投げすてゝ、悶えに悶え一時に高まる胸の動悸、明し得ぬ戀に泣くべき戀の涙の、果ては、床に入りて打臥し泣きぬ。

岡山　小山松枝子

空くもりたれど雨も降るまじと、朝まだき立ち出づ。小田の稻葉そよぎて吹きくる心地よさ、つぐろはぬ籬に、はひまじはれる朝顔のうすくこく色をきほひつゝ、この清き朝をわが世と咲きにほひたるもあはれに、むかひの山はうす霧につゝまれて、其影いと〳〵淡し。はや賤の男女は田草とりにと出でゆく勇しさ、心地よげなる顔に希望の光も見えて、ちりもまじらぬ朝の空氣を吸取るかれらの幸多さよ、げに、けがれを知らぬあしたの自然の景をながむれば身ものびらかに心も清々としぬ。東の天、雲湧らぎたれど、なほかほやける太陽をつゝみぬ。今に光かゞやくらん、と待たるゝもわれながらをかし。漸く市中に至る。老いさらぼひたる翁の草花あるは松の枝など小さきを、わづかばかり器にいれて賣りあるくあり、やしなふ人もなくてかとそゞろにあはれなり。かれこれ用を達すまに、日はたかく上りて塵ばかりの雲もなし、いそぎかへり路につきたれど、やくばかりなる空のたへがたさ、今までになき暑さなり。午後にはかに涼しき風のそこらあたりの反古を吹きちらすよと見るまに、黑雲一面にひろがり、なる神の音も近づきて、雨ふり出ぬ。しばらくしく晴れたる後のこゝちよさ、心身ともに洗ひきよめたるやうなり。あゝ朝のながめ、夕立の後のけしきこれぞ夏のいのちなる、いな身をも心をもやしなひておのがつとめはげむ時ならめ。神はそれ〴〵時をあたへたまふ、其時をいかすもころすも人々の心にありとは、思はずてやは。

備後　片山松子

八月五日東の空の漸々白む頃、起床して散歩す。瑠璃峯の麓に來りし時、大寶の峯より打出す明の鐘、餘韻嫋々として響きいひしらぬ感あり。海濱通りて歸れば、あな嬉し朝顔四ツ咲き居たり。後朝餉すまして裁縫す、午後よりは、殊に暑さ烈しきに玉垂の小簾卷きあげ、庭の葉より吹き來るしなとの風に、かつ〳〵暑凌ぎつつ、女鑑繙きぬ。石川様の〆切當日云々、同じ事にて、思はずほ

ほゝみつゝ夜は涼台にて、新聞見る、西の空には細く淡き三ヶ月の宜れに傾けり。
六日五時半起床、朝より幼き弟に七夕をさいなまれ、五色の紙にとり〳〵の存書き記せば、己が其かみも忍ばれていとなつかし。正午出來桁に立つ、をちこちの家々にも、早美しう飾られたり。午後裁縫す、夜郁子の君訪つれ給ひ、暫し語りて歸らる。
七日朝顔三ツ咲く、午前は裁縫し、午後はしをり二ツ編む。夕つ方弟等にそゝのかされ、散歩に出んとす。御空仰げは、常ならぬけはひにて、今にも夕立の來らん樣なれば止みぬ。とばかりありて、小雨降り出す、雨夜のつれづれさに談話會なりとも開かんとて、皆々打つどひ、幼き弟の學校にて學びし話等聞く。いと可憐なり、後兄上自分なども、古の英雄豪傑などの物語聞かすれば、打興じて歡ぶ事限りなし、思はず夜を更かし、十一時臥床。

鹽原　田中千賀子

八月四日。相變らず降り。本當に鹽原の雨の多いのには驚く。木村さんから國の光と。美人繪端書十枚御送り下すつた。いつもながら御親切な方。すぐ自筆の繪端書で御禮狀出す。お隣から歌留多會の招待狀來たから出かける。雨ひどく降て來た運動にも行かれず。退屈で仕樣がない。午後はお噺しやら讀書で暮してしまつた夕方から雨やんでしまつて。お星樣もお見えになるから明日はお天氣大丈夫らしい。
五日嬉しいお天氣今日は父上お出でになるから花でも取つ來ましようと。小野サンを誘ひつて例の白雲洞から前へ行た通ろ人に聞て見たら。大綱近いと仰たから。そこまであるいて。瀧も見てと坂な下りる。こゝの湯は大變二百段から下りなければならない。男女とも無茶苦茶で隨分甚々しい。巾の廣い瀧なんかあつて中々景色はいゝ、上りの時の苦しさ中途で息ぎれして下りたのを後悔した位。歸りに小い流れでお水戴た冷たいこと。苦しかつたのも暑いのも忘れてしまふ女郎花たくさん取る。なでし子は一本も見あたらない其時吉田さんのお歸になるのにお目にかゝるなんだかお名殘惜しい。家へ歸たのが十時父上お出でになると思ふので外ばかしながめて落ちつかない湯に入つて。來ても。まだ入らつしらない。どー遊ばしたのかしら。氣にかゝる。修善寺の春子さんからお手紙毎日淋しくて。あき〳〵するから鹽原へ行きたい等と愚痴仰ていらつしやる。尤もお一人だから其のはず。妹からは母上と合作らしい繪端書來た。十時頃までおまちしてたけれど。とう〳〵父上入らつしやらない明日かしらん。
六日上天氣今朝はやつと少し早く起た七夕のお歌頼まれたので小野さん皆さんで書く二三枚繪端書かいて見たけれど思ふよう書けないからよす十一時過ぎ父上入らしたパースの都合で昨夜は黒磯で。おとまりになつたとか色々お菓子の御土產ある
七日父上はおつかれでお留守番小野さんいよ〳〵明日お立ちになるので源三窟見物したいと仰るから御案内するお隣の新ちやんも御一處に皆さんよくあるきになる道に美しい花どつさり咲て。ゐたので取る午後別に變た事もなし。武田さんは私など留守の間にお立ちだつたらしい夕方大分お客あつた樣子夜はお夕宗ごとに中々綺麗鹽原もだん〳〵にぎやかになつてくるまたぽつ〳〵雨がお天氣かと思ふと降るし。降るかとおもへばお天氣。あてにならない歌留多して十時休む

肥後　德永廣子

七月も二十日あまり日々降りつゞきたる雨のいとさびしければ、つれ〳〵に覺けるをりしも、今日は幸ひ雨ふらず照もせぬものから、叔母君姉君とともに、平野村の鬼子母神に詣でんと志しぬ。迫間川の流なる年魚(アユ)かへりの瀧をながめばやと立よれば、汗もひぬべく、只白雪を打ちらすかとうたがふばかり水煙たちていとおもしろし。岩の間より水玉一尺ほども水面に飛ちり、それより瀧壺に落るさまはげに白糸といはんばかりうるはし。是れより菊池

神社に詣でぬ。神社の後門より縣道をたどりけるが、此の道は山林をひらける事とて、木蔭おほし。深山ならねど青葉がくれに、鶯の二聲三聲いとなつかし。かくて鬼子母神堂につきぬ。こゝはいとさびしき山寺にて、いとけはしげなる巖そばだち、其間よりわき出る清水をかけひにつたひて、庭前にながれぬれば、うれしくて手に掬ばんとせしが、彼方より老僧の聲あり雨しげきころに侍れば、茶めされよとありければ、いとありがたしと、僧の房にゆけば此方にもかけひありて、小池に落くる水のさまいと涼し。此房にて晝飯をなし寺内を去りぬ。此度は同じ道のみは興あらじと叔母君のいざなひ給ふがまにまに、菊池川の堤にそひてゆくに、此川も水淸き中島などありて、目前のけしきはいはんすべなし、暑をさけんには、此邊に一亭をむすばゞなど語りつゞけて、行ほどに、はやく築地村にぞつきぬ。ここに水車屋あり菊池川より水をひきたる流れにて、是は加藤淸正朝臣のうがち給ひし水路とかや、幾多の人その便なるをよろこび近年大なる紀念碑を建て、加藤侯の厚德をしたひけるとぞ、承る。此の上流には細川侯の治國の時は、名產の年魚(アユ)をすなどる梁(ヤナ)をうちて、國君の遊漁の一所なりしといふ。今も其なごりに、村民の年魚(アユ)とる梁(ヤナ)あり立よれば、番屋の内より梁に上りて見たまへとありければ、よろこびてあがらんとせしに、梁には水あかのつきたることとて、足すべりてあやうしとはらばひて上りぬ。川たたく間に二三尾の年魚(アユ)は梁におちけり。白たまとちる水沫にもまれるさまいとたのし。それより流にそひて、正觀寺に詣でぬ。この寺にしばしやすらひ、伯母君の奧津城どころに詣ばやと、寺僧に草花をこひて、二本三本おくつきの前にささげ奉り、寺を出て隈府の叔母君の家にかへりつきしは午後五時すぎなり。今日の日記の一節をかくなむ。

前橋　林　廣子

八月五日　ふとめさむれば、早や夜明けぬ、姉チャンと枕邊に弟の聲、常に似あはぬ早さよ先つ日よりまち〳〵し朝顏の、今朝は一入美く、弟の自慢せるも理なり。定の用事も終へつれば、髮を結び、今朝來し上毛新聞を見通しぬ。都に在す姉上よりお文來る、お情あふるゝ許りいと懐し、天氣朗かにて、木々の、梢に蟬のなく聲一入かしまし。

午後裁縫す、四時半食事の仕度にとりかゝる、六時一家まとゐの樂しき內に、食事は終へぬ。淸くすみ渡れる大空の月影木の間に、見えやがて水にうつりぬ、夜は九時床につく。

六日、日和惡し時々小雨そぼふる、女鑑やう〳〵着きぬ、姉上共々頭を合せまづ目次口繪等見る、あとは後のお樂にとて、やみぬ。昨日のしかけの裁縫をなす、夕方やう〳〵仕上げぬ。六時夕食、妹、弟は散歩に出かく、夜は女鑑をひもとくいつも皆樣のお作には感じ入る今更ならねど己が身の淺學をかこちぬ。蚊類に身體をおそひて堪へがたし九時前床につく。

七日、終日雨降る心地あし、土用中とも思はれず、妹弟は常の如く學課の復習に忙はし、後、妹はお向ふの輝子さんのお家にゆく午後妾は獨り師の君の許にゆく、御きげんよくて妾のゆきしを喜ばれ、いと嬉し其の歸るさ友が許を訪づれぬあひにくくお留守にて空しく歸途につく夜は、また女學世界、歌文集をひもとき、後、日誌を認め床につきしは十時過ぐる頃なりき。

下野　金子とし子

久しく音容に接せざりし親しの友、なつかしき師の君も相見ゆるさへ嬉しきに、まして古りたる机、低き腰掛さては壁間の落書など一として我等が幼き友ならぬはなき。紀念多き學舍に集ひて、相共に語り、相共に樂む事のいかばかり樂しきぞや。第一鈴の高くひゞきて、開會を報ずるに、さと子の君と相携へて會場に入り毋ぬ。會場は昨日男子同窓會が開會せられしを其まゝ使用せしなり

されば場内の裝飾は、男子及び女子兩幹事の手になりしものにて入口に亞鈴を高く積み上げて、門柱に擬したるに、造花の藤をあしらへたる、或は場内の中央に吊せる大なるくす玉を中心に、萬國々旗を縱橫に張りたるなど、美しさ限りなし。亞鈴の門柱及び國旗は、男子の手に、他は女子の手になりたるものとか、面白き配合なりけり。會長の開會の詞、幹事の會務報告終りて、來賓醫師神山先生の春日の局の話及び會員伊矢野まち子の家庭と主婦なる談話ありて、共に家庭における主婦の價値を論ぜられたり。其より我等一同は、日光に避暑遊ばさるゝ常宮周宮兩殿下の當驛を御通過あらせられ給ふを迎へ奉る。兩宮殿下は、御機嫌特に麗しく、車窓近く立たせ給ひて會釋し給ふを恐る〳〵拜し奉りて、歸校し晝食をすまして餘興にうつる。水戶黃門記の一節、孝子孝作の傳及び赤穗義士狹間重十郎妻の貞節の講談に感じ入りて、われしらず袖ぬらしつ。在高女會員の遊戯を見、合奏を聞きて妾等は過ぎし昔に返りて、よし子の君の美音を師の君のいたくたゝへ給ひし事、動物採集に出でゝ野路に日暮たりし事、或は和賀井先生のこの校を去らる前日、一堂に會して告別の詞を述べられし時、我は泣きて別を惜みたりし事、さては妾等が此校を出づる時奏されし螢の光にいひしれぬ悲しさをおぼへて、尙奏樂の耳朶にある心意せらるゝ事など、其より其と思出さるゝなりけり。やがて奏樂も終りて來賓の椅子取あり。來賓は動物の採集にともなはれ給ひつる藤沼師を初め、和賀井師など皆妾等の舊師にして、音樂に連て演ぜられたり。かくて我樂しき同窓會は、茲に終をつげぬ。噫樂しかりし事よ。

短歌

陰暦七夕の夜　磐城　須摩子

夕立の露また消えぬまつが枝にすゝしく照れるなつの夜の月

夏の夕なき父君を思ふ　伊豫　益田春子

父ぎみのめでし白ゆり花咲きておもひ出おほきなつのゆふくれ

久間山行軍の兄君を思ひて　同

すみ渡るこよひのつきを兄君はいかにみまさん久間のやま路に

螢　淡路　けい子

火の花と砕だけて散れるほたるかな宇治の川瀬のゆうくれの空

社頭の蟬　飯能　谷泉記

あまつかみ花の宮居も衣をぬぎてあなば社頭にせみのかなづる

すゝき　前橋　林廣子

やさしやな吹く秋風になびきつゝむつぶ少女を野邊にまねきつ

友人高田秋子の兄君の出征を祝ひて　長野　田島みよ子

君がため戰のにはにうち出づるますらたけをぞ神まもりませ

同　同

黄金色のとひのしるしを胸に掛て歸へりきまさん時なしそまつ

歸省の折友となしき秋を別ちて　伊豫　廣田薫子

樂しみつ行く手をいそぐ心にもまたふりかへるけふのわかれ路

歸省の折汽車のうちにて　同

大御代の惠みぞうれしけふはこゝあすは千里をへたつふるさと

月　和歌山　高内さくら子

さやけさや玉のうてなもしばの戸もひとつにてらす秋の夜の月

折にふれて　伊豫　廣田政美子

なにとなくよべ見し夢のうれしくてたゝずむ園を胡蝶舞ふなり

古稀の賀莚に侍りて　同

かぎりなき春秋をへてけふの宴むかしかたりと君はなさなむ

籠鶯　伊豫　廣田せき子

花の香を籠にそめけむにほひ鳥夏をよそにもなきしきるなり

戰死せる軍人の未亡人をしのびて

肥後　德永廣子

いさぎよくかたることばの下かげは泪の露のひるひまもなし

朝顔　薩摩　松原みれ子

見せまほし人をまつまにあやなくもいろうつろひぬ朝がほの花

夕立　本郷　日暮郁子

ほどちかき畦が伏やもみえぬまでたのもはげしくゆふ立のふる

蜩聲　神戸　今西みさを子

しげりあふ梢々に鳴くせみはともよびかはすこゑかとぞおもふ

秋夕　同

かなしさも桐の一葉に知られけり露おきそむる秋のゆうぐれ

茅蜩　牛込　瀬藤ちよ子

單衣すゞしくなりし夕まぐれあはれを添へてひぐらしの鳴く

初秋風　岐阜　中島菜子

ひさかたの星のひかりもすみ田川わたるたもとにあき風ぞ吹く

瞿麥　和泉・中江なほ子

ゆかしくもさこそみ國の名におひて千代もにほはめやまと撫子

雨後月　和泉　中江なほ子

夕立のみかきすぎにし月影はくも間にかけしたまかとぞ見る

野　岐阜　中島もと子

村雨のふる野のおくに分けくればむかし岩家のあとぞのこれる

山里にて　奈良　栗山たか子

杉村にかしましく鳴くひぐらしのこゑに夕日のかたむきにけり

深山鹿　奈良　栗山俊子

秋ぎりの立へだてたるとほやまの夕のつきにさをしかのなく

折にふれて　三河　榊原てい子

つゝの音はしづまりはてゝ衛兵のたつかげさびし奉天のしろ

同　同

人の世のわづかその日の煙りさへやすくは立たぬものにあるか

友より越せし手紙を見て　岡山　黒瀬まさの子

いにしはる別れをしみしともがきの露のさはりもなきぞ嬉しき

庭萩　大和　栗山たみ子

まはぎはら分ゆくそでにちるはなの露にぬるゝも哀れなりけり

吾が家より十町あまり山手に瀧あり去る日そこにてよめる　滋賀　大宮求馬子

きてみれば谷のしらたき音たかくよになかれたるなこそ淸けれ

折にふれて　越後　しけ子

わが胸はいたみにふれて古さとにかへらむゆふべ君なつかしき

山家鹿　肥後　秋吉輝尾子

風さそふま萩のつゆをわけながらなくなる鹿はつまやこふらん

橋月　同

行みづのそこのまさごもみえにけりちりもくもらぬ橋の上の月

行路霧　同

ふみなれし道さへ今朝は迷ひけり八重たつ霧のさきをとざして

紅葉　同

百千鳥囀するはるのはなよりも千々にぞ染るこずえゆかしも

河時雨　同

今ははやはるなとみへしひまもなく立田の川はしぐれふるなり

田霜　同

萌生る小野の田面を今朝みればおく霜しろくおきわたしけり

歲暮鐘　同

鐘の音のみつよつ二つたそかれにひゞくは年のをはりなるかな

朝草花　同

今朝みればまだ夏ながらおもひきや野べは千草の花がさんとは

古寺鐘　肥後　佐藤玄子

詣てくる人もやどりてふるてらの夕さびしきかねをこそきけ

七月の末つかた梅齋軒に鶯なき聞て　肥後　德永廣子

梅園に聲なしのひてくりかへし青葉がくれにほとゝぎすのなく

同　同

日さかりのあつさもよその梅園はきくもゆかしきうぐいすの聲

短文

螢

前橋市　林　廣子

とりて集めん。終夜文よむ窓の友とせんも一入、日頃のうきも何處にか空ゆく雲とゆきかひて、心もいとゞ爽になりつるぞ、あはれ獨窓が邊にイみて、螢雪をあつめ文學ひし人もありしものなと、物語れば、さる心知るや知らずや、今一入光は添へられぬ。此樂しき夏もすぎたらば、汝は何處に行くらん又こん年はとく來に、やよ螢とこしなへに清き光をな失せそ。あはれさても愛らしの螢なる哉。

照子の君へ

越後　松永しけ子

君が御文を見まほしさに、かよわき足もて名古の浦までかけつけ、女子文壇購めむとしたるも殘りなしげに口惜しく歸てより好める女鑑をのみ携へて國分寺に詣でかのおばしまによりて添ひ昔を思ひ出で候櫻盛りの折は追ひつ追はれつやさしの蝶を羨かしき事の候よ、紅葉の色ある時は友と尋ねて赤きをかざしにしたる事も候ものを今日こゝに參りたるもなつかしき君が傍を思ひ浮べむとの業君あやしき千鳥のあとなとゝあまりに謙遜に入らず御直筆の文なりとも給へかし有りがたく抱き申さむをさりとてはしたなき者よとて御目にとまらずば詮方なくて候へども情ふかき君にはさるつれなき業はよもはべらじと千よかけて頼み奉る、君世の文壇上の爲め自愛したまへよかしこ

名々志千代子の君に奉る

石川縣　軍國の女子

私、貴嬢に艶書送つた覺えありません。斷然無いです『貴嬢の手蹟らしい』まあ驚いたれ！、私に左樣な勇氣が有れば、今迄此處田舍にぐず〳〵しては居ませんよ、縦へ上げたにしろ彼の三十一文字が返事ですか、それは兎も角「などか返しの文よこさゞる」とは何です。それとも返事に又返しがいるものですか、愚なる私には少と解しかねます、君はたゞ人の感情をおもちやに遊ばしたのです。——あゝ。‖今後何を被仰つても御答は致しませぬ。御仰の通り私心が狂ふてゐるかも知れません、終りに一寸御手紙を下さる丈は是非御免下さい、地に伏して御頼ひ申ます。

姫百合

福井　岩橋花子

お向の家で水を汲み上る音に、目をさましたのが五時に近い時起き出て窓をおし開いて見るのは村園の山、春は霞に冬は雪に今は夏の靄とて緑りが深くまづ、目がせい〳〵して、それから室内の掃除をするのである、ふと庭をながめたらうす紅の姫百合が只一輪咲いて居る、まあなんて可愛だろうと急いで庭に下りてかけよつた、なんて美しい色だろう、なつかしい姿だろう朝がほの花やその外の夏草が白く紫に咲いて居るけれど、どうしてこの花には及ばない、見れば露さへ宿して居つて花のゆらぎに散るのである、實に罪も汚れもまだ知らぬ、幼子の、ふくよかなる愛らしの顏に笑たゝへたるそれの樣。

今樣

樺太占領

福井　岩橋花子

仇しの露にいくとせも　汚されにけるかば太の
島もふたゝひ美はしき　御國のひかりあふぐなり

評　威風堂々

漁村　　たか子

せとに懸たる網の目にかゝれる月はすみながらか
やりの煙茂げゝればくもりて浪の影くらし

評　餘音嫋々

朝顔　　近江　治子

野に落つ月は細くして　露に情をうつししが
やさしき花も萎くさの　弱きうらみをのこしけり

評　幽艶

樺太の恢復　　岩代　菅野和子

サガレン島は露西亞國の　しばしの勢につきしかど
天に裁決のみ神あり　正義の我に降りけり。

思ひ　　東京　田中千賀子

さやけきこの夜窓に凭り　思ひは遠きとつ國に
仇うつ君のいさをしや　雲間をいづる月のごと

新體詩

盲者の献金を承りて　　肥後　徳永廣子

身體はつぶうるはしく　父母にさづかれる身を持て
世のうきふしをなげきつゝ　かこつ人のみ多かるを
不具との生れし人の身の　あはれはいかにそもいかに
まして盲者のかなしさは　知識も才もあふれても。
ものゝあやめもまきまへぬ　心のうちぞあはれなる
されど目くらにかんずべき　人こそありけれ我郷に
氏は森山名は法玉　家は貧しき家なれど
をさなき時より習ひえし　筑紫の琵琶に上達し。
これを日ごろの業として　目はみえねども兩眼を
そなへし人もをとるべく　杖をたよりに只一人
都をはじめ津々浦々　あまねくふまぬ所なく
今は九州遠近の　市や港に身をよせて。
つとめたりしが去年の春　日露の軍始ると
きくやたゞちに歸國して　赤十字社にぞ入にける
しかのみならずたくはへし　金を役場に持ち來り
些少ながらも御軍の　御用にたてゝ給はれと。
いだせる金は二十圓　金におどろく役人も
かん心なして問ひければ　世にすてられし不具の身の
かくも安けき月日をば　おくろも一面に皇國に
生れし民の幸なりと　よろこぶたひに大君の。
恩の露のかしこさは　いはんすへなくたふとしや
かゝるをりこそ賤の身も　おもふ心の萬分一
つくさまほしとかたるにぞ　聞つる人もひたすらに
かん心の外なかりけり　かくて其日もすぎ去れば。
敵國降伏つはものゝ　無事なる身をばいのらんと
一室内にとぢこもり　霜おく朝のさむさにも
しのゝめつぐる鳥におき　うがひ手水に身をきよめ
心つくしも百日の　ながき月日をわたりけり。
いかに盲者の身ながらも　あはれ日本の男子也
かくも忠君愛國の　心にとめる民草の
心つくしのかひありて　我日本の大勝利
さればかしこきあたりより　御木盃の一組を。
下し賜ひしたふとさよ　人は一代名は末代
盲者の身にはあまりある　ほまれなりけり名譽かな

心なりけりいかばかり
世にもまれなるま心に
うれし泪にむせふらん
かんせしままにかくはなん。

評　愛君憂國の情藹然掬すべし

田舍の曉

さつき

尾花の袖におく露の
松虫鈴虫きりぎりす
身にしむばかり哀なり
遠山里に衣打つ
うれしき思はいやまさり

風にみだれてちる野邊に
なのがさまざま鳴聲は
霧さへはれぬ朝まだき
音もかすかに聞えきて
しほるゝ涙のぬれ衣

朝顔

本郷　星野千代子

籬に匂ふ朝顔の
みどりしたゝる袖口の
花のま袖のさゆらきに
あたりすゞしくみちみちて
此花笑ひ此朝げ
しばしや此所に休まなん
花すり衣折りかざし
秋のしらべに事寄せて
咲く花かつら色も香も
匱くもゆたけきませ垣に

朝の露のほゝゑまひ
ほころびそめしはで姿
こぼれてにほふ花の香は
足もそゝろにえ立たぬ
實にいと妙の天ひめも
風にまかせる羽衣の
はえある聲に音も高き
月の宮居のほぎことを
たくへて舞へや朝つゆの

名もなき里

能登　加野こひ子

名もなき里の
名もなき野邊の
晨は露より天の使女
名もなき村の

前にひらけろ
夏草の花
夕べは風より地の國神
僧士は歌ひ

名もなき家の
双つの命

處女は戀し
永久なる

嫁げる妹を思ふて

岡山縣　黑瀨まさの子

同じ窓に起き臥して
惠みの露を受けし身の
世にも美はしあのホーム
人の見る目も羨まし
など斯くまでに果敢なくも
涙に明し暮すけふ
心細くも思はれて
軒端に落つる一しづく

同じ師の君の
春子樣や秋子樣
一家の主婦と仰がれて
それに引きかへ其の許の
邪見の下につながれて
思へば今更世をうらみ
折しもそゝぐ村雨の
思はず袖をぬらしけり

夕顔

磐城國　三森すま子

暮れ行く空に笑みそめし
賤が垣根に匂ひ出で
花は咲けども言もなく
打まもりつゝ短夜の
更くるも知ら　おろかさよ

露もしたゝる夕顏の
今宵の月を待つものと
語らんすべもなかりけり
光涼しき月影に

夕暮

前橋　廣子

ひろの暑さもどこへやら
ひとりさびしく門が邊に
讃美の聲のきこゆなり
なぐさめ玉ふ心根か
樂器の音もいとたへに

吹く涼風にぬぐはれつ
そみ居ればいづこにか
母なき我を知り居てか
たえんとすれば又つよく
ひとしほ聲もすみわたる



英國皇后陛下の御盛德

英國皇后陛下が今春南部歐羅巴御旅行の際某所に於ける拜謁者に語給へる事實なりとて近着の同國新聞に記されたる記事は我等が同盟の國母陛下の御盛德として讃仰し奉るべき御物語なり下に其御談話の一節を譯出して陛下が一の婦人としての極めて完全の思想を有し給へるを仰がんに陛下は先づ我等は政治を談ぜざる可しと宣ひ更らに皇后の職分は左の如しと述べ給へるは約そ皇后の職分たるや先づ其の子女をして完全なる高貴の地位に副ふべく敎育するを第一として次に不幸に沈み痛苦に陷いる者を慰藉すべきにあり現代の如き困難の多き時代にありては下民の不平逐日に昂まり行くは當然の趨勢にして而して此現象の昂まる丈け夫丈け我が責任の重くなるを免れず、尙また他日此問題を解決する場合には正義と慈愛の働きをなし得べき婦德を有するを必要とすべし、紳士諸君が戰爭を談ずる間に我等は平和を說かざる可からず、實に然り此心掛を現實にせんと勉むるは皇后たる者の最善にして且つ又婦人として最も愉快なる事業なりと信ずるなり、正義に富める王者の學校にて敎育せられたる我は唯慈善と親愛のみを說かんとする者なりと語り給へりとぞ誰か此記事を讀みて襟を正うせざるものあらんや。

米國貴賓の來遊

珍客來れり、太平洋滊船會社のマンチユリア號は桑港より偉大なる二個の男女を乘せて東洋に送り來れり一は米國陸軍卿にして次期の大統領を以て目せらる丶タフト氏、他は米國大統領の令孃にして交際界

の女王と崇めらるゝアリス、ルーズベルト孃共に米國の男女兩性を代表する著名なる模型的人物なり、之れに加ふるに同國の上下兩院議員等夫妻約七十餘名隨伴し來れるあり。

船はホノルヽを經由せるによりて、右兩氏等が日本に於て大に歡迎優待せらるべき豫報を朧げながら耳にするを得たりしかば、船長は一行の一時も早く日本に着し一時も多く日本の友情に親しましめんことを欲し同港を拔錨するや船足を出來得る限り敏速にし平常ならば二十六日(六月)は横濱に着すべき豫定なるを、二十四日の午後七時比には既に近く觀音崎の沖合にさしかゝり廿五日未明には早くも劔ケ崎を通過するの運びに至り夫れより稍々速力を緩にし同日七時港外なる檢疫船にぞ一先づ投錨したりける。

投錨後間もなく小蒸滊を本船に漕付け檢疫の終るを今や遲しと待ち受けたる記者は同八時許されて漸やく本船に乘移るを得たり一等室の階段を上れば程なくサルンに來る、サルンの裡、幾多の米國紳士は各自一樣の紙片を手にして立てるあり、座せるあり上陸後の打合せを爲せると覺ぼしく、人の出入亦極て多く一時は雜鬧を極めたるが打ち合せも了はりて立ち去る人の漸く多くなるに伴れ、其の集團の中央の卓を擁して高聲に雜笑せる人こそ見出されたれ、鼠色縞セル地の背廣を着し、骨格飽くまで逞しく肥えふとり、顔は圓くして飽くまで肉付よく赫く、鼻下に茶褐色の多きに失せざる八字髯を蓄ふ、一笑三尺の兒童も親しみ得べき愛嬌を湛たへ、音吐の輕快にして洒落なる、態度の沈着にして應揚なる、一見是れ群鷄中の白鶴、其動作の極めて平民的にして、服裝の極めて質素なるうちにも自から犯すべからざる氣品を備へ容易に他に混同すべからざる一人物、言はずして歡迎の目的者たるタフト氏なるを知るべし記者の機を見て刺を通ずるや氏は滿面の愛嬌を湛えて熱心なる握手をなしつゝ「意外なる處に意外なる歡迎を受くるものかな」といひ、前々日海上にて可なりに猛烈なる風雨に會したることより横濱の氣候

などを談じ、我小村外相も既に着米したるべきことども談は漸う〳〵多方面に入らんとせしが他に訪客多く、殊に上陸前の多忙なるを見るものから徒らに遠來の珍客を困さんことの心なき業なるを慮かり、對談は極めて小時間にて切上げぬ。

恰かもかゝる時なりし、出入繁きサルンの裡に年若き美はしき一女性は飄然として入り來れり、恰かもタフト氏の據れる圓卓子の側に立ち、折からタフト氏と言葉を交しつゝありし米友協會の某々氏を捕らへ婉然口を開きて極て早口に出迎の好意を謝しつゝあるもの、之れぞ、かよはき一女性の身ながら萬里の波濤を蹴つて日本に來遊を思ひ立ち米國女性の面目を一身に負ふて立てる、健氣にも華美なるアリス孃なれ。

孃の服裝も亦極めて質素總體純白にして頸部と腕部と而して裳裾にレースを編み出だしたる着衣の上に稍長き藤色リンチルの上衣を被り、右の手には方形の黄金造りの小さな印籠如きものを携へたり、帽子は經木白眞田の編方稍々細かなるに白薔薇を葉付のまゝに作りたるリボンを結へぬ骨格は中肉中身にして容姿は絶美といふ能はざるも亦比較的美と云を失はず、殊に目元の涼しく唇邊に萬斛の愛嬌を堪えたる其風采態度の活潑輕快にして、何處までも無邪氣に、無頓着なる物ごしは、孃が聞きしに違はぬ米國交際場裏の花形となれる特色なるべく、其美は到底日本淑女のそれを以て律すべからざる處にあるものゝ如し。

記者が孃に近付かんとせる時、孃は例の活潑なる歩調にてあはたゞしく室外に出で去り、此時既に孃の着席を待ちあぐみたる朝の食堂に入りたり、食事果てゝ船房に入れる時は船已に漸く棧橋に近からんとし、直ちにタフト氏に擁せられて甲板上に去りたれば、親しく談話を交ゆるの遑なくして止みぬ。

船は多數の滿船飾を爲せり出迎船と前後して九時棧橋に着しぬ、マンチユリヤ號が一萬數千噸の巨船を以てして棧橋に横付けとなれるは今回が初めてなり

アリス孃とタフト氏は他の一行と共に中甲板と棧橋に面せる鐵欄に據り、橋上歡迎の爲めに雲集せる内外の紳士貴女を見つゝ極めて滿足せる體にて其上陸を待ち受けたり、此間アリス孃はたえずタフト氏と共に在り、恰かも其父にあまへる如き態度にて饒舌嬌舌を弄して止まざりき棧橋より船に梯子を架せらるゝや兩珍客を先導として中甲板の入り口に出でしが、茲にて米國公使グリスカム、周布神奈川縣知事、市原横濱市長、其他宮内省、外務省等よりの出迎を受け一々握手の禮を爲し、導かれて梯子を下りたる時、横濱市は市原市長の令孃をしてアリス孃に一束の大なる花束を贈らしめ、婦人矯風會亦た同樣の花束を贈りぬ。

一行はかくて棧橋上を徒歩にて進み、全く人々の注視の焼點となれり、物數奇なる内外人は今こそ時と其携へたる寫眞機を開閉するに忙はしく、棧橋上の光景は船に於けると變はりて一層繪畫的なる趣きを添へたり、米國屈指の豪傑的男性と、女性とが手に花束を携へ、黑く塗りたる棧橋に白衣の裳をひるがへしつゝゆく、實に一幅の好畫題に非ずや。

棧橋を出づれば兼ねて待ち受けたる宮内省の馬車あり、タフト、アリスの兩客はグリスカム氏等と共に車を同ふし、沿道に雲集せる内外人の歡呼を受けつゝ横濱市民の心づくしなる本町一丁目の大綠門をくゞり、日米兩國旗のトンチルの間を通りて十時四十五分横濱停車場發の特別列車に投じて新橋に向へり。

扨て同日午前八時三十分日比谷公園に於て擧げたる數發の狼烟に米國佳賓一行の横濱着港を知りたる東京市民、市府名譽職員、各團體等は期に後れじと東西南北より思ひ〳〵の旗押立てゝ新橋停車場に雲集する人、數を知らず、午前九時三十分頃には停車塲附近は往來の留まるばかりの人出を見るに至れり。

▲貴婦人の一團　停車塲外の光景は殊に裝飾に意を用ひ天に飜る各國旗林立せる各團隊の彩旗等頗る美觀を添へたるが停車塲内には亦愛國婦人會篤志看護婦會等の貴婦人の一團いづれも盛裝を凝して水色

の絽の涼しげなる夫人あれば空色縮緬の裾模様美くしき令嬢あり蘭麝の薫蒸すが如く停車場を籠めぬ。

▲一行の到着　十時五十五分の着車期に迫り歡迎の一行はプラットホームに入り貴婦人の一團を先にして順次に一側に整列し着車を待つ内一行の乘車の通過するを見て芝浦にて打擧げし歡迎の祝意をこめたる煙火の響五六發聞ゆる間もあらせず同列車はプラットホームに着するや歡迎の人々は潮の寄するが如く下車せる一行を擁して垣をなせり

▲ルーズベルト嬢　この時愛國婦人會々長岩倉公爵夫人、副會長鍋島侯爵夫人は進んで嬢に花束を贈りしに嬢は滿面の笑を以て之を受け續いで多くの歡迎人に或ひは握手し或ひは會釋しつゝ遺漏なき滿足を與へたるは流石に米國交際社會に鍛錬されたる交際術の巧妙なるを思はしめぬ嬢は芳紀廿前後に見受けられ痩形の容姿端麗なる佳人にして服裝は橫濱着前に船中にて改めたる服裝のまゝにてラブインダー（藤紫色）のスコルト白色のウエストにレースのチクタイを眞珠のブローチにて留め丈すらりと高く優雅なる容貌と瀟洒たる風采とは人をして自ら尊敬心を起さしむるものなり

▲タフト陸軍卿　かく一方にはアリス嬢が萬遍なき愛嬌をふりまきて歡迎の謝意を表はするに忙がしき間にタフト卿は田中宮相佐久間大將其他圍繞さるゝ我文武官諸歡迎人に一々握手をかはしつゝありその群を拔ける長幹肥大なる偉風は坐ろにその人の人物を思はしめ笑を湛へつゝ人と語る溫平たる容貌はいかに德望の高きかを表示するものゝ如くなりき氏は當日霜降の背廣に麥藁帽を戴き上衣の見返しに一枝の櫻花を挿し居たり

▲改札口の握手　かくてルーズベルト嬢は長崎式部官に扶けられ又タフト卿は寺島伯爵夫人と相携へ寺島接待員及び高橋新橋驛長の先導にてプラットホームを出で改札口を通過する際其處に出迎へたる德川公爵及び德川伯爵などに再び握手の禮を行ひ萬歲の歡聲破るゝばかりの中に嬢は長崎夫人及長崎式部

官、米國公使夫人と同乘にて米國公使館に入りタフト卿は同副官及寺島伯同夫人と同乘にて芝離宮に入りたり。

▲一行の歡喜　これに續いて一行の賓客はいづれも宮内省より差廻されし馬車にて芝離宮又は帝國ホテル、メトロポールホテル愛宕ホテル等に入りたるに塲外の歡迎各團體は馬車の通過する毎に樂隊吹奏あり萬歳を唱へ帽或は米國旗を打振りつゝ歡迎の意を表せるに活潑なるルーズベルト孃は四方を見廻しつゝ手を擧げて會釋をなし公衆のこの歡迎に非常に滿足の樣子に見受けられたり又その他一行の人々も車中より帽子を打振り同乘の夫人も双手を擧げて答禮しいづれも盛なる歡迎に欣々たらざるはあらざりき。

▲一行の櫻花の徽章　一行は何處にて用意せしか櫻花の造花を胸に挾み居たるは日本を愛するの意を表したるものにて歡迎の人に少なからざる快感を與へたりき。

▲停車塲外の雜沓　停車塲外の廣塲は歡迎者の馬車と一行の爲差廻されし宮内省の馬車等にて無慮三十餘臺に及びたるを以て一時は馬車を以て埋まるばかりの有樣なりしは空前の盛觀なりき。

大山侯爵夫人

我が上流婦人は時局に對し活動しつゝある中に大山侯爵夫人の如きは戰爭の始まりしより以來殆んど家事を顧るの暇なく篤志看護婦人會の理事として又愛國婦人會の理事として其他婦人會に關する各種の會に出席し疲勞してお歸になると令孃は夫人の傍にて新聞紙を母君に讀み聞かせ參らせ又澁谷の豫備病院よりのお歸りの遲き時などは自から母君をお迎ひに參らるゝ事もありて共に歸邸されまた常に邸内に在すときは出征軍人家族慰問婦人會の爲めに有志より施與されし衣服の古るきものを洗濯し縫ひ直しては軍人家族の貧しきものに惠まれつゝあるが夫人は人

も知る如く津田梅子氏等と我國卒先の留學生の事とて能く英文をも操らるゝより我上流婦人活動の狀態につき米國の雜誌杯に投書さるゝも屢々あり夏の初めにも『コレヤース、ウキークリー』といへる雜誌に一章を寄せ貴婦人活動の狀況を通信されし終りに『一つの願あり他にあらず若し本誌の讀者其他にして日本漫遊を思ひ立ちたまへる折しも戰爭の爲めに或ひは遠慮して中止されたる人の多くありやせんかと思へるなり然し我が日本は戰爭の爲めに遠來の客に對し萬不都合いな危險など與ふることは更になし來つて戰捷國の光景を觀らるゝも興深かるべし兎に角に戰爭の爲め日本漫遊を中止さるゝが如きは全く以つて取越し苦勞と云ふべし』云々と書かれて米國婦人に日本の態度を發展することにつとめつゝありしとぞ。

米國に於ける我柔道

日露戰役に於ける皇軍の大捷は即ち本邦の精華とも稱せらるゝ武士道發現の結果にして又其の武士道は我國獨特の武術に依りて修養せられたるものなるを思はゞ終に歐米諸國に斯道の歡迎を受くるに至りたるの偶然ならざるを知るに足らんか近着のワシントンタイムスに依れば目下同地滯在中の講道館六段山下義昭氏は同伴の門下生と相謀り去る六月三十日同府ラハエット座に於て柔道講演會を催ふしけるに我が高平公使を始め日米官民多數の參觀者あり非常の盛會にして小柴三郎氏の「日露戰爭の說明的演說」「柔道の眞價」「柔道原則の說明」及び山下氏、同夫人の「勝負の形」「投けの形」等ありて觀客の拍手喝采裡に終演しけるが氏は嘉納門下の高足にして二年前サミユール、ヒル氏の知遇を得て渡米し忽ちにして其妙技の喧傳せらるゝや名譽ある大統領ルーズベルト氏を始め二令息及び同地知名人士の入門せるもの其數舉て數ふ可からず傍ら北米合衆國海軍兵學校柔道教授を囑托せられ併せて斯道の普及に努めつゝあり夫人も亦柔道に於ては巾幗社會第一流の堪能家にし

て渡米後山下氏を扶けて日も是れ足らざるが如しと云ふ因に前記の講演會は山下氏が本邦柔道の眞價を知らしめんが爲め大統領の賛助を得公會塲に於て堂々開演したるものにて今後時々開催の筈なりと云ふ以て如何に我が柔道の米國に於て歡迎せられつゝあるかを知るに足る可く併せてプロフヘッサー山下氏の名はマダーム筆子の名と共に北米の天地に馳せつゝありとのことなり。

日本婦人と俘虜との試合

（薙刀と劍）

京都武徳會劍術部の中に薙刀の一部ありて舊龜岡藩士美田村顯教氏が教授を擔當し四十餘名の妙齢婦女は後鉢巻襷掛の雄々しき姿にて日々稽古を勵み居れり、伏見收容所の俘虜は此程武徳殿に至りて此の演武を參觀し日本婦人の勇ましき試合に就いて舌を卷きし様子なるが中には我等武運拙くて日本男兒にこそ敗を取りたれ斯かる優しき美はしき女性に向ひて何とて後方を見すべきや願はくは露西亞流の劍法を以て一度試合に與らんと言ひ出したるに斯と聞きたる日本婦人は偖も健氣なる詞よ成るほど日本刀の味は戰塲にて思ふさま聞召されしならんが日本女子の薙刀の尖先は尚試み給はじ國許への土産話に恥かしながら手並の程をお目に掛けんと白魚の優しき手に薙刀の柄をリウ〳〵と扱いて竢受けしが忽ち武術監督者より命あり俘虜との試合は妙ならずとの事に雙方遺憾を呑みて其のまゝ中止となりたり、今度青年大演武會に就きて出京したる同會評議員渡邊昇子は此の事を聞き其は面白し一番露國俘虜に日本女子の技倆を見するも愉快ならずや殊に彼れより呼び掛けられて試合を拒みしとありては日本女子末代までの恥ぞ遣れ〳〵ナーニ構ふものかとの無造作の詞に女子連は忽ち勇み立ち早速前の俘虜に向つて試合を交涉しつゝあれば遠からず武徳殿に於て勝負を決する事となるべしといふ、日本婦人勝つか、俘虜勝

つか、劍と薙刀と兩々火花を散らして闘ふ中には自から敵愾心も溢れて玆一段の見物なるべし

愛國婦人會の現在と將來

去月末日現在の愛國婦人會員は、三十九萬千五百七十八人にして、各府縣女子人口との比較に於て、最も多數を占むるは、山口縣の人口百人に付會員五人三分二厘、最も少なきは栃木縣の零人二分一厘にして、東京府は一人二分三厘なるが、同會本支部役員等は今後益々其規摸を擴張して、少なくも全國を山口縣と同等に爲し、總數を百廿六萬三千百五十四人に達せしめんとて、熱心其擴張運動に從事し居れり

軍國模範婦人

鳥取縣下日野郡根雨村池田おとみは去十二年同村池田善藏に嫁したるが當時赤貧洗ふが如くなりしを必死となりて夫を輔け農業に勉勵する中善藏は翌年より眼病に罹り痛風症を併發し八九年前より躄となり歩行する事も協はずなりたればお富は十年一日の如く介抱看護して少しも倦みたる氣色なく傍ら一錢だも空に使はず能く經濟の道を辨へ常に犢を購ひて飼育賣却しこれにて幾分の利益を得是れを郵便貯金として利殖を計り目下二百圓に達した、と尙又看護の片手間に些少の畑を借り蔬菜を耕作して生計の資に充て夫の食膳には努めて美味を供し餘りあれば近隣の子女に與へて己の口腹を肥したる事なく昨年征露の役起りて後は村内の有志者に就て日々戰況を聽問し之を病夫に話して心を慰め又鳥取婦人會及び因伯時報社の恤兵手拭募集の擧あるを聞き直に村内四十餘戸を奔走勸誘して百餘筋の手拭を募集し恤兵の手續を爲し次で第三回國庫債劵募集ありし時其趣旨を聞き貯金を以て一百圓の應募を爲し昨春動員令ありし以來出征軍人の宅前を通行するものあれば必ず休憩を請ひ茶菓を薦めて欵待の意を表し居れりといふ感ずべきの限と云ふべし

百歳の老媼

神奈川縣鎌倉郡瀬谷村籾山政右衛門の母ナヲと云ふは文化三年七月七日の生れにして即ち本年六月を以て滿百歳に達したり同人は長壽の血統あり實父相澤七兵衛は六十五歳、母マサは八十一歳、弟七之助は六十三歳、妹サダは七十九歳の長壽を保ちて沒し長女ハルは高坐郡澁福田村保田嘉左衛門に嫁し當年八十一歳、長男即ち戸主の政右衛門は當年七十二歳次女ハナは同村小川斧右衛門に嫁し當年六十一歳にて現存す、孫七人ありて内長孫一人夭死したるのみ他は健在せり曾孫三人あり此れ又健在なり斯る目出度家柄なるがナヲは生れ付強健にして近來耳少く遠きを感ずるのみにして體軀の弓曲は甚しからず故に杖に縋らずして能く數丁の步行に堪へ眼力の如きは更に衰へず針孔に糸を通すに眼鏡を用ゐずといふ平素好んで小說繪本等を讀み小供等に伽話するを樂とせり常食料は中庸にして平素嗜むものは酒なり齡三十の頃より五十歳の頃までは三四合の酒量なりしと其他の嗜好品は菓子、豆腐等にして喫煙はせずと云ふ同家は農を業としナヲは七十歳の時廢業したるも坐食するを好まざる性なれば現今は專ら内外の掃除を爲し時には裁縫を爲すが其忍耐力の強さに至つては到底他の及ぶ處にあらず甫めて結婚したるは二十歳にして先代政右衛門に嫁し五十歳の年に夫を失ひたり日蓮宗の信者にして朝夕祖號を拜して一日も怠らず性質は溫厚篤實にして人と爭ひたるとなし生家は都筑郡都岡村にして亡相澤七兵衛の女なりとぞ

男女混合敎授禁止

從來東京を始め各地方に於て設立せる民間有志者の創立せる醫學校に於ては男女學生を同一敎場に於て混合敎授を爲すの結果往々男女學生間に於て風紀上不尠影響を及ぼすを以て來る秋期開校の際より斷然男女混合敎授を禁止するとに其筋に於て決定せりと

○保姆志願者募集　神田區神保町東京保姆養成所にては今般幼稚園保姆志願者を募集する由修業年限は凡そ四ヶ月（九月から十二月まで）授業時間は毎日午後三時三十分より六時三十分まで學科は教育學、保育法、音樂、手藝等にして講師は女子高等師範學校教授兼附屬幼稚園主事中村五六氏等なり。

○女子と謠曲　高等聲樂として謠曲は男子のみの謠ふべきものにあらず且は女子の品性を高むる藝品なればとて斯道に堪能なる土居香瀞氏は（麴町區有樂町一丁目一番地）女子の爲めに親切に謠曲を教授する由。

女鑑兼題

歌

十月	松間紅葉　月前遠情
十一月	初冬時雨　靜女
十二月	氷始結　社頭雪

文

月に對して懷を述ぶる文

秋日汽車旅行の記

雪の日に滿洲の寒氣を想ふ

定價

一冊	前金貳拾錢
三冊三ヶ月分	前金五拾七錢
六冊半年分	前金壹圓拾錢
拾貳冊一年分	前金貳圓拾錢

金國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行	金三拾錢
半頁三十二行	金八圓
一頁六十四行	金拾貳圓
表紙一頁	金拾六圓

（色刷は特に御相談に應ず）

御注文規定

一切前金の事（但郵劵代用一割增の事）●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地貳丁目貳拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便受取所へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治三十八年八月廿一日印刷
明治三十八年九月一日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　渡邊素一

印刷人　東京市京橋區築地二丁目二十番地　河本龜之助

發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　株式會社國光社（電話新橋二六三九番）（電話新橋特八八番）

女學及家庭書類

- 島田佳矣・野口駿尾 共著 ◎女子技藝 編物模樣圖案 全五冊 定價（松ノ巻四十錢 櫻ノ巻五十錢 藤ノ巻五十錢 菊ノ巻五十五錢 梅ノ巻五十五錢）郵税各二錢
- 棚橋絢子 著 ◎女道叢話 全 定價金三十錢 郵税金四錢
- 三輪田眞佐子 著 ◎女子之本分 全 定價金二十五錢 郵税金四錢
- 三輪田眞佐子 著 ◎女子處世論 全 定價金二十錢 郵税金四錢
- 磯部武者五郎 著 ◎家計簿記法 全 定價金十五錢 郵税金二錢
- 藤野天城 著 ◎女子小觀 全 定價金二十錢 郵税金四錢
- 堀内新泉 著 ◎女樂師 全 定價金卅五錢 郵税金六錢
- 松川霓州 著 ◎結婚と家庭 全 定價金十五錢 郵税金四錢
- 堀内新泉 著 ◎家庭の鑑 全 定價金十八錢 郵税金四錢
- 女鑑編輯局 編 ◎新編 ひめかゝみ 全 定價金二十五錢 郵税金四錢

著者	書名	冊數	定價	郵稅
梅澤清一著	清少納言と紫式部	全	金卅五錢	金六錢
澁谷愛著	萬國女子風俗	全	金二十五錢	金四錢
堀內新泉著	少女讀本	全三冊	各金十八錢	各金四錢
大町桂月著	常盤御前	全	金十三錢	金二錢
小林雨搭著	勾當の內侍	全	金十三錢	金二錢
濱田廉著	袈裟御前	全	金十三錢	金二錢
國府犀東著	靜御前	全	金十三錢	金二錢
長田偶得著	顏世御前	全	金十三錢	金二錢
杉谷正隆著	家庭訓誡 修身百首	全	金二十錢	金四錢
高瀨眞卿著	學校家庭 修身一夕話	全	特六十錢 並三十八錢	八錢 六錢
指原乙子著	女子文章軌範	全	金三十錢	金四錢

◀國光社出版圖書目錄▶

- 岡勇次郎著 ◎ 日本米穀ノ將來 全 定價金三十錢 郵稅金六錢
- 川崎直衞譯 ◎ 國際貿易論 全 定價金六十錢 郵稅金六錢
- 佐美孫三著 ◎ 臺風雜記 全 定價金三十錢 郵稅金四錢
- 白耳義リーヂ大學教授 ラヴレー氏原著 文學士寺內淳二郎譯 ◎ 奢侈亡國論 全 定價金二十錢 郵稅金二錢
- 陸軍大臣寺內正毅題辭 阪謙之序 甲秀輔編 ◎ 德川の孔明 全 定價郵稅共金十五錢
- 山崎忠和著 ◎ 日露の英雄 全 定價郵稅共金二十二錢
- 倉庫銀行頭取 中村清藏序 中村佐平著 ◎ 銀行簿記學 全 定價金五十錢 郵稅金六錢
- 故富士谷御杖述 ◎ 土佐日記燈 全三冊 定價金一圓五十錢 郵稅金十五錢
- 井上賴圀校訂 小澤政胤著 ◎ 慶長以來國學家略傳 全 定價金一圓五十錢 郵稅金十錢
- 弘田正郎編 ◎ 豪吟集 全 定價金八錢 郵稅金二錢
- 幸田露伴序 村上濁浪譯述 ◎ 鐵血宰相語錄 全 定價金三十錢 郵稅金四錢
- 在法科大學 矢田七太郎著 ◎ 江川坦庵 全 定價金三十錢 郵稅金四錢
- 水主天姥著 ◎ 石田三成 全 定價金三十錢 稅郵金四錢
- 塚原澁柿著 ◎ 山崎合戰 全 定價金卅九錢 郵稅金六錢


色白くなる
高等化粧料
ロ

女鑑

明治三十八年九月一日發行　毎月一回一日發行　第拾五年第九號　明治廿五年三月十三日第三種郵便物認可

